
GATE 3:UPHEAVAL
ゲート
3.動乱編
自衛隊
彼の地にて、
斯く戦えり
柳内たくみ
Yanai Takumi
アルファポリス


GATE 3:UPHEAVA
3.動乱編
ゲート
自衛隊
彼の地にて
斯く戦えり
柳内たくみ
Yanai Takumi

ゲート ―3. 動乱編―

自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり

柳内たくみ

主な登場人物紹介

日本

伊丹耀司（いたみ ようじ） …… 33歳。陸上自衛隊二等陸尉、特地資源状況調査担当。いわゆるおたく趣味の持ち主。同人誌やネット上の小説や漫画を愛読する。仕事は生活と趣味のための収入源と割り切っている。

黒川二曹（くろかわ にそう） …… 23歳。第三偵察隊の女性自衛官。看護師でもあり、身長190㎝の美女。ゆったりとしたお淑やか口調だが、なにげに毒舌を放つ。

栗林志乃（くりばやし しの） …… 24歳。第三偵察隊の女性自衛官。陸上自衛隊二等陸曹。小柄ながら豊かなバストを装備するが、格闘徽章を有する猛者でもある。

古田陸士長（ふるた） …… 機関銃手。元老舗料亭の板前。独立開業の費用を貯めるために自衛隊に入隊。情報活動の為に皇城に潜入中。

森田総理大臣（もりた） …… 辞任した本位の後を継いで総理大臣に就任する。事なかれ主義者の上に、深く物事を考えている様子が見えない。

嘉納太郎（かのうたろう） …… 日本の外務大臣。おたく趣味の持ち主として国民に知られ、かつては伊丹ともおたく仲間だった。

菅原浩治（すがわら こうじ） …… 外務省のエリート官僚として将来を嘱望されている。官僚トップの座を狙って冷徹な野心家を演じているが、意外にも熱血漢。

梨紗（りさ） …… 伊丹と離婚した元妻。女性向け同人誌作家。

望月紀子（もちづき のりこ） …… 日本の住民の性格や気質を調べるために帝国によって拉致されていたが自衛隊によって救出された。

アメリカ

ディレル …… アメリカ合衆国大統領。『特地』から得られる利権拡大を狙って、様々な陰謀を巡らせている。

中国

薑徳愁（とう とくしゅう） …… 中華人民共和国国家主席。『特地』に移民を送り出すことによって、利権独占を狙っている。

ロシア

ジェガノフ …… ロシア連邦大統領。『特地』からの資源流入によるロシアの影響力低下を懸念して、様々な策謀を巡らせている。

異世界(特地)

テュカ・ルナ・マルソー ……165歳(外見は16～17歳)。金毛碧眼のエルフ上位種族の娘。

レレイ・ラ・レレーナ……15歳。ヒト種の賢者、魔導師。老賢者カトーの二番弟子。理知的で優れた才能を持つ。

ロゥリィ・マーキュリー……961歳(外見は13歳)。亜神、神エムロイの使徒。異世界の神官服であるフリフリの黒ゴスを纏っている。

ヤオ・ロゥ・デュッシ……315歳(外見は20代後半～30代前半)。ボンテージ鎧のよく似合う肉感的な美人ダークエルフ。

モルト・ソル・アウグスタス……異世界の帝国皇帝。帝国の覇権拡大を図るために、ゲートを越えて日本にまで出兵を試みる。

ピニャ・コ・ラーダ……19歳。モルト皇帝の美人娘。帝国と日本との間にある国力の差にいち早く気づき帝国を守るために奔走する。

ゾルザル・エル・カエサル…皇帝モルトの長子、皇女ピニャの兄。あくまでも戦争継続を主張し、政権を掌握するや講和に賛成する勢力の弾圧を図る。

ディアボ・ソル・カエサル……皇帝モルトの次子、皇女ピニャの兄。皇位の継承を狙っていたが、ゾルザルが政権を掌握すると帝都を脱出し『門』外の諸外国との接触を目論む。

テューレ……帝国に侵略された部族を守るために我が身を差し出して奴隷となったが、生き残った同族からは裏切り者とされている。ゾルザルに仕えつつも全てを恨み様々な策謀を巡らす。

シャンディー・ガフ・マレア……ピニャの騎士団に属する女性騎士。アルヌスで語学研修を受け講和会議の通訳として帝都に呼び戻される。

シェリー・テュエリ……12歳とは思えぬ聡明さを備えた少女。傾きつつあった家を盛り上げるために日本からの外交官である菅原に近付き、次第に恋心を抱く。

ジゼル……400歳超(外見は20代前半)。亜神、冥府の神ハーディの使徒。竜人族出身。神官服はフリルたっぷりの白ゴスだが、着崩しているのでいろいろ隠せていない。

01

帝都の城門に炎龍の首が掲げられたのは、地震から数ヶ月の時を経て、その恐怖の記憶もそろそろ薄れようという頃合いだった。

人間の力では抗し得ないという意味で、炎龍は地震や天候による災害と同一視される。だから人々は、それによってもたらされる不幸を嘆きつつも、豪雨や落雷による災禍と同じくして「運が悪かったのだ」と呟き、諦念という形で受け容れてきたのである。

それでも災害を克服しようという動きがこれまでなかったわけではない。治水工事によって河川の氾濫を防ぐことが試みられるのと同様に、炎龍の討伐のために何人もの英雄が送り出された。だが、炎龍という害を取り除けた者はなかった。

英雄達が柔弱であったとか、使命感に欠けていたわけではない。ただ単に敗れた。彼らをもってしても勝てない相手だったというに過ぎないのである。

だからこそ、である。

これを退けた「緑の人」と呼ばれる存在の噂は、真実であると期待する心とこれを疑う心の双方を燃料にして、爆発的な勢いで人々の間を駆けめぐり、帝国はおろか国境を越えて周辺諸国にまで

広がっていった。

そして今日、恐怖と絶望の象徴とも言える炎龍の首がさらされた。

炎龍を退けたというだけで皆、驚いたのだから、これを討ったという証拠を目の当たりにした人々の衝撃は、それをはるかに超える。形容するなら『瞠若』あるいは『愕然』、写実的には「目を見開いて、口をぽっかりと開けて眺めている」と記すべき姿となった。

敵国の軍を討ったとか、城を陥としたとか、憎い仇敵を倒したということなら、即座に喜びの感情が湧き上がって歓呼の声があがっただろう。だが、炎龍という存在があまりにも強大過ぎたため、それを倒したなどという話はどこか現実感に乏しくて、骸となった炎龍の首を見ても、実際にどのような反応を示せばよいのか分からないという戸惑いが先に立ったのである。

だから、そこには興奮も喝采もなかった。『驚倒』とも言うべき不思議な沈黙があった。とはいえそれは無感動を意味するわけではない。あえて言うならば『静かな熱狂』とでもするべきだろう。爆発的な燃焼は勢いこそ凄まじいが、時をおけばたちまち消え失せてしまう。けれどこれは、見えない地下でじわじわとどこまでも広がっていく煮えたぎったマグマのような力があった。そこに可燃物を投げ入れれば、たちまち燃え上がるだろう。

帝都の周囲をぐるりと囲む巨大な城壁。その南側に帝都の玄関口にあたる大城門がある。

この南門の周囲は、噂を聞いてやって来た人々の群れで埋め尽くされた。皆、城門が見える場所ならば、道路どころか建物の窓に鈴生りとなって、そのあげく民家の屋根によじ登ってまでして、

これを見ようとしていた。

互いに足を踏んでしまいそうなほどの混雑である。にもかかわらず大きな混乱も起きることなく、人々は口をぽっかりと開け、瞬きすらも惜しむように刮目し、受け容れ難い現実がその身と心へと浸透していくのを待った。そして、充分に理解した後で、囁きはじめた。

「いったい誰がこんな凄いことを」

「どこかに、何か書いてないのか？」

大衆に出来事を伝えるメディアのない世界の話だ。衆目にこのように何かをさらそうとする時、普通はプラカードや貼り紙などにその主張を記す。そうしなければ誰が何の目的を持ってしたことなのか判別できないし、皆からの賞賛を受けるようなことであれば、横から「俺がやった」という騙りが現れて功績を奪われてしまうからだ。

だが、今回に関しては、それがない。ただ、炎龍の巨大な首が掲げられているだけであった。どこの誰が、どんな苦労の果てにこれを成し遂げたのか。その一切の説明をしようともせず、ただ沈黙のまま結果を示しているのだ。

それでもこの沈黙は、多くの言葉を費やすよりもはるかに雄弁であった。

人間には自ら推測し、解釈し、考察したことを表明して、他者から賛同を得たいと思う欲求がある。故に、人々はこう語り合うこととなった。

「あんなことが出来るのは、緑の人しかいないと思うんだが、どう思う？」と。

炎龍討たれるの報は、民衆に行き渡るのに少し遅れる形で為政者達の下へと届くことになった。その理由は、国家の安全にかかわる危急の事態とは異なると判断されたため、見張りから警備長、そして伝令によって皇城へという通報システムに乗ることがなかったからである。そのために噂という不正確な形になってしまった。

しかもほとんどの者が話を聞くと一度は耳を疑った。そしてその都度、それぞれが遣いを出したり、自ら足を運んで事実を確認したものだから、その日の早朝に起きた出来事が最高権力者であるモルトの下に届いた時には、すでに夕刻となっていた。

皇帝モルトは内務相マルクス伯より報告を受けると「そうか」とだけ答えた。そして、あまり驚いた様子も見せず、兵士を派遣して群衆の整理と、城門に掲げられた炎龍の頭部を宮廷内に運び入れるよう命じた。

「へ、陛下はすでにご存じだったのですか？」

そのあまりにも淡々とした様を意外に思ってか、マルクス伯は尋ねる。するとモルトはこともなげに答えた。

「何やら、宮廷雀共の様子が上擦っておったからな。何を聞かされても驚くまいと思う程度に心構えを済ませておいたのだ」

帝国軍壊滅、突然の地震、元老院の議事堂倒壊と、このところ心胆の寒くなる出来事が続いてい

る。それだけに、また何か良くないことが起きたのかも知れないと、覚悟を決めておいたと言うのである。だが皇帝が凶報慣れしてしまったというのも、ゆゆしきことである。マルクス伯は暗い面持ちとなって、恐縮するより無かった。

「そうでしたか……」

「うむ。炎龍が退治されたとは、思っても見なかったがな。だがこれは悪い話ではない。災害が一つ防がれたのだから吉報とするべきであろう」

「しかしそうとばかりは申してはいられません」

「分かっておる。炎龍を倒すなど誰にも成し遂げることの出来なかった偉業である。その功績は単身で一軍一城を攻め滅ぼすにも匹敵しよう。名乗り出ればどのような出自種族の者であっても褒美を充分に与えるであろう。にもかかわらず名乗る者がおらぬというのは解せぬ。それがその者の謙虚さ故のことならば案ずるまでもないが、首を掲げて功績を誇ろうとする行動とは矛盾する」

「はい。どうにも底意が知れません。某かの意図があってのことと解釈いたすべきでしょう」

「あるいは穿ち過ぎかのう？　単に、炎龍が滅したことを民に知らしめたいだけかも知れぬ……そこで伯に命じたい。まず、炎龍の首を掲げたのが何者であるかを調べよ。さすればその意図も朧気ながらつかめるやも知れぬからな」

マルクス伯は「かしこまりました」と一礼すると、速やかに仕事に取りかかろうとした。だが退室寸前に呼び止められ、再び振り返ることとなった。

「なんでございましょうか？」
「済まぬがピニャをここに呼んでもらえぬか」
「ピニャ殿下でいらっしゃいますか？　殿下ならばニホンから参られている使節の饗応中と存じますが……すぐにお召しになられますか？」
至尊の座にある皇帝が用があるというのだから、それが優先されてしかるべきではあるが、今は重要な役務の最中である。それでも呼び出すか？　という意味でマルクスは確認した。
すると案の定、皇帝はそれには及ばないと手を振った。
「おおっ、そうだったそうだった。今宵には虜囚となっていた者らの帰国を祝う催しもあったな。余も臨席することになっておったというのに、すっかり失念しておった」
「どういったご用件でいらっしゃいましょうか？　火急とあらば、この私めが直々に参りまして殿下にお伺い申し上げ……」
「よいよい。後ほど、宴席にて顔を合わせるであろうから、その際にでも直接問うことにする」
「差し支えなければ、陛下のお心の内をご披露いただくわけには参りませんでしょうか？」
「うむ。実は、以前あの者より受けた報告に『緑の人』がどうのといった記述が含まれておったことを思い出してな。その者らは、どこぞの村を襲った炎龍を退けたと聞く。当時は一笑に付したが、このような結果となってみると調べる必要もあろうかと思ってな」
「では、その者が炎龍を討ったと……？」

マルクス伯は訝しげに首を傾げた。
「まだ分からぬ。だが、その噂を知る者は皆、そのように思ったであろう。此度の一件は、それと関係があるのではあるまいか、とな。それで、ピニャに確かめたかったのだ」
「かしこまりました。私の方でも、その者について調査させましょう」
「うむ。緑の人とは誰なのか。どこの国の者か？　しかと調べて貰いたい、頼んだぞ」
恭しく「かしこまりました」と頭を下げたマルクス伯爵は「緑の人」と、その名を心に刻むように呟いていた。

その頃、帝都南苑宮では日本からの使節団を歓迎する午餐会が開かれていた。
主催者は皇女ピニャ・コ・ラーダ。列席者は閣僚、元老院の主立った議員、軍人、貴族に列せられる者達とその令夫人、令嬢などである。
帝国の習慣では外国からの使節が到着したら、戦争中であろうとなかろうと、まずは歓迎記念式典を開かなければならない。そうしなければ、これからはじまる講話交渉も公式なものと認められないからである。特に重要なのは、来訪した使節が皇帝から歓迎の言葉を受けることであった。これによって使節の帝都滞在中の安全とその活動の自由を保障する外交特権が付与され、帝国の公的な使節団と交渉を開始することが出来るようになる。
だが日本側の感覚では、これは固辞せざるを得なかった。

何故なら戦争の当事国同士で、さらに銀座事件の被害回復も、拉致被害者の返還も済まされていない状態なのに、友好を前提とするような催しに参加出来るはずがないからである。

そこで、工夫されたのが午餐会をピニャの私的な催しという形式にすることであった。そしてその終了後に場所を隣の会場へと移して、捕虜となっていた者の生還を祝う式典を行うのである。これならば日本側も捕虜を送り届けた者として出席するという名分が成り立つ。そこで、皇帝に謁見(えっけん)するのである。

宴会の主催者を変えたり、催しの名称を変えただけで、出席出来たり出来なかったりするというのも変な話で、ここから茶番めいた下らなさを感じるとすれば、それはある意味で健康な感性を持っていると言えるだろう。

というのも、その下らなさの根底には、「意地」とか「見栄」といった、成熟した大人ならばあまり重きを置かないような要素が複雑に絡み合っているからだ。だが、これを下らないと言い張れるのは、幸せなことである。何故なら、その幸せを享受できるのは、「そんなものに拘(こだわ)らなくても人間が尊重される」成熟した社会に住んでいるからだ。そうでない社会でこの手のことを軽視すると、侮られ、軽んぜられ、隅に追いやられて無視されて大変なことになってしまうのだ。

例えるならば、いじめの蔓延(はびこ)る教室で、周囲から侮られ馬鹿にされるのと同じだ。その結果として何が起こるかはホンの少し想像力を豊かにするだけで分かるだろう。

そして、国際社会はいじめの蔓延(はびこ)った教室と同じだ。自慢できる物、そして皆に一目置かせる要

素を数多く持つことが平和に暮らすために必要なのである。だからこそ、例え下らないことであっても後々になって禍根が残ることを避けようとするのだ。それが外国との交際である。個人同士の付き合いのような適当さの入り込む余地は全くないのである。

講和交渉にしてもそうだ。要するに双方の代表が角突き合わせて話し合うだけである。にもかかわらず、そこに名目やら伝統やら、格式といった各種の要素が加わるから、非常にやっかいな面倒ごとになってしまう。

しかし、そのやっかいさを乗り越え、様々な問題を解決し、摺り合わせの難しい習慣になんとか折り合いをつけるのが外交当局者の仕事だ。互いが納得できる形式を整えるためには、例え傍目から下らなく見えようとも、奇策めいた工夫をするのである。

そうした配慮は日本側使節団の構成にも現れていた。

例えば、帝都に入ったのは、二十名ほどの官僚と、武官たる佐官級幹部自衛官数名であるが、それらの代表として女性である白百合玲子が抜擢された。そしてその肩書きも、首相補佐官から特地問題対策担当副大臣へと格上げされたのである。

これは、「対等な国家など存在しないので、会合の席で位の同じ者同士ならば帝国の者が無条件に上座を占める」という傲慢さを式典の儀礼として組み込んで、使節を粗略に扱ったり、必要以上に待たせる帝国の外交習慣に対抗するためであった。

帝国では、女性が大臣職に就くことがない。外国からの使節として女性を受け容れる時も、その

女性が王族である例が常だったため、女性使節を宮廷儀礼上、帝国の皇族よりは下位としながらも、閣僚よりは上位者として扱う習慣が出来上がっていた。これを逆手に取ったのが今回の人事なのだ。これに対して帝国側は式典の格式を一段落とし、参列者の服装を最上級からは一級下げたものにすることで対抗していた。つまり歓迎の程度を最高からはやや劣るものにしてバランスをとったのである。

そんな下準備の功労者である外務省の官僚、菅原浩治（すがわらこうじ）は、これまでしてきた活動の成果を示すように、白百合副大臣に帝国政界の重鎮と言われる者達を紹介し続けていた。

「こちらが、元老院議員のキケロ卿です」

「はじめまして副大臣閣下。しかし、まさか女性が代表とは思いませんでしたな。お国では大臣職に就かれる女性は多いのですか？」

「いいえ。我が国でもまだまだ男性が主流ですわ」

「しかしそんな中でご活躍なさっておいでなのですから、閣下は相当にご優秀でいらっしゃるのでしょうな？」

「いいえ。このような重要な職を任されて、戦々恐々としております」

するとキケロは過去の失敗を思い返してか苦笑いをする。

「だまされませぬぞ。スガワラ殿とお会いした際にも思いましたが、貴国の方は謙遜がいささか過ぎるようです。交渉の席ではお手柔らかにお願いしますぞ」

キケロは元老院きっての論客である。だが、女性相手のやりにくさを感じているようで、必要最低限の挨拶を交わすとそそくさと逃げるように退いていってしまった。

次々とやって来た帝国の要人達の挨拶攻勢も、彼を最後にして一段落がつく。

日本側のプロトコルに従って、華美ではないが、それでいて地味でもないイブニングドレスで身を固めた白百合副大臣は、帝国側の習慣に従って床に置かれた巨大なクッションに凭れるように腰を下ろす。そして菅原に向け「何か不思議な気分です」と愚痴るかのようにこぼした。

菅原は言い訳するように説明した。

「敵国の首都を交渉場所とせざるを得なかったのは、通信速度の格差故とお考え下さい。本来なら中立国に会場を用意するのが適切なんですが、帝国側の通信手段が伝馬という状況では、ちょっとした意思伝達にも時間がかかってしまい、それを時間稼ぎの口実にされるおそれがありました」

だが白百合は「そうじゃなくて……」と語尾を濁らせる。そして周りにいる帝国貴族の婦人達を見渡して、彼女たちの服装が、日本的な感覚から見ても斬新に過ぎると告げた。

例えば、近世ヨーロッパの上流社会を描いた映画やドラマなどを見ても、ひとつの文化が爛熟期を迎えると、奇抜なデザインが流行している様子が描かれる。それと似て「重くないのか？」と問いたくなるぐらいに大きな帽子とか、「それって何の機能があるの？」と、問いたくなるぐらいに巨大なリボンとか、頭の数倍くらいに膨らませた髪型とか、変に露出度が高かったり、身体の線が妙に顕わになっていたりという感じで、デザインにしても色遣いにしてもまさに南国の鳥のごとし

なのである。

まるで彼女の息子がよく見ているアニメキャラのようであった。

「男性の正装が、トーガに似ていると聞いていたから、女性の服装も古代ローマかギリシャ風をイメージしていたのだけれど……」

実際、主催者たる皇女ピニャの服装は、白百合の予想の範囲に収まっていたことが彼女の混乱をいっそう助長させていた。普通、服飾文化というものは突然変異しない。大抵は基本のデザインがあって、それが少しずつ変形していく形で移り変わる。なのにこれほどの違いが発生するとは、いったいどのような事情によるものなのかと不思議に思ったのだ。

菅原にとって幸いだったのは、白百合の言葉が単に感想を述べたに過ぎなかったことだろう。服飾文化が突然変異を起こすのは、たいていの場合が異文化との接触が原因なのだから、彼にもその責任の一端はある。とはいえ、帝国貴族の女性達に、日本で言うところのコスプレが流行ってしまった経緯（いきさつ）を説明することは、優秀な彼をしても非常に困難だったのである。

＊　＊

「スガワラ様？　お国では女性でも大臣閣下になれるのですか？」

ピニャが主催した歓迎の宴は何事もなく無事に終わった。そしてすぐに次の宴会が始まった。

日本人的な感覚で言えば結婚式直後の披露宴。あるいはその二次会といったところであろうか。実際に雰囲気も、ピニャ主催の一次会に比べると参列者達はリラックスしていて、談笑しながら料理と酒を楽しみ、あちこちで笑い声と歓声が上がるという祝賀ムードにあふれるものとなった。やはり敵国の使節を歓迎するという趣旨の宴では、緊張して盛り上がらなかったのである。

それに対して二次会の方は、一度は生存を諦めすらした貴族の子弟十五名の帰還を祝うことが目的である。集まったその家族の喜びに引きずられて、明るい雰囲気になってしまうのも当然と言えるだろう。

だがそういった雰囲気の中では日本使節団は呼ばれてない場所に紛れ込んだ気分になる。会場の一角に自分たちだけでかたまって、並べられた料理を食べつつ、知り合った帝国の要人についての情報交換などをして、皇帝が現れるのを待つだけになってしまった。

そんな中で、突然投げかけられた菅原を呼び止める声。

最初の宴会で通訳をしたり、政治家を紹介したりと忙しかった菅原は、暇になって気を抜いていたこともあり、思わずびっくりしてしまった。しかも、その声はここで聞こえるはずがないと信じていたものだ。

頭にうっすらとした痛みを感じながら、ゆっくりと振り返る。

するとそこにはテュエリ家の娘シェリー嬢がちょこんと立っていた。

先日誕生日を迎えたばかりの十二歳。物怖じしない積極性と、くりくりっとした瞳が可愛らしい

少女だ。若干首を傾げ、菅原の反応を悪戯っぽく楽しんでいるような表情をしていた。

今日は、菅原が贈った小粒ながら若干ピンク色が入った真珠で首もとを飾り付け、身体全体を華やかな白い花のように見せる衣装で包んでいた。精一杯のおしゃれをして、少しでも自分を大人に見せようとしている微笑ましい姿である。

「シェリーさん。今夜は駄目ですよ」

菅原はそう言うとシェリーに背中を向けた。だが日本交渉団の一員として纏っているタキシードの裾を引っ張られてしまった。

「そう邪険にしないで下さいませ。スガワラ様が、わたくしのような幼齢の娘に興味がないのは存じておりますわ。ですが、わたくしとてあと四年もすれば一人前の女に成長いたしましょう。それまでにはきっとスガワラ様に似つかわしくなってみせますから、先物買いとでもお思いになって優しくしてくださいませ。そして、お国の女性副大臣閣下をどうぞ紹介して下さいな」

にこやかにつぶらな瞳を輝かせる。断られるなどとは少しも思っていない笑みだった。

これには菅原もはっきりとした目眩を感じた。

これまで図々しいほどに親しみを向けて来る彼女を、邪険にすることもなく接して来たのは講和派の重鎮カーゼル侯爵との繋がりを得るためである。要は子守くらいに考えていたのだ。なのにどこを間違ったのか、当の少女の心境にちょっとした変化を引き起こしてしまったのである。子守の仕方が分からなかったのもあって、映画『マイ・フェア・レディ』のヒギンズ教授を真似て立ち居

振る舞いと日本語の指導をしてみたのが悪かったのかも知れない。

とはいえこの年代の少女にとって、こんな心境の変化は、はしかみたいなもののはず。まともに受け止める親はいないだろうから、しばし冷却期間を置けば良いくらいに考えていたのだ。

ところがテュエリ家の当主はまともではなかった。シェリーからその心境をうち明けられると、菅原を将来の婿候補として真剣に検討しはじめたのである。

理由はとっても分かりやすい政略的なものだ。

現在のテュエリ家は豊かな領地を持つわけでもなく、一族に力のある官僚や将来を嘱望できる軍人もいない。カーゼル侯爵の縁戚というだけで、貴族としての体面をどうにか取り繕っている貧乏貴族なのである。この状況を改善するには、ニホンとの繋がりを強化することで外交という分野における存在感を高めるしかない。

恐るべきは、このようなアイデアが当主の脳内で自然発生したものではないということであろう。こともあろうにシェリー嬢自らがそのような理由付けをもって、自らの幼い恋を応援するよう父親を説得したのである。

だが、菅原は三十路近い年齢だ。外務省のエリート官僚として将来が嘱望されている。入省以来、外務省の頂点を真っ直ぐに目指して来た。なのにそのお相手が、日本と比べて千年は遅れているように見える未開の国の、しかも十二歳の少女と来ては体裁が悪いばかりか足を引っ張られてしまう。ついでに言えば犯罪であって、その上趣味ではない。大いに遠慮したいところであった。

彼は、一流企業の社長令嬢といった『お嬢様』級の女性との縁談をいくらでも選べる立場なのだ。もちろん容姿や家の財産だけが評価基準ではない。これまた外交分野に強い影響力を持つような家柄の女性を選ぶ必要があるだろう。例えば、西欧で手広く活動する複合企業の閨閥(けいばつ)だ。

菅原はこれらの力を背景として、官僚としてのさらなる高みを目指すという野心を抱いているのである。

と言うわけで最近では多忙を理由にシェリー嬢のお相手は断るようにして来たのだが、まさかこんなところで出会うとは。皇帝すら列席するような公の場に、十二歳になったばかりの少女を送り出して来るとはテュエリ家当主、どうにも侮れない相手である。

「いや、侮れないのはこの娘か……」

菅原は嘆くように呟いた。何かに絡め取られそうな気分なのだ。

シェリーは菅原に歩み寄ると「このところお会いできる機会が少なくなりまして、わたくし、とっても寂しゅうございました」と拗ねるように言った。

「ここしばらくは仕事が忙しかったので。公務優先です、ご理解頂けますね」

「まぁ嬉しいっ！　わたくしとのお付き合いを、お仕事と考えてらっしゃるものとばかり思っておりましたわ。いつの間にか私的なことと見て下さっていたのですね。シェリーとっても幸せです」

「い、いや、そういうことではありませんよ」

抱きついて来ようとするのを慌てて突き放す。だが目の前の少女は許してくれない。

「わたくしにとっては楽しい日々でございました。スガワラ様には詰まらなかったのでしょうか？」

などと言いながら菅原の腕を取り、その発展途上の胸に抱くように包んだのである。いったんこのような体勢が出来てしまうと、無理にふりほどくわけにもいかない。

「それとも、わたくしのことなんてもう飽きてしまわれたのでしょうか？　お母様が申しておりましたわ。どんなに好意を抱いていても、殿方に対しては最後の一線だけは守り続けなければならないと。殿方はそれを得てしまうと途端にそっけなくなってしまうそうです。スガワラ様が最近冷たいのも、きっとそのせいですわね」

「違うでしょうっ！　そういう人聞きの悪いことを公衆の面前で口にしてはいけませんっ！」

菅原は自由な方の片手を前に出してぶんぶんっと振った。

「ああよかった。そのようにおっしゃるところを見るとスガワラ様は最後の一線とやらが何であるかご存じなのですね？　それはいったいどんなことなのでしょうか？　わたくし、お母様からそう言い聞かされた時に、つい尋ねそびれてしまいまして、実のところよく分かっておりませんの。教えていただけますか？」

きちんと教育しておけよと菅原は叫んだ。もちろん心の奥底で。

「良いですか？　そういう話は、他人の耳がたくさんあるようなところでするものではありませんよ。噂はその広がる様から風などに例えられますが、風というのは実体がよく見えません。そして人間という生き物は、見えないものを想像で補うのが大好きで、それが下世話な本性の投影だと気

付かずに見るに耐えない醜悪な姿にしてしまうのです。その結果、不利益を被るのは大抵女性です。いいですね、これは貴女のためを『思って』言っているのですからね」

「はい。スガワラ様がわたくしを『想って』下さっていることが、とっても良く分かりましたわ」

シェリーは、いつもそうしているように菅原の教えを素直かつ好意的に受け取った。そしてこう言葉を継いだ。

「では、後ほど二人きりになれる場所ですることにいたしましょう。お約束ですよ」

菅原は頭重感と目眩の混在した症状に襲われ、項垂れて頭を抱えながら呻いた。返す言葉もないとはこのことである。

「そういうことで、未来の夫たる方がお仕えしている副大臣閣下にご挨拶申し上げたいのです。スガワラ様、どうぞ紹介して下さいまし」

「何が『そういうこと』かが、分からないので駄目です」

菅原は未来の夫ではないので懸命に抵抗した。

「そう、おっしゃらずに。わたくしにご紹介下さいますと、もれなくとっても良いことがありましてよ」

「どんな良いことがあると言うのですか？」

「まずは、ご覧下さいまし」

シェリーはそういうと白百合と使節団がたむろしている宴会場の一角に、ほっそりとした指先を

向けた。
「見ての通り、我が帝国の者は遠巻きに様子を窺うばかりであの一角には近付こうとすらしておりません。これでは折角交流の機会を得てもそれを生かしているとは言えないのではないでしょうか？」
そこで、自分が先鞭を付ける。そうすれば皆が近付いて来ると言うのである。
現在、ここに集まった貴族達のほとんどが、帰還した捕虜達を取り囲むので忙しく、日本人と親しく言葉を交わして相互の理解に努めるという状況にはなっていない。どちらかというとさりげなく避けている印象すらあった。だが戦争の当事国同士である。双方に家族や親族を失っている者がいる。帝国人の感情からしてみれば、それも当然のことと理解した菅原達は、ここで無理をする必要もないと考えていたのだ。
「別に良いんですよ。もうすでに主だった方々との歓談は済ませましたから」
ピニャ主催の歓迎の宴はその為に開かれたのである。後はもう、皇帝が姿を現すのを待って挨拶を交わせば、講和交渉に必要な形式が整う。それで充分なのだ。
ところがシェリーは、小生意気にも立てた人差し指をちっちっちと振った。
「認識がとってもお甘うございますわ、スガワラ様。帝国の者にとって、ニホンという国は未知の国なのです。大変素晴らしい文物ととてつもない軍事力を有していることは、すでにわたくしのように浅学な女児ですら存じております。けど、ニホンの方々についてはどうなのでしょうか？　ス

ガワラ様が、表面的にはツンケンしていらっしゃるくせに、その実とってもお優しくていらっしゃることは、わたくしのよく知るところです。しかし、それはわたくしとスガワラ様の特別で特別な特別の関係があっての理解。他の方についてはほとんど存じません。しかも使節代表は女性。聞くところによりますとニホンの女性はとてつもなくお強いとか。そんな噂のせいで、皆は迂闊に近付いて粗相でもしたら、殴られてしまうのではと恐れているのです」

菅原は皇帝の面前で大立ち回りをしたあげく、皇太子を素手で半殺しにしてのけた女性自衛官の存在を思い出した。自分もその場に居合わせたから、非常によく憶えている。

「地揺れのあった夜の出来事は、まことしやかに語られておりましてよ。帝国の者がそのような恐怖の心を抱いたままでいる限り、たとえ講和を結ぶことに成功しても、その後が長続きするとは考えにくいと思いませんか？」

ヒトは恐怖を抱くが故に、その恐怖の対象を排除しようとして暴力を振るう。敵が怖いから抹殺したくなるのだ。その連鎖が戦争の原因となったことも多い。例えば民族紛争などがそれだ。

日本は、それを止めようと言って講和の手を差し伸べたのである。ならばそれを中途半端に終わらせず、相互理解のためにもう一押ししてはどうかと、少女は誘っていた。

「まずは、このシェリーよりお始め下さい。わたくしのような可憐な美少女が、副大臣閣下と親しくお話をしている姿を皆に見せれば、帝国の貴族達もお話をしたいと前に出てくると思いますわ。きっとお互いの理解も進んで、スガワラ様のお仕事に、必ずやお役に立つことでしょう」

シェリーはそれだけ言い終えると「どうします？」と問わんばかりに瞼をパチパチと瞬かせた。

これにはさすがの菅原も、真剣に受け止めざるを得なかった。彼女の言葉には、真剣に検討するだけの価値があったからだ。

「本当に十二歳？」

アルヌスには、見た目は同じくらいなのに実際には九百歳を超える娘がいた。もしかしたら、シェリー嬢もその手合いなのではないかと一瞬思ってしまった。「小生意気」とか「こまっしゃくれ」等の言葉が辞書にはあるが、そんな言葉ではとても言い表しきれない、とても難しい存在なのである。

もしかしたらと思って、つい「トラックに跳ねられて転生したとか、前世とかの記憶が残ってたりします？」などと尋ねてしまったぐらいだ。もちろん、「何をおっしゃっておられるのか分かりかねますわ。変なスガワラ様」と笑われ、伊丹に毒されつつある自分に嫌気がさしてしまった。

しかし、それほどまでに幼さと賢さが不均衡に同居しているのだ。シェリーという娘は。

正直言って、そのポジティブシンキングと大人顔負けのしたたかさは苦手とすら思うほどだ。だが個人的な好悪の情は別にして、彼女の提案を受けるべきだと考えるだけの分別は持っているつもりである。

「分かりました。では、ご紹介しましょう。ですが、勘違いしてはいけませんよ。貴女の提案を受け容れたのであって、貴女を受け容れたわけではないのですからね」

「ええ、分かっておりますとも。わたくし、スガワラ様の本心はちゃ～んと理解しておりましてよ。

では宜しくお願いしますわ」

シェリーは、そういうと貴婦人のごとく菅原に介添えを求めて手を伸ばした。

菅原は、「ほんとに理解してるのかよ」と思ったが、こうなってしまうと周りの目にそれがどう映るかを心配しながらも、彼女の手を取るしかなくなっていたのである。

「副大臣閣下、お初にお目もじ致します。わたくしテュエリ家のシェリーと申します」

シェリーは白百合の前に出ると、スカートを摘み上げてお辞儀した。

見事なまでの日本語を操って口上を述べる情景は、一枚の絵画のようにも見えて、菅原も大いに感心した。しかし……。

「スガワラ様には、日頃から大変よくしていただいております。本日も後ほど、二人きりでいろいろと教えていただく約束をしておりますの」

という余計な一言を上気した表情で付け加えたものだから、藤堂以下、外務省の同僚達から発せられた視線が痛く突き刺さることになった。これらの視線が意味するのは、「お前、こんな少女相手に何をやっている？」という詰問に近いものだ。あるいは「菅原、お前終わったな」という、出世競争の相手が脱落したことを喜ぶものであったかも知れない。いずれにせよ、菅原の評価を下げるばかりか、窮地に追い込むこと必至の一言であった。

「これは丁寧に有り難う、可愛らしいお嬢さん。日本語がお上手ですね？」

「いいえ、なんとか挨拶だけですわ。閣下」
謙遜しつつも数ヶ月で身につけたとは思えない流暢な日本語で、菅原から言葉も含めていろいろを、手取り足取り教えてもらったと返したのである。『いろいろ』を過分なまでに強調しながら。
白百合は丁寧な答礼を済ませると、菅原を呼び寄せ厳しい視線を向けた。
「菅原君。責任をとれないようなことはしてないでしょうね？」
「私は節操というものを持ち合わせておりますので」
「それならいいのですが、くれぐれも後で問題になるようなことだけは控えてくださいね」
「念を押されるまでもないことです」
そんな砕けたやりとりが、帝国貴族にあったある種の緊張を取り払ったのかも知れない。
シェリーが予告したように、貴婦人達が菅原に紹介を求めて近付いてきた。そして、これに引っ張られるようにして議員や有力者までもが寄って来はじめた。
日本の外交官達と帝国貴族の間で行われた相互理解のための会話、そして講和交渉の第一歩は、このような形で始まったのである。
こうして場の雰囲気が和らぐと、まるでその頃合いを見計らったようにして侍従の一人が杖をうち鳴らした。
「モルト皇帝陛下、並びに皇太子ゾルザル殿下、皇女ピニャ殿下の御入来！」

ゾルザル・エル・カエサルにとって、皇太子となって最初の公務が、この式典への参列であるというのは皮肉なことかも知れない。

「ゾルザル様。何をそう苛立っておいでなのですか？」

テューレの問いに、ゾルザルは歩く速度をゆるめようともせず、激している感情そのままの粗暴な口調で答えた。

「いったいなんでこの俺が、ニホンからの使節団なんぞに会ってやらねばならぬのだ！」

「御公務ですわ。殿下は、皇太子におなりになったのですから……」

「くそっ。忌々(いまいま)しいっ」

「も、申し訳ありません！」

歩幅の狭いテューレが、ゾルザルに追いつくにはどうしても小走りにならざるをえない。その上、慣れない踵の高い靴を履いている。さらには二人が進む暗く長い廊下は床面が大理石で出来ているために滑りやすく、テューレは思わず転びそうになって小さな悲鳴を上げた。だが、立ち止まったゾルザルが丸太のような太い腕で素早く支えた。

「しっかり歩かないか、馬鹿者め。別に、お前を責めているわけではないのだ」

「しかし、妨害工作に失敗したのは、わたくしの責任で……」

「密偵共が役に立たなかっただけだろう。命令の伝達役に過ぎないお前にどんな責任がある？」

ゾルザルは皇太子となると、テューレの扱いを少しばかり変えていた。

彼女を連れ回すことが多くなったこともあり、鎖と首輪をはずし、それなりの衣装を着せるようになったのである。とはいえ、そのデザインは最近の貴族社会で流行となっているものの中でも、少しばかり特殊な部類に入った。布地面積は申し訳程度しかない上に、ボディラインは恥ずかしいまでに露わとなるぴったりしたもの。それを腰丈の上衣で申し訳程度に隠している。もし、日本人が彼女の姿を見れば、一目でこう評するに違いない。「高級感のあるバニーガール」と。

ゾルザルはテューレが付いてこられるぐらいに歩調を落とすと声を潜めた。

「小細工は一時中止を命じておけ。今は、軍部の支持を集めることに専念したい。それと主戦論派との繋ぎも忘れるな。敗北主義者共が気を抜いた時に、一気に巻き返しを図るから、手足代わりとなって働いてくれる者をそろえておかなくてはならん」

「は、はい」

「とはいえ忌々しいっ！　今の時点で講話交渉を始めることだけは何としても止めたかったっ！」

彼にとって戦争の終結とは、勝利かあるいは完全なる勝利かのいずれかであって、そのどちらでもない戦争終結は、自らが受け継ぐことになる帝国にはふさわしくないと考えていた。

「確かに、戦争は百戦百勝とは行かん。形勢が一時的に不利となることは、帝国の歴史の中でも何度もあったことだ。だがそれを克服してこそ帝国ではないか。しかもニホン軍はアルヌス周辺を占領するにとどまり、帝国内部に深く攻め込んで来てはいない。つまり敵は帝国を攻めあぐねているのだ。だからこそ講和を求めて来た。皆は、そのことに何故気付こうとしないのだ？」

それが分かれば、戦いようはいくらでもあることに気付けるはずなのだ。なのに講和の誘いに軽々(けいけい)に応じてしまうのは、敵を利するだけの行為だと言うのがゾルザルの主張である。

二人はやがて、大きな扉の前に行き当たった。

「父上！」

扉の前には、すでに皇帝とピニャの姿があった。ゾルザルは皇帝に話しかけようとしたが、式典侍従に少し声を低くするよう求められてしまう。この向こう側には式典の会場があり、いくら厚手の樫で扉が出来ているといっても、声が大き過ぎれば漏れ聞こえてしまうのだ。

ゾルザルは声を潜めると、講和交渉には反対だと皇帝とピニャの二人に対して力説した。

だが、皇帝は彼の言葉を受け容れようとしなかった。息子の事を振り返ろうともしない。

「ゾルザル。戦争は始めるに当たって、どのように幕を引くか考えておかねばならぬ。そして予定通りにならぬと見たら、傷を広げぬうちにさっさと終わらせねばならぬのだ」

「帝国はまだ戦えるっ！」

「だからこそなのだ。戦えなくなってしまえば、交渉の機会すら持てなくなるのだぞ」

「では帝国の威信はどうなるのです!?」

ゾルザルは声を押し殺しながらも怒鳴り、「父上は、臆病風に吹かれているんだ」と叫んで、壁を蹴った。

だがそれをテューレが咎(とが)めた。

「殿下、もう時間ですわ。気をお鎮めくださいませ」
今のゾルザルは皇太子である。例え意に沿わなくとも、捕虜の帰還を祝う式典を成功させなければならない立場にあった。自らの役目を放棄してこの式典をぶち壊しにしてしまうわけにはいかないのである。
テューレはゾルザルの服装の乱れをなおしていった。そうすることで彼の荒ぶる感情を表面的にせよ宥めることが出来ると知っているのだ。
ゾルザルも、数度の深呼吸で落ち着くことに成功したのか、忌々しそうにしながらも頷いた。
「分かった。捕虜帰還を祝ってやればいいのだな」
「はい。そのとおりです、殿下。皆様のご帰還を祝って差し上げてくださいませ」
テューレはゆったりと頭を垂れた。
「モルト皇帝陛下、並びに皇太子ゾルザル殿下、皇女ピニャ殿下の御入来！」
侍従の声とともに、巨大な扉が大きく開かれる。
その瞬間、まばゆいばかりの宴席の照明がテューレを包んだ。
だが、それも一瞬のこと。重々しい扉の音とともに光は細く狭くなって、最後には完全に閉じられてしまった。
静まりかえった薄暗い廊下に頭を下げた姿で独り取り残されたテューレは、「単純な奴」とボソリと呟く。そして誰にともなく語りかけた。

「支度は出来ていて？」
するとどこからともなく、くぐもった答えが返ってきた。
「はい。細工は流々、後は仕上げをご覧じろ、でございまする。きひひひひひ」
「前のような失態だけは許さないわよボウロ。他人任せにするから失敗するのです」
「ノリコの件につきましては、言い訳のしようもございません。ですから此度はハリョの精鋭を呼び寄せましてございまする。ウクシ、カクシ、コルメの三名でございまする」
薄暗い廊下の暗がりに暗黒色の人影が三つ、浮かび上がった。
「では、始めなさい。何もかもを面白くしてちょうだい」
頭を上げたテューレの顔は、邪悪な笑みによって覆われていた。

参列している大臣や貴族、官僚、軍人といった者達は、万雷の拍手でゾルザル達を迎えた。
式次第によれば、皇帝を先頭にして次にゾルザルが、さらにその後ろにピニャが続いて進むことになっている。まずは帝国の主立った閣僚や議員に声をかけ、続いて本命たる日本からの使節に声をかけて、最後に帰還した捕虜達に謁見するという段取りである。
だがゾルザルは会場に入ると、脇目もふらずに帰還した者達が集う場所へと突き進んでいった。
そして戸惑う彼らの名を一人一人呼びながら、その肩を叩いていった。
「ヘルム子爵。良く帰って来てくれた！」

「で、殿下。ありがとうございます」
「カラスタ侯爵公子。怪我はないな？」
「わたくしのような敗軍の将にまで、そのようなお言葉を賜り、感激の極み……」
ゾルザルはほくそ笑んだ。建前とはいえこの式典の本旨は捕虜の帰還を祝うことであったから、皇太子のこの行動を押しとどめることは誰にも出来ないのである。
皇帝モルトも、式の進行を担当する侍従達も、会場にいた参列者達も、ゾルザルが式次第に戻ることを期待して待つしかない。皆、彼のすることを指をくわえて見ていることしか出来ないのだ。
「殿下、そろそろお戻り下さい」
ゾルザルはおそるおそる声をかける侍従の呼びかけすら無視した。そして捕虜達がどのような苦労をしたのかを問い、その話にじっくりと耳を傾けることで、講話交渉の開始に反対という意志を、態度で示した。
皇帝は、そんなゾルザルの背中を見て深々と嘆息した。
「あれのことはもうよい。帰って来た者を労うのは、あの者に任せておいて我らは式典を続けよう」
そう告げて、式次第をゾルザル抜きで進行させるよう命じた。
皆、皇太子の意固地さに顔をしかめていたから、ゾルザルの存在は無視される形で、式典は進められることとなった。
だが、そんなゾルザルの態度は、帰国した捕虜達を大いに感動させていた。何故なら、彼らは捕

虜となったその日から今日まで、言葉もろくに通じない者の監視下で、今日処刑されるか、明日には奴隷に売られるかという不安な毎日を過ごしてきたからである。

もちろん、実際にそんな酷い扱いを受けた者はない。抱いていた不安の正体も、自分たちが捕虜となった者に対して行ってきたことをそのまま自分に向けたものでしかない。振り返ってみれば、丁重な扱いを受けていたと分かる。しかし、それは今だから言えることであり、捕虜として明日はどうなるかという不安の最中にいた時は、看守の靴音が死神の足音にも聞こえ、それがいつ自分の監房の前で止まるかと息を凝らして恐れていたのである。

それに、もし生きて戻れたとしても、温かく迎え入れられるかという不安もあった。虜囚の辱めを受けた者という蔑みの目で迎えられないかが心配だった。

だからこそ重要なはずの日本使節団との謁見や、式次第もかなぐり捨てて、自分たちを労ってくれる皇太子の言葉と、肩に置かれた手の温かさが、彼らの心に染み渡ったのである。

一方、ゾルザルもそんな彼らに対する労りの気持ちが、芝居ではなく自然な形で湧き上がっていた。皆が味わった屈辱と辛労には心底共感できたのだ。地揺れのあった夜の出来事によって、ゾルザルの自尊心には拭いがたい傷が刻み込まれていたからである。

あの日以来、廊下ですれ違うメイドたちの笑顔が、自分のことを嘲笑っているように見え、官僚たちの声を潜めた会話や視線が、自分に対する批判のように感じられるのだ。

ゾルザルはこの屈辱にまみれた状況に耐えるため、皇帝たる父に自分を無能に見せるための苦肉

の策であると、自分に対して言い訳していた。
これまで皆に顔をしかめられるようなことをしてきたが、それはわざとだ。
女に殴られて痛い目にあったが、それもあえて抵抗しなかった。
そして、その努力は報われた。権力を手放したがらなかった皇帝も、ようやく自分を次代の皇帝に選んだ。無能を演じてきた自分を傀儡にすることが出来ると見くびったからである。
だが、皇太子となったからには思い通りにはなってやらない。肉体の傷も癒え、翼竜の鱗でこしらえた義歯を入れれば、外見的にもすっかり元通りである。これからが本気の自分を見せる時。これまでの自分は擬態で、本当の自分がどれほど凄いかを示すのはこれからなのだと考えたのである。
なのに、皇帝はゾルザルを無視した。
皇太子たる自分を抜きにして式典を進めるなどあってはならないはずなのに、皇帝は自分を放っておけと言ったのである。しかも皆もそれに同調して自分を無視している。
それとなく視線を向けてみれば、皇帝が日本からの使節達に声をかけているところであった。
これによって日本からの使節団に外交特権が付与される。講和会議の席に帝国の正式な代表が座ることが出来るようになり、ゾルザルが反対した講和会議が始まってしまうのである。
帰還した捕虜達がゾルザルに懇願するように言った。
「こうして無事に帰ることが出来たことに感謝すべきなのかも知れませんが、そのために帝国が不利な形で講和を結ぶことには、我らは耐えられません」

「殿下。どうぞ我らに雪辱の機会を！」
汚名をそそぐ機会を与えて欲しいと願う者達に、ゾルザルは声を潜めて告げた。
「しばし待っていろ、まだ戦は終わっておらぬ。お前達が本当の力量を示すべき機会は、この俺が必ず作ってやるからな。待っておれ」
いいな、と言い聞かせるゾルザルに対して、元捕虜達は頼もしげな視線を向ける。
この視線こそが皇太子たる自分に向けられるべきもの。本来ならば、宮廷の皆が、全ての臣民が自分に向けるべき眼差しなのだ。
「なのに、なのに……」
自分は無視されている。その口惜しさにゾルザルは奥歯を噛み砕きそうになっていた。

＊　＊

「ところでピニャ姫。炎龍の首が城門に掲げられた話は、もう耳にされましたか？」
「私は直々に足を運んで見て参りましたぞ。あれはなんとも恐ろしげな姿でありました」
「俺も見てきたが、言われているほど恐ろしげに感じなかったな。あれなら、工夫次第で俺にも狩ることが出来た」
「そうそう、俺もそう思った。今まで何人もの英雄が敗れてきたと言うが、その者達が不甲斐なか

ったけではないのか？」

そんなことを語りながら気安くピニャに声をかけてくる青年貴族達。普段ならば彼女の半径十レン（約十六メートル）の範囲を危険域として、それ以上近付くことを避けたがると言うのに、今日に限っては何故か男達が集まってくる。

宴席の片隅で食事を口に運んでいたピニャは、不思議なこともあるものだと思いつつ、彼らが何のつもりで寄って来たのかを探るべく黙って観察することにした。

「本日は、姫様におかれましてはたいそうご機嫌麗しく」

この言葉にピニャは「うむ、確かに」と頷いた。実際その通りで、帝国皇女ピニャ・コ・ラーダにとって今日という日は大変に喜ばしい日なのだ。何故かと言えば、これまで彼女独りの肩にのしかかっていた重荷を、本日を境にすっきりさっぱりと降ろすことが出来たからである。

イタリカ防衛戦で自衛隊の実力をまざまざと見せつけられ、東京に行って日本という国を直に見て来た彼女にとって、戦争の継続は滅亡に向けてひた走ることと同義であった。帝国という国を生き残らせるためには、なんとしても日本との戦争を終わらせなくてはならないと真剣に憂えていたのである。

もちろん、講和のためならば日本の要求に無条件で応じるべきだと思っているわけではない。それでは国は残っても、人々の生活が破壊されてしまう。この帝都も、人間の住まない廃墟となってしまうおそれがあった。

菅原が彼女に内示した講和の条件……例えば賠償金は、それほどまでに巨額だったのである。もし素直に支払おうとすれば、帝国はおろか周辺諸国をも巻き込んで経済的に破綻してしまいかねない。だからそれを、これから引き下げさせなくてはならないのである。

これからはじまる講和交渉は、戦闘よりも困難で厳しいものとなるはずだ。帝国側にとって取引の材料となる有利な事項が、あまりにも少な過ぎるからだ。

それでも、それはもう彼女が心配するべきことではない。講和交渉は、皇帝の選んだ代表達が携わる。これからの彼女は、これまで築いてきた日本側との関係を生かして、仲介の任を担うだけでよいのだ。もちろん通訳の養成やら手配やら、日本との文化交流とか、細々とした雑務はあるが、そんなものはこれまで抱えてきた責任の重さに比べたら無いにも等しい。

そう思ってみると、なんと身軽なことだろう。

帝国の将来を気に病んで鬱々と眠れぬ夜もあったが、それも今日で終わりだ。宴会の後片づけなどは秘書のハミルトンに全部おしつけてしまい、解放感に浸っていた。

「前にもこんな気分になったことがあったな」

ピニャは思い出す。あれは確か、菅原と共に園遊会を開いた時だ。主戦論派だった議員達に講和の必要性を納得させることに成功した時、今と同様の気分を得ることが出来た。

ただあの時は兄ゾルザルの乱入があって、しかも背後にはマルクス伯の使嗾があったことが分かったため、降ろしたはずの重荷をすぐさま背負う羽目になった。内相のマルクス伯がどのような陰

謀を巡らせているか、その後に暗闘がはじまる予感から、身構えなければならなかったのだ。
さらにその後も講和交渉など吹っ飛んでしまいそうな事件が続いた。
皇帝の面前での乱闘。日本から拉致被害者の引き渡し請求と元老院議事堂の破壊。さらにはアルヌスでの拉致被害者暗殺未遂。
何か事が起こる度にピニャは、胃のもたれ、頭痛、吐き気、目眩等を感じて眉間に深い皺を刻み込む羽目になったのである。
だが、それも今日までのこと。
「ここまで話が進めば大丈夫。もう何があっても講和交渉が立ち消えになることはない」
これまでに続いた数々の試練が、彼女の性格に慎重という成分を加えた。
以前から持っていた悲観的な方向へと働く想像力も幾分か現実的になっていた。だがそれらを総動員しても、どう考えても、現在の状況をひっくり返すような事態は考えられなかったのである。
「父上の身に何か起きない限り、絶対に大丈夫」
だからこそ、ピニャは難事を成し遂げた者だけに許される満足げな表情をしていたのである。
穏(おだ)やかに弧を描く唇とふんわりとした頬。それが、どうやら男共を魅了することとなったらしい。
「おおっ、お美しい」
「姫様。どうぞこれからもそのようなお美しい笑顔を我らに手向けてくださいますよう」
青年貴族達は、口々にピニャの気品と美しさを称えながらその気を惹こうとした。ピニャも恥か

しげに頬に当てた指先がえくぼに触れて、自分が今、上機嫌であることを改めて自覚した。
「なるほど、そういうことか」
ピニャは、気高さたっぷりのお澄まし顔をした。
「炎龍など実は大したことがなかったとは、皆の壮語にこのピニャ、いたく感銘を覚えたぞ。そなた達のような者がいてくれれば帝国も安泰であろう。だが惜しむらくは、その剛勇と才幹が充分に生かされているとは言えぬことだ。皆には是非、軍に志願して兵を率いていただきたい」
すると途端に、皆は及び腰となった。
「あ、いえ……それはその……」
「我が家は代々官僚として帝国に奉職しておりますので、私はそちらで」
などと口々に言いながら半歩引き下がった。
「なんだ、とてもがっかりだ。皆が女を口説く時ほどに勇敢かつ勤勉になってくれれば、妾ももう少し卿らと親しく出来るのに。なぁシャンディー？」
「はい。殿下」
シャンディー・ガフ・マレアとは、明日から始まる講和会議の通訳として、ボーゼスらと共にアルヌスから呼び戻された女性騎士の一人である。まだ十七歳と年若いが、その分語学の修得が早く実用に耐えるということで、講和会議の通訳に選ばれていた。亜麻色の長い髪をお下げに編んだ姿が、清楚な魅力を周囲に放っている。今日は職務で多忙なハミルトンに代わって、彼女がピニャに

伺候していた。
「帝国軍は常にみなさまの志願をお待ちしていますよ」
「うむ。人手不足の今なら、昇進も思いのままだぞ。何しろ今は戦争中なので、手柄を立てる機会も頻繁におとずれようからな」
「そうですとも。しかも、万が一捕虜となるようなことがあっても、ニホンという国は奴隷に売りさばいたりしないそうですから、安心してください」
「うむ。妾が責任持って返還交渉役を担おう。十年後ぐらいにな……」
するとどうしたことか、青年貴族達は突然急用を思い出し、逃げるように去っていった。たちまち彼女の周囲からは男っ気がなくなってしまった。
「いくら何でも口にする言葉に重みがなさ過ぎるのではないか？」
青年貴族達の逃げっぷりを見て、ピニャは唾棄するように呟き、「ふん」と鼻を鳴らした。
「姫殿下の毒舌、久しぶりに耳にいたしました。爽快でした」
「妾も久方ぶりに毒を吐いたような気がするな」
正確には、毒舌を吐いている余裕がなかったのである。それだけ追いつめられた日々が続いていたということであろう。
「しかし知らなかった。炎龍の首が掲げられたのは本当なのか？」
「はい。私も最初は疑って、直に見に行って来ました。炎龍を見たことがあるという年寄りに聞い

たままの恐ろしげな姿でした。あれは絶対に炎龍ですよ」
ピニャはしみじみとした面持ちで呟いた。
「イタミ殿、ついに成し遂げられたか……」
「姫殿下。大役を果たされて気が抜けてらっしゃるんだと思いますけど、いくらなんでもトルティージャを頬張りながらでは、いろいろなものが台無しですう」
いろいろとは威厳とか、美しさといったものである。
ピニャは慌てて、酒で口内に残っていた食べ物を飲み下すと、口周りを手巾で拭いた上で繰り返した。
「イタミ殿、ついに成し遂げられたか。無事だといいが……」
今度は、格好が付いたらしい。シャンディーは、ぱちぱちと拍手した。
「あの方ならきっと大丈夫です」
「お前も、そのあたりの経緯は知っていたのか？」
「っていうか、報告書は私が書いたんです。イタミ様がアルヌスを旅立たれた時まではアルヌスにおりましたから。その後がどうなったかまでは分からずに気を揉んでたんです。でも、あの方も試練を乗り越えたようで、素敵なことです」
シャンディーは我が事のように喜んだ表情を見せた。
だがピニャは、訝しげに若干責めるような、呆れの色合いを含んだ視線を向けた。

「あれを書いたのはお前だったか。何かの英雄物語の序章かと思ったぞ……」
「良く書けていたとはおっしゃって下さらないのですね？」
ピニャはうんざりした表情で、物語としては良くできていたから、その調子で芸術の理解に努めるように。ただし報告書では客観性が大切だから以降は気を配れと言い聞かせた。
「妾は知っているから問題ないが、テュカを男性にしてしまうのはやり過ぎだぞ」
シャンディーは「すみません」と首を竦めた。
「しかし、続報が待ち遠しいな。イタミ殿がどんな風に炎龍と戦われたのかが気になる」
「はい。パナシュお姉さまが現地で情報収集されてますから程なく届きましょう。とても心待ちでワクテカしてます」
「ワクテカ？」
「はい。ワクワク、テカテカという意味です。わくわくと心待ちにしているとお肌にも艶が出てくるという意味らしいです」
見ればシャンディーは、アルヌスで憶えたらしいスラング的表現の説明をしながら、両手を胸の前で組んで夢見心地な表情をした。
それを見たピニャは、彼女の精神的健康が心配になった。
「どうした？　大丈夫か？」
「はい。姫殿下より下されたご命令なんですけど、正直言ってとても気が進みませんでした。です

がこうなってみますと、殿下からのご命令が無くても進んでお引き受けしたいなぁ、なんて思うようになりまして……」

実は、シャンディーには秘密の任務が与えられていた。それは伊丹籠絡の任務である。もともとは、語学研修でアルヌスに行くパナシュの後任として白薔薇隊を率いるはずだったのだが、「お姉さまと一緒にアルヌスに行きたいですう」などと我が儘を言ったので、それを叶える条件としてこの極秘任務を押しつけられたのだ。そんな理由もあったからこそ、彼女は伊丹の動向に気を配っていたのである。

「あ～、その命令は保留だ保留。妾が指示するまで何もするなよ」

「え～～そんな殺生なぁ～～ひめでんか～」

急にシナを作って唇をとがらせるシャンディー。

ピニャは、シャンディーという娘が、とっても有名人好きであることを思い出した。

例えば民衆から歓呼の声援を受ける剣闘大会の優勝者、客席のことごとくが若い娘で埋まってしまう美しい男優などと、人々から注目を浴びるような人物が大好きなのである。要するにミーハーなのだ。

そんな娘が炎龍を討ち果たした英雄に憧れるのは分からなくもない話である。とはいえ「籠絡のために」なら良くても、本気になられるのはいささか不味い。

「あれに本気になるのは止めておけ」

ピニャは警告するように言った。
「え～、なんでですか？」
理由は数え上げるといくつもある。その中でもピニャにとって最大の懸案（けんあん）は、芸術の供給源たる梨紗（りさ）の機嫌を損ねるということであった。
「でも、お二人は別れちゃったんですよね」
「男女の機微は、そういう形式的なことで分からぬほどに難しい。妾も経験不足故、理解しきれておらぬが、まずいということだけは分かる。シャンディーがどうしても気持ちを抑えられぬと言うのであれば、イタミ殿籠絡の任は解くしかないな。この手の任務は己を人身御供と割り切れる者でなければ困る」
それに本気になられると、裏切りの心配すら必要になってしまう。
「ううっ。それはアルヌスにはもう行っちゃ駄目ってことですか？」
「そうなるな」
「それは嫌です。すっごく嫌です。分かりました、我慢します」
シャンディーはしゅんと項垂れて肩を落とした。
「大丈夫か？」
「なんとか、します」
とは言いつつも、頬をふくらませて不満なのがありありと分かる顔つきをしていた。しかしピニ

ャは話をそこで切り上げ、手元に確保しておいた菓子の全てを頬張り、「さてと、炎龍の首を見に行くとしよう。たしか城門だったな……」と腰を上げた。

「姫殿下。食べ物で頬をふくらませていては、いろいろと台無しです」

いろいろとは、色気とか、気品といったもののことである。

ピニャはちょっと待ってくれと手で合図し、もりもりと咀嚼、嚥下を素早く済ませた。

「この菓子はアルヌスから取り寄せたニホンのものだから、食べねばもったいないではないか。それに頬をふくらませているのは、お前も一緒だ」

「キャラクターが違います。私は貴族でも身分が低めなので、多少粗忽でも可愛いげがあって許されるんです。でも姫殿下は気高さと美しさが売りなのですから、それを損ねるようなことをしちゃ駄目なんです」

「そういうものか？」

「ええ、そういうものです。それに炎龍の首なら、もうすでに陛下のご命令で運び出されて城門にはありませんよ」

「は、早いな」

「遅いくらいです。帝都の市場も街道も、朝から夕刻まで凄い賑わいとなって、往来が出来なかったんですから」

おかげで、帝都の流通と商売の機能は一日中麻痺していたという。

「で、今どこにある？」
「ええと……」
シャンディーは頬に人差し指を当てて困ったような表情をしたが、一瞬で愁眉を開いた。
「……あ、あそこです」
彼女の指さした方向を見ると、今まさに炎龍の首が運び込まれて来たところであった。

炎龍の首は非常に大きく重たそうであった。
運搬作業には、体格の大きな兵士が二十人も必要となったほどである。こんなものをどうやって軍旗掲揚塔のてっぺんに掲げたのか、その方法が気になるところであった。だが、マルクス伯の報告は、「現在調べさせておりますが、まだ分かったことはございません」というものであった。
「我が帝都の、しかも正門で起きた出来事に誰も注意を払っておらなかったとは、なんと嘆かわしいことか」
皇帝は眉根を寄せると嘆いた。
「陛下のご不興、ごもっともなことと存じますが、この帝都も今や百万の民が暮らしております。来る者去る者、昼夜を問わずひっきりなしに城門をくぐります。城門も閉じられなくなって二百年。見張りも定期的な巡邏だけで、夜ともなれば、みな足下に気を配るのが精一杯で頭上には注意を払わなかったのです」

マルクス伯の言い分には納得できる合理性があった。

かつての帝都は、日が沈むと同時に城門は閉じられて、見張りの兵が四方に警戒の目を光らせていた。だが今では深夜であっても荷車の出入りがある。城門近くで荷下ろしの作業をしている者がいても、珍しくもないから誰も気にしないのだ。

「致し方あるまい。だが調査は継続せよ。さらに炎龍が出没していた地域の諸部族、村落、諸侯らの動向に気を配らせよ」

「かしこまりました」

指示を下したモルトは、炎龍の頬部から顎にかけてなで回すと、その硬さを試すように拳で軽く叩いた。すると鈍い硬質の感触が跳ね返って来て、鱗の一枚一枚が剣を受け付けない強靭な装甲であったことを改めて確認した。これでは剣や弓矢などでは歯が立つわけがない。さらに上下の顎から生えている牙は、小さな物でも大人の親指ほど、大きな物ともなると女性の腰回りほどに太かった。これならば、石造りの塔すら噛み砕いたという伝説も、それほど誇張されたものではないと納得できる。

眼球はすでに失われてしまっているが、虚ろな眼窩（がんか）がかえって不気味さを際立たせていた。

これこそが、人々に恐怖と絶望をもたらした炎龍だ。頭部だけでもこれだけの大きさなのである。広げた翼の両端、尾の先まで含めたらどれほどとなったろうか。これまで語られてきた伝説の凄まじさもあいまって、人々の想像力は、現実の域を超えた姿を描いていると思っていたが、現実はそ

れに負けていなかったのだ。
いつの間にか周囲には、炎龍の頭部を間近で見ようと大勢の列席者達が集まってきている。
皆、その恐ろしげな姿に身を震わせ、同時に頭の大きさや牙の鋭さに見入っていた。
モルトは振り返ると集まった者達へと語りかけた。
「皆の者、じっくりと見るが良い。これが今朝方より帝都を騒がせた炎龍である。これが街を焼き、人々を喰い殺して多くの民を苦しめてきたのだ。だがそれも今日、こうして骸(むくろ)をさらした。もう恐れる必要もない。これを神々からの引き出物として受け取り、今日の佳き日を祝おう！」
「陛下。これは何者が為したことなのでしょう？」
軍人の一人が尋ねた。今や誰もが、その答えを求めている。
「はっきりとしたことはまだ分からぬ。まことしやかに流れている噂もあるようだが、軽々に断ずることが出来ぬ故、余としてはここでは語らぬことにしたい。調査した上で、いずれ皆に報告するであろう」
モルトはそう告げて炎龍の頭部から離れた。
すると入れ替わるように遠巻きにしていた者達が炎龍に近付いてその表面に顔を近付けたり、顎に生えている牙の切っ先に触れてその鋭さの感想を語り合った。
「陛下！」
ピニャの呼び声に振り返ったモルトは、「おお、ピニャよ。そなたに尋ねたいことがあった」と

娘の肩を抱くようにして人混みから離れた。
「緑の人のことですね？」
「そうだ。以前、そなたより報告を受けた時は、信じられぬと粗略に扱ってしまった。かたじけなく思うぞ」
「いえ。それもまた仕方のないことと思います。この妾ですら半信半疑だったのですから」
「その後、何か情報を得てはおらぬか？　これほどの栄光だ、賞さぬわけにはいかぬからな」
「炎龍討伐に赴いたのは、イタミ、ロウリィ、レレイ、テュカ、それにヤオの五名です。ここに、その者らが出発するまでを確認した者がおりますので、直接お尋ね下さい」
ピニャはそう説明しシャンディーを皇帝に紹介した。だがモルトは、並べられた名前の一つに気をとられたようだ。
「ロウリィだと？」
シャンディーは片膝を付くと、膝頭に額をこすりつけるほどに頭を下げながら報告した。
「はい。エムロイの使徒、ロウリィ・マーキュリー聖下でございます」
「おおっ、あの方が加わっているならば、討伐成功も納得できる話だ。しかし、神々に列せられる方がよくぞ関わろうと決意されたものだな。例によって気まぐれであろうか。……しかしそうなると、此度の栄光は神々のもの。緑の人と噂されている者とは無関係だな」
「いえ。イタミヨウジなる者が緑の人、その人でございます」

「イタミ？　聞き覚えがあるな」
ピニャがおずおずと「以前、陛下の御前にて、兄様を打擲した……男の方です」と囁く。
皇帝モルトは「あの者か」とあからさまに落胆の様子を見せた。
「緑の人とは、やはり敵なのだな……。で、他の者は？」
「テュカはロドの森氏族のエルフ、ヤオと申す者はシュワルツの森に住まうダークエルフでした」
何が不満なのか、皇帝はますます消沈した表情となり、「今度は、異種族か」と呟いた。だが次の言葉を聞くと突如顔つきを変えた。
「最後に、レレイ・ラ・レレーナ。こちらは賢者カトーの弟子。コダの住人でございます」
「おおっ！　あのカトー老師の弟子か！　その者はヒト種かっ!?」
豹変とも言える皇帝の突然の変化に戸惑いつつも、シャンディーは問われたことに答えるべく口を動かした。
「は、はい。ルルドの末裔ですが……コダの村に定住していたようですから帝国の臣民と申せましょう」
皇帝は愁眉を開くと、うんうんと頷いて派手に相好を崩した。
「よし！　それは嬉しい報せだ。炎龍討伐に我が臣民が関与していると聞いて、余も安堵した。ピニャ、そなたはそのレレイなる者を探してこの帝都に招聘するのだ。よいな、しかと命じたぞ。何があってもこの命令は遂行するのだ。分かったな？」

皇帝は、まるでつっかえていた物がとれたかのように喜びだした。そして、両手を広げると参列者達に、今聞いたばかりの話をそのままに告げた。

すると、どうしたことか列席者達もこれまで以上の喜びに沸いた。

皆、炎龍が討伐されたことは喜ばしいと思っていても、手放しに喜んでいたわけではなかったのだ。と言うのも炎龍を退治してくれた者に対して、帝国人は恩を感じて感謝しなければならない立場だからだ。それは帝国の支配階級に属する者にとって口惜しく、自尊心の傷つけられることだった。しかし、この功績に帝国の臣民が関与しているとなれば話は変わる。対外的には帝国人の功績として自慢できる事柄となったからである。

この世界、帝国とその周囲を取り巻く国際関係では、人々の尊敬を得られるような功績と名誉がどこに帰属するかは、かなり重い事柄である。他国や他部族から尊敬を受け、一目置かれる者が現れると、その者が所属する国家や諸部族の序列にまで影響が及んだ。

例えるならオリンピックの金メダル、サッカーのワールドカップ……そうした競技全てにおける優勝の栄誉を根刮ぎかき集めたようなものかも知れない。実際にはそんな者いやしないのだが、もし現れたとすれば、全世界から「凄い、凄い」の大合唱を受けて、王侯のような扱いを受けるだろう。その者の母国民も、どこの国に行っても胸を張れる。

エルベ藩王国をはじめとする様々な部族が、騎士やら名誉族長の称号を次から次へと伊丹に贈ったのも、伊丹達を身内にすることで現実的な利益が得られるからであって、決して、彼に対する感

謝や賞賛ばかりではなかったのだ。

こんな心理が、帝国の為政者達に帝国民としてのレレイの功績を過大なまでに評価させることとなった。そして帝国に勝利の栄光をもたらした「カトー老師の弟子、レレイ・ラ・レレーナとは何者か？」という声が、燎原の火のごとく急速に広がっていったのである。

だが、貴族達が喜べば喜ぶほど、苦々しい表情となる男が一人いた。

黒い嫉妬の炎を激しく燃やしたゾルザルは、心の底から湧き上がる猛烈な憎悪で、握った拳の爪が手掌を傷つけ血が流れだすほどに力を込め、炎龍の首と皇帝とを睨み付けた。

「くそっ……炎龍を斃したことがそんなに偉いか！」

皇太子たる自分が皆から無視されるという侮辱に耐えているというのに、この場に居もしない者が、皆の話題を独占し、賞賛と尊敬を得ているのである。

ゾルザルにはそれが許せなかった。自分より賞賛される者の存在が、帝国に勝利の栄光をもたらしたのが自分でないことが、許せなかった。そして、その名を皆に報せた男が許せなかった。何故、自分の名ではなく、レレイなどという名を皆に告げたのか。何故他人を褒め称え、自分の息子を見ようとしないのか！

許せん。許せない。ぶっ殺してやりたい。この男もレレイなる者も、みんなぶっ殺してやる！

やがて、ゾルザルの憎悪が、まるで力を持ったかのように作用した。

「皆の者、祝おうではないか！」

モルトの音頭で乾杯の声が唱和された直後、黄金の杯が床を転がった。
悲鳴の声に続く静寂。
皆が見つめるその先には、皇帝が仰向けに倒れていた。

02

うららかな日差しの下、草原を貫く一本道を高機動車が走っていく。
のんびりと、ゆったりと。丸い砂煙を巻きあげながら、どこまでも続く地平線とその向こう側に浮かぶ大きな白い雲を目指していた。
車内では、エンジン音の他に、月琴の音が鳴り響いている。
奏者は後部座席に座るテュカ・ルナ・マルソー。音楽の神ルナリューを信奉しているエルフ娘。
その桜貝のような指先がつま弾く旋律は、芸術と呼ぶに相応しいものだった。これだけの技量ならば日本で演奏会を催しても客席が埋まるに違いない。立ち見も出るかも。音楽業界の現実を、漫画で描かれている程度にしか知らない伊丹耀司（いたみようじ）は単純にそう考えた。
「次は、何の曲を弾こうかしら？」
「陽気な曲がいいな」

そんなリクエストを出しながら、伊丹は時計を見て、地図を見て、再び時計を見るを繰り返す。

テュカは「分かったわ、父さん」と月琴を抱え直した。

「ところでさ、そろそろ父さんって呼ぶのはやめない？」と伊丹は地図から目を逸らさずに言う。顔を向けないのは、手元から目が離せないというのもあるが父さんという呼称に照れを感じているからだろう。

「い……嫌よ。恥ずかしいじゃない」

何故か頬と耳の先端を赤く染めているテュカ。「ヨ、ヨウジだなんて呼べるわけないじゃない。精神的歯止めが、ゴニョゴニョ……」と呟いているところを見ると、お父さんと呼ぶ方が気安いらしい。二人の意見は、この件に関しては平行線である。

「歯止めって何だ？」

「何でもな～い」

ごまかすように声を上げたテュカは、伊丹のリクエストに応えて軽快なリズムを奏で始めた。歌詞の理解できる部分だけ拾っていくと、男性を慕う乙女心をユーモラスに唄った曲らしいと推測できた。男の気を引くためにあらゆることをするが、それらが全部空回りして、嘆いたりして、でも最後には思いが通じる、というよりは元々通じていた、という曲だった。

「無茶苦茶上手いんだけど何年ぐらいその楽器を弾いているんだ？」

伊丹の問いに、テュカは「そうね。百年ぐらいかな」と何でもないことのように答えて、笹穂耳

をピクピクっと振るわせた。
「ひゃ、ひゃく年か……」
伊丹は、感心して良いのか、百年も練習したならそれだけ弾けて当然と頷けば良いのかよく分からなかった。何はともあれ、自分が生きてきた年月の三倍以上だ。想像の範囲を超えている。
「エルフって何げに凄くね？」
「そうね。でも、あたしぐらいの歳のエルフなら、大抵は得意な楽器を持つものよ」
「へぇ」
ならばここにいるもう一人のエルフはどうだろう？
伊丹は視線を傍らにいるダークエルフの女性へと向けた。
するとヤオは「あははは」と、恥ずかしそうに笑うと「まぁ、そうだな」と頷いてみせた。
「ヤオはどんな楽器を？」
「此の身は葦笛(あしぶえ)を……だが、嗜(たしな)む程度だ。他人に聞かせられるようなものではない。むろん御身(おんみ)は他人ではない故、ご所望とあらば喜んで披露させて貰うが、かなうことなら余人をまじえず二人だけの時にしてくれると嬉しい。早速だが、今宵などはどうだろ……痛っっ！」
隠しておきたかったことを白状させられたかのようにはにかんだヤオだが、艶(なま)めかしい声色で誘いめいた言葉を口にした途端、くぐもった悲鳴を上げた。
伊丹の座る助手席からはよく見えないが、隣に座っているロゥリィと、向かいに座っていたテュ

カが、ヤオのつま先をぐりぐりっと何かしているようである。
「お、お役に立たないと、此の身の立つ瀬がない」とか「そういうことでぇ役に立とうと思わなくていいっ！」とか、そんな諍い女達の声がひそひそと飛び交っていた。
何をしているのだろう。そう思った伊丹が後ろを見ようと助手席から身を乗り出したところで、テュカが慌てたように言葉を継いできた。何かを誤魔化そうとしているかのようだった。
「と、父さんは……ホドリュー父さんのシタールはとてもすばらしくて、皆で聞き惚れてたのよ」
「そっか？　テュカの音楽の師匠は父親なのか」
するとテュカはきょとんとした表情となって、師匠なんていなかったわと言う。
「じゃあ誰に習ったの？」
するとテュカは、困ったような表情をして首を傾げてしまった。
自分達にとって当たり前のことを問われると、質問そのものの意味がつかめず、何をどう答えて良いのか分からないということがある。テュカもそうした状況に陥ってしまったようだ。
だが傍らで聞いていたヤオには状況が理解できたようで、助け船を出してくれた。
それによると、こういう芸事を特定の誰かについて習ったりしないのがエルフという種族らしい。武術、精霊魔法の基礎ですら、見よう見まねで身につけて、経験と試行錯誤で技量を磨いていくという。
「その意味では師匠はいないと言えるし、周りにある全てが師匠であるとも言える」

「へぇ……」

例えば、話すことや日常生活で必要なことを師匠について学ぶ者はいない。毎日の生活の中で自然と覚えるからである。それと同じ感覚らしい。だからだろう、彼女達は技量の巧い下手で、その人物を評価することはない。全くしないとは言わないが、あまり重きを置かないという。今、未熟なのは、始めるのが遅かったからでしかないし、今の技量が優れているとすれば、それは充分に時間をかけて習得したからに過ぎないのだ。逆に、何かを他人よりも上手になろうとしてしゃかりきに練習する行為を、『執着』と称して人柄に偏りをつくる良くないこととみなすという。

「無理に大樹に育てようとして黒く肥えた土を盛り、大量の水を与え、精霊の力を加え続けると、その木は歪な姿となってしまうだろう？　此の身達エルフは、自然のままに調和のとれた伸び方をすることを尊ぶのだ」

ヒト種と違って寿命の長い彼らは、どんなことにも時間をかけられる。音楽にしても楽しむためだけに楽器を取り出して、時々弄るだけ。それでも百年、二百年と時をかければいっぱしの演奏が出来るようになるのだ。ならば慌てる必要はない。急ぐ必要もないということらしい。

「なるほど。ま、実際に若くして何かに長じる人って変人が多いって言うからなあ」

エルフから見ると、師匠について知識や技術を習得し、継承していくというシステムは、試行錯誤をしている時間を持たない短命種族のためにこそ存在する。エルフが百年単位ですることをわずかな時間で達成できるようにするこの仕組みがあるからこそ、ヒト種はこの世界の支配者として君

臨することができたのである。
「此の身らのそういう姿勢が、ヒト種には鼻持ちがならないらしいがな」
ヒト種の一人として、伊丹は後ろ髪を掻きつつしみじみ呟いた。
「そういう感覚、俺にはちょっと分かんないな。ベートーベンとか、モーツァルトだったらなんて言うだろう？」
「ねぇ、ヨウジぃ。それって誰ぇ？」
ロゥリィが伊丹の肩越しに身を乗り出してきた。彼女の手が伊丹の肩にかかり、黒髪が肩にふぁさっとかかる。
「俺の世界の作曲家。何百年も前の人だけどその人の書いた曲が残っている。そして、二人ともかなり変わった人柄だったと言われている」
もし彼らがエルフと会ったら、妬むだろうか。そんなことを自問していると運転席から物言いたげな翠（みどり）の視線が伊丹に向けられた。ハンドルを握っているレレイだ。
「ヨ……」
「ヨ？」と伊丹は尋ねようとした。だが高機動車のものとは明らかに異なるエンジン音が辺りに響き始め、答えを待つ間もなくそちらに気を取られてしまった。
「お、来た来た！」
伊丹が、待ちかねたように空を仰ぐと無線機に向けて叫ぶ。

「今、機影を確認。投下してくれ！」
『受け取りのハンコはいらねぇから、土産物を一つたのむわ。じゃぁな！』
無線機のスピーカーからパイロットの声が漏れる。その直後、青い空をC－1中型輸送機がジェットの轟音をあげながら通過していった。その騒音の凄まじさに、テュカの演奏がすっかり聞こえなくなってしまったほどだ。C－1はそれぐらいの低空を飛んでいた。
輸送機はまるで荷崩れでも起こしたかのように、伊丹達の頭上で大きな箱を落とした。
「きゃっ！　あんな所から落としたら壊れちゃう！」
「危ないっ！」
その乱暴とも思える配達ぶりに、テュカやヤオは悲鳴を上げた。
だが、すぐに落下傘が開いて荷物の落下速度にブレーキがかかった。緩やかとは言い難いが、それでも地面に激突して何もかも木っ端微塵になるような勢いではなくなった。
「レレイ。あれが落ちていくところに向かってくれ」
伊丹は、落下傘を指差してハンドルを握っているレレイに声をかけた。
「……了解」
何か言いたそうにしていたレレイだったが、軽く頷くとハンドルをわずかに切って、高機動車の進路を変えた。

第三偵察隊の隊長職を解かれた伊丹に与えられた次の任務は、特地の資源状況の調査である。

要点を簡単にまとめると、特地のあちこちをうろつきまわって、どんな鉱山があるか詳しく探して来い、というものである。原油や希土類といった有力な地下資源が埋まってる場所を見つけて来いとも指示されている。けれどその任務を達成するには、解決しなければならない大きな問題が立ちはだかっていた。

それは伊丹が地質学者でもなければ鉱山技師でもないということである。

石コロを見て、そこに鉱山の存在を予測するのが地質学者で、どんな風に商売するかを考えるのが石材店や建材屋だと言う。だが伊丹の場合は、石コロはやっぱり石コロにしか見えない。なので、とりあえずは現地人に聞き取り調査をしたり、すでに存在する鉱山で何が採掘されているかを調べることとなった。それだけでも、大まかな資源分布ぐらいは把握できるらしい。

「はあ、了解しました。けど、まさか本当に独りで行って来いって話になるとは、思っても見ませんでしたけどね」

伊丹の直属の上司たる檜垣(ひがき)三等陸佐は、停職処分の明けたばかりの部下が時間を持て余していた間に認知症にかかったのではないかと真剣に心配する表情を見せた。

「何を今更なことを言う。ついこの間、有力な地下資源があるという情報を得て、エルベ藩王国に単身で乗り込んだばかりだろうが？」

炎龍退治のために勝手に出かけた伊丹の行動は、書類の上では資源状況の調査ということになっ

ていた。そしてその任務遂行中に、たまたま特地甲種害獣、通称『ドラゴン』と遭遇したので、これを撃破したというのが公式の報告にまとめられた事実なのである。

「別に一人だった訳じゃないんですけどね。あいつらがいたし」

「なら、今回も現地協力員を雇い入れろ。そのための予算は付いてるんだからな」

檜垣はそういって書類をめくり予算表を広げた。

ダイヤモンド鉱山と油田を見つけたという実績が評価されて、資源状況調査活動の予算は、当初の計画よりも大きく膨らまされていた。それ自体は有り難い話だったが、それに相応しい成果が期待されることになる為、手放しでは喜べないのだ。

伊丹はその表の数字に指を這わせると、大げさに驚いて見せた。

「うわっ、一、十、百、千、万、十万、ひゃく……報償費がすっごい額になってますね」

「事務屋共は金をかければ成果が得られると思ってるからな。おかげで君の他にも何人かを、資源調査に送り出さなきゃなんなくなった」

「実際、金が無きゃ何もできないから予算が付くのは嬉しいんですけどね。問題は、金で雇っただけの現地人をどれだけ信用できるかってことなんですけど」

「現地人と親密な関係を築いているのは君ばかりじゃないぞ。ま、華やかさには欠けてるがな。それと、君が助けたダークエルフの部族が手を貸してくれるそうだ」

「あそこの連中ですか？　いつの間に……」

「君が停職で休んでる間に売り込みにやって来た。折角故郷を取り戻しても、隠れて暮らしている間に蓄えを食い潰したから出稼ぎをしたい。仕事をくれ、だそうだ。それとエルベ藩王国からも人が派遣されて来る」

「あの爺様が王様だったというのは驚きです。でも、渡りに船ですね」

「ま、どちらも下心込みだろうがな。少なくともいきなり後ろから襲われる心配だけはしなくて済むから、それで充分だ。ということで伊丹、お前にも早速任務に取りかかってもらう。いいな」

「はっ。了解しました」

伊丹は姿勢を正して敬礼すると隊長室を後にしようとした。

「ああ、ちょっと待て」

背後から呼ばれて伊丹は「なんでしょう?」と振り返る。

「こいつを渡し損ねてた」

檜垣が伊丹に差し出したのは、給与明細だった。開けてびっくり、その額は目を疑うほどに少なくなっていた。

「一、十、百、千、ま……うわっ、これは」

「自業自得と思え。それに君は報償としてダイヤモンドの原石を貰っただろう? それがあれば減った額なんて微々たるもんじゃないか?」

「それとこれとじゃ違いますよ。それにあれだけでかいと、簡単には金額も付かないそうで、正直

置き物にしかなってません。それに五人で山分けにしたいし」

伊丹は、すでにダイヤモンドの原石を銀座の高級宝石商に持ち込んで鑑定して貰っていた。

しかし余りにも高品質かつ巨大過ぎて、値段の見当が付かないと言われてしまったのである。

細かく砕けば確かに売れる。だが、「そんなこと恐ろしくてとても出来ない。この大きさだからこその価値というものがあり、それを所有者の都合で無闇に打ち砕くなど、宝石に対する冒涜である」とまで言われた。だがしかし、これだけ大きいと値が付くとしても半端な額ではない。文章表現としては『天文学的』という比喩があるが、それを遙かに越える『電波天文学的』な数字が付いてもおかしくないということであった。

「断言しても宜しいのですが、支払い能力があるような個人は国内にはいません。買い手はきっとアラブの王族とか、ユダヤ系の大財閥とか、そんな方々になってしまうでしょう。私どもにもそのような方々へのコネクションはございませんので、お取次をお引き受けすることはできません。ただ、ダイヤモンドを取り扱う商社を通じて、各方面にお問い合わせはしてみます。果たしてどんな返事が来るか、答えがいつになるかは皆目見当が付きませんが、お待ち頂きたく存じます」

宝石商はそんなことを言いながら、震える手で原石を伊丹に押し返した。

そんな訳で、伊丹の経済状態はちっとも豊かにはなっていなかった。それどころか逆に貧しくなってしまったと言える。それが彼にとっての炎龍退治の顛末(てんまつ)なのだ。

「はぁ。あ～あ……」

伊丹は懐から自衛隊手帳を取りだすと、何かの項目を次々と横線で消していった。
一本、線を引くたびにため息をつくので、心配した女性達の視線が集まるほどだった。
「なぁにため息ついてるのよぉ？」
ロゥリィが後部座席からバックレスト越しに身を乗り出し、伊丹の手元をのぞき込み「何よこれ」と尋ねた。
「いや、買い物しようと思ってた物のリスト。収入が減ったから、支出を削らないといけなくなってさ。ただどれも必要だと思っていたから、諦めるのが惜しくってさぁ……」
必要と言いつつも、そこに並んでいるリストが同人誌即売会の出展サークル名であるところが彼の彼たる所以であろう。もしロゥリィがその事実を知ったなら、後ろから伊丹の頭を小突いたに違いない。「そんなことで心配させるな」とかなんとか言いながら。だが、パッと見ただけでそれを読みとることが出来るほど、彼女は日本語読解に精通しているわけではないから「それは残念だったわねぇ」と若干の同情を示して引き下がっていった。
この車内にいるメンバーでそれが出来るとすればレレイだけであろう。だが彼女は今、伊丹の右隣の席に座ってハンドルを握り、前方を注視しながらアクセルを踏んでいた。なので伊丹の手元を覗き込む余裕はなかった。
高機動車は現在安定した速度を保って北へと向かっている。
未舗装の草原を走っているから、時には岩や窪みなどが進路に立ち塞がることがある。だが伊丹

からハンドルを任されたレレイは難なくそれを躱し、あるいは上手に乗り越え、走破して、順調に道程をこなしていった。高機動車がオートマチック車なのも幸いしているが、それにしてもスムーズなハンドル裁きで、昨日から習い始めたとはとても思えないものであった。

「交通法規のない場所でただ車を走らせるだけなら、習うより慣れろだからな」

教習所で学ぶことのほとんどが、法規に従った安全な運転方法である。信号や道路標識のないこの特地では、当面の間は必要のないことである。

ちなみにロウリィ、テュカ、ヤオの三人もすでに運転を試みていた。そして初心者姫ドライバーの恐ろしさを、伊丹に再確認させて終わっている。伊丹は三人に対して、こう宣告していた。

「お前達が運転する車には、俺は絶対に乗らない」

今後将来にわたって、永久に絶対に、どんなことがあってもハンドルを握ってはならない。危険だ。事故を起こす。人を巻き込む。だから駄目！　というのが彼の評価であった。

なので運転の練習を許されたのは自己のコントロールに長けたレレイだけであった。

「随分慣れてきたな。そろそろ疲れたろう」

運転を交代しよう。

伊丹としてはレレイを気遣って言ったつもりだった。だがレレイは伊丹の予想に反して車を止めなかった。

何故か伊丹の言葉を聞き流すようにしてハンドルを握り、前を見続けていた。そして口を開く。

「不要。貴方こそ待機していて欲しい」
伊丹はレレイの横顔をしばらく眺めた。この娘、最近は耳朶（みみたぶ）にマラカイトのピアスをつけたり、やせぎすだった肢体がほんのりと曲線を帯びはじめて来たりと成長が著しい。
「もしかして、運転が楽しいとか？」
するとレレイは答えた。
「とっても」
「ど、どのあたりが？」
「路面の状況を素早く読みとって、車輪の摩擦力と、車体の進む力、慣性とを勘案して舵輪を操作する。その結果が現実のものとして即座に現れるところ。車の運転は、知性と理性の表現と思われる。知性の集合体である車体との一体感は、魔法にも通じるところがあり……」
レレイは一呼吸区切ったのちに続けた。
「……快感」
伊丹は思った。それは表情をぴくりとも変えずに言うセリフではないだろうと。もうちょっと頬を赤く染めるとか、少しはにかむとかしても良さそうなものである。
だが運転しているレレイは、自らも機械の部品にでもなったかのように、無表情のままであった。
さらに言う。
「それに、学都ロンデルはすぐそこ。あの稜線（りょうせん）を越えると見えてくる」

レレイの言うとおりであった。
丘の峠を越えると、伊丹達の目の前に石造りの建物群が広がっていたのである。

＊　＊

「ロンデルは歴史ある古い街。古い街の多くがそうであるように、ここも様々な種族が住む……」
レレイの解説によれば、ロンデルが建設されたのは、今よりもおよそ三千年ほどの昔らしい。
当時はまだ亜神だった学問の神、エルランとラーの二柱によってつくられた私塾が礎となったと言う。
帝国よりもさらに古い歴史を誇るその都は、以来、周囲を取り巻く国々が滅びては興り、また滅びるという栄枯盛衰を繰り返す中で、少しも変わることなく学問の都であり続けてきた。
そこでは数多の賢者と魔導師が集まって学問と研究に明け暮れている。そしてそれを学ぼうとする若い学徒達が、やはり世界中から集まって来ては勉学に励むのである。
「リンドン派の『リンドン』とは、ロンデル発祥のという意味」
なるほど、レレイが所属する学派の名称には、そんな由来があったのかと感心しつつ、伊丹は街の景色に目を向けた。
街は日干し煉瓦を積み上げて、漆喰で塗り固めた建造物が軒を連ねている。建物と建物の間に設

けられた隙間は、窓から手を伸ばして互いに握手できるほどでしかない。しかも建物はみな古く、白かったであろう外壁は煤で燻したように汚れ、ところどころでは漆喰までもが剥げ落ちて、内部の日干し煉瓦がむき出しになっているという有様であった。そういう場所では職人が漆喰を新たに上から塗っていくので、外壁が継ぎ接ぎのように色違いとなって、より見窄らしさが引き立てられてしまうのである。

建物はほとんどが二層ないし三層の構造。まれに四層ぐらいの建物が空に向かって頭を突き出している程度である。

狭い路地では、二階や三階から吊された洗濯物が風にそよいでいた。

そんな街の雰囲気は、狭い範囲にどれだけ人間を詰め込めるか試そうとするかのような下宿街的猥雑さで溢れかえっている。故に、人通りの激しさも生半可ではなかった。

中央通りと称しつつも道幅が五メートル程度しかない往来は、頭に籠を載せた妖婆や、材木を抱えたドワーフ、ヒト種の年寄り、そして様々な種族からなる学徒の群れで埋め尽くされ、高機動車はたちまち立ち往生してしまった。それは、買い物客で賑わう夕刻の商店街に自動車を乗り入れてしまった状態に近いだろう。

周りを見れば、野菜を山と積んだ荷車とか、騾馬に乗った老人なんかが似たような境遇に置かれていた。交通整理という概念がないので歩行者の流れには法則性などなく、道路の真ん中を歩いたり、横切ったり、立ち止まって話し込むこともあって、図体のでかい荷馬車や荷車は、その都度進

むことが出来なくなってしまうのだ。
ところが皆、この状況に慣れ親しんでいるようである。諦念の表情を顔に貼り付けて、あくびをしつつも、少しずつでも進めれば良いと考えているように見受けられた。こうなってしまうと焦るだけ無駄なのだろう。伊丹も地元民を見習って「ラッシュに出くわすなんてなぁ」などとぼやきつつも、交通渋滞待機モードへと気持ちを切り換えることにした。
「ここはいつもそう。無計画で非合理的」
運転席のレレイは懐かしそうな、それでいてどこか辟易しているとも読みとれる言葉を紡いで、車をじわじわと前進させていった。
すぐ前を行く荷馬車は、カボチャに似た野菜で満載となっている。
御者は老人。荷台には小人種の男と猫耳幼女が、後ろ向きに仲良さげに並んで腰掛けていた。ぱっと見では微笑ましいが、実のところ小人種成人と猫耳幼女という歳の差カップルであることに思い当たった伊丹は、ついまじまじと見てしまい、ふとした弾みで視線が合った瞬間、ニヘラッと微笑みかけてばつの悪さをごまかしたりした。
「この先の四つ辻を右に曲がって少し歩くと、大きな宿がならんでいる。もし退屈ならば先に行ってもらっても良い」
皆の苛立ちめいたものを感じたのか、レレイがそんなことを言い出した。
だが、喧噪だの雑踏を好まないテュカは「下手にうろつくと道に迷いそう」と言い訳して楽器を

取りだす。これに対してロゥリィはこれ幸いとばかりに「わたしぃは分かるからぁ、先に行って宿をとっておくわぁ」と高機動車から降り立った。ヤオにもついて来いと誘いをかけている。
「貴女に行ってもらえると助かる」
「分かったわぁ。良い宿を探しておくわねぇ」
ロゥリィはヤオを引き連れると颯爽とした足取りで人混みの中に消えていった。
「あいつ、この街に来るの初めてじゃないのかな？」
伊丹のつぶやきに、テュカは「きっとそうかもね」と答えると月琴を構えた。
「ところで、何を弾いて欲しい？」
「そうだな……」
結局のところ高機動車が宿に到達するまで、伊丹は十曲ほどリクエストしてしまった。

ロゥリィが選んだ宿は書海亭という名で、四階建ての下二階が日干し煉瓦造り、上の二階が木造という、なかなかに瀟洒な外観を持っていた。
宿の玄関口ではロゥリィとヤオの二人が手を振り、こっちよぉ、こっちだと合図している。
それを見たレレイが車を寄せると、宿付きの馬丁が慌てふためいた様子で飛び出して来た。馬丁は毛むくじゃらのワイルドマンで車を牽くべき馬が居ないことにちょっと首を傾げつつも「聖下のお付きの方々ですね。こちらへどうぞ」と、通行人を上手にさばいて宿へと誘導してくれた。この

街のように多種族が暮らす地域では、馬丁のような混血種も少なくないようだ。
「俺たちがロゥリィのお付きだって？」
いつの間にそう言う話になったんだろうと呟く伊丹に、レレイは、この街の宿は客の足元を見る上に、紹介のない客は断られることもあるから、その方が良いと答えた。
「なんだか京都の老舗料亭みたいだな。でも、それもロゥリィなら大丈夫ってわけか？」
「そう。古い街の古い人間は、権威や肩書きにとても弱い」
「ま、神様ってのは最高の権威だろうからなぁ」
見れば宿の停車場には馬車、荷車などがずらっと列んでいる。
奥の厩舎では馬や驢馬などが、飼い葉を食んでいた。さらに奥には種類の分からない恐竜めいた生き物までいて、ジュラシックパークが開けそうだった。
「屋根付き車庫はこちらです」
ワイルドマンの馬丁は、まるでそちらを選ぶのが当然とでも言うような態度で、どうするか問うこともなく伊丹達を屋根付きの車庫へと誘導していく。
レレイの説明によると、この手の宿には屋根なしの停車場と、鍵のついた扉のある屋根付き車庫が用意されている。屋根付きを利用するとそれなりの料金はかかるが、荷物を積んだままにしておけるので行商人などには重宝がられているらしい。これに対して、露天の停車場だと料金こそかからないものの、荷物を盗まれたりすることもあるし、雨が降れば濡れてしまう。

高機動車に載せている武器弾薬、装備の類を部屋まで運ぶのは確かに面倒である。なので伊丹にとっても屋根付きの車庫を利用できるのはありがたかった。

とりあえず身の回りの品と、護身用の武器を抱えて車庫の扉を閉じることにした。

すると錠や壁面にレレイと、テュカと、そして背後からやってきたロゥリィの三人が何やら細工をはじめた。

何だろう？　と思って近付く。すると一部始終を見ていた馬丁の呟きが耳に入った。

「魔法と精霊魔法と、聖下の呪詛の多重掛けかよ……迂闊に触ったらまず確実に死ねる。いや、下手に生き残ると死んだほうがマシと思うかも知れん。いやいや、考えるだに恐ろしい」

どうやら防犯対策を施しているらしい。伊丹は決して近付かないことにした。

「いらっしゃいませ、ロゥリィ聖下、ならびにお付きの方々。私が書海亭の主、ハーマルでございます。聖下にご利用いただけることは望外の幸せです。この歴史あるロンデルでも老舗中の老舗であることが、この書海亭の自慢でしたが、これで自慢のタネがまたひとつ増えました」

ハーマルと名乗った宿の主人は、見る限り明らかにヒト種ではなかった。大柄で赤に近い色の肌をしている。尋ねるとプッカという商売に長けた種族らしい。

カウンターを挟んでロゥリィに差し出される宿帳。あたりを飛び回っていた手のひらサイズの妖精種が、宿帳の傍らに降り立ってすっとペンを差し出した。

ありがとうと、受け取ったロゥリィは流麗な字でサラサラと署名していった。
宿屋の主人は満足そうに、その名を読み上げる。
「ロゥリィ・マーキュリー……聖下は流石に達筆でいらっしゃいますな。これは自慢なのですが、当宿の宿帳にはクレシアの覇王ソルモンのご署名が残っているのですよ」
「懐かしい名前ぇ。わたしぃが神官見習いをしてた頃の人物よぉ。アレが泊まったの？」
「はい。ソルモン王は、このロンデルで青春時代を過ごされたのです。聖下のお名前も、子々孫々の自慢として残して参りたいと思います」
続いてレレイがペンを取って残り四名の名を記しはじめた。しかしその間も宿の主人が言葉をかける相手はロゥリィだけであった。
「しかし聖下。この度のご来訪はどういったご用件でいらっしゃいますか？」
学問の都だけに、このロンデルにある神殿はエルランやラーといった学術関係の神を祀るものばかりである。エムロイの使徒が、わざわざ立ち寄るような街ではない。
「主にこの子の用件よぉ。わたしぃは付き添いぃ」
ロゥリィの目配せを受けた宿の主人は、初めて気付いたかのように「ルルドの娘？」と、レレイの白銀の髪から足の先まで舐めるように視線を巡らせた。ルルドは、ヒト種にしては珍しく、定住しない流浪の民であることで知られている。
「賢者のローブ……なるほど、御入門ですね？」

『御入門』とは、簡単に言えば入学のこと。学問の道を進む者は、まずは地元にいる賢者の下へと通って基礎を学ぶ。そして、その中でも特に優秀で将来を嘱望される者だけが、知識を深めるためにロンデルへとやって来るのである。とは言っても、学校などの組織立った教育機関があるわけではない。この学都にいる導師に弟子として入門するのだ。そして、やって来る者の多くはレレイと似た年頃だ。そんなこともあってハーマルは「御入門ですね」と推理したのである。

レレイはハーマルの誤解を、あえて否定しようとしなかった。

ロゥリィもまた、それを見て軽く微笑むだけであった。

「ようこそロンデルへ。部屋は一番良い部屋をご用意させて頂きます。聖下も、みなさまも、今しばらくお待ち下さい」

主人は口笛を吹いて雑用の小僧達（ボーイ）を呼びつけた。たちまちブラウニーやら、プッカやら、ホビットやら、様々な種族の少年達が集まってくる。

「四階南の二号に寝台を一つ追加するんだ。それとお向かいの三号を片づけろ。急げよ」

「はい。ハーマルさん！」

小僧（ボーイ）達は、三人部屋に寝台をもう一つ追加するために走っていった。

さらに手の空いている小僧（ボーイ）達が「お荷物をお運びしますよ」と周囲から群がって来た。

「うわっ、可愛い娘だなぁ」

「美人だ。金色のお髪（ぐし）が綺麗ですね」

「こらっ、お客様だぞ！　粗相の無いようにしろ」
「聖下。ハルバートをお持ちします」
ロゥリィからハルバートを受け取ろうとした小僧（ボーイ）は、その重さに驚き「うわわわわっ」と、あたふたしながらひっくり返ってしまった。
ゴスッと、ハルバートの鋭い刃が木製の床に食い込んで、股間を切り裂かれそうになった小僧（ボーイ）達が「ひぃっ！」と飛び退いて尻もちを付く。
「おいっ、こらっ！　何をしてるんだ？」
「すみません、ハーマルさん。けど、これすっごく重いんです……ど、どうぞこちらにいらして下さい。お部屋は四階です」
小僧（ボーイ）達は、三人がかりで「せいのっ！」とハルバートを抱え上げて運び始めた。
ロゥリィはその様子に「やれやれ」と肩をすくめ、後に続くようにして階段を昇っていった。
レレイやテュカ、ヤオ達も、みんな荷物を持ってもらい手ぶらで階段を上がっていく。なのに、伊丹だけは自分の荷物を抱えたまま、独り取り残されていた。
「あの……、俺は？」
荷物も持ってもらえない、声もかけてもらえないという状況に、切ない気持ちがこみ上げて来た伊丹は、俺の存在を忘れていませんか？　お客なんですけど、という意味を込めたアピールを始めた。
すると、ハーマルは目線だけ向けてこう言い放った。

「ああ、下男さん。あんたの部屋は、皆さんの部屋の向かいの三号室だよ。物置部屋だけど、御用を言い付かるのに近い方が良いだろうと思って気を利かせたんだ。感謝してくれよ。フェ！　案内してやんな！」

見ると伊丹の顔の前で、手乗りサイズの妖精少女が空中静止（ホバリング）していた。

手で、わたしについてきなさいと合図してる。

「あ、ありがと」

このサイズでは、さすがに荷物は持ってくれないだろうなあ……。

伊丹は、「三号室ね」と呟くと、重々しい足取りで階段を上るのだった。

一方、一人残ったハーマルは宿帳の記載を眺めながら、レレイという娘が何者であるかを推し量ろうとしていた。エムロイの使徒ロゥリィと、いったいどんな関係なのだろうか？

宿の経営は人物の鑑定眼がないとやっていけない。迂闊（うかつ）に素性の良くない客を泊めたりすれば、料金を踏み倒されたり、備品や他の客の荷物を狙う盗賊だったりすることもあるからだ。

この書海亭が千年にもわたる伝統を守ってこれたのも、代々の主がやって来る客をしっかりと吟味して、少しでも怪しい素振りのある者には注意を払って来たからである。そうすることで信用が醸成（じょうせい）されて、上客が集まって来たのだ。そんな理由から、客に対して観察の目を向けているのだが、最近では用心の範囲を越えて、あれこれ想像を巡らせることが彼の趣味となっていた。

「レレイ・ラ・レレーナ……か」

身にまとっていた賢者のローブはどこにでもある平凡なものに見えた。だが彼の目は鋭い。その生地と縫製からして金のかかる品であることを見抜いていた。とはいえ流浪生活を送るルルドの娘が裕福であるとは考えにくいから、そこに様々なドラマを想像する余地が発生するのである。

例えばどこかの豪商か貴族の目にとまって、養女として納まったというのはどうだろうか？

美談としてまとめるなら、貴族や豪商で実務を息子などに譲って隠居した老人などが、人材を育てることに生き甲斐を見いだしたというのがよい。才能のある少女を見いだして、例えば孫の嫁などにと教育を施しているのだ。

逆に醜聞にしたてるなら、養女ではなく幼い妾だ。だが、それだとちょっと可哀想だし、腹立たしくもある。そこで妾になって早々、狒狒親父が心臓麻痺か何かで死んだことにする。で、自分たちよりも年若い親父の妾をどう扱ったものかと困った息子達が、家から追い出すかわりに好きなように暮らせ、金だけは出してやると言ってこのロンデルに送り出して来たのである。

こちらだと、彼女の境遇に同情した聖下がここまで送り届けてきたという推測も成り立つ。

「テュカ・ルナ・マルソーと、ヤオ・ロウ・デュッシ」

このエルフとダークエルフの二人も想像のし甲斐がありそうだった。なにしろエルフとダークエルフというのは、あまり仲が良くないというのが一般の認識なのだ。この二人が一緒に旅をするようになるまでの経緯を考えるのは、きっと楽しいだろう。

「イタミヨウジ……荷物持ちの下男はどうでもいいか」
濃淡の緑と茶の混在したまだら模様の服装は、道化か何かのようにも見えた。
しばらくするとお客の案内を終えた小僧達が、靴音を鳴らしながら階段を下りて来た。
ハーマルは「もっと静かに歩け！」と怒鳴りつけつつも「で、どうだった」と客の気前の良さについて尋ねた。客の懐具合は、小僧達にどれくらいのチップをはずむかでも分かるのだ。
小僧達は、「モルト銅貨ですよ」と手にした貨幣をハーマルに見せびらかした。
「お、本当か？　まさか全員で一枚とかじゃねぇだろうな」
「みんなに一枚ずつですよ」
この書海亭を選ぶ客は比較的裕福な者が多いが、それでも小僧達の貰うチップは薄っぺらな銅貨数枚が相場だ。それが銅貨とはいえ、重厚なモルト貨をくれるとは、なかなかに気前が良さそうである。おかげで小僧達の話題もしばし彼女たちのことで占められることとなった。
「銀髪翠瞳っていいよなぁ」
「俺は、金髪のエルフの娘がいいな」
「おいおい。エルフだから、きっととんでもない年上だぞ」
「そう言うお前は誰がいいんだよ」
「聖下がいいに決まってる」
「もっと年上じゃないか！」

こんな風にわいわい言いあって煩さかった。

ハーマルとしては、やはりダークエルフの女が良い。この場合、実年齢は問題とはならない。大切なのは、大人の女の妖艶さなのだ。彼は、このあたりが分からない内はまだまだガキだと小僧達を見下した。

「おっ、次のお客だ。さあお前達、仕事だぞ、働け！」

ハーマルが手を叩き、小僧達は「はいっ」と返事して再び働きだした。

その後、何人かの宿泊客がやってきた。本日の客入りも良好である。ほとんどがここを定宿にしている書籍商や、あるいはこの街で学徒生活を送っている子供の親などだ。ハーマルは挨拶をして宿帳に署名して貰い、小僧達を走らせて部屋まで案内させるという慣れ親しんだ仕事を、丁寧に繰り返していった。

その中に、今朝方帝都方面に向けて出立したのに引き返して来た行商人がいた。

どうしたのかと尋ねると「橋が落ちてて渡れなかった」という答えが返ってきた。

どこかの河川が氾濫したという話もないのに、橋が落ちるなど考えられない。詳しく尋ねると、どうやら何者かが意図的に橋を破壊したらしい。そんなことをして得する者がいるのか？　と思うところであるが、帝都方面に商品を運ぶ行商人などが、物価の高騰を狙った可能性も考えられるので、そのあたりを疑う噂が流れていると言う。

こうして、引き返して来た行商人が数人ほど続いて、それも一段落した頃である。上の階から誰

かが階段を降りて来る気配がした。
見ると、ロウリィとその仲間達である。その姿を見たハーマルは、現実が自分の想像の範囲をはるかに超えていることを思い知ることとなった。小僧(ボーイ)達が多額のチップを貰ったことから「狒狒親父の幼妾説」を信じかけていたのだ。
「これから出かけてきます。晩の食事は外で摂って来ますので用意しないでください」
そう告げた下男と思われた男は、先ほどの道化のようだったまだら緑の格好を改め、異国風ながらも、それなりに見られる服装となっていた。宿の主人は知るよしもないが、彼が着ているのは陸上自衛隊の制服である。そしてその男を中心にしてレレイ、ロウリィ、テュカ、ヤオが取り囲んで立っている。この立ち位置こそが、五人の現在の関係を表していると言えるだろう。
さらなる思い違いは、学徒の少女が純白の導服をまとって肩から胸に白い索縄(さくじょう)を下げていることだった。手にはリンドン派を象徴する杖を携えている。
この姿は、この学都に住まう者なら誰もが分かり、分かるが故に彼女を見ただけで避けて歩こうとする出で立ちである。
「こ、これは驚きました。いや、お見それしました。そのお歳で、導師号に挑まれるのですか？」
導師号と言う最終試練に挑む者は、ロンデル滞在中はこの姿でいることが慣習となっている。
このロンデルで定期的に開かれる学会という場で、周囲にその実力を認めさせることが出来れば純白の衣装は汚れることはない。だが、もし居並ぶ老師達にその水準に達してないと見なされれば、

容赦なく油だのインク壺だのを投げつけられるのだ。当然、この白い導服は惨めなことになる。しかもこのロンデルにいる間はそれを脱ぐことは許されず、衆目に恥をさらさなくてはならない。だから皆、ほとぼりが冷めると、このロンデルから逃げるようにして去って行く。

導師号に挑む論文発表は、それなりに実績と経験を積んだ練達の博士達ですら尻込みする。ヤジと底意地の悪い質問、そして嘲笑とが四方から降り注いで、精神的な安定を失って、上がりまくったあげくに論述で舌を噛み、読むべき原稿を取り違え、魔法の実践を失敗して、涙を流しながら逃げだす者すらいる、過酷な場なのだ。

勿論、失敗しても命を取られるわけではない。観衆から嘲笑される恥辱に耐え得るなら何度挑戦しても良いのである。しかし、それが出来るのは羞恥心が欠落しているか、よっぽど神経が太いかのどちらかであろう。

だが、ハーマルの見たところ、目の前にたたずむ少女に神経の太さを期待するのは間違いであった。その可憐なまでの線の細さは、細緻な陶器のようであり、ぞんざいに扱えば粉々に砕けてしまうのではないかと心配になる程なのだ。

どこの誰だ、こんな無謀な挑戦を認めた導師は。詰問の思いでハーマルは尋ねた。

「失礼ですが、貴方の師はどなたで？」

「カトー。カトー・エル・アルテスタン」

宿の主人はその名を知っていた。というより、このロンデルに住まう者なら誰でも知っている。

知っていなければおかしいほどの有名人だった。
老賢者カトー。魔導師の中の魔導師とまでうたわれた男であった。
そうか、この娘はあの人の弟子なのか。
宿の主人は、ぽっかりと口を開けたまま閉じることも出来ず、ただ改めて少女を見直していた。

レレイが伊丹達を連れて出かけたのは、宿から歩いて少しのところにある、団地のような建物が列ぶ街区だった。小高い丘の中腹でもあるため、麓に広がる街並みを一望することが出来た。
「あの建物が会堂、学会などの発表がされる場所。あれが市議会堂。この街は、自治権を持っているので小さいながら議会がある」
そしてレレイは振り返ると丘の山頂方向を指さした。
「そして、ここからが研究街区」
そこは、背の高い壁に覆われた場所であった。
その石造りの壁には何か重要な物を守り、よそ者を拒絶するような排他的な気配があった。例えるならば巨大豪邸の周囲にしつらえられた塀。そんな形容が近いかも知れない。
ただ、近付いてみると警備員もおらず、立ち入り制限もなかった。誰でも壁に設けられた出入り口をくぐることが出来るのだ。しかも中に入ってみると、そこにある建物はどれも朽ちかけた集合住宅のような見窄らしいものばかり。おかげで伊丹などはそこを貧民街かと誤解した。壁の外にあ

る一般の建物の方が、よっぽど立派に見える。だが、此処こそがこの学都の中枢であり、大学であればキャンパスに相当する場所であった。

当然の事ながら、ここにいる青年や女性達は、ほとんどがレレイと同じく賢者のローブをまとっている。しかもそのローブも、汚れていたりすり切れていたりで初々しさなど微塵もない。皆、随分と年季が入った学徒生活を送っているようである。そして皆、レレイの姿が目に入ると驚いたように目を剥き、その後に無視するように、あるいは地面に唾を吐いて立ち去って行った。ちょっと見ただけでも、後ろ暗い複雑な感情が、彼らの胸中に渦巻いていることが推察できる表情であった。

「レレイの歳で導師号を貰えば、きっとまわりから嫉妬の嵐よねぇ」

ロゥリィの警告に、レレイは前方を注視したまま無表情に頷いた。

「覚悟している」

レレイは導師号へと挑もうとしている。

それが許されるのは、カトー老師からその力量に達していると認められたからだ。だが、このロンデルには五年、十年と研鑽しても一向に芽のでない者が大勢たむろしている。そんな中で、レレイのような若者が皆が羨むような高みへと昇っていこうとしているのだから、その姿を見た者が、このような反応を示すのも当然のことなのである。

視野を周囲へと広げてみると、汚らしいローブを纏った青年達が何やら激しく問答を繰り広げ、地面に何かを大書していた。さらに別のところに目を移せば、学徒達に取り囲まれた講師らしきド

ワーフが何かを講義していた。
伊丹は、ここを大学の研究室棟みたいな場所と理解した。日本の大学との違いは、ここでは講師が居て、学徒がいれば、道路端でも木陰であっても教室となることだろう。
「もしかして、偉い人達もここで講義とかしているのかな？」
「いる。老師達の研究窟がここに隔離されている」
この場で用いるに適切とは言えない単語を耳にした伊丹は思わず「隔離？」と問い返した。
だがレレイは、事もなげに「そう。隔離」と繰り返す。
言った途端、少し離れたところにある建物の一つからピカーと光が溢れた。続いて窓という窓から滝のような水が怒濤のように溢れ出て、あたりにちょっとした水災害をもたらし、たまたま通行していた学徒達は皆ずぶぬれとなってしまった。
「なんてこった！　折角思いついた公式が！　公式がっ！」
「し、試料がああああ！」
「わたしの論文！　わたしの論文！　あああっ、びしょびしょぉおおお！」
あちこちであがる悲鳴、嘆き。まさに、阿鼻叫喚の大惨事であった。
見るとヤオまでもが、その余波を受けて水の滴る姿となってたたずんでいる。
ヤオが盾となってくれたおかげで飛沫すら受けなかったレレイは、足下近くまで水が流れてきたのでそれをよけて、再び歩きはじめる。そして先ほどの言葉を繰り返した。

「隔離されている」
伊丹は、飛沫で少しばかり濡れた制服を気にしながら、繰り返されたその言葉の意味を「なるほど」と噛みしめることとなった。
「あの壁はもしかして隔離のため？　もしかして、カトー老師がコダ村にいたのも、隔離の一種だったとか？」
「……アレぐらいになるといろいろ危険だから」
コダ村の住民はいいのか？　とか、これは危険ではないのか？　といった類の疑問が次々と湧き上がるが、なるほど、だからこそカトー老師の小屋は、村から少しばかりはずれたところにあったのかと、村の被害状況を調査した際に浮かんだ疑問の答えを得ることとなった。
「こっち」
路地に入って、迷路かと見紛うばかりの狭い道を通り、やがて小さな建物の前に立つ。立て付けの悪い扉を開けて、すれ違うことすら苦労するほどに狭くて急な階段を昇った。体重をかけるとギシギシと音がして今にも崩れそうな感じの踏み板にそっと足を乗せながら、やがて小さな木の扉の前へと出る。
踊り場はレレイとテュカが立てばもう満員。ロゥリィやヤオや伊丹は、階段の途中で待たされることになった。
レレイはノッカー代わりに杖で扉を叩いた。

「誰ですか？　借金取りなら無駄ですよ。お金、ありませんから」
数度叩いて、中からぼそぼそと聞こえた誰何の声は、嗄れたお年寄りの女声であった。
「レレイです」
名乗るや否や、ドアがバッと開かれた。
出てきたのは七十代後半ぐらいの、可愛らしいヒト種のおばあさんだった。
その目鼻立ちから察するに、五十年ほど昔はさぞかし美しかったに違いない。白黒の混ざり合った灰色の髪をあげてシニヨンを作っている。背筋はしゃんと伸びて、その瞳は、充実した人生を送るとこうなれるというお手本のような澄んだ輝きをたたえていた。
服装はもちろん年季の入った賢者のローブである。
「まぁ！　まぁ！　まぁまぁまぁ！　貴女なの、リリィ？」
「違う。レレイ」
老婦人は軽く右手を額に当てると、「そうも言ったわね。だけどリリィの方が可愛いと思うわ」などと言って、レレイの頭を撫でた。老婦人の背丈はちょうどレレイと同じくらいである。
「わざわざこんなところまで訪ねて来てくれてありがとう。さあさあ、皆さんも入ってちょうだいな。何にもお構いできないけれど、どうぞ入ってちょうだいな」
案内されたのは、羊皮紙や書籍、標本箱の類が堆く積まれた部屋だった。
壁はことごとくが書棚である。机やテーブルの類は、例外なく書類が山積みになっており、その

周辺の床には机からこぼれ落ちたのだろう羊皮紙やメモ書きの類が散らばって、足の踏み場も無いほどであった。伊丹達は自然と、わずかに残る隙間に密集して立つことになった。ロゥリィなんかは伊丹の真後ろだ。まるで隠れているみたいである。

老婦人はレレイの服装を見て首を傾げた。

「その格好を見ると、貴女、導師号に挑むつもりのようだけど少し早くない？　カトーの奴、ついに呆けたの？」

レレイは返事代わりに懐から羊皮紙の手紙を取り出すと、老婦人に手渡した。

老婦人はパリパリッと封蝋を剥がすと、「どれどれ」と手紙を読み始めた。

「ふむふむ、なるほど。あらあら、そうなの～」などと、読みながら大仰に相づちをうつ。そして、ひとしきり読み終えると、レレイになんとも言えない喜びに満ちた瞳を向けた。

「貴女、素晴らしい業績をあげたわね。これなら飛び級も当然ね。カトーが手放しで褒めちぎってるわよ。アルペジオなんか、きっと焼き餅を焼いちゃうかも」

「アルフェは？」

「相変わらずよ。いま、買い物に出ているの。少ししたら帰って来るでしょう……あらあら、いけない。お客様達を待ちぼうけさせてしまったわね。リリィ、ちょっと手伝ってくれない？　お客様に椅子をお勧めしたいのよ……」

「わたしはレレイ」

そんなこと言い合いながら椅子を探す。だが、テーブルやその周囲に置かれたそれらは、どれにも標本箱などが鎮座していた。そして、それをどけようとした老婦人が手を伸ばした拍子に、テーブル上に積まれた書類が雪崩をうって崩落し、その連鎖反応で、椅子や棚に積まれた箱までもが一斉に崩れ、標本の貴石や鉱物などがぱらぱらと床に散らばってしまった。

「あぁっ！　何やってるんですかっ。老師っ！　あれほど弄らないでくださいって言ったじゃないですかっ！」

突然の声。

買い物籠を投げるように床に置いた栗色の髪の女性が、「もうっ！」と唸りながら、飛び込んで来て、老婦人やレレイを押し退けるようにして散らばった石を拾い始めた。

「どうしちゃったの？　なんだか妙に刺々しくなっちゃって、もしかしてお通じがすっきりしていないとか？」

「ち、違いますっ！」

その女性は、長いちょっと癖のある栗色の髪を麻紐で無造作にまとめていた。

さらには化粧気もなく、女であることとか、色気とかをどっかに投げ捨てているとしか思えない薄汚い格好である。にもかかわらず肢体の凹凸はメリハリがたいそう良く、ローブの外側からでも、そのラインが躍動的に浮かんでいて、それはもう目に毒なほどであった。

「えっと、これがこの箱で、あれがこれ。ひぃふぅみぃ……あぁっ、ルチルがないっ！」

こちらの女性も老婦人と同様に、整理整頓の才能が致命的なまでに欠如しているようである。
「あら、これかしら？」
手伝おうとしてか、テーブルの上に手を伸ばす老婦人。だが、せっかくテーブルに積み上げた箱が、その拍子に再びドサドサと落ちてしまった。
静寂の時がしばし流れる。
女性は胡乱（うろん）げな視線を老婦人に向けた。何かを懸命に堪えているらしく身を震わせている。
「老師。はっきり言って邪魔ですから、しばらく外にでも行ってて下さい」
「そ、そうね……そろそろ夕食時だからお客様達とマリナの店にでも行ってるわ。貴女も終わったらいらっしゃい。折角リリィが訪ねて来てくれたんだもの、積もる話もあるでしょう」
「リリィ？　誰です？」
「違う。レレイ」
「……分かりました。これが終わったらすぐに参ります。ええ。すぐに参りますとも。未だに博士号でうろうろしている姉を飛び越して導師号に挑もうとしている妹とか、男っ気が無くて寂しい想いをしている姉を差し置いてピアスなんかして色気づいている妹とか、金が無くてピーピーいってる姉を横目に金回りの良さそうな臭いをさせている妹とか、エルフなんかと連んでる妹とかに、たっぷりとこの世の条理というものを言い聞かせてやろうと思ってますから」
この時、伊丹は珍しいものを見る。

それはレレイの額から頬にかけてツツッと落ちて行く、汗の一滴であった。

＊　＊

マリナの店というのは、研究街区の隔壁を抜けて、少しばかり歩いたところにある小さな店だ。テーブルが三つとカウンター席という、こぢんまりとした造りをしている。

店内にいた二〜三人の客はみな女性で、書籍を広げて読んだり、何かを書きとめていたりと勉学に打ち込んでいるところからすると、皆学徒のようだ。

店の雰囲気としては、女子大近くにあるちょっと素敵な喫茶店、そんなところだ。家庭的で小洒落た雰囲気なので、女性の客が多いのかも知れない。

「いらっしゃいミモザさん。今日はずいぶんと大勢ですね。お弟子さんですか？」

店の主人らしき赤ら顔の男が、笑顔で老婦人を迎えた。

「いいえ、みんなお客さんなのよ。みてみて、美人ばかりで嬉しいでしょう？」

「ホント、綺麗どころばかりだ。そういうことなら、今日は腕によりをかけなきゃ」

店主はそう言って張り切って厨房へと飛び込んでいった。

ミモザはそれを見ると満足そうに頷いて、テーブル席を選ぶ。

「さあさあ、みんなも席についてちょうだい。ここの料理はなかなかなのよ。しかもお客が可愛い

女の子だと、輪をかけて美味しくなるの。それでいて安いのよ」

伊丹は気を利かせて四人がけのテーブルを二つ寄せ併せた。そしてそのまわりに椅子を配して腰を下ろし、メニューを探してきょろきょろと周囲を振り返る。

「何があるんですかね？」

「ここは店主にお任せなの」

こうして一息つくと、料理が出て来るまでの待ち時間を利用してミモザはレレイに、互いを紹介するように求めた。

「こちらはミモザ・ラ・メール。魔導師にして大賢者、このロンデルの長老の一人」

レレイによれば、この老婦人はカトー老師の師姉弟ということであった。今はレレイの義姉アルペジオが、この老師の下で学んでいるという。さらに付け加えられた「老師は、博物学に造詣が深い」という一言は、伊丹に向けられていたようであった。資源調査の任務に役立つ人物だと、さりげなくほのめかしているのだ。

次は、伊丹達の番である。

レレイは、席順に従って遠くからヤオ、テュカの順に紹介していった。

ミモザは、「エルフとダークエルフのお二方が一同に会するなんて、とても珍しいことね。どんな経緯で仲良しになられたのか、後で良いからお聞かせいただける？」と目を輝かせた。

するとテュカとヤオの二人は互いに目配せして微苦笑しあった。自分たちの関係を、仲良しなど

と言われるとは思っても見なかったからだ。

実際、この二人はお世辞にも仲良しとは言えない。互いに対する複雑な心情が……例えば、同胞を救うためとはいえ、自分は酷いことをしてしまったという罪責感に捕らわれていたり、自分の理性を取り戻すきっかけになってくれたという感謝の気持ちを抱きつつも、その手段があまりにも極悪すぎて、反感を打ち消しきれなかったりするからである。

それでも嫌ったり、憎んだりしているわけでもないから、席を同じくすることは出来た。当たり障りの無い会話をすることだって出来る。要は、苦手意識を持っているだけなのだ。

レレイは、続いてロゥリィの紹介をしようとした。

だがミモザは「お久しぶりね、ロゥリィ。もしかして宿題の答えを聞きに来たの？」と語りかけて、紹介が不要であることを示した。

「もう、五十年くらい前になるかしら。ロゥリィとは一緒に旅をしたことがあるのよ」

「ミモザぁ。あなたぁ老けたわねぇ」

「ええ、羨ましいでしょう？　あたしはもう、すっかりおばあちゃんなのよ」そう言って老婦人は、自分の皺だらけの手を仰ぎ見た。その姿はどこか誇らしげにも見えた。ロゥリィまでもが、羨ましそうに唇を尖らせてしまうほどである。

「じゃあリリィ……じゃなくてレレイ。次の方を紹介してちょうだい」

レレイは、自分の隣に座る伊丹をちらりと見た。

「これはイタミヨウジ」
余計なことは一切付け加えず、名前だけを告げる。
「そう？　イタミヨウジさんって言うのね」
「よろしくお願いします」
伊丹は席を立つと礼儀正しく頭を下げ、伊丹が姓、耀司が名だと告げた。その上で尋ねる。
「ミモザ老師は博物学に造詣が深いとか。もしかしたら有用な資源とか、鉱物がどのあたりで採掘できるという情報をお持ちですか？」
「ええ、ある程度は。ただ、何をもって有用とするかの定義付けを考えなくてはならないわね」
「よかった。もし宜しければ教えていただけますか？」
「かまわないわよ。でも後にして良いかしら？　今は楽しくお喋りをしたいもの。良いでしょ？」
「はい。レレイの学会発表が終わるまでは、このあたりをうろうろする予定なので、お手すきの折にでもお願いします」
伊丹はそう言って腰を下ろした。社会人をやっていれば、例え伊丹であってもこれぐらいの礼儀作法は自然にこなせるようになるのだ。そんな伊丹が隙無くまとっている緑の制服を見て、ミモザは尋ねた。
「それにしても見慣れない服装ね。どちらの国の方？」
「日本です。アルヌスに開いた『門』の向こうから参りました」

「まぁっ！　とても興味深いわ。『門』が開いたという噂は耳にしていたけれど、その向こうの話はちっとも伝わって来ないんだもの。で、どんなところなの？　レレイ達はもう行ってみたのかしら？」
「行って来たわよぉ」
ロゥリィが誇らしげに言った。するとミモザは興味深げに身を乗り出す。
「まあっ、羨ましいわね。是非お話を聴かせてちょうだい」
レレイとロゥリィ、テュカは互いの顔を見合わせると、手分けするようにして『門』の向こう側について見聞したことを語り始めた。ロゥリィはその街並みを、テュカは衣料品の豊富さについて、そしてレレイが力を込めて描写したのは、日本にある大型書店についてであった。
「書籍の量がとても素晴らしかった。ピニャの話では、あらゆる書籍を集めて一般に開放している図書館もあるということだった。次の機会があれば是非見に行きたい。このロンデルにも、是非造るべき」
伊丹は、会話を聞いていて浮かび上がった疑問について尋ねた。
「もしかしてここって図書館、ないの？　学問の都なのに？」
「ない」
「大昔はあったという記録はあるのよ。でも、燃えてしまったの」
かなり前のことだが、宗教戦争がおこった際に一神教の過激な信者達に燃やされてしまったと、

ミモザは残念そうに語った。
　このロンデルが学問の都である理由の一つは、膨大な蔵書を有する老師達がこの街に集まっていることにある。図書館のような施設が失われてしまったため、知識を求める者は自ら本を求めるか、誰かの蔵書を紐解かせて貰うしかないのだ。
「レレイの言うとおりになったら本当に素晴らしいわね。でも書籍は高いから集めるとなると大変よ」
「大丈夫。印刷にかければ書籍はかなり廉価になる。ニホンでは本の出版はとても身近で、ドウジンシソクバイカイなる大きな市も開かれているほど。数え切れないくらいの人間が集まる様子は壮観だった」
　レレイが珍しいことに上気したような表情を見せた。
「本当に本が安くなるのなら、それは素敵な事ね」
「きっとそうなる」
　レレイは虚空を見つめ未来を予言するかのように頷いた。だが……。
「駄目よ！」
　バタンと扉が力づくで閉じられるような激しい音が響き、何事かと皆が振り返る。
「ち、ちょっと、それは駄目。駄目よ。本が安くなったら困る人だっているのよ」
　そこに、レレイの姉アルペジオ・エル・レレーナが、見る者の背筋を凍らせる般若のような表情

で立っていた。

03

夕刻。

それは学徒達が一日の課業を終えて、自分の下宿に戻ろうとしはじめる頃合いを意味する。

街の住民達もその動きに合わせ、商売人は「さぁ、商売商売」と一日の内でもっとも稼ぎの良い時間帯に呼び声を上げることに精を出し、家庭の主婦などは帰ってくる夫や子供のために晩餐の支度に余念がない。

道路の往来も早朝のひと時に匹敵するほどの混雑となって、街はにぎわいと活況に満たされる。

そんな中、人々を掻き分けるようにして、ローブをひらめかせながら走り抜けていく数人の学徒の姿があった。

彼らは、見聞きしたことを、あたかもそうすることが義務でもあるかのように、大声で触れ回っていた。

「喧嘩だ、喧嘩だっ！　魔導師同士の喧嘩だっ！」

「しかも二人とも女だ」

「片方は、あのアルペジオ女史だってよ！」
「えっ!?　あの鉄のアルフェがか？」
どうやら片方の名は、学徒の間では広く知れ渡っているようであった。
「相手は誰なんだ？」
「レレイとか言う十四～十五のヒト種の女の子だ」
「知らないな。で、場所はどこなんだ？」
「マリナの店の前だ。急げ！」
これを耳にした多くの者が、弾かれたように走り出した。まるで暴れ牛の暴走、スタンピードのように、走る人々の群れはその数を急激に増していったのである。
「グレイ騎士補。お聞きになりました？」
「しかとこの耳に。シャンディー殿、場所はマリナの店だそうです。なぁに、いちいち尋ねなくとも、あの連中の後を追えば分かることでしょう」
「でも、こうなると急がないと危ないです。足止めにかからなかった敵がきっと居ますです」
「左様ですな。小官らすら立ち聞きしたのです。敵だけが知らずにいるなどあり得ませんからな」
街の片隅にいた旅装の騎士が、そんな言葉を交わしながら互いに頷きあうと走る学徒達の後を追いかけ始めた。
こうして戦場に選ばれたマリナの店の前の路上は、瞬く間に物見高い野次馬学徒達で溢れかえる

こととなった。おかげで、料理店は折角の稼ぎ時だというのに客がちっとも入らない。いい迷惑であった。だがしかし、商魂たくましい店の主人はこれに負けてはいない。集まった見物人に、立ったままでも口に運ぶことが出来る軽食の販売をして、損を上回る利益を得ることに成功していた。

さて、集まった人々は、路上の二人に注目して、戦いが始まるのを今や遅しと待っていた。

道路の東側に杖を立てたのはアルペジオ・エル・レレーナ。

カトー老師から「どうせのっかるならボン、キュ、ボンのレレイの姉」とまで言われたその肢体は、ローブの上から見ても見事なまでの曲線を描き、男性達の視線を理不尽なまでの吸引力で惹き寄せる二十四歳である。

一方の西に杖を立てたのはレレイ・ラ・レレーナ。

もし、この対決が、容姿の成熟度合いによって決まるものならば明らかに負けが確定しているが、痩せぎすだった体躯も最近になってようやく丸みを帯び始め、遅れていた性徴も今が盛りの十六歳（このあいだ誕生日を迎えた）である。

十歩ほどの距離をおいて対峙する姉妹の間を、風に吹かれた砂塵が舞った。

ちょうどいい感じで藁球なんかがコロコロと転がっていったりして、決闘のマカロニウェスタン的雰囲気を盛り上げていった。

ちなみにここは馬車がすれ違うのもやっとこさな狭い路上だ。当然、両者の背後では、往来しようとしていた荷馬車や通行人が立ち往生していた。道路の真ん中に立ち塞がっているのだから、は

っきり言えば交通妨害なのだ。だがしかし、御者達はちょうど良い見せ物くらいに思ってか、それとも諦めた上で開き直ったのか、かえって喜んでいる様子であった。

すでにどちらが勝つかで賭もはじまっている。胴元となった男が「掛け率は三対一」などと叫んでおり、名前の知られているアルペジオの方が、優勢と見られているようである。

こんなことがまかり通るのも、この学問の都に娯楽が少ないからだろう。あるいはそういう風土というか気質なのだろうか。いろいろな意味で世知辛いどこかの世界の人々と較べ、実におおらかで余裕の態度と言えた。

「あの子がレレイか？　見かけない顔だな」

見物人達はアルフェに対峙する無名の少女についての情報を求め、思うところをひそひそと語りあっていた。

「あの子が着てるの導服だろ？　なんだってあんなに汚れてるんだ？」

「彼女の髪、見りゃ分かるだろ。頭からスープをぶっかけられたからに決まってるじゃないか？」

レレイの髪とローブは、果実と野菜を煮込んだスープによって真っ赤に汚されていた。

それは肉と野菜がとろけるほどに一昼夜かけてじっくり煮込まれ、骨からにじみ出たダシの味のするスープである。その滋味深さは、ちょっとやそっと洗ったくらいでは落ちないばかりか、かえって広がるほどで、純白であることを旨とする導服はこれですっかり台無しになってしまった。

「酷いことするなあ。誰だそんなことしたの？」

「アルペジオ女史以外の誰がするって言うんだよ？　それぐらい状況から推測しろよ」
「あの歳で導師号に挑もうなんてするからさ。生意気だって、女史を怒らせたんだ」
「うわっ、なに？　じゃあこの喧嘩って嫉妬からはじまったの？　みっともない話だなぁ」
そんな言葉がそこかしこで囁かれ、アルフェは舌打ちした。
誰が見てもそう思える状況に嵌ったことに、自身でも忸怩たる思いを抱いたのだ。
だが、どうしてこんなことになってしまったのだろうか。
感情に駆られて、つい……一言でくくってしまえば、確かにそれだけであるから「嫉妬ですね。お疲れさま」と罵られてしまうのも致し方ないことだと思う。けれど、そこには譲ることのできない意地とかプライドといったものがあり、それらをねじ伏せて現状を納得し、受け容れるにはここで妹と一勝負して、力量の違いを明らかにしておく必要がどうしてもあったのだ。
だからやらかしたのである。
端から見れば、それは確かに酷いことだろう。自分だって悪いことをしたと思っている。だけど、妹には何としても本気を出してもらわなければならない。是が非でも本気でやり合わねばならないのだ。
それをせずに、黙ってこの時をやり過ごしてしまったら、裡に抱えた負の感情に永遠に呵まれ、妹に引け目を感じ続けなくてはならなくなってしまうだろうから。
度量を大きく持って義妹の成功を喜んで見せれば、確かに二人の間で平和は続く。だが、それは

もう偽りの平和だ。この瞬間から胸の中と、表の顔とに乖離が起きて、義妹との間に偽りの関係がはじまってしまう。血の繋がらない関係に、偽りが少しでも入ればもうそれは他人でしかない。そんなことになるのは絶対にご免なのである。

だから、嫉妬と揶揄されるのも承知で義妹を挑発する道を選んだのである。

とはいえ、どうしてこうなったのか。

どうして、義妹が一足飛びに、二足飛びに、自分を追い抜くまでになったのか。

アルフェは見物人となってこちらを傍観しているイタミという男を見て、下唇を噛んだ。

＊　＊

研究窟の整理をようやく終えたアルペジオは、書きかけの羊皮紙をくるくるとまるめて鞄の中に放り込み、扉の錠をおろすと師匠の行きつけとなっている店へと急いだ。

店の扉を半分開いて顔だけつっこみ「こんちわ。老師来てます？」と主人に声をかける。

すると「ミモザさんなら、お客さん達と一緒に奥にいるよ」という返事があったので慣れ親しんだ店の板造りの床を踏んだ。そしてその瞬間、耳に飛び込んで来た老師と妹の会話によって心臓が止まるような思いをすることとなった。

「本当に本が安くなるのなら、それは素敵な事ね」

「きっとそうなる」
その言葉は、暴力的な衝撃力をもっていた。
ショックのあまり手が滑って、扉にバタンと激しい音を立てさせてしまったぐらいである。
だが、それも致し方のないことであった。レレイ達が口にしたことは、明らかにアルペジオを困窮させる内容だったからである。
「ち、ちょっと、それは駄目。駄目よ。本が安くなったら困る人だっているのよ！」
アルフェはそう言いながらレレイに迫った。あたかもレレイが、書籍相場の値崩れを目論む悪徳商人であるかのような責めっぷりであった。
「何をしてるのアルフェ？　おやめなさいな」
「老師、少しは危機感を持ってください！　研究の試料だってただじゃないんですよ。お金がかかるんです！」
「何を興奮しているかと思ったら、そのこと？」
「『そのこと？』じゃありませんよ！　せっせせっせと夜なべして書き写した魔法大全。今ならシンク金貨で三枚は堅いんです。それが値崩れしたら、四ヶ月の苦労が水の泡になっちゃいますっ！　そんなことになったら、食費に家賃に生活費の目算が……あっ！」
頭を抱えて激しく煩悶する女性の図というのも、なんとも奇矯なものである。魅力的な容姿の持ち主ならばなおさら滑稽で、伊丹は唖然として口を閉じることも出来なかった。伊丹ばかりでなく、

テュカやヤオやロウリィまでもが、レレイの義姉の振る舞いに驚きを隠さなかった。
その様子を見たミモザは、弟子の名誉のために少しばかり説明する必要を感じたようであった。
「驚かせてごめんなさいね。この娘、鉱物魔法を専門にしているのだけど、この分野ってとかくお金がかかるの。それでこの娘は本の筆写を副業にしているのだけど、それでも日々の暮らしが厳しくて。だから……本の値が下がるって耳にして動揺しちゃったみたいね」
するとレレイは、義姉を安心させるように肩をポンと叩いた。
「大丈夫。今日、明日、書籍の値が下がると言ってるわけではない。これはいずれの話」
「いずれ？」
「そう。いずれ、将来のこと」
途端、アルフェは気が抜けたようにへなへなとその場に座り込んだ。
どっと疲れが出たのか深々としたため息もついていた。
それを見たレレイは、義姉に落ち着いて貰おうと思ってか水を貰いに腰を上げた。
やがてコップを手にして戻って来ると、今の今まで自分が腰掛けていた椅子が空いていないことに気付く。
「あ」
こともあろうに姉が座っているのだ。
その席はミモザの隣であるが、同時に伊丹の隣でもある。

レレイは表情こそ変えなかったが、じっと姉の背中を見て立ちつくしてしまった。もし、視線に力があればミモザはその『視圧』によって押しのけられてしまったかも知れない。

レレイは義姉とミモザの間に、唯一空けられていた隙間に椅子を持ってきて腰を下ろした。

そんなレレイの心情など分かるはずもないアルフェは、レレイからコップを「ありがと」の一言でひったくって、ぐびぐびと飲み干し、起伏の激しい胸をなで下ろした。

「脅かさないでよ。もお～」

ぐで～っとテーブルの上に突っ伏して愚痴をこぼす姿に皆の視線が集まった。

「アルフェの早合点はいつものこと」

「でも、いずれって……いつぐらいから本の値が下がり出すのよ？」

「まだまだ先。けれどさほど遠くない」

「そっか。ヴァレッタで活字とかいうのを使った印刷っていうのが実用化されたって噂は耳にしてたから、いつかは来るって思ってたけど。この商売も先がないのかな。これからどうしよう……」

すると隣の男が興味深げに「本を書いてらっしゃるのですか？」と尋ねて来たので、アルペジオは身を起こして答えた。

「いいえ。書いているといっても、著名な賢者の稀覯本を筆写しているだけです。少し豪華に装丁して見てくれを良くして書店に卸しているのです」

「この娘は字が綺麗な上に、装丁が凝っているので、お金持ちに人気があるのよ」

ミモザの言葉に、男は「へぇ」と感銘の声を上げた。
装丁の豪華な本は書棚に並べると見栄えがするので、インテリアとしての付加価値を持つ。知識人を気取る貴族や、豪商などが好んで購入するのだ。
「一冊分をまるまる手書きで写していくなんて、大変でしょう？　別れた女房がやっぱり本を描いてましたが、日がな一日机に向かっていてよく神経が保つなって思いました」
「奥様も賢者を？」
「いいえ。同人漫画……何て言えばいいかな、いわゆる絵草紙による洒落本を描いてました」
「はぁ……絵草紙作家さんでしたか」
アルフェは、伊丹の顔をおそるおそる覗くようにして尋ねた。
「あの～……不躾なことを尋ねますけど、どうして別れられたのですか？　やっぱり日がな一日机に向かっているような女性は可愛げがないと思われたのですか？」
「とんでもない。三行半をつきつけられたのは俺の方です。俺としては別にかまわなかったのですが、仕切り直したいとか言われて。何か行き違いを感じていたみたいです」
あはははは、と伊丹は後ろ髪を掻いて笑った。
するとアルフェは、何を思ってか義妹の首に腕をまわしてぐいっと引き寄せた。
「この人、誰？」
「イタミヨウジ」

「何をしている人？」
「『門』の向こうから来た、軍人（自衛官）」
「『門』の向こうから来た軍人（自衛官）が、なんだって帝都じゃなくて、ロンデルくんだりまで来るのよ？」
帝国が『門』の向こうにある国と戦争をしているという噂は、このロンデルでも知れ渡っている。だが、アルヌスから見ればここロンデルは帝都とは方向違いである。さらに帝都との間には氷雪山脈から流れる大河を挟んでいるため、戦禍（せんか）が及ぶことはないと考えられていた。
「彼は、国から資源調査を命じられている」
その会話がミモザの耳に入って、老婦人はポンと手を打った。
「そうそう。そう言えばイタミさんは鉱物のことを知りたいんだったわね。それだったらこのアルフェが専門なのよ。アルフェ、良かったらイタミさんに教えてあげてちょうだい」
「あ、はい。わたしなんかで良ければ」
アルフェは、そういって居住まいを正した。
すると頃合いを見計らったかのように店の主人が料理を運んで来て、狭いテーブルの上はスープの入った深皿や料理の皿などで埋め尽くされた。
「相変わらず、おいしそうね」
「ええ。今日は張り切らせてもらいましたから」
そんなことを言って店の主人は、女性達に微笑む。

こうして食事が始まった。その間の話題として最初に選ばれたのは、宿題についてであった。
「ロゥリィ。忘れる前に、貴女に出されていた宿題を答えて置くわね。問いは、何故この世界にこんなに多くの種族が住んでいるか。その答えは『門』よ。この世界に様々な種類の亜人が生活しているのも、『門』が開いた時にこちらに移り住んで来たからしいの。そこから考えると、私たちヒト種は最近やって来た一番の新参者ってことになるわ」
ロゥリィは身を乗り出してミモザに、本当にその答えで良いのかと確認する。
「ええ。アルヌスが帝国で聖地と呼ばれているのはそのせい。信仰の対象としてではなくて、自分たちがやって来た場所と言う意味で聖地と呼んでいるのね」
「さすがミモザねぇ」
ミモザは拳を握った腕を曲げてぐっと小さな力こぶをつくって応えた。
「ああっ、これで宿題の提出が済んだ。気持ちいいわ。この歳にしてようやく解放された感じ」
「何でロゥリィが宿題を出すんだ？」
伊丹の問いにロゥリィが厳かに答えた。
「わたしたちぃ亜神は世界の庭木を守る庭師でもあるのよぉ。必要ならばぁ、伸び過ぎた枝や木の芽を刈り取ることもあるわぁ。けど刈ってばかりだとぉ、世界という樹は大きくならないでしょ？だからぁ、これと見込んだ賢者に無理難題を持ちかけるのぉ」
ロゥリィの言う『枝』が指すのが、知識や技術であることは伊丹にも分かった。

「なんか盆栽を育ててるみたいに言うなあ」
「似たようなものよぉ。好ましからざる枝は剪定して、余所から害虫が紛れ込んだら駆除するぅ。わたしたちぃはそうやってこの世界の調和を守っているぅ。守っているはずなんだけどぉ……」
はずだけど……どうした？　と伊丹は尋ねようとした。だがロウリィはため息をついて「ハーディの馬鹿者ぉ」と呟くように誰かを罵るだけであった。
一方、レレイはミモザに「その話、習ってない」と説明を求めていた。
ミモザは当然よと肩をすくめた。
「だって、これはわたしの研究ですもの。カトーの専門は窮理（物理）だから、史学は一般教養程度にしか修めてないし、この分野に関心を払っているかも怪しいわね」
するとアルフェは、言わんこっちゃないとばかりに妹の脇腹を肘でつついた。
「だから言ったでしょう？　確かにカトー老師は戦闘魔法の大家だけど、一人だけにぶら下がっていると知識が偏っていくって。今からでも遅くないからここに戻ってきて体系的に勉強なさい」
アルフェはそうレレイを諭した。
だがレレイは、カトーの下に残っていなければ、導師号に挑むという今はなかったと言い返す。
「それはそうかも知れないけど、本当に大丈夫なの？　変な報告して、その真っ白な一張羅を南国鳥みたいに色とりどりに染められても知らないから。最近の長老連中、わざわざ水で溶いた顔料とか持って行くぐらいなんだから」

「自信があるから大丈夫。良かったら見てほしい」
レレイはそう言うとローブの下に提げていた鞄から、ファイルを取り出した。
勢い余ってカバンに詰め込んであった漏斗（じょうご）が数個こぼれ落ちてしまい、慌てて拾い集める。
それは日本の雑貨屋などで売っている台所用品であるところの、真鍮製（しんちゅうせい）の漏斗であった。主に一升瓶から、徳利などの小容器に酒や醤油などを移す際に用いられるものだが、ペットボトル全盛の昨今では、家庭で目にする機会も少ないかも知れない。
「な、なんで、そんなものを持ち歩いてるの？」
伊丹の問いに、レレイは淡々と答えた。
「ノイマン効果を発揮するのに適した材質と形状。コストも低く使い捨てても惜しくない。しかも見ただけでは武器とは分からないのがよい」
一方、二人がそんなやりとりをしている間、ミモザとアルフェの二人は、レレイの差し出したファイルを開いて視線を走らせていた。
アルフェなどはその外見に「随分と安っぽい装丁……」などケチを付けていたが、中身を読み込んでいる内にすっかり黙り込んでしまった。
「驚いたわ。学問の進んでいる異世界の知識を持って来て、それをそのまま発表したのなら剽窃（ひょうせつ）だけど、それを土台にしてちゃんと魔法の技術体系の中に組み込んでいるのね。これなら気むずかしい爺さん達も黙らせることが出来るわ」

ミモザは微笑みながら太鼓判を押した。
「来月の学会がとっても楽しみね」
だがアルフェはと言うと、眉根を寄せたまま凍り付いていた。しばらくして、ぽつりと呟く。
「ぬ、抜かれた。しかも完全に……」
アルフェは指先をつつき合わせて、嘆くように繰り返した。
「……レレイなんかに抜かれた」
「それは残念ねアルフェ。でも、まだまだこれからよ」
ミモザはそう言って励ましたが、様々なことを犠牲にして研究に打ち込んできたレレイの姉にとっては、妹に越されたという衝撃はそんなものではとうてい治まるものではなかったのだ。
「もう、学問なんか止めちゃおうかな。わたし才能無いんだ。いつまで経っても芽が出ないし。いっそのこと田舎に引っ込んで子供相手に読み書きでも教えようかな」
すっかりいじけてしまっていた。
すると今度はレレイが励ましにかかった。
「そんなことない。鉱物魔法の研究は成果を得るのに時間のかかる分野。それだけのこと」
「そ、そうかな？」
「わたしは、たまたま『門』の向こうの知識に接触する機会を得たから一足飛びに此処まで来れた。けれど鉱物魔法はお金がかかる。それはもう仕方のないこと」

「そうなのよね。お金がないと試料すら揃わなくて……ねぇ、レレイ、あんたお金に余裕がありそうじゃない？　少し融通してよ！」

すると途端にレレイはテーブルに向かって、スープを口に運んだ。

「これは、ほんとうに美味しい」

アルフェからの要請はすっかり無視であった。

「ねえっ！　いくらなんでもそれは無いんじゃない!?」

「鉱物魔法は、要するに練金術。金貨を溶かす魔女の大釜。あればあっただけお金が消えていく恐ろしい分野。関わると大変なことになる。だから誰も手を出さない」

「うわわわわわわん！」

アルフェは頭を抱えると嘆くように泣き始めた。それを見たテュカとヤオはひそひそと語り合った。

「レレイのお義姉さんって、面白いのね」

「うむ。此の身もここまで親しみが感じられるヒト種の女性と出会うのは初めてだ」

ミモザ老師もこれに加わって嘆息した。

「物心ついた時から研究ばっかりして来たから、いろいろと余裕がないのよ。せっぱ詰まっちゃってるの」

「その点、ミモザがあの年頃の時はぁ、遊びまくってたわよねぇ」

何を意味しているのか分からないが、ロゥリィは指折り数えていた。右手だけで足りず、左手まで動員している。

「ロゥリィ。昔のことは言わないでくれるかしら？」

見るといい年したおばあちゃんが頬を赤く染めて恥ずかしがっていた。

やがて、いくら泣いても誰も相手にしてくれないことが分かると、アルフェは突如言い放った。

「もう良いもんっ！　いっそのこと結婚して家庭に入るっ！」

「あれ。なんか、風向きが変わってきたみたい」とテュカ。

「今度はぁ、何を言い出すのかしらぁ」とわくわく顔のロゥリィ。

アルフェはまた、レレイの首に腕を回すと尋ねた。

「イタミさんって、どんな人よ」

「イタミヨウジ。ニホンの軍（幹部自衛官）の士官。さらにはエルベ藩王国国王より卿の称号を賜っている。他にもシュワルツのダークエルフ名誉族長などの数多（あまた）の称号を有している」

「卿って……下級とは言え貴族じゃないの！　け、経済状況は？　資産は？」

これにはヤオが答えた。

「イタミ殿には、とある功績により、我が部族よりこれぐらいのサイズの金剛石を贈らせてもらった。ついでに言うと、此の身もイタミ殿の所有資産なのだ」

アルフェはヤオが両手で示した人の頭サイズを見て、思わず絶句。立ち上がるとヤオに迫るよう

にして尋ねた。
「こっ、こんごうせき？　人間の頭サイズの金剛石!?」
思わずアルフェは夢想してしまった。
資産は潤沢で、試料や機材が欲しいだけそろう研究環境。
家事や子育てなんかの雑事はメイド（妄想ではヤオの姿をしている）を雇って任せることが出来る。しかも夫は軍人だ。ならば仕事でほとんど家にいないだろう。つまり「亭主元気で留守が良い」という、アルフェ的には非常に住み心地の良い、男にとっては夢も希望もないが……そんな家庭が期待できるのだ。しかも離婚しているということは、今は独身でフリー。
まさに、お買い得物件！
そう思ってがばっと振り返ると、いつの間にか伊丹の隣にレレイが寄り添うように鎮座していた。
アルフェが立った隙を衝いてレレイが移り座ったのである。
「ちょ、ちょっとレレイ。そこはわたしの席でしょ？」
「その前はわたしの席だった」
「そんなの今更でしょ。そこを譲ってよ」
「だめ」
「なんでよ。意地悪しないでよ」
するとレレイは「すでに三日夜を終えた仲」と伊丹の二の腕あたりの袖をきゅっと摘んだ。

三日夜の儀（あるいは「ならわし」）とは、成人男女が『連続して三日間同衾（どうきん）』することで内縁関係が開始されるという土着の習慣であり、つまるところ「もう、結婚したよ」と宣言するに等しい。

「だ、誰と誰が？」

思わず声が調子はずれになってしまうアルフェ。

「わたしとイタミ」

「ひっ！」

学問で追い抜かれ、経済力で上を行かれ、あげくの果てに男までも先を越され……。

この瞬間、アルフェの中で張りつめていた糸が数本切れた。プチッと音を立てて切れてしまった。

気が付いたら、テーブルにあったスープの皿をレレイの頭上に掲げていた。

火傷をさせたらまずいなと思ったが、長話をしていたせいで充分に冷めているのが皿を持った感触で分かる。そうなればもう躊躇（ためら）う必要はないと、レレイの頭の上からドバっとかけていた。

白銀の髪が甘薯（かんしょ）のスープによって赤黄色く汚れ、それがそのままうなじ、肩を伝ってレレイの白装束へと広がっていく。

周囲からの驚愕の視線を浴びつつ思う。しまった。つい、やってしまった、と。

だが後悔はしてない。非常にすっきりした。そう、これは必要なことなのだ。

体を小刻みに震わせて立ち上がる義妹に、これを無言で睨み返す義姉。視線に火花が散る。

こうして話の場面は、この章の冒頭へと戻ることになるわけである。

＊　＊

対峙する二人の女魔導師。

見守る野次馬学徒達は息を呑んで、戦いの始まりを待っていた。

何しろ双方共に、魔法戦闘の大家とも言うべきリンドン派に属している。皆、魔法戦の神髄が見られるかも知れない。あわよくば秘技とされる魔法すら、見ることが出来るかも知れないという期待を抱いていた。

そんな姉妹のほぼ中間地点に、黒い神官服を纏ったロゥリィがハルバートを立てた。

「こほん。この戦いにおけるルールを述べるわぁ。条件は不殺であることぉ。女ゆえに相手の顔に傷を付けないことぉ。この二つを守る限り好きになさぁい。敗北条件はルールに反した時ぃ。降伏、あるいは倒されて十カウント以内に戦闘態勢をとることが出来なかった時ぃ。また戦闘終了後の調停には必ず従うことぉ。以上四点に同意するぅ？」

戦いの神エムロイ。その使徒たるロゥリィの言葉に異議などある筈もなくレレイは頷いた。アルフェの方も、しっかりと頷く。

「では第十三次レレーナ家姉妹会戦の開始をぉ、エムロイの使徒ロゥリィ・マーキュリーの名において許可するわぁ!!」

ロゥリィの声が号砲となった。
先に動いたのはアルフェだった。右腕を一閃させて小さな光球をレレイに向けて放つ。
レレイは純白のローブを風にはらませながら、軽快な動作でこれを躱した。
続いてアルフェが振りかざしたのは、ボーラと呼ばれる武器であった。
これは元来狩猟用の投擲武器である。だが、熟達した者の手にかかると変幻自在な動きを見せ、中・近接距離で威力を発揮する。さらにかさばりにくいので、常時持ち歩くのも容易い。一般には、複数の分銅を縄で繋いだ形状をしているが、アルフェの場合は三個の分銅をそれぞれ細い鎖で繋ぎ止めていた。さらに使い手は鉱物魔法を専門とするアルフェである。振り回す分銅はそれぞれ異なる材質が用いられており、それぞれに込められた魔法は、使用者の意図を汲んで様々な色合いの光を放っていた。
それを見た伊丹は唸った。
「あ、あれは……」
それを感銘の声とでも思ったのか、ミモザは説明を始めた。
「凄いでしょう？　アルフェは、鉱物を触媒とした魔法の現理展開を研究しているの。普通、魔法を発動するには『現理』の支配するこの世界を『法理』で開豁しなければならないのだけど、触媒を用いると手っ取り早く『現理』に干渉することが可能になるの。ただし、触媒の種類によって発動される効果は異なるのね。例えば鉄だと単純に発光発熱するだけだし、ある種の鉱石だと強力な

光を放ったりするわ。特殊な加工を施した木材なんかは、障壁を展開するの。アルフェはその性質に法則性を見いだそうと研究しているわけなの」

だが伊丹は困惑したように眉を寄せた。

「いや、そうじゃなくて。あんなものぶつけたら怪我してしまうんじゃないかと思いまして。って言うかするでしょう普通。絶対、姉妹喧嘩のレベルじゃないですよ、これ……」

「ところが、魔導師同士ともなると、喧嘩もこんなことになってしまうのよ」

そんな会話をしている最中も、空気が切り裂かれる音と共に、かまいたちが飛び、舞い上がった石礫が土砂降りのように降り注いでいる。それを杖を振って防ぎ、躱し、なぎ払い、そして力場と力場を真正面から叩きつけ合っているのだ。

「ちょっと見ない間に、腕を上げたじゃないか」

「純白の導服は伊達じゃない」

「そら言を言ってろってぇの。鍍金を剥がしてやるよ」

二人の攻撃はさらに威力を増しているようであった。外れた光弾が流れ弾となって民家の軒を焦がし、跳弾となった石礫が野次馬達の間に飛び込んだりして悲鳴が上がった。怪我人が出ないのがほんとに不思議なくらいである。そこはやはり野次馬も魔導師ということなのだろう。

「そ、そろそろ洒落にならなくなりはじめたんですけど」

弾丸のような勢いで突然降って来た石のかけらに、伊丹はびくっと首を竦めた。

空気中の水分を凍らせた氷柱が、鋭い先端を輝かせながら飛び交い、建物の壁に突き刺さって、漆喰がパラパラと崩れて落ちる。

「リンドン派の魔導師は、一番最初に防御魔法を仕込まれるのよ。だから喧嘩をする時は、どっちが相手の防御を打ち破るかという力比べになるんだけど……ホントこの二人、攻撃も防御も威力が随分と上がってるわ。レレイなんか見違えるくらいに成長したわね」

実際、二人が用いる力はその勢いをどんどん増していった。

とは言っても、いずれは限界に達するわけで、ある時点を境にして二人とも大きな動きを止めてしまった。二人とも肩で息をしながら、攻撃を放つ。そして重く感じ始めた杖を構えて、力ずくで障壁を張るのである。

重い鉄塊のぶつかるような音が響いて、砂煙が上がった。

「くっ、これが天賦の才って奴なのかい。ちくしょう……」

アルフェが歯を食いしばりながら前へと踏み出した。

そこから先の戦いを例えるなら、交互に渾身の力で相手を殴る騎士の決闘だろうか。此処まで来ると単純に力と力、意地と意地のぶつけ合いになる。

だがそうなると力量の差がはっきりと姿を現し始める。次第にアルフェは攻撃の手が少なくなり、一方的に守勢に回る場面が増えていった。

伊丹はその壮絶な状況に、そろそろ止めに入った方がよいと思った。そして審判役のロゥリィに

それとなく水を向けた。
「ロゥリィ、どうするよコレ？　真面目に危険域に入ったと思うけど……」
「そうねぇ。でもぎりぎりまで待つわぁ。だってここで止めたらきっとわだかまりが残るものぉ。アルフェはまだ起死回生の一撃を狙っているしぃ、レレイは勝利を決定づける一撃を狙っているぅ」
そうかも知れないけどさ、なんかこう嫌な感じしない？
伊丹は、そう言おうとした。だが、その途端、野次馬の群れの中からレレイとアルフェの戦いとは無関係な悲鳴が上がった。
撃剣の音。
裂帛の気合いに続く、呻き声。
「この卑怯者め！　覚悟っ！」
最初は、レレイとアルフェの戦いを見て興奮した何者かが、喧嘩を始めたのかと思った。そしてその方角に目を向けると、男が剣で胸を貫かれ倒れていくところであった。

どれほど強力な魔法が飛び交い、地面を掘り返して、壁を抉ることになったとしても、その戦いはエムロイの使徒ロゥリィが立会人となった不殺を前提とした姉妹喧嘩であることが明言されていた。だからこそ皆、野次馬気分で傍観することができたのである。
だが、血が流されてしまった。

人間の命が衆人環視の中で断たれたのである。男がよろよろと数歩進んで大地に倒れるという衝撃的な光景を、何の構えもなく目に焼き付けてしまった。

皆、顔色を変えた。ある者は蒼白となって口を押さえ、ある者は怒りで顔を真っ赤にし、殺した人間に非難の視線を注いだ。眦を逆立てて街の治安担当の衛士を呼びに走る者もあった。

また、心得のある者は杖を引き寄せて、犯人を捕らえるべく攻撃魔法の支度を始めている。

そんな中で、ロゥリィが憮然とした面持ちで尋ねた。

「……このロゥリィが仕切る決闘の場を汚した理由ぅ、説明してくれるんでしょうねぇ、グレイ・コ・アルド？」

「はっ」

殺した男。グレイ騎士補は、血に染まった剣を背後に回すとロゥリィの前で片膝を付いた。

「お久しぶりにお目もじいたし申す、聖下。こうして再びお目にかかることが出来て、光栄です」

ことさら大仰に威儀を正したのは、周囲からの敵意をひしひしと感じたからである。

自らの行為の正当性をアピールするには、なによりもまず堂々と、そして礼儀正しくあることが肝要だと、この男は考えていた。そしてそれはこの場面では概ね正しかった。皆、グレイが何を言い、何をするかに注目して決定的な行動を控えた。

当然、返す言葉も周囲に聞こえるまでに大きなものとなる。

「聖下のご不興はごもっともなれど、今は早急に場から離れることを小官進言申し上げます。刺客

の一人を倒したとは言え、この場が安全とはまだ決まったわけではないのですから」

これには野次馬達もざわついた。「安全ではない」とは、すなわち危険という意味だからだ。誰が危険なのか、何が危険なのか、皆困惑して周囲を見渡した。

激闘の疲れを癒すようにしゃがみ込んでいたアルフェもレレイも、この言葉が耳に入ると顔を上げざるをえない。

少し遅れて、殺された男の持ち物や荷物をあさっていたシャンディー・ガフ・マレアもロゥリィの前に進み出た。そしてたった今押収したばかりの弓銃を差し出した。

見れば弦が弦受けにかけられ、矢が番えられていた。拳銃で例えるなら弾丸を薬室に装填して、撃鉄を起こし、安全装置もはずしてある状態と言える。つまり、引き金を引けば弾が出るのだ。そんな状態で武器を持ち歩く者など通常はいない。少なくともこの場で誰かないし、何かに向けて、使用する意図があったと言うことなのだ。そうなればグレイの言葉が信憑性を帯びて来る。

レレイとアルフェは互いに顔を見合わせた。いったい何が起きているのか。理解できない状況の中で、さらなる説明を求めてシャンディーに問いかける。

「それは？」

「あの者は、人混みにまみれてレレイ様のお命を狙っていたのです」

「えっ、なんで!?」

声を上げたのは当のレレイではなく、義姉のアルフェだった。

「今は、それにお答えしている暇がありません。さ、早く……」
グレイの言葉に対する皆の反応は鈍い。まだ事態が把握出来ていないからだ。だが、こう言う時に限って理解と反応が早い者がいる。
「分かった。行こう、行こう、すぐ行こう」
伊丹である。伊丹は、レレイとアルフェの二人をまとめ、「さあさあさあ」と急かすようにして歩き始めた。そして野次馬の人垣を掻き分けて、マリナの店を後にしたのである。
グレイとシャンディーは周りに向けて警戒の視線をぐるりと巡らせてから、この後を追った。
伊丹はヤオを招き寄せると「一足先に宿に戻って様子を見て来てくれ」と指示した。
すると役割を与えられたことが嬉しいのか、ヤオは小気味よい返事をした。
「承知した。怪しい者が待ちかまえてないか見てくればよいのだな？」
「テュカもだ。頼む」
未だに釈然としない表情のテュカだったが、伊丹から頼まれれば二つ返事だ。「仕方ないわね」と言いながらも素直に首肯した。
こうしてテュカとヤオの二人が小走りに先行していく。
レレイとアルフェにはミモザと伊丹が寄り添うように歩き、ロゥリィと、グレイ、そしてシャンディーが周囲に対する警戒の視線を巡らせる。
「いったい誰にレレイが狙われていると言うの？　こんないい娘なのに」

ミモザからの抗議めいた問いにグレイとシャンディーは互いに顔を見合わせていた。どう答えたものかと躊躇っている様子が見て取れる。人の耳が周囲にある状態では、話すのに具合が悪いようであった。とはいえ、伊丹も情報が欲しい。そこでグレイ達が答えられる範囲で、情報が得られないかと思い質問の方向を変えてみた。

「二人は誰の命令で動いている？　やっぱり皇女さん？」

「はい」答えたのはシャンディー。

彼女は先に進んでは立ち止まり、周囲を見渡して、また小走りに進むという動きを繰り返している。そのせいか少しばかり呼吸を荒くしていた。汗にぬれた亜麻色の前髪を、額にはりつけている。

「姫殿下からわたくし達が仰せつかったのはレレイ様を帝都にお招きすることだけでした。わたくし達ならば、イタミ様達も信用して下さるであろうと姫殿下もおっしゃられて。ですがその途中で、ひょんなことから刺客が雇われたという情報を得まして、取り急ぎ駆けつけたんです」

グレイはイタリカの対盗賊戦の際に、シャンディーは語学研修生としてアルヌスに滞在していたから伊丹らとは面識があるのだ。

シャンディーは愚痴る。本当ならば自分は今頃、帝都の講和会議で華々しい通訳官をしているはずだった。こんな泥臭い荒事をやらされることになるとは思っても見なかったと。

「誰が狙ってるかは……ここでは答えられないんだよね。でも、理由は言えるでしょ？」

「さすがイタミ殿ですな。『誰が』についてはまだ憶測の域を出ませんので、迂闊に申し上げるこ

とは憚られます」

グレイはそう前置きして「ただ……」と続けた。

「炎龍の首が帝都に掲げられてから、レレイ殿のご名声は、帝都あたりでは知らぬ者がないほどに広がりました。その方は、それを快く思わなかったようです」

「炎龍の首が帝都に？」

「ご存じなかったのですかな？」

「あれは確か、ダークエルフの部族が引き取って行ったんだ。炎龍が滅んだことを皆に報せて、安全宣言するためだとかなんとか言って……」

「確かにその効果はありましたぞ」

「それ以上ですわ。おかげでレレイ様の評判がこれ以上ないってほどに高まってしまって」

グレイと、シャンディーによる二人がかりの説明だったが、伊丹は「それって変だ」と首を傾げた。その説明ではどうしてレレイの評判だけが高まるのか分からないのだ。炎龍を斃したことが理由なら、ここにいる全員が狙われなければおかしい理屈である。

すると、足を止めたグレイがレレイを振り返った。

「別にレレイ殿の名前だけが知れ渡っているわけではございませぬぞ。ただ帝国に住まうヒト種は、外つ国や、異種族である皆様に向けるのとは異なった種類の感情を、レレイ殿に向けたのです。そしてそれが、そもそもの原因になったと思われます」

伊丹が首を傾げた。
「なんで？」
「それは、レレイ殿が帝国の臣民で、ヒト種でいらっしゃるからです」
「わたしは流民（ルルド）の一族。帝国の臣民なんかになったつもりはない」
「そんなことは、民衆にとっては関係ありません。いや、だからこその喝采（かっさい）もあるでしょう。なにしろ貴族や軍人、そして陛下ですら果たせなかったことを、まつろわぬ民であった貴女が為し遂げたのですから。帝国の支配にしぶしぶ従っている者にとっては、あなたは身内意識を大変にくすぐる存在なのです」
それは日本人が、野球やサッカーなどで外国で活躍している日本人選手を応援するのと似た心理かも知れないと伊丹は考えた。所属チームが優勝でもすれば、マスコミは連日連夜特別番組を組んだりするだろう。けれど、他にどんな選手がそのチームで活躍してるかまでは知られない。そこまで関心を払うとすれば一部のマニア。それと同じなのだ。
「ちょっと待ってよ。そんな説明じゃ、なんでレレイが狙われるかの理由が、まったく見えないんだけど」
グレイは「失礼ですが、あなたは？」とレレイの決闘相手に警戒の構えを見せる。
アルフェが答える前に「わたしの義姉」とレレイが告げた。
「何と！　先ほどの争いごとは姉妹喧嘩でしたか。また派手な姉妹喧嘩もあったものですなぁ」

「そんなことはどうでもいいわ。なんでレレイが狙われるの？　だいたい炎龍の首ってなに？」
「おや、まだお聞きになっておられないのですか？」
驚いたグレイは問うような視線をレレイへと向けた。
「話してない」
「驚いた、最初に話すべき事でしょうに」
「それほど大したことはしてない」
「これだ。ご本人達は自分が何を為したか、その価値を全く分かっておられない」
グレイは信じられないとばかりに頭を振った。そして改めてアルフェに告げた。
「あなたの妹君はこちらにおわす皆様と協力して、炎龍を討ち果たすという功績をおたてになったのですぞ」
「何、馬鹿なことを……って、ホントなの？」
だがグレイは、アルフェの疑問は放置して先に話を進めた。冷たい言い方だが、この場でそんなレベルの問答をしている余裕はなかったからだ。そしてその態度こそが、それが事実だと言うことをアルフェに否応なく理解させた。
「どうも『さるお方』にとってはそれが大変気にくわないことだったようです。ま、口ではなんとでも理屈は立ちますな。『生きている英雄ほどやっかいなものはない』とか『それがまつろわぬ民であるならばなおさら』などと。なれどどれほど理屈を連ねても根底にわだかまる心情は単純なも

のでありましょう。すなわち嫉妬です」
「なるほど」
伊丹は唸るように頷いた。どうやらそれがレレイが狙われる理由らしい。
「ただ問題は、刺客が並大抵の相手ではないらしいのです。炎龍を倒したという実績を高く評価されてかなりの刺客が放たれたようです。我ら二人だけでは、とうてい防ぎ切れぬ相手です。ご協力いただけますな」
「当然だな。大事な身内を守るのを誰が嫌がるって言うんだ？」
その言葉にレレイのギュッとした視線が伊丹に注がれた。
「大変結構。それでこそ緑の人と噂される方。共に手を携えて刺客を返り討ちにいたしましょう」
だが、伊丹は首を振ると、期待を裏切って申し訳ないといった表情をした。
「いやだなあ。俺ってそんな好戦的な男に見える？」

04

陸上自衛隊・帝都内悪所街事務所。
いつもならば、常駐する者の数も決まっていて閑散としているはずの事務所だが、ここ一週間は

多数の人間が詰めて、内部は熱気で溢れかえっていた。あちこちに置かれたモニターは街の各所に設置された隠しカメラから送られた風景を映し出し、笹川陸士長は無線機にしがみついて各所と交信して、戸津陸士長などは机に広げた帝都の地形図に青や赤い字で部隊符号を書き込んでいた。

さらに、二科から派遣されてきた大勢の情報担当者が、帝都で何が起きているのかを把握しようと、これまで手間暇かけて広げた情報網をたぐり寄せる作業に従事していた。

視点を転じると廊下の隅には簡易ベッドが置かれて、横たわっている仁科一等陸曹が腹をパリパリと掻きむしりながらいびきをかいていたりする。皆、昼夜の別なく働いていて、疲れたら交代で休むという状態が続いているのだ。

「ただいま帰りました。買い出しをして参りましたわ」

黒川と栗林のコンビが帰ってくる。傍らには協力者となった翼人ミザリィもいて、三人とも手には小荷物をかかえていた。

すると、男共が「有り難ぇ」と群がるようにして集まった。今まで寝ていた者まで、がばっと起き出してくる。そして、栗林達から小荷物をひったくるように受け取り、その中味を覗いて「また、これかよ」と口々に不満をもらした。入っていたのは硬く焼き締めたライ麦のパンに、干した肉、それと干した果物などであった。

「文句を言うなら喰うな！　こんなのだって、手に入れるのにすっごく苦労したんだからね」

栗林が拳を震わせて凄むと、戸津や笹川がごめんなさぁいと頭を抱えて逃げていった。

桑原曹長が干した棗に似た果物を噛りながら首を傾げた。
「前から気になってたんだが、どうやって手に入れて来るんだ？　もう店なんて開いてないだろうし。まさかと思うが……」
その拳で誰かの家に押し入って奪ってきたんじゃないだろうなと続ける前に、栗林は答えた。
「古田陸士長から横流ししてもらったんです」
「おいおいおい！　大丈夫なのか？　前の料理人達、皇帝の食事に毒を入れたっていう疑いだけで、ゾルザルからコレされたんだろ？　皇城の食い物の横流しもヤバくねえか？」
桑原が首を手刀で叩いた。もちろん一般的な意味で言うところの馘首ではない、料理人達は文字通り頚部を胴体から切り落とされたのだ。
「大丈夫ですよ。彼、ゾルザルのお気に入りですから。それに別に宮殿の裏口から貰ってくるわけじゃありませんから。彼から出入りの商人に話をつけてもらって、そこから分けて貰ってくるんです」
「おかげであたし等も助かってるよ。この街ですら食べ物が手に入りにくくなってるからね」
ミザリィはそんなふうに言いながら事務所にいる男連中に食糧を配っていった。階段を上がると二階の奥には、籠もっているか、どっかに出かけているかで、あまり接する機会のない連中がいる。
「ケンザキ。エサだよ。みんなの分もあるよ」
「おっ……ありがとよ」
寝台に寝転がっていた剣崎三等陸尉らが、ミザリィから食事を受け取った。

ついでに寝台に引きずり込まれそうになってミザリィはヒヤッとした。
だが「そういうことは、店開きしている時にしておくれ」と剣崎の腕を軽く叩くと、男はニヤリと人好きのする笑みを見せてすぐに解放してくれた。あちこち触られたが、このぐらいはサービスしてやっても良いかと思う。
だがそれにしても、下にいる連中が忙殺されていると言うのに、手伝いもせずにサボっているこいつらって、何者なんだろうと思う。生活態度も、部屋に籠もって寝ているか運動をしてるか、あるいは何日も留守にしているかなのだ。
そして帰ってきた時は、身体が震えるほどの殺気を放散している事が多い。視線を向けられただけで蛇に睨まれたカエルみたいに、痺れきってしまい動けなくなるのだ。もう死んだ、好きにしろ、と思わず言いたくなるぐらいに。
トゲトゲしさをまき散らす男は、この悪所街では珍しくないが、ここまで研ぎ澄まされた鋭利な気配をまとう者はいない。ミザリィはそこに格というか住んでいる世界の違いを感じた。
「ケンザキ……最近、このあたりも景気が悪くてねぇ。どうだい今夜あたり？」
「残念。そういうことは禁止になってるんだ。他をあたってくれ」
そう言う返事が来ることは分かっていたが、お預けをくらった気分になるミザリィだった。
一方、黒川は所長の新田原三佐に復命をしようとして事務所の奥を覗き込んでいた。だが、新田

原はアルヌスの今津一等陸佐に、帝都の状況を無線で報告している真っ最中のようで、手だけの「ゴクロウ、ちょっと待ってろ」を意味する指示が返ってきた。

耳を澄ますと、スピーカーから今津のエセ関西弁が聞こえる。

『分かった。講和派の議員さん連中はみんな軟禁されてもうたんやな？　で、街の様子はどうや？』

「皇帝が倒れてすでに一週間になりますが、帝都は未だ戒厳下にあって解除される様子がありません。街のあちこちには警備の兵士が立っていて、往来する市民達を威圧しているかのようです。日中の外出は許されていますが、帝都への出入りが制限されているため、ほとんどの商店は品薄になって閉じられてしまいました。その為、人通りもめっきり少なくなって閑散としています。帝都事務所も食糧が不足しはじめました。早めの補給をお願いします」

『なんでや？　百五十食分の備蓄があるはずやろ？　メシも武器なんやで。粗末に扱ったらあかんやろが』

「副大臣一行に多めに回して消費しました。副大臣は、身の回りの世話をしてくれるメイドや、フットマンたちに、食料品を渡したりしているようです」

『こう言う時の袖の下は、金よりも食い物ってことやな。なら早速送りつけたるわ。C－1輸送機のスケジュールを確保でき次第、空から投下したる。で、副大臣達は変わりないんやな？』

「戒厳下とは言っても提供された翡翠宮は、外交協定が効いておりますので問題ありません。連中も、さすがに我が国の使節に害を加えることはないでしょう」

『あかん。そう言う先入観は絶対にあかんわ。馬鹿は、わしらがそんな馬鹿なことするはずがないっちゅうことを選んでやりよるんやで。常識は一切捨てるんや。やられちゃ困るっちゅうことは全部警戒するんや。いいな』

今津はそう言って楽観的観測を口にした新田原をたしなめた。そしてこれまでつかんだ情報をまとめにかかった。

『要するに、ゾルザルのクーデターは概ね成功したってことやな』

「はい。皇帝の不豫に乗じたゾルザルは、皇太子府の開設を宣言すると政務を壟断。指揮権の継承を受けたとして各地で編成中の軍に忠誠を誓わせ、帝都を厳戒体制下に置きました。講和派に属す議員の多くは、家族を密かに脱出させています」

『分かった。家族を逃がしとるっちゅうことは、そうせななんことが起こる予感があるっちゅうことや。火の粉がそっちまで回るようならすぐに駆けつけるさかい、それまで保たせることだけ考えや。いいな』

「了解です。ただ脱出先を持たない家族がいるようです。保護してはいけませんか？」

『早まったらあかんよ。変に助けると、相手の立場を悪るうするだけや。見極めが大事やで』

「分かりました」

『とにかく、副大臣と外務省連中の状況だけは、分刻みで把握し続けてなあ。それと皇帝の健康状態や。生きとるのか、死んどるのか、生きとるとして回復の見込みはあるのか、それが情報見積り

のためのＥＥＩ（情報主要素）や、いいな。注文多くてすまんけどあんじょうたのむわ』
「はい」
新田原はそう答えて今津との交信を終えた。
「皇帝の病状か……誰か宮廷内にツテのある奴いたかな？」
新田原は、そう事務所の奥に向けて声をかけた。だが答えたのは目の前にいた黒川だった。
「そういう時は、ピニャ殿下の側周りの人物と個人的な親交を深めている富田（とみた）二曹がお役に立つのではないでしょうか？」

＊　＊

――皇城　ウラ・ビアンカ――

そのころ、宮廷内は深刻な混乱状態に陥っていた。
皇太子府の開設を宣言したゾルザルが、内務、財務、農務、外務、宮内の閣僚から、果ては宰相までをも独自に任命し、それぞれが現職の大臣と同等の権能を持つと宣言したからである。
確かに、皇太子は皇太子府を開いて国政に関与する権利を持つ。だがそれは、現皇帝が譲位の意志と時期を明確に示してからなされるのが常であった。その目的も皇太子が即位する際に、政策の

継続性を保つためなのだ。ところが、それをいきなり現任者と同等などと言って並び立たせ、政務をとらせたため、現場が混乱に陥ってしまったのである。

もちろん、法政上はゾルザルが任命した皇太子府の閣僚には権限は何もない。だが、実際に現場で働く者からしてみればそういうわけにはいかない。皇帝が病に倒れ、いつ崩御してもおかしくないとなれば、そう遠くない将来、皇太子任命の次期閣僚こそが上司となるからである。そんな者に逆らって睨まれたりすれば、自分の立場が危うくなってしまう。つまり将来への不安からどうしたって保身が働くのである。そのため現任大臣と次期大臣とを同等に扱ってしまい二重権力の状態が起こってしまった。

当然、ゾルザルの行動に対する反発の声が各所から湧き上がった。「そもそも何故、皇太子に過ぎない身で、国政を掌握することが許されるのか?」と。だが、次期皇帝として定められているゾルザルが強引に振る舞えば、例え正論であってもそれは力を失った。正論とは、相手がそれを尊重する意志があって、初めて成り立つものだからだ。最初から踏み倒すつもりの人間には、何の役にも立たないのである。

現職閣僚の権威と権限の源は、皇帝にある。しかし現在、皇帝はその意志をはっきりとさせることは出来ない状態となっていた。そのため彼らは沈みかけた太陽の残照によって政務を取り仕切っているに過ぎない。曙光(しょこう)として輝き始めたゾルザルを制することは、建前はともかくとして、実質的にはもう出来なくなっていたのだ。

さらに元老院では、講和派のほとんどが自宅に軟禁されてしまったため、ゾルザルを支持する主戦論者達だけで議事が運営されていた。主戦論派に都合のよい法案、ゾルザルに都合の良い決議が次々と行われ、この勢いを押しとどめることが出来る者はいなくなってしまった。そのため、多くの閣僚らがこの混乱に手を焼きながらも何もすることが出来ず、皇帝の回復をひたすら待ち望むという有様となってしまったのである。

皇太子ゾルザルの入来が告げられ、皇太子府広間の扉が大きく開かれた。

招集をかけられた次期閣僚、文官、そして軍務に携われる気鋭の将校達からの視線が集まって、ゾルザルはその間に開かれた道を威風堂々と進んだ。

野心に溢れた少壮の文官と将校が、金糸銀糸で縫われた壮麗な出で立ちで並ぶ皇太子府の見事な様は、豪華さという一点で現皇帝の閣僚を凌駕しており、さながら絵画のようであった。

皇太子には、少し遅れる形でテューレが付き従う。

彼女の位置付けは、あくまでも皇太子の『所有物』でしかない。だが、そうであるが故に皆、彼女の背後に皇太子の姿を見る。皇太子という光源にもっとも近いところにいる彼女は、彼女自身すら輝いているように見えて、奴隷という身分にもかかわらず王侯にも準じた礼遇が周囲から与えられていたのである。

ゾルザルは颯爽（さっそう）とマントを脱ぐと、傍らに控えるテューレへと押しつけた。そして皇太子府の主

座たる席へと腰を下ろす。
テューレは仮面のような無表情さでマントを受け取ると、役目に従ってこれを抱えたまま傅いた。
一方、待ちかまえていたピニャが、ゾルザルの着座ももどかしげに進み出ると咎めるような口調で問いかけた。
「兄様。何故、カーゼル侯爵やキケロ卿ら講和派議員を代表から外して、さらには自宅に軟禁されたのですか？」
ゾルザルは迷惑そうに眉根を寄せ、口にしなければ分からないのかと言わんばかりの態度で説明した。
「軟禁などと人聞きの悪い。あの者らには、ニホンに買収されていたという疑いがある。それ故、調べが済むまで自宅に謹慎させたに過ぎん」
「買収ですと？　言うに事欠いて買収ですか？」
「そうだ。今分かっている範囲だけでもその疑いは大変に濃厚だ。その調査結果によっては、逮捕してしかるべき処分を行わなければならぬ」
「その処分。きちんと裁判を行って決めるのでしょうな、兄上？」
「今は戦時である。敵の策に踊らされて軍陣中で利敵行為を行った者を処断するのに、いちいち裁判を行っている余裕などあるものか。即断即決こそが勝利の要諦よ」
これを聞いたとき、ピニャの視界は一瞬暗くなった。

確かに軍陣内では、流言飛語を行った兵士や、敵に買収された将校や会計官を処罰するのに裁判を行わないこともある。だがそれは、あくまでも接敵して、戦い間近という喫緊の状況においての処置である。裁判なしに処分することなど本来ありえないのだ。さらに言えば、例え上官といえども、部下をむやみに刑殺することは許されない。多くの場面で誤解されているが、「部下を処分した」ことは咎められなくとも、「何故部下を処分さねばならなかったのか」は徹底的に追及されるのだ。そして理由を周囲に納得させる事が出来なければ、今度は自分が罰せられるのである。

そんな基本的な原則すら理解しようとせず、軍陣中であると強弁さえすれば好き勝手に処分できると勘違いしている兄を見たピニャは、一気に力が抜ける思いとなった。

「あ、兄上。あなたはいったいどこまで……」

「くどいぞピニャ。皇帝が不豫の今、政務は皇太子たるこの俺が取り仕切る。そして、やるからには俺のやり方でやらせてもらう」

「兄上は、政権の交代を占領政策か何かと勘違いされている。交代とは責任を引き継ぐということで、好き勝手して良いという意味ではないのですよ」

「うるさい。いちいち説教臭いこと言って咎め立てするな。なんだその態度は、俺に対する当てつけか!?」

「妾は以前から、皇帝に対してもこういう態度でした」

敢然と言い放つピニャを前に、ゾルザルは虚を衝かれたように目を瞬かせた。

「ちっ。確かにそうだったな、それは認めてやる。だが、俺は皇帝のように寛容ではいられんぞ」
「では、妾の首も切りますか？」
「そんなことするわけがなかろう。お前にはニホンとの間に立って貰わねばならぬ。お前はそれに専念しておれば良い」
「しかし、新たに据えた代表がウッディ伯やクレイトン男爵等というのは、講和を締結するつもりが全く無いかに見えますが？」
「そんなことはないぞ。あの者らとて、最終的には講和の成立を願っている。だが現状のままではいかん。そう思っているだけなのだ」
「まるで勝ち目があるかのようなおっしゃりようですな」
ピニャは皮肉そうに言った。だがゾルザルも負けてはいない。
「敗北主義者は悲観的な物の見方しかせぬからな、勝利のために工夫するということを理解できぬのだろう。ヘルム、ミュドラ、カラスタ！」
ゾルザルは居並ぶ軍陣の列から三人の名を呼んだ。
将校達の最前列に立っていた彼らは、前に出るとゾルザルの前で膝をつく。
中央にヘルム子爵。右にミュドラ勲爵士、左にカラスタ侯爵公子。それぞれゾルザルの皇太子府にて将軍職に任じられた者達である。さらに言えばヘルムとカラスタは、先日、日本から返還されて来た元捕虜でもある。

「さて卿らに問う、何か腹案はないか？　ピニャの蒙を払ってやってくれ！」
ゾルザルからの問いを受けて、ヘルムは立ち上がった。
「確かにピニャ殿下のおっしゃるとおり、まともに戦ってはかなわない相手です。となれば、常道に反した方法を採らざるを得ません」
「そうだな。だが構うことはない。帝国は今勝利を欲してるのだからな」
「かしこまりました。ならば、敵を充分に引っかき回してご覧に入れましょう」
ゾルザルは「ほう、どのようにする？」と身を乗り出した。
「邪道に徹します。ニホンという敵は、民衆を愛すると聞き及びます。ならば、ゴブリンやコボルト共を掻き集め、アルヌス周辺の街や村、隊商を襲わせます。畑を焼き、家畜を殺し、井戸には毒を入れましょう。こうして東、西、北へ、南へと駆けめぐり、徹底的に荒らすのです」
「まさしく焦土戦術だな。だが、それが敵の侵攻を誘発することにはならぬか？」
「いいえ。あくまでも盗賊や亜人どもの仕業。我らは知らぬ存ぜぬ、あずかり知らぬ……」
「なるほど。だが、そうなればニホン軍は躍起になって亜人や盗賊を追うであろう。どうする、お前達は戦うのか？」
「勝てもしない相手と戦うなど滅相もないことです。連中に出会ったなら隊商に変装して親しげに手を振ってやりましょう。鎧を脱いで村人の間に隠れましょう。あるいは国境を越えて隣国へと逃れ、それでも見つかったなら人質を取って、この者の命が惜しくば追うなと叫んでやりましょう。彼ら

は、住む家を失い流民となった者を保護しているとのこと。家をなくし、生活の糧を失った者共に、アルヌスに行けば助けてもらえるぞと唆してやります。そしてその難民等の間に隠れて、敵の懐に入り込んでやるのです」

ゾルザルもこれには二の句を継げることが出来なかった。

声を発することも出来ずに二～三回、口を開けたり閉じたりしてしまった程である。彼ですらそのようなことしていいのか？　という思いで、目前の部下を見直したくらいなのだ。それだけに他の者の驚きぶりはさらに強く激しいものとなった。

ヘルムは敵の根拠地を焦土とするような苛烈な戦いぶりで知られた武将である。それでもそれは堂々と戦場で向かい合っての戦いの結果であり、好んで殺戮を求めるような性格とは思われていなかった。それだけに、このような後ろ暗い方法を持ち出して来ること自体が意外なこととして周囲に受け取られたのである。

ピニャは怒りのあまり、柳眉を逆立てて剣を抜こうとしてしまった。

「は、恥を知れヘルム！　それでも貴様、誇りを知る軍人か！」

ヘルム子爵は、ピニャ率いる騎士団の第一期卒業生でもあったから、彼女の怒りもなおさらであった。まさかかつての仲間の口からそんな戦術、いや戦術と呼ぶことすらおぞましい、陋劣極まりない方策が提示されるとは思っても見なかったのだ。

だがヘルムは「正々堂々と戦って負けますか？」と反問する。

「そうは言っておらぬ。妾は、軍人としての誇りの在処を問うておる！　帝国の名誉を問うておる」
「負けるくらいなら名誉や誇りなど犬に食わせればいいんです。軍人精神も高潔さも結構ですが、それで負けては元も子もないんですよ。死して名を残せ？　下らない、下らなすぎる。死ぬぐらいなら私は生きて栄華と快楽を極めたい」
「い、今までのそなたはどこに行ってしまったのか？」
「これまではそうする必要がなかったから、しなかっただけのことです。私とて見栄も張りたいし外聞もあります。ですがまともに戦って勝てない相手なら、こうするしかないのですよ」
　確かにヘルムの言う通りであった。そして、そうであるが故に効果的であるとゾルザルは直感した。民衆の間に隠れてニホン軍を襲えば、ニホン軍は疑心暗鬼に駆られる。反撃しようとして民衆を傷つけ巻き込むに違いない。市街戦の巻き添えとなった者が出れば、これを虐殺と喧伝し非難する。そうすれば、今度は民衆もニホンを恨み、敵視するようになる。敵は、背中に気を配らなければならなくなるはずだ。それは痛快であった。
「ヘルム殿、いっそのこと敵の装いを模した姿に身をやつし、あちこちの集落を襲ってはどうだ？」
　ミュドラの言葉に、ゾルザルは「よしっ！」と膝を打った。
　ミュドラは、大商人の三男に産まれ、軍に籍を置くようになってからも物資の手配や輸送と言った兵站部門で堅実な力量を示してきた男である。
　その出身もあってか、横流しや一部商人と癒着の噂も絶えないが、実際には問題を引き起こした

こともなく、必要な物資が常に必要な場所にあるという仕事ぶりは、それらの悪評をうち消すに充分な実績であった。そのために着実に昇進を重ね、今日では勲爵士の称号が与えられている。

「うむ、それはいい手だ。汚名は敵に着せよ。いっそのこと、都市のひとつも襲って、財貨を奪い婦女子を姦して、住む家を焼き払ってみてはどうか？　そうすれば彼奴らの評判は地に落ち怨嗟の声が響き渡るであろう。敵は民衆と帝国の二つを相手にし、今までのような余裕も持てなくなろう」

「そうですとも。それに物資も経費も現地で調達出来ますから、良いことずくめですよ。ところで、敵はどのような格好をしているのでしょう？　衣服を用意させるために、何か参考になる物はありませんかね？」

「私はギンザの地に出征したので敵の姿を見たことがある。捕虜となったのでな、この目にしっかと焼き付けた」

「僕もです」と名乗り出たのはカラスタである。

先の二人が実務において能力を示して昇進してきた者だとするならば、カラスタ侯爵公子は、門閥によって位階をここまで進めてきた軍人の一人と言えた。

侯爵家という権門の長子に産まれた彼は、手柄というものを必要としなかった。それだけに危険な戦場に勇んで進むこともなければ、他人を蹴落とすようなこともしなかった。一部では、たまたま手中に転がり込んだ功績を、他人に譲ってしまったという噂もある。しかし、全くの無能というわけではない。温厚とも言える人となりをしているせいか、彼がいるだけで過剰すぎる自負心を持

つ同僚や、野心家、性格のきつい連中がまとまっていくのである。
ゾルザルは、喜色の笑みをたたえて腰を上げた。
「ヘルム。早速、卿の作戦を行うがよい」
「かしこまりました。では早速準備に取りかかります」
そんなものは作戦とは言わない。頼むからやめてくれとピニャは叫んだ。だが彼女の声は無視され、押しのけられてしまった。ピニャは、今にも泣きそうな視線をゾルザルに向けた。
「あ、兄様、やめさせてくだされ！」
「なんだピニャ、後にするがよい。俺は今、忙しいのだ。次にルフルス次期法務官、先に指示した件の進行具合はどうか？」
文官の列から白髪の青年が「はい」と進み出た。
痩せぎすで陰気な表情をしていて、若々しさを全く感じさせない男である。
「オプリーチニナ特別法の件でございましたら、草案の用意が終わりました。すでに要員の選抜も終わっておりますので、法案が可決され次第、講和派の一掃をはじめます」
それを聞いたピニャは感情をすっかりと閉ざした表情となって、床に視線を這わせた。
「まただ、まただ、またこれだ……」
うわごとのように呟いて、深紅の髪を掻きむしり自らの頭皮に爪を立てる。
何とか努力を積み重ねて、これでようやく安心できると思うと、必ず積み上げたものが突き崩さ

れて希望が打ち砕かれてしまうのだ。それも一度や二度ならば、気を取り直して再度頑張ることも出来たが、こうして三度四度と続いてしまうと、何かの呪いに絡め取られているように思えてくる。最早、そういう運命なのだと自分自身を諦めてしまいたくなるほどであった。

「何故だ。何故こうなる？」

ピニャの憔悴した姿は、端から見るとゾルザルの恐ろしさを思い知って緊張しているかのように見えた。それが皇太子の嗜虐心に不思議なほどの満足を得させたのである。

皇太子府を後にしたピニャはよろけるような足取りで、西宮にある次兄ディアボの館を訪れていた。

絶望という名の病にとらわれる寸前に、なけなしの勇気を奮い起こしたピニャは、ゾルザルをもう自分だけでは止めることが出来ないことを認め、他者の助力を仰ぐ決断をしたのだ。

「兄様、兄様はどこにおわす？」

だがピニャの呼び声に答える者はいなかった。普段なら次兄付きの侍従かメイド達が出迎えるのに、館内は閑散として住む者など最初から居ないかのようであった。

「これはいったいどうしたというのか？　兄様、ディアボ兄様！」

広い城館内を彷徨うかのようにあちこち歩いていると、旅装を整えた兄と侍従の二人をようやく発見することができた。若い侍従は大きな荷物を背負わされて、額に汗する顔つきからしても大変

そうであった。
「うるさいぞ、ピニャ。いったい何の用だ」
「何の用だもなにも……兄様、これはいったいどういうことですか？　兄様のその姿、どこへ参られようとしているのですか？」
「決まってるだろ、ここから逃げるんだ。側仕えの者らにはすでに暇を取らせた。一緒に連れて行ってはやれんからな。ああ、ここにあった金目の物は、これまでの忠勤の褒美代わりに好きにとらせた。しかし、ものの見事に空っぽになったなあ、ははは」
ディアボは空疎となった館内を見渡すと愉快そうに笑った。
「脱出？　そ、そんな無責任なことなさらず、妾と一緒にゾルザル兄ぃを止めて下され」
「何を馬鹿なことを。何故俺がそんな危ない橋を渡らねばならんのか？」
「兄様も元老院に籍を置く者。さらに言えば皇族の一人として国の行く末を案じる責任があるではありませんか!?」
「俺はなにも責任を放棄して帝都を逃げ出すと言っているんじゃないぞ。逆だ。責任を果たすため、ゾルザルを止めるために外つ国の力を借りようと思っているんだ……」
「外つ国？　そんなことをしたら、国が益々荒れてしまうではありませんか？」
古来から内憂を払うため外国の力を借りたばかりに、国土を削られ、国そのものまで失った例は少なくない。国家に『よき友人』など存在しないことは歴史が証明しているのだ。

「ならば、どうやって彼奴を止める？　ゾルザルは言葉なんかに耳を貸す男ではないだろう？　あの手の奴に言うことを聞かせるにはな、それなりの実力が必要だ」
「確かにそうですが妾達がそろって諫言すればもしかしてあるいは。例え逃げるとしても、それからでも遅くはないではないですか……」
「無理だな。俺の調べたところ、奴は講和派をはじめとして、自分に逆らう人間をことごとく、獄に繋ごうとしている。諫言なんかして見ろ、後でどんな目に遭うか」
「オプリーチニナ特別法ですね。あれは酷すぎる。あれの布告だけは何としても止めさせないと」
ピニャは爪を噛んで唸った。
「だから無理だと言ってるだろう？　元老院に残っているのは、今や主戦論者ばかりになってしまったんだからな」
呆れたように言うディアボにピニャは、いきなり飛びつくと縋った。
「ディアボ兄様！　後生ですから妾を、帝国を助けてくだされっ！」
「ちょっと放せ、放せっ！　メトメス、こいつを何とかしろよ！」
ディアボは、慌てて振りほどこうとした。だが、意外にもピニャの手は力強く絡みついて簡単に引きはがすことは出来なかった。ディアボの侍従である青年も、いくらディアボの命令でも、まさか皇女に手をかけるわけにも行かず、おろおろと「殿下方、ご冷静に、ご冷静に」と繰り返すぐらいのことしか出来ないでいる。

「嫌だ！　妾を独りぼっちにして、行ってしまおうとする兄様の頼みなど聞かぬ。放してたまるものかっ！」
「放せ、ピニャ！　だったらお前も逃げればいいじゃないか！」
「病床の父上を置いていけるわけないじゃありませんか！」
「とにかく放せ！」
「嫌だ。兄様、後生だから助けて！」
渾身の力をこめてピニャを引き剥がそうとするディアボ。決して放すまいと、髪を振り乱してディアボの胴にしがみつくピニャ。二人の争いは単純な力比べだったが、ディアボにはピニャを振り払うことは出来なかった。そこはやはり必死度の違いなのだろう。どうやっても妹を剥がせないと思い知ったディアボは突然力を抜くと舌打ちした。
「……分かった。お前がそこまで言うのであれば、仕方ない」
「分かってくれましたか」
喜色を満面にして微笑むピニャ。見れば二人とも肩で息をして汗びっしょりの姿となっている。
それでもピニャは油断せず、ディアボにしがみついたままであった。
「ただし条件がある」
「それは何であろう？」
「何しろ、お前と違って俺はゾルザルとは皇継を争った仲だ。そんな立場で彼奴に意見するという

ことは命にかかわる。それは分かるな」
　兄弟間で意見するだけなのに命に関わるという事実は、ピニャには受け容れがたいことであった。だがピニャも現実を見つめる目は持っている。権力の中枢に立つ以上、親子兄弟の相克は時として命がけになるのだ。市井の仲良し兄弟のようにはいかない。
「……分かる」
「つまり、死を覚悟しなければならない。お前はそう言うことを俺に望んでいるんだぞ。分かるな」
　ピニャは、再度頷いた。今度はわりと素直だった。
「分かる」
「で、あらばだ……それ相応のものを受け取らねば割に合わぬ」
　ピニャは、不快感を表すかのようにディアボの胴への締め付けを強くした。
「それは、いったい何であろうか？」
「ところでだ、話は変わるがお前の部下が書いた報告書の写しが俺のところにもまわって来た。炎龍退治に行った者たちの話を物語仕立てにしてあった……」
「お恥ずかしいものをお見せした。報告書の書き方については、きちんと指導しておく故、許してたもれ」
「いや、良く書けていたと思うぞ。俺が気に入ってるのは、ダークエルフのなんとかという娘が、自分の部族を救ってくれと頼むのに、我が身を好きにしてくれと差し出すところだった。相手に命

を捨ててくれと頼むのに、差し出せるものは全て差し出すという心意気が素晴らしかった。そうでなくてはいかんと俺は思う」
「はあ……」
「でだ。お前は同じようなことが出来るか？」
「は？」
「だから、お前は我が身を俺に差し出せるかと尋ねている」
「それはいったいどういう……」
「つまりだ、お前、俺の枕頭に侍れと言っているのだ」
この一言を聞いた途端、ピニャはぱっとディアボから離れて距離をとった。
「あ、あ、兄様。い、今、な、何を言われた？」
「だから、俺の言いなりになれと言ってる。それともっと直裁に言わねば分からぬか？」
ピニャは顔を深紅の髪と同じぐらい真っ赤に染めると口答えた。
「あ、兄様……妾達は、一応兄妹なのだぞ？　確かに腹違いではあるが……あの、その、血の繋がった兄妹なのに、なのに……それは良くないことだと思う」
「それがどうした？　別に夫婦になれと言っているわけではないのだから問題はあるまい？」
「も、問題だらけではないか？　わ、妾は、嫌だぞ。兄様の子を孕んだりしたら妾は、妾は……」
「ふん。つまりお前の帝国を想う心など、その程度と言うことだ。自分以外の者に命をかけさせよ

うと言うのに、自分はその程度の禁忌で踏みとどまってしまう。そこがお前の限界だな」

「あっ……」

ディアボは乱れた服装をパンパンと叩きながらこれ見よがしに整えると、ピニャを「ふふん」と見下した。

「政とは端的に言えば、他人に言うことをきかせること、他人を自分に従わせることなのだ。そして人間はそれぞれに身勝手な欲望を抱いて生きている。それを束ねていくためには様々な方法を考えなければならない。利益をもって誘導するも良し、理性に訴えるのも良い。感情を刺激して煽動するのも分かりやすくていいな。ゾルザルは、力と恐怖を柱に据えることで効率的にそれを為そうとしているに過ぎない。その意味では、あの男のしていることはお前よりも正しいんだ。お前は何も為さずに自分の思ったとおりにならないと駄々を捏ねているだけだ。まあいい、気にするな。悪かったな、脅かして。今のはお前を試しただけで別に本意ではなかった。許せよ」

「ま、待って」

「なんだ気が変わったか？」

ディアボは手を差し伸べるピニャの肢体に舐めるような視線を這わせた。その素振りはいかにも大仰で、ピニャに嫌悪感を沸き立たせようという意図と優越感が丸見えであった。

だがピニャは手を震わせながらもディアボの袖を掴んだ。

「ディアボ兄ぃの言うことを聞いてみせれば、……ゾルザル兄ぃを止めるのを手伝ってくれると言

うのだな？」

俯いて垂れた髪に隠されたピニャの表情は見えない。だが、その小さな、そして震える声には、恐怖や様々な葛藤と戦っていることが感じられる響きがあった。

「やめておけ、出来もしないことを言うな」

「……手伝ってくれるのだな？」

「ま……それだけのものを差し出されたら、俺とてこの身を張らないこともないぞ。だがな、ピニャ。俺はねちっこいぞ。ちょっと目をつぶって我慢していれば済むというものではない。一晩中、いや丸一日お前を責め立てる。未通女（おぼこ）のお前にはかなり辛いことになるだろう」

「……かまわない」

「止めておけ、止めておけ。口で言うのと実際の間の隔たりはかなりのものだ」

「我慢できる。いや、我慢などと言っては兄様に失礼だな。妾から進んで願おう。こんな妹で良かったら抱いて欲しい」

その声にはだんだんと張りが戻って、返事も早くなって来ていた。ピニャの中で禁忌を踏み越える覚悟が固まって来ている証拠と言えるだろう。

一方、ディアボの方は額に脂汗を流して、誰が見ても「まずったなぁ」と読みとれる表情をその顔に張り付けていた。こちらはどう見ても後方に向けて全力疾走を始めていた。

「あのな……ピニャ、早まってはいかんよ。もっと自分を大切にしないと」

「よいのだ。兄様、一緒に堕ちていこう」
顔を上げたピニャの表情はどこか常軌を逸した、精神的な平衡を欠いた笑みで満ちていた。
「堕ちなくて良い！」
ディアボは叫んだ。だがすでに、精神的に一線を越えてしまったピニャの耳には入っていない。「うん。ただ、このままではちょっと嫌だ。身を清めてきたい。それに服もちゃんとしたものを……兄様、しばし待ってくれるか？」などと一人でどんどん話を進めていた。
「ピニャ、聞いているか？　お～い」
ひたひたとピニャの頬を軽く叩くディアボ。だがピニャは何かを見ているようで実は見ていない瞳をディアボに向けて「では、行って来る。だから絶対待っていて欲しい」と言って、西館を飛び出していってしまった。
「あの、ディアボさま。どういたします？　寝台を使うのでしたら整えますが」
侍従のメトメスがおそるおそる尋ねる。
「いらんっ！　妹なんかと目合えるか！　俺は行くぞ」
「宜しいので？　ピニャ様は待っていて欲しいとおっしゃってましたが」
「かまわんっ！　放っておけ」
「あの。小生が思いますに、一度ああなったご婦人をすっぽかされますと、後で酷い竹篦返しがあると思うのですが」

「ゾルザルに意見して殺されるよりはよっぽどマシだ。行くぞっ！」
「あっ、はい」
こうしてディアボ主従は、帝都を去って行った。
一方、ピニャは自分の居館に戻ると、メイド達を招集し、香油を溶かした浴槽につかり、髪を丁寧に梳きあげ、薄化粧を施し、さらには勝負下着、そして自分で最高と考える紗を重ねた衣装で身を飾り立てていった。メイド達はピニャの指示を聞いて「姫様がいよいよ」と一斉に色めき立った。もちろん、「どこのどなたがお相手ですか」などと問いかけるような真似はしないが、メイド達のネットワークでは「どこどこの誰々」と憶測まじりの情報があっという間に広がっていったほどである。だが、そのどれも正鵠を射ることはなかった。ピニャがしようとしていることは、それほどに論外なことであったからだ。もし、メイド達が真実を知ったら、今とは反対方向の感情的な反応が引き出されただろう。下手をすると医者を呼ばれ、長年付き従って来た篤実なメイドあたりから、部屋に監禁された可能性もある。だがピニャは相手が誰かを匂わすような事は一切せず、支度を済ませると一人で館を出た。そして、誰も居ない西館で独り佇むこととなった。
ディアボの使っていた部屋に残された寝台に座って膝を抱く。そして、自分が結局見捨てられたということをとことん思い知ったのである。
シャンディーが書いてよこした物語仕立ての報告書には、富と我が身を差し上げると言いながら縋ってくるダークエルフの女を冷たくあしらったくせに、友情のために、何もかも捨てて命がけの

戦いに出立する男の姿が雄々しく描かれていた。
今のピニャは、それが心の底から羨ましかった。妬ましかった。そんな幸せな女が居る一方で、振り返って見れば我が身はこれこの通りの始末なのだから。
「妾には抱く価値もないというのか、兄様」
悔しさと、無力感に歯噛みしながら、帝国皇女ピニャ・コ・ラーダは涙に暮れた。

＊　＊

「皇太子殿下におかれましては、ご機嫌麗しく」
商人風の男は、ゾルザルを前にして膝を着くと額を床にこすりつけるほどに下げた。
日頃から良いものを腹満ちるまで食べているのだろう。顎まわりや胴ははち切んばかりに丸みを帯びている。それでいて手足が細く短いため、後ろから突き飛ばしたらどこまでも転がって行きそうに思える体躯をしていた。
ゾルザルは、その姿を一目見ただけで暑苦しさを覚えたようだった。不快そうな表情をあからさまにすると突き放すように言う。
「別に、麗しくなどない。それではこの俺が皇帝陛下の病臥を喜んでいるみたいではないか？」
「こ、これは失礼申し上げました。このたびのことでは殿下もお心を痛めていらっしゃいますでし

ように気が利かず申し訳ありません。……しかし、皇太子府の開府のお祝いは、それとはまだ別の意味での慶事。折角ですので、お納めいただければ幸いと存じます」

「そうか。ならば、そこに置いて行け」

客人達は汗にまみれた顔を手巾で拭いつつ、あたふたとした所作で、執務室の壁際に積み上げられた贈り物の小山に、小さな、けれど中身のずっしりと詰まっているであろう質感漂う木箱を置き加えた。

「なかなか壮観でございますな。これだけ集まりますと、誰が何を持ってきたのか分からなくなってしまうのではありませんか？」

「折角、見繕った祝いの品物が自分からの物だと分からなくなるのは心配か？　大丈夫だ。俺の秘書はなかなかに優秀だからな。きちんと記録をとっておる。テューレ、挨拶をするがよい」

テューレは定位置となりつつあるゾルザルの執務机の隣に立って小さく頭を下げた。何かあればすぐに書き留めるためだろう、右手には羽ペン、左手には羊皮紙を貼り付けた画板を提げている。

「これはこれはテューレ様でございますか？　噂通りのお美しさですな。お初にお目にかかります、私はマルキと申します」

「それと、こっちは次期侍従長のネイだ」

テューレのさらに隣には、初老の男性が地味ながらも品の良い服装に身を包んで背筋を伸ばしていた。

「ネイ様、よろしくお願いいたします」
次期侍従長は、鷹揚(おうよう)そうに軽く頷いた。
「で、今日は何の用だ？　ただ祝いの進物を持って来ただけではあるまい？」
「はい。我がマルキ商会に、ご贔屓(ひいき)を賜りますようにというお願いでございます。帝室より御用達の指定を受けている商人の入れ替えがあるかと思いまして」
「なんだ。もうそんな噂が流れているのか？　それともお前の耳が格別なのか？」
「それはもう耳敏(みみざと)の方でして。殿下が何もかも新しくなさるおつもりだと伺い、これはと思いました」
「ふん、耳ばかりでなく勘働きも悪くないな。俺があらゆる事柄の刷新をはかっているのは確かだ。だから御用達商人も、どんどん替えていくぞ。何もかも全てを新しくするのだ」
「このマルキも、殿下のお考えには大賛成でございます。もし、ご贔屓いただければ、当商会は全力をもって殿下の政(まつりごと)にご協力させて頂きます」
「分かった分かった。言いたいことは分かったから、今日のところはそのへんにしておくがいい。俺は忙しいのだ……」
「は、はい。気が利かず申し訳ありませんでした。お仕事中の貴重なお時間を頂きありがとうございました」
ゾルザルの合図で、テューレは優美な歩き姿を披露して執務室を横断すると、商人に代わって扉を開いてやった。そしてくるりと振り返って、マルキに微笑む。もちろん「お帰りはこちらから。

どうぞお急ぎを」と言う意思の表明である。
商人は表情を引きつった笑みの形状にすると、ゾルザルの前からあたふたと退出していった。
テューレはその背中を見送りながら唾棄するかのように呟く。
「この男は、駄目ですわね」
羽ペンを持った手で、後ろ髪を掻く仕草は妙に所帯じみていた。
「ああ。これまでああいった者を蔓延らせてきたのは歴代皇帝の罪と言えるだろう。だが、俺の帝国にはあのような者はいらぬ。確かに勘働きは良いが、俺は賄賂など求めておらぬのだ。これからの商人は、常に品物の質と値段とで勝負するような堂々とした者でなければならぬ。あの者については、当然出入り禁止だ。いいな」
「かしこまりました」
テューレはそう言うと画板にペンを立ててかりかりとひっかくように何かを書き加えていった。
そんな二人のやりとりを見た次期侍従長のネイが遠慮がちに告げる。
「殿下。お考えのほどは至極もっともと存じますが、何もかもを一度に刷新しようとなさいますと宮廷の混乱は酷くなるばかりとなりましょう。ここで、いささか間を置かれてはいかがでしょう？物事は緩急をつけることが肝要。『急』を示したらしばし『緩』を入れて、様子を見るのです。さすれば混乱もやがて鎮まることでしょう」
「かまわん。混乱こそが俺の期待しているものなのだからな」

「それはいったい……。宮廷内を混乱させることにどんな益があるとおっしゃるのですか？」
「ネイ、お前は生粋の侍従だから官僚については何も知らぬ。だが俺は馬鹿を演じている間に、連中の観察をしてきた。そして一つの真理に気付いた」
「真理とは何でございますか？」
「帝国ほどに巨大な国家ともなると、官僚どもは下から上まで自分たちの慣習や、面子、手続きといったものに沿う形でしか政策を実行に移さないようになると言うことだ。累代の皇帝の中には、これを改革することを目標に掲げた者もあったと聞く。だが、例え皇帝の命令でも、元老院の定めた法であっても、それを実施するのは奴らだ。そのためにほとんどが、命令が実行へと移される間に、連中の考える『現実』に則すようにと修正が加えられて骨抜きにされてしまうのだ。だがな、それも官僚機構が健全に働いていてのこと。今のように混乱していれば、俺が実施を命じたことに修正を加える暇もなく、そのまま丸飲みするしかなくなるのだ」
「とは申しましても、役人どもがここまで右顧左眄（うこさべん）していては、仕事の成果を期待できませんが」
「それをしっかりと整えるのが大臣らの仕事であろう？」
「左様でございますが、ここまで乱れてしまいますと、整えるのはなかなか容易ではなく」
「気にするな。この混乱の中でも出来ることを簡潔に行えばよいのだ。俺が求めているのは簡潔さと、単純であることに他ならぬのだからな」
執務室の扉が叩かれる音がする。テューレが戸を開いて来客を出迎えた。

次に入って来たのは、ルフルス次期法務官であった。法務官は入って来るなり挨拶も惜しむかのようにいきなり書類を突き出した。

「ご指示のあったオプリーチニナ特別法なのですが、元老院からはこのままでは可決できないと突き返されてしまいました。『帝権干犯』の定義が今ひとつ明確ではないから、このままでは主戦論者までもが有罪にされかねないとの意見が付されています」

「なんだと？　俺としては充分に簡潔に分かりやすくしたつもりだったんだが……」

ゾルザルは羊皮紙を手に取ると巻きを解いて広げた。

「う〜む、どうすれば良いかな。あんまり厳密に定義づけると、反逆罪同様に適用させるのが難しい法律になりかねん」

「元老院のしていることは議論を弄んでいるとしか思えません。この際、令旨として強引に発令してしまってもよろしいのではないでしょうか？」

「だが、それでは元老院議員達の不安を煽ることになるぞ。要は、連中もニホンと私的に交渉を持ち某かの物を受け取っていたということなのだろう？」

「はい、嘆かわしいですがどうもそのようです。ただ、贈り物に左右されず立ち位置を決めたので自分たちの場合は外交権への干渉や収賄に当たらないというのが彼らの主張です」

「どうしたものかな」

ゾルザルの独白にテューレがおずおずと答えた。

「殿下。取り締まりの対象になる帝権干犯（かんぱん）の定義を、単純に『陛下の政策を妨害する行為』としてはいかがでしょうか？」
「政策を妨害する……か？」
「はい。それでしたら元老院におられる方々のほとんどは抵触いたしませんわ。こう言っては失礼ですが、何もしてないんですもの」
「妨害か……だが、それでは反対意見の一つも持てなくなってしまうおそれがあるな」
オプリーチニナ特別法制定は帝国に対する背信行為を取り締まるというのが目的であった。それに照らし合わせたところ、たまたま講和論者のほとんどが該当していただけという形になることを目指しているのだ。問題は背信行為の定義である。「政策を妨害する行為」などと定めたら、議論すら出来なくなってしまう。それならば最初から「お前ら、俺と考え方が違うので気にくわないから有罪。死刑！」と言った方が簡潔で話が早い。
もちろん、それをすれば見栄も外聞もかなぐり捨てることになる。それはゾルザルの美意識に反することであった。彼は、元老院の議員達が皇帝たる自分を補弼（ほひつ）し、国のために良かれと思う議論を戦わせている風景を理想にしているのだ。そこでならば多数派工作も駆け引きも大いにするべきだと思っている。ただし、その議論は、あくまでもゾルザル自身が理想とするものを同じように見ている内容でなければならないのだが。
ルフルス次期法務官が決断を促すように一歩踏み出した。

「法案の草稿はこちらに用意いたしましたが……」
考え込んでいるゾルザルは、まるでテューレと打ち合わせていたかのようなルフルスの用意の良さを疑問と思わずに頷いた。
「そこに置いておけ、しばし考える。それと、元老院には今度こそ可決しろと言っておけ」
そこに、扉の向こうから声をかけて来る者があった。
「お仕事中、失礼いたします」
ゾルザルの「入れ」の声を受けて扉を開けたのは料理人の古田であった。
「昼食をお持ちしましたが……後にしますか？」
「いや、今でよい。実は待っておったんだ。ここに置け」
ゾルザルは、昼食を執務机に置くよう古田に指示した。
古田と入れ替わるようにして執務室から出ていくルフルス。だがテューレは「ちょっとお待ちを」と引き留め、食事に関心を移しているゾルザルに声をかけた。
「殿下。ルフルス法務官がいささか多忙気味で、仕事の進行に差し障りが出ています」
「そう言えばそうだな。これからルフルスにはオプリーチニキの指揮もしてもらわなければならなんのだからな。どうしたらいい？」
「当面の間、私が連絡役をお引き受けいたしますわ。いちいち呼びつけなくても良いように」
「そうか。テューレがそうしてくれるならありがたい」

ゾルザルは頷くと、仕事の進行や報告についてはテューレを介するように指図した。
「そう言うことだ、ルフルス」
次期法務官は、「はい。かしこまりました」と返事をするとあわただしく退室していった。
すると待ち構えていたように、今度はネイが口を開く。
「殿下。昼食でしたらどうぞ食堂にてお召し上がりください。このような場で簡易に済ませようとされるのは、立って食されるのとほとんど同じことで品位に欠けます……」
「ふん。昼飯なんかのために、いちいち場所を移ってられるか。俺は忙しいのだ」
「しかし食事というのはしかるべき場所にて召し上がりますと、より美味しく感じることが出来るものです。それに重厚さや威厳を損ないます。王者たる者やはり威儀を正しませんと」
「そんなものは、改まった時と場で気を配ればよいのだ。日常の些細な事にまで、儀式だの典礼だのうるさくてかなわん。だいたい、フルタの食事はここでも美味く食えるぞ」
「ありがとうございます。殿下」
軽々しい口を利く料理人に、苦虫を噛みつぶしたような表情を向ける次期侍従長。どうして自分に協力しないのかと、古田に詰め寄るように睨みつけた。だがゾルザルは、さあ食うぞとばかりに、執務机の上に置かれた弁当籠をひろげてしまった。
「おうっ!?　今日のこれは何だ？」
「小麦のパンに、焼いた挽肉を挟み込んだものでハンバーガーと名が付いています。殿下好みの味

付けも澄んでおりますし、野菜なども挟み込んでいますので、そのまま手で掴んで、豪快に齧り付いてお召し上がりください。付け合わせの野菜の酢漬けも、お好みに合うかと思います……」

ネイはこれ見よがしに嘆いて見せた。

「仕事場なんぞで午餐を召し上がるとは、なんと野卑なことか。嘆かわしい」

「だが、美味いぞ。これは俺の気性にはあっている。フルタ、こういったお小言のうるさい連中に遠慮することなく、どんどんお前の料理を作れ。いいな」

「はい。了解しました」

傍らではテューレも陪食を仰せつかってハンバーガーに、小さな口を広げてカプリと齧り付いている。はみはみと咀嚼する姿は、木の実をかりかりとかじる小動物っぽい可愛げがあった。

「ところで、どうだフルタ。そろそろ正式に宮廷料理人になろうとは思わぬか？　今、ちょうど料理長の席が空いておるのだ。別にお前のために空けたわけではないが、代わりに据える人材に俺はお前以外を見いだしておらぬ」

「ありがとうございます。ですが自分にも夢があります」

「分かっておる。自分の店を持ちたいと言うのだろう？」

ゾルザルは魂も抜けよとばかりに深々としたため息をついた。

「それを小さい夢だと貶したら、お前には怒鳴られてしまったからな」

「その節はご無礼なことを口にして済みません」

「いや良い。正直、俺には小気味よかった。小身者であろうと、誇りを持つ者があるのだと気付かされた。まあいい、分かった。お前はお前の夢を叶えるがいい。だがそれまでは俺の側にいて、他の料理人にお前の味を仕込んでいくのだ。いいな」
「はい。殿下」
「しかし、フルタ。今日のお前は、珍しく誤りを犯しているぞ」
「な、何かやってしまいましたか？」
「折角のメシだがこれでは足りぬ。俺の腹を満たすにはこの倍は持ってこい」
ゾルザルは、籠を満たす小山のようなハンバーガーを見て言った。これでも足りないと言うのだから、どれほど喰うのかと思うところである。
「かしこまりました。では早速焼き立てを持って参ります。そろそろできあがってる頃です」
「……ちっ。そう言うことか、あらかじめ用意しておいたな」
「はい。いかに殿下が大食漢でらっしゃるとは言え、一度に全部持って来ては最後の数個は冷めてしまいますから。ならば追加して持ってくるようにすれば良いかと思いまして」
「ええいっ！　どこまでも忌々しい奴。分かった、俺が喰っている間に持って来い。そうだ、テューレ。お前も行って、フルタが本当に用意をしていたか確認して来い。こいつのことだ、大慌てで作って辻褄（つじつま）を合わせようとするかも知れぬからな」
「あ、はい」

はみはみとハンバーガーを三日月状態にしていたテューレは、はじかれたように腰を上げた。
「テューレさん、急ぎましょう。殿下が食べきるのが速いか、我々がお代わりを持ってくるのが速いかの勝負を仕掛けられているようです」
「は、はい」
ゾルザルは苦々しげな表情をしつつも豪快に笑った。それを号砲として古田とテューレは執務室を出て小走りで厨房へと向かった。
テューレは、息を弾ませながら尋ねた。
「貴方、殿下が恐ろしくないの？　よく、そこまで自分自身を貫き通すことが出来るわね」
「恐ろしくないかって言われても……」
古田としては、料理に関しては例え何と言われようとも自分を曲げることが出来ないだけである。それを他人から言われた程度でどうにか出来るくらいなら、長年修行した老舗料亭を飛び出すこともなかったし、変な噂を流されて行き場を失い、自衛隊なんかに入るということもなかったのである。
それに、ゾルザルが怒ったら逃げ出せばいいとも思っている。と言うか、さっさと怒らせてこの任務を終わりにしたいと、実のところ思っていた。
この世界の人間にとっては、ゾルザルの手が届かない場所へ逃げるのは大変なことかも知れないが、古田にはそれは最初から準備されているのだ。緊急支援を要請すればいつでもヘリが飛んで来るし、『門』を越えて日本に帰ってしまえばゾルザルの手が届くことはありえない。それ故の大胆

さであって、別にテューレに感心されるようなことではないのである。
「そんな大きな器量の持ち主の見ている夢が、自分のお店を構えることだなんて……ゴメンなさい、こんな言い方しかできなくて」
「この国の皇太子殿下に仕えている貴女から見たら、そう思えるかも知れませんね。でも自分にとっては、店こそが自分の城、自分の国みたいなものなんです」
「あなたはそのちっぽけな国の王様になりたいの？」
「そうです。食べに来てくれる皆が国民ですね」
「あなたの国の民草は幸せね。だっていつもおいしい思いをさせてもらえるもの。でも、民草なんて気まぐれでわがままばかり言う傲慢な存在よ？　きっと振り回されて酷い目に遭うわよ。良かれと思ってしたことが憎まれることに繋がることもあるのよ」
「ですから、皆の舌を満足させるような努力を続ける必要があるんです。そうしないと、あっという間にそっぽを向かれてしまいますからね。そうなれば店なんて潰れてしまいます」
それが三代目には分かってないんだ。古田はそう言って愚痴っていた。
「貴方は、民に背かれるのは王自身にその責任があると思っている？」
テューレは何かに打たれたかのように足を止めた。
古田は、どうしたんです？　とテューレの顔をのぞきこむ。
「少なくともどちらが一方的に悪いということは無いと思いますけど」

「そう、そんな風に考えるのね。……貴方は、民に慕われる良い王になることでしょうね」
「そうなれるといいなぁ」
先へ急ごうと小走りになる古田。少し遅れてテューレもその背中を追った。
テューレは思う。ゾルザルの下にやって来た者の多くは、立派な服を着て、その重さに耐えかねたかのように背筋を丸めていた。だが強者に媚びない独立不羈の精神によって支えられたフルタの背筋は、まっすぐに伸びている。背丈だってそう高い訳じゃない。着ている服だって薄汚れた調理場の作業着だ。なのにどうしたことか、その背中がテューレにはとてもまぶしく見えたのである。

一方、執務室のゾルザルはハンバーガーをかじりながら、次期法務官の持って来た書類に目を通していた。鼻で笑って条項のいくつかに訂正の書き込みを入れた上で承認のサインをする。
「うん？　肝心のオプリーチニナ特別法案の草稿がないぞ。どこにいった？」
机の上を探して、古田の持ってきた弁当籠の下に挟み込まれていないかも見る。そして机の下に落ちていないかを覗き込んだ。
だがどこにも無かった。
そんな挙動を不審に思ったのか次期侍従長のネイは尋ねた。
「どうされましたか？　殿下」
「いや。ルフルスの奴が、大事な書類を置いていくのを忘れたようだ……」

「では、後ほどテューレに届けるように申し伝えましょう」
「ああ、そう言えばテューレに任せたのだったな。よし、次の書類を処理しよう。持ってこい」
こうしてオプリーチニナ特別法の草案は、テューレの手によってゾルザルが目を通すことなく『再動議』の箱へと放り込まれることとなったのである。

05

――学都ロンデル――

夜の帳（とばり）に包まれた書海亭は静まりかえっていた。
外から宿を見上げれば窓の二～三つに薄明かりが点いているのが見える。だがそれは、四階建て全四十室の建物全体で見れば例外のようなものであり、ほとんどの窓がすでに真っ暗となっていた。別に空室というわけではない。実態はその逆で、ほとんどの部屋に泊まり客がいた。ただ、燈火用の油は安くないから、無駄遣いを避けて早く就寝してしまうのである。
みな、不安と恐怖の象徴とも言える夜の闇を照明で切り開いて安心するよりも、快適な睡眠へと逃げ込んでやり過ごすことを選んでいるのだ。

だが、振り返って街並みを見渡すと、多くの建物の窓に燈火が瞬いていた。
そのほとんどが寝る間も惜しんで、学問に研鑽する学徒達のものである。帝都の悪所街を焦がす刹那的な狂楽の炎とは一線を画す、静かで温もりのある輝きであった。
「古都の夜景か。何回見ても良いな」
もう何泊目になるだろうか。ロンデルの街並みを暗い室内から眺めている男が一人。
丘の麓にある書海亭からは、中腹から頂上へと連なっていく街並みを一望することが出来る。
その風景には、古都のような風情があった。事実このロンデルは歴史ある古都であったからこの感覚には誤りがない。だが古い建物が本来の機能を半分以上失って、観光用の抜け殻としてのみ存在している例えば京都、奈良のような観光地と違い、ここでは全ての建物が営みの場として十全にその役割を果たしているのだ。夜景を飾る燈火も、全てが実用を目的としているが故に、虚飾のない美しさが際立つ。
傍らに立つ少女が、男の言葉に応えるように告げた。
「そう。『とうきょう』のようには明るくない燈火。燭台のゆらめく頼りない炎。学徒達はその小さな明かりの下で本を紐解いて、ペンを走らせている。知識の炎で蒙昧の闇を切り開くために、皆小さな努力を積み重ねて目指すところへと手探りで進んでいる」
少女は纏っていたシーツの隙間から、衣擦れの音をさせながら男の袖を掴むために手を伸ばした。純白のシーツの下には何も纏っていないかのようにも見える。

「ちょっとぉ……何を雰囲気つくってるのぉ？」
「父さん。そろそろ来るんでしょ？　支度しなさいよ」
伊丹とレレイの背後には、赤外線暗視鏡を片手に胡乱げな視線を向けてくるTシャツワンピ姿のテュカ、頬をふくらませている下着ワイシャツのロゥリィ、おろおろとした表情でスポーティなブラトップとハーフパンツという格好のヤオ、そして貫頭衣姿の寝ぼけまなこなシャンディーの、四人が並び立っていた。
「あいよ、今行く。尋問したいから極力死なさないようにしてくれよ」
伊丹は、ＯＤ色のTシャツに下半身だけ戦闘服という姿をしている。右肩に吊っていた小銃を手に取ると、鉄の硬質な感触と角の取れた木製握把のなめらかな感触を撫で、レレイは纏っていたシーツを畳むと掛け布の下に押し込んだ。彼女の格好は普段でもあまり目にすることのない、ぶかぶかタンクトップと、脚むき出しのホットパンツという出で立ちである。要するに皆、寝入ったところを叩き起こされた寝間着姿的な装いなのだ。
「わたしが導師号を諦めれば、荒事は避けられる」
その方が良かったのではないのか？
レレイの言葉に伊丹は「その話は、もう済んだろう？」と応じて、二つ束ねにした組み合わせ弾倉を小銃に装着した。小銃の各所には黒ビニルテープを巻いて、金属同士のこすれ合う音すら立てないように施されていた。さらに、切り替え軸を完全に『ア』の位置に合わせず、わずかに『タ』

に近付けた位置で止めた。完全に合わせてしまうとはまりこんで、指先一つで動かすと言うわけにはいかなくなってしまうからだ。安全管理上の必要からそのような作りになっているのだが、素早い操作には支障があるのが六四式小銃の欠点とも言える。

「逃げて刺客連中が諦めてくれるならそれが一番だけど、きっと無理だ。だからやっつけちまおう」

伊丹達はこの二週間余りの間、この書海亭を拠点にして毎日のようにロンデル郊外をうろつき回っていた。近くは車で半日程度のところにある寒村、遠くは車で二日のベルナーゴ神殿まで足を伸ばした。

目的はいろいろあったが、主に伊丹の任務である資源調査であった。一ヶ所に留まっていないことはレレイを刺客から守ることも繋がるので一石二鳥と考えたのである。相手がどれほど凄腕の刺客であっても、高機動車以上の速度で移動できない限りは、決して追いつけないからだ。

だが、結局の所それは一時しのぎにしかならなかった。

どんなに逃げ回っても、必ずロンデルに戻らなくてはならないからである。伊丹達を招聘するためにグレイらがこのロンデルに来たのだって、レレイがここで学会発表をする予定だということを、アルヌスにいるパナシュの報告で知っていたからだ。当然、刺客達もそれを知っているだろう。

レレイが言うように、学会に出ることを諦めてしまう手もあるが例えそうしたとしても、刺客はアルヌスへとやって来る。結局は迎え撃たなければならなくなるのだ。

「でも、次の刺客が送り出されてくれば同じこと」

「それでも、お前さんが学会発表をするくらいの時間は稼げるだろさ？　そう考えるなら今のコンディションは、戦力的にも最良だよ」

この場には、伊丹に始まってロゥリィ、テュカ、ヤオがいる。さらに隣の宿に部屋をとっていたグレイにも駆けつけてもらっていた。刺客を迎え撃つには申し分ない。

「ええっ!?　私って戦力外なんですか？　レレイさんより年上なのに。頼り無いんですか？」

否定して欲しくて皆を見るシャンディーだが、亜麻色の髪の少女に優しくする者はこの場にはいなかった。伊丹はさすがに申し訳なくなって、フォローをしようとした。だが、それも直前に挫かれてしまう。

「しっ！　イタミ殿のおっしゃるとおり、本当に誰か階段を昇って参りましたぞ」

「やっぱりな。俺、昔っからそう言う勘は働くんだ。厭な雰囲気っていうか気配が充ち満ちてた」

「そう言うことはぁ、もっと早く言いなさいよぉ」

「悪い。確信が持てたのはついさっきだったんだ」

ドアに耳を押し付けて外の様子を窺っていたグレイの合図で、伊丹達は部屋の各所へと散らばっていった。それは、まるであらかじめ打ち合わせていたかのような速やかさであった。

皆、闇に潜むと一斉に息を凝らす。

ところが、コロコロコロと音を立てて床を転がっていく物があった。

おそらく誰かのポケットからこぼれ落ちた貨幣か何かだろう。なまじ部屋が広いため、何かにぶ

つかることもなく、いつまでも室内で転がり回っているのが非常に残念であった。
「……」
「……」
ようやく、転げていた『何か』が音を立てるのをやめ、静けさが蘇る。
そのかわり何とも言えない笑いを堪えるような雰囲気が暗く無音の室内に漂ってしまい、「す、すまない。此の身だ」という謝罪の声があるまで、打ち消されることはなかった。
やがて外の様子をうかがっていたグレイが、「来ますぞ。おそらくは、四人と言ったところですな」と告げてドアから離れ暗闇へと溶け込んで行き、今度こそ室内は静まりかえることとなった。
そんな書海亭の階段を、静かに音も立てずに昇る人影がある。
その数はグレイの告げたとおりの四つ。
目を凝らして見ても、人影の黒さが際立つばかりであり、男なのか女なのかという細部の見分けは出来そうもなかった。皆、黒い衣服をまとっているのだ。
木製の階段を昇り終えて、廊下へと進み出る。
わずかに羽目板のこすれる音が響いて影達は足を止めた。
「シッ！」
口元に指を立てて、くぐもった声で互いを非難し合う姿は、目標の宿泊する部屋まで迷うことなく近付くことが出来る周到さに反比する、微妙な素人臭さがあった。

影達はドアを挟み込むように立つと、静かにドアノブへと手をかけ錠をはずす。
手入れの行き届いたドアは、きしみ音すら立てずに開き、影達は、さっと近付いて四つある寝台の傍らへと散って、剣を抜いた。
「……！」
寝台に盛り上がった掛け布の上から、剣を構えると一気に貫きにかかる。渾身の力で振り下ろすと鈍く貫く音が各所で響いた。
「やったか⁉」
「やった！　僕らがやったんだっ！」
歓喜の声があちこちから続いた。だがそれは、金具のような何かが床に転がる音によって破られてしまう。
「残念でした。ご苦労さん」
その声に続いた、百六十デシベルの爆音と六百万カンデラの強烈な閃光は、室内の暗闇を一瞬にして塗りつぶし、人間も家具も、ありとあらゆる物体を青白い闇の中に飲み込んでしまった。
この閃光をまともに直視してしまった人影は、苦痛さえ伴う輝きに目が眩み、耳鳴りの嵐に覆われる。ある者は呆然と立ちつくし、ある者は叫んで、目を覆いながら手探りでこの場から逃れようとした。
だが視力と聴力の双方を失った恐慌状態の渦中にあって冷静な行動など出来るはずもない。皆、

足を寝台にとられて転がったり、互いにぶつかり合って闇雲に喚き合うことになってしまった。
「よいしょ……そこぉ！」
ロウリィの大儀そうな声に続く四つの音。
「ベンッ！」
「バンッ！」
「ドスッ！」
「ペチッ！」
目を閉じて気配だけを頼りに振り回したハルバートは、物の見事に刺客達を叩きのめした。
閃光発音筒の燃え滓から僅かに煙が上がっている。伊丹の関心はもう室内の可燃物に、その火が燃え移っていないかにあった。幸いにして木製の床にうっすらとした焦げ目を残した程度で、火事などは出さずに済みそうである。
レレイとテュカはそれぞれの魔法で燭台を灯して室内を明るくしていった。
「目が、目がぁ～」
前もって、さんざん「耳を塞いで、顔を背け目を閉じていろよ。間違っても直視するなよ」と警告したにもかかわらず閃光を直視してしまった亜麻色の髪の娘が床を転げ回っていた。これはもう、しょうがないので治まるのを待つしかなく放置することにした。
その傍らではヤオが、お尻を突き上げる男心的に微妙な四つん這い姿で、寝台の下を覗き込み「ど

こにいった？」と先ほど床に転がした何かを探している。
「ヤオ、何を落っことしたんだ？」
「聖下から頂いた幸運のお守りだ……あった」
ヤオが寝台の下に肩口までつっこんで、懸命に指を伸ばして拾おうとしているそれは、真鍮色に輝く日本の五円玉硬貨であるらしかった。
「これを持つようになってから、嫌なことが起きにくくなった。怪我をしてもおかしくないのに水に濡れるだけで済んだりとかな……聖下の話では、幸運に『ご縁』があるらしい。あ、と、届いた」
五円玉でねぇ、随分と安あがりなことだ、と伊丹は思った。さりとて『鰯の頭も信心から』とも言う。ゲン担ぎは人それぞれであり、当事者にとっては結構切実なことなのだ。
「だったら、穴に紐を通して首にでも提げておいたらどう？」
「ああ、そうしよう」
そう言って五円硬貨を握りしめるヤオの表情は、心底嬉しそうであった。
「よし、火は燃え移ってないな。後続はないと思うけど、テュカとロゥリィは周囲の警戒をよろしく。グレイさん、そっちはどう？　生きてる？」
「大丈夫ですな。皆、息がありますぞ」
襲撃して来た刺客達は、ロゥリィのハルバートの胴でぶん殴られ、床に転がされていた。グレイが気を失った刺客共を一人ずつ革ひもで後ろ手に縛り上げようとしていた。

その紐の一本をヤオはちょろまかして五円玉の穴に通そうとしている。手伝ってくれるかと思ったらそういうことなのでグレイの表情はちょっと悲しげになっていた。

「テュカ？」

コンパウンドボウ（機械式洋弓）を手にしたテュカが、建物の外に対する警戒を続けている。

「今のところ誰か近付いてくる気配はないわよ、父さん」

「分かった。そのまま警戒を続けてちょうだい……んで、刺客はどんな奴かなって、あれ？　随分とこいつ等若くね？」

ふと見ると、仰向けに転がされている刺客の顔には大きな痣が出来ていた。

ハルバートの横っ腹ではたかれて出来たものだろう。可哀想だが生きていられるだけでも有り難いと思って欲しいところである。しかし、どっかで見たことのある連中だ。

ロゥリィも、伊丹同様の疑問を抱いたようであった。

「あれぇ？　この子ぉ、もしかしてこの宿の従業員じゃないぃ？」

「えっ！」

ロゥリィの指摘に驚く一同。

慌てて燭台をかき集めて、他の三人の顔も確認することとなった。

深夜、気持ちよく眠っているところを叩き起こされた書海亭の主人ハーマルは、「ええいっ、忌々

しい！」と叫び出したくなる不快感を、長年の経験で身につけた接客業者独特の笑顔で覆い隠して戸を開けた。

「お客様。いったいどうしたというのです？　こんな夜更けに」

問いかける声が、詰問調に響いてしまうところに彼の隠しきれない感情が表れていた。だがよくよく見れば、尋ねて来たのは成熟した女の色香が漂う、ダークエルフである。今は深夜。そして女が一人で男の部屋へ。

も、もしかして、夜這いか？

妻を亡くして以来、独り寝が当たり前となったハーマルは、艶めくような事態を思い浮かべた。だが、女のその薄紅色の唇から紡ぎ出された事情説明は、淡いときめきなんぞ瞬く間に吹き飛ばし、ハーマルの赤ら顔を蒼白にさせた。

「えっ！」

それはそうだろう。自分のところの従業員が剣を持って宿泊客に襲いかかったと言うのだから。

「ま、まさかウチの従業員に限って、そんな……」

それは従業員への信頼と言うよりは、現実を否定したい心情から返した言葉であった。だから「では実際に見てみるが良い」と言われて客室を訪ねてみれば、この宿の従業員達が、後ろ手に縛られた姿で床に座らせられていたから、思わず膝をついて崩れるように座り込んでしまう。

「お、お、お、お前ら。何をやっているんだ？」

怒鳴る声にすら、力がない。

「お前達、なんてことをしてくれたんだ……おしまいだ。もう、この宿もおしまいだ！」

周りを見れば、目を覚ました宿泊客達が何の騒ぎかと廊下に出て来てこちらの様子を窺っている。もう今夜の出来事を隠すことなど不可能であった。噂は瞬く間に街中に広がってしまう。そればかりか宿泊客から宿泊客へと話は伝わり、街の外にも広がってしまうだろう。そうなればもう客足は途絶えてしまう。従業員が客の寝首を掻こうとする宿に、泊まろうなどと考える者など居やしないからだ。これは宿の信用を地に落とし、存続すらも危うくさせる致命的な大事件だったのである。

見れば、従業員の小僧（ボーイ）達が恐縮顔でハーマルを見上げていた。

言い訳として何を言い出すかと思って見ていれば、その第一声は「僕たち、騙されたんです」というものであった。

「話して見ろ」

ハーマルは、もう諦めに近い心境になっていた。

「怒る」という感情は相手に期待を裏切られた場合に起こることが多い。もうすっかり諦めてしまい、相手に何一つ期待しないとなれば、腹も立たなくなってしまうのだ。

小僧（ボーイ）達は答えた。

「僕たち聞いたんです」

「聖下様達が偽物だって」

「この宿に泊まっている商人を狙った極悪非道の人殺しだって言われて」
「賞金のかかったお尋ね者だって聞きました」
口々に並べた言葉がこれである。呆れて物も言えなかった。
四人の話を総合して解釈すると、ロゥリィは偽物で、この宿の宿泊客を狙う詐欺師であり、さらに賞金のかかったお尋ね者であると、何者かから言い聞かされたことになる。
「それを信じたのか、お前らは？」
「実際、手配書も見せて貰ったし、分け前の前渡しだって言って、金貨だって貰ったし。だからお客様達を守らないとって思ってやったんです」
「お前ら、ちょっとは疑ってみなかったのか？」
手配書なんかに偽物も本物もない。羊皮紙にそれっぽい絵を描いて、でっち上げることなんか非常に簡単なのだ。それに何の成果もあげてない段階で、金貨をくれるというのも気前が良過ぎて怪しい。はっきり言って突っ込みどころが多すぎるのだ。
「あの人から、聖下達から頂いた心付けが多過ぎるって言われました。あんまりたくさんくれるのは他人を信用させようとしたり、疚しさを隠すためだって言われて、そうかもって思って……」
「銅貨を貰ったことは疑って、金貨を疑わないお前らって、もしかして馬鹿？」
返す言葉もないとばかりに消沈する小僧達。ハーマルは嘆息して天井を仰ぎ見た。
「それで、お客様のお部屋に忍び込んだのかお前ら」

「まだ、何もしてません」
「そうです。何もしない内に捕まってしまって……」
とは言いつつも、ちょっと視線を寝台へと向けると、枕のあたりには剣が突き刺さっている。お世辞にも何もしてないとは言えない状態であった。これは途中で気が変わったとか、手を下すのを躊躇(ためら)ったという意味での未遂ではなく、ただの失敗なのである。
伊丹をはじめとする周囲のお客達から浴びせられる視線の色合いも、その言い訳に対しては厳しくなって来ていた。もとより悪くなっていた顔色をハーマルはますます悪い、土気色へと変えた。
「何も出来なかったのと、何もしなかったとの間には、天と地ほどの開きがあるのよ」
テュカに窘(たしな)めるように言われて「ご、ごめんなさい」と素直に謝る小僧(ボーイ)達。
その素直な様を見ると、普段はきっとよい子達なのだろうと思えた。
それまで、黙って小僧(ボーイ)達の言い訳に耳を傾けていたグレイは「そうだ、そうだ、きっとそうに違いない」と頷きながら言った。
「この手口は、笛吹男(パイパー)ですな」
「笛吹男(パイパー)？　それってぇ誰ぇ？」
「ある時はヒト種の男、またある時はエルフ女、時には妖婆(ハッグ)と正体は一切が不明です。こいつのやっかいなところは、人間の心の綾を熟知していて、虫も殺さないような少女を刺客に仕立て食事に毒を入れさせたり、階段を降りていく目標の背中に足腰の不自由そうな老人を飛びつかせることを

可能とすることなのです。おそらく大本の笛吹男（パイパー）を倒さない限り、次から次へと刺客が湧いて出てきます」

「始末に負えないわねぇ」

ハーマルは、身を乗り出すとグレイに迫った。

「し、しかし普通に生活している者に殺人をさせるなんて、どうしてそんなことが出来るのですか？よっぽどおかしな人間でなければ、人殺しなんかしようと思うはずがありません」

「確かにその通りですな。ですが、殺人を禁忌と思う心は『錠』に似ておりましてな。当てはまる鍵さえあれば容易にはずれるのです。例えば、我ら騎士や兵士等は、戦争という状況となれば、上官の命令を受けますと実に簡単に人を殺（あや）めます」

これを聞いた途端、ハーマルは血相を変えた。おかしな人間でなければ人殺しをしないと言い放ったということは、騎士や兵士、警吏と言った存在をおかしな人間と中傷したも同然となるからだ。

「あ、あ、これは失礼いたしました。ご容赦下さい。言い過ぎでした」

「いやいや。市井の民ならば、そう考えて良いのです。お気になされないように」

だがグレイは気にした様子もなく言葉を続けていた。

「ご主人。実は、人を殺めてはならないとは、どのような法典にも書いてない事をご存じですかな？」

「そ、そうなのですか？」

「法典には『人間を殺めたら罰する』とあるだけです。しかも、相応の理由があれば罰しないとす

ら書かれています。一番分かりやすいのは、殺人鬼などから身を守るためなどの状況ですな。いかなる理由があろうと人間を殺めてはならぬと放言する者は、そんな状況下でも自らや家族を守らない卑怯者か、嘘つきだけでありましょう。常識人ならば、人間が人間を殺めることをやむを得ないと考える状況はいくらでも思いつきます。笛吹男（バイパー）という刺客は、目の前にいる人間がどのような信条や正義心を抱いているかを見抜いて、殺人へと駆り立てる名人なのです。夢見がちな少女には、それが恋人の為なのだと囁き、年寄りには孫が騙されて酷い目に遭わされようとしていると告げる。そう聞かされれば死にかけの老婆とて、いや老婆なればこそ残った命を燃やしきって、階段の上から孫の敵に飛びつくのです。小官が推察するに、この小僧（ボーイ）らは宿の従業員として、客を守ろうとする心につけ込まれたのですな……おおかた我らが人殺しも平気な犯罪者か何かだと言われ、この宿に泊まっている客を守るためとでも唆（そそのか）されたのでしょう。それで若い正義感と、職業意識を刺激された彼らは、止むにやまれず剣をとった……というところでしょう」

小僧（ボーイ）達は、どうしてそこまで分かるのかとばかりに「うんうん」と一斉に首肯していた。

「で、そこもとらに、そんな与太話を持ちかけたのはどんな奴であったかな？」

グレイの問いに小僧（ボーイ）達は一斉に答えた。

「それは、愛想の良い感じの」

「恰幅がよくて長身で、気前が良くて」

「年の頃は初老で、落ち着いていて」

「ヒト種の男性でした」

四人の話を総合するとこういう経緯らしい。

およそ十日ほど前のこと、仕事を終えた彼らはいつものように酒場へと繰り出していた。流れの占い師に運勢をみてもらい、酒と食事を大いに楽しんでいた。

ところが、「君たち、書海亭の従業員だね」と、初老の男性に声をかけられた。

その男性は、人当たりがよく笑顔も穏やかで話しやすそうな人物であった。

たいそう気前がよく、「若いうちは、あまり飲み過ぎてはいけないよ」などと言いつつも、酒をごちそうしてくれ、さらには日常の仕事や、女性の好みに至るまで彼らの話に大いに関心を示し、耳を傾けてくれたのである。

やがて小僧達の話も尽きて、今度は男性の番となった。

男性は「ボクの仕事はね、君たちのように誇りを持てるような仕事じゃないんだ。街の芥溜めを掃除するような汚れた仕事さ……」と、犯罪者を捕らえ、時にはこれを倒して賞金を稼ぐ仕事に就いていることを明かしたのである。

男性は小僧達にせがまれるままに、彼が経験した様々な事件について語った。

小僧達は被害者の惨い境遇や、犯罪者のあくどい手口などを聞いてはこれに憤り、犯罪者をやっつけた話には喝采をあげ、被害者からの感謝の言葉をもらったエピソードにはホロリと涙をこぼした。

小僧達（ボーイ）は、酒場に行くたびにその賞金稼ぎの体験談を聞いて、一緒に酒を飲むようになったのである。そして何度目かの夜、賞金稼ぎは彼が今、追跡している詐欺師集団の話を始めた。

その詐欺師集団は、多くの商人を騙し、財産の全てを巻き上げて破滅にまで追い込むような事をしてきたと言う。そして、被害者とその家族が、どれほど悲惨な状況に置かれているかを説明した。

「そ、その詐欺ってどんな手口なんですか？」

「それは言えないんだ。ただ、これによって何人もの商人が破滅して自殺に追い込まれ、借金を背負った家族は奴隷に売り払われたりしてるんだ。ボクはこいつらを絶対に許しておけない」

「どうして、その手口を公表しないんです？　前もって、そういう奴らがいるって噂にして流せば、多くの人が助かるのに」

「それは危険なことだからなんだ。この詐欺師連中は傲慢（ごうまん）な奴らでね。失敗を人のせいにするんだ。例えば何かの都合で商談を中途でうち切ったり、詐欺であることを悟って逃げたりすると、怒ってその相手をどこまでも追いかけて殺してしまうんだ。だから、言うことが出来ないんだ。今、詐欺に引っかかりつつある人が危ないからね。言えるとすれば、連中が得意にしているのが鉱山にかかわる儲け話ってことだけさ」

そして男は言った。

「今、詐欺に引っかかろうとしている被害者を救うには、この五人をやっつけてしまうより他はないとボクは思う。非情なことだとは思うよ。できれば無傷で捕らえた方がいいのは分かってるんだ。

だけど、それをしている余裕はボクにはない。大丈夫、生死は問わないという賞金首だから、人殺しにはならないよ」

その詐欺師グループは女四人、男一人で構成されている。

その内の一人は、恐れ多くも亜神ロウリィの名を騙ることが多い。一人はルルドの娘。さらに二人はダークエルフか、エルフのどちらかであることまで分かっていると言う。

「君たち、もしそんな連中が書海亭に泊まることがあったら、ぜひ教えておくれよ。ボク一人ではかなわないかも知れないけれど、大丈夫。必ずなんとかしてみせるからね……」

男性は、固い決心を告げるように小僧達（ボーイ）の顔を見た。

「最近、うちに泊まって鉱山の調査とか言って出歩いている人達が居るんです」と小僧達（ボーイ）が言い出したのは、その直後であった。

ハーマルは小僧達（ボーイ）の顔を見ると「そうか、お前達。そうだったのか」と頷いた。

彼らがしたことは確かに許されない行為である。だが、その発端となった心根だけは非難したくなかった。それは、ハーマルが常日頃から小僧達（ボーイ）に言い聞かせて来たこと、そのものだったからである。

彼らは、お客をもてなしお客を守るという精神を、若いなりに実践しようとしたに違いない。ただその手段を間違ってしまっただけなのだ。間違えるよう、言葉巧みに唆されてしまったのである。

ハーマルはがばっと頭を床にこすりつけると言った。
「聖下、そしてみなさま。私はこの連中を庇ってやりたいと思います。それによってみなさまのご不興を買うとしても、雇用主としてそうしなければならないと私は確信しました。この書海亭はもうおしまいですが、前途あるこいつらまでおしまいにしたくはありません。どうぞ、こいつらを許してやって下さいっ！」
「ハーマルさん！」
小僧(ボーイ)達は「待ってください」「自分たちなんかのために」などと言って、庇うのをやめてくれと叫んだ。そして自分たちを罰して欲しい、宿の主人には何の罪もないと言って伝統ある書海亭を守ろうとしはじめたのである。
「どうする？」
と、互いに顔を見交わす伊丹達。するとロゥリィが口元に微苦笑をたたえながら一歩踏み出して神託を告げた。
「許すわぁ。ただし何を間違ったのかぁ、宿の主人としてしっかり教育なさぁい」
ロゥリィがそう言う以上、他の者には言うべき事はなかった。
野次馬として室内を覗き込んでいる他の宿泊客達も、ロゥリィの裁きを納得したように頷いていた。皆、小僧(ボーイ)達の行動を浅薄ながらもどこかやむを得ないことと思ったようなのだ。その分、「それにしても、笛吹男(バイパー)って奴は悪辣(あくらつ)な奴だ」という悪評と、その手口に対する悪感情が高まっている。

伊丹としてはこの土地の司法制度がどうなっているのか、これで許されてしまうのかと気になるところであった。だが、許して片が付くと言うのならそれで良いのではないかとも思った。要するに、面倒くさいのだ。

「ありがとうございます」

ハーマルをはじめ、小僧達も平身低頭して喜ぶ。

「とは申しましても、皆様をこのままこちらにお泊めするというのも失礼な話です。すぐに知り合いの宿に話をつけますので、聖下様方にはそちらにお移りいただきたいと思います。大丈夫です、ここよりも良い、一番の部屋を用意させますから」

するとロウリィと、なにやら目配せしあったレレイが前に出てきて言った。

「その必要はない。それに一度騙された人間は警戒心の高い人材へと成長していることが期待できるから、ここは安全になった」

小僧達も、レレイの視線を受けてもう騙されることはないと胸を張った。

「このままここに泊まらせて欲しい」

「か、かしこまりました。皆様がこの宿を出立されるまで、誠心誠意お仕えさせていただきます」

何度も頭を下げながら部屋を出ていくハーマル。

縄目を解かれた小僧達もその後に続いて部屋から出ていった。どんな言葉を口にしたのか、ハーマルから頭を小突かれている小僧もいた。

やがて閉じられた扉の向こうから、他の宿泊客達に事の次第を説明する声が聞こえ始めた。どうやらハーマルは、一切を隠すことなく、宿泊客達に起きたことを伝えるつもりのようであった。

「でもさ……あの従業員の小僧（ボーイ）さんたち、ホントに大丈夫なのかね？」

伊丹は首を傾げながら後ろ頭を掻いた。するとロゥリィが大丈夫なはずがないと嗤（わら）い、レレイが説明を付け加えた。

「グレイはああいったけれど、殺人を禁忌とする心の錠は簡単にははずれない。戦う者は皆、相応の訓練の果てにその禁忌を外すことが出来るようになる」

レレイのこの意見には、ロゥリィをはじめテュカやヤオも頷いている。伊丹も同意であった。

伊丹もまた、厳しい訓練を経て、命令下における殺人という禁忌をなんとか越えられるようになった一人だからだ。きっかけは無我夢中とも言える銀座事件での二重橋攻防だったが、その後もそれなりの葛藤を味わっている。それだけに他人からの言葉一つで、誰もがそうなれるとは思えなかった。と言うより思いたくない。

「おそらく、笛吹男（バイパー）は、その禁忌がはずれやすい者を見つけだすことに長けている」

伊丹は思わず手を打った。

「なるほど。中二病患者を見つけるのが巧いってことか」

「ちゅうに病とは？」

「なんて言えばいいのかな……錠のはずれやすい思考形態や価値観を持っている連中のこと」

「そのような単語は辞書になかった。便利なので記憶して語彙に加えておく」
レレイはいい加減な解説を真に受けて伊丹を慌てさせた後に言葉を続けた。
「他人に騙される人間は、何度でも騙される。だったらこの宿に泊まっていた方が、笛吹男（バイパー）が目を付ける人間を絞り込める。彼らは数少ない『ちゅうに病』患者。笛吹男（バイパー）はおそらく、もう一度彼らに接触する」
伊丹は「もしかして、それで許したとか？」と、ロゥリィの表情を覗き込んだ。
するとロゥリィは「くすくすくすくす」と実に人の悪そうな笑みを浮かべていた。
ヤオなどは可哀想にと呟いている。彼女も罪に手を染めたことがあるだけに、その償いをどうするかと日々悩んでいるのだ。それだけに、彼らに対する同情の念もひとしおなのかも知れない。
「あの小僧（ボーイ）さん達を泳がせて、もう一度騙そうと笛吹男（バイパー）が出て来るのを待ち伏せるってことか。その発想はなかったな。だけどどうやって小僧（ボーイ）さん達の監視をする？　みんな、顔バレしてるだろ？」
「幸いにして、顔を押さえて床を転げ回っていたおかげで、誰にも素顔を見られていない人材がこちらにはいる」
レレイの指摘を受けて、伊丹は振り返った。
すると顔を押さえて、床と壁が作る隅っこに張り付くようにして横たわるシャンディーの姿を発見したのだった。

翌朝、伊丹は自分にあてがわれた部屋……元、物置き部屋で目を覚ました。

物置といっても、部屋が汚いとか調度品が壊れているとか、粗末ということもなく、あらかじめそう言われていなければ、ビジネスホテルの一番安い部屋くらいに感じる場所であった。設備は寝台と床頭台と椅子。最低限必要なものがどうにかそろえられているだけである。だがその程度にこぢんまりとしている方が、伊丹としては居心地が良いのだ。広すぎたり、高級な調度品や、天蓋付きの寝台なんぞがあった日にはまともには眠れなかったはずだ。

天井には何本かの梁（はり）が渡されていて、採光のための小さな天窓がある。その向こうを蝶に似た妖精が飛び交っていた。

天井板は張られておらず、屋根の斜面がそのままの天井となっていた。そのため結構広い空間が頭上にひらかれている。お陰で狭くても閉塞感がない。さらに目を覚まして最初に目に入った光景がそれであったため、まだ頭がすっきりとしない半覚醒状態でも、ここは自衛隊の隊舎ではないという認識だけはしっかり保つことが出来た。

朦朧とした意識で体を起こした伊丹は、服装を整えると半長靴につま先を突っ込んだ。

床頭台に置かれた洗面器に、ポットから水をどぼどぼと移してこれで顔を洗い、枕の下に隠してあった拳銃をズボンのベルトに挟み込み、ドアを開けて廊下へと出る。

一応お向かいの女部屋のドアをノックしてみる。だが返事はなかった。

もうみんな起き出して食事に行っているのだろう。日の出直後と言えば日本人的にはまだ惰眠を

貪りたい頃合いであるが、特地の人々の朝は総じて早い。太陽が出ている明るい間だけが、労働したり移動したりするのに適した時間帯なので、日が昇ったらすぐさま活動を始めるのだ。

実際、四階分の長い階段を下って一階へとたどり着いてみると、すでに食堂のまわりでは朝食をとろうという宿泊客達が集まってごった返していた。

宿の受付カウンター周りでは、これから出発しようという宿泊客が支払いをしていたり、荷馬車が引き出されて来るのを待っていたり、小僧（ボーイ）達は荷物を運んだりと忙しく立ち働いていて、陽性の活気で満ちていた。どこを見ても、昨晩のハーマルが恐れていたような、悪評によって宿泊客が逃げてしまい、もう誰からも見向きもされなくなってしまうという、「もうこの宿もおしまいだ」的な雰囲気は見られなかった。

「あ、おはようございます。イタミ卿（きょう）！」

左目の周囲に大きな痣を作った小僧（ボーイ）が、伊丹の姿を見つけて元気よく挨拶してくる。

これを合図にして、あちこちから一斉に挨拶が、伊丹に向かって投げかけられた。

小僧（ボーイ）達や主のハーマルだけでなく、他の宿泊客達までもが伊丹に対して丁寧な挨拶をして来る。見れば、蝶みたいな手乗り妖精までもが伊丹の前にホバリングして慇懃に頭を下げていた。

「あ、は、はい。……おはようございます」

思わず足を止めた伊丹は、戸惑いながらもどうにか挨拶を返すことが出来た。

いったい何があったのだろう。

しかも、付けられた敬称が「卿（きょう）」である。
周囲から浴びせられる好意的視線の集中砲火に戸惑った伊丹は、逃げるようにして食堂前の人混みへと紛れ込んだ。そして席が空くのを待っているらしい行列の最後尾を見つけて列んだ。
だが、食堂の料理人達から「ほら、あんた！　そんなとこ、立ってちゃ駄目だよ！」と怒鳴られ非難するような視線を向けられてしまう。
どうやら列ぶべき場所を間違ったようであった。
「あ、はい。ごめんなさい。でも、どこに並んだらいいのかな？『ここが最後尾です』の看板なんてないしなぁ……」
「そうじゃなくて、あんた……違った、貴方様（あなたさま）はこっちだ」
料理人は伊丹を「ほらっ、こっちに来い」とばかりに食堂中央に置かれたテーブルのところまで連行していき、問答無用で座らせたのである。
見ればロゥリィやレレイが、手乗り妖精の給仕で朝食を摂っていた。
「あ、おはよ」
「おはようぅ」
気怠そうなロゥリィの返事。レレイは抑揚に欠けたいつもと同じの淡々とした挨拶。テュカは引きつった笑顔。ヤオなんかは何故かテーブルに突っ伏して「恥だ、一生の恥だ」と呟いていた。
「どうした？　何があった？」

「ヨージはぁ何もなかったのぉ？」
「すっごく慇懃な挨拶をされた」
「お父さんは、いいわねえ」
「おいおい、大丈夫かテュカ？」
「朝から妖精達に揉みくちゃにされちゃったわ」
みんな、取り囲まれて挨拶攻めに遭ったらしい。さすがに食事をしている最中まで声をかけて来る無礼者は居ないが、その代わりに挨拶の順番を待つための行列が出来ていると言う。伊丹が列んだのが、どうもそれだったらしい。だからこそ、「お前あっち行け」的な扱いを受けたのだ。
あのまんま列んでいたら面白いことになったかも知れないなと伊丹は思った。声優か漫画家のサイン会のノリで、ロウリィ達に握手なんかしてもらったら、嬉しいかも知れない。
「面白くなどない。あの列でもらえるのは、整理券だけ」
レレイは普段以上に抑揚の欠けた口調で語った。ほとんど平坦と言ってもよいほどであった。だがそれだけに、彼女の胸中で渦巻いているであろう感情の激しさが感じられた。
「この宿の主人が列を仕切っていた。かなりの数の整理券が配布されていた」
「しかし、なんでまたそんなことに？」
すると突っ伏していたヤオが真っ赤になった顔を持ち上げた。
「橋の崩落で足止めを受けていた馬飛脚が昨晩到着したとかで、帝都で炎龍の首が掲げられたこと

や、御身らが炎龍を討ち果したという話をあちこちで吹聴してまわっているそうだ。しかも、アルヌスで此の身がしでかした一切合切までもが、相当な脚色をされて伝わってる。嗚呼、穴があったら入りたい……」

そう言って赤くなった顔を、再びテーブルに押しつけて隠すヤオ。

「あたしだって恥ずいわよ、正気を失ってた時の話だなんて。しかも何故かあたしは男の子ってことになってるのよ」

テュカも両手を組み握って「家名を汚してごめんなさい、父さん」と祈り、そのまま耳の先っぽを薄紅に染めてテーブルに突っ伏した。もちろんこの場合の父さんとは実父ホドリュー氏のことのはずだ。

「実際には参加してない炎龍戦でぇ活躍したことになってるのが気に入らないわぁ」

ロゥリィは、他人の手柄を盗んだみたいで不愉快だと唇を尖らせていた。

実際には赤・黒二頭の新生龍と、ジゼルとかいう亜神が戦闘に乱入して来ることを防いでいたのだから、その功績は風聞として伝わっているものよりもっと大きいのである。だが、その事実はどうやら伝わっていないようであった。

「でも、なんだってそんな風に知れ渡ったんだ？　俺なんか、さっき『卿』の称号付きで呼ばれたぜ。俺だってそんな称号もらったの、今の今まで忘れてたのに」

噂の内容を確かめると、どうやら事実に忠実に伝わっていることと、デマが混在していて、その

落差が異様に激しいようだ。デマの部分は想像で補われたこととして理解できるが、問題は事実に相当することがどうやって流出したかである。少なくとも、帝国側でそれを知り得る者はそう多くはないはずだ。

「情報の発信源はピニャとその周辺らしいわよぉ。それがここまで伝わって来たみたい」

「そのピニャというお方には面識はないが、出来ることなら此の身のしたことについては伏せて置いてほしかった」

「悪質な歪曲もなされている」とレレイが愚痴る。

「どんな？」

「炎龍にとどめを刺したのがレレイになっているのよぉ」

ロウリィの説明を聞いて、「へぇ」と感心の声を上げる伊丹。

グレイから帝国人がレレイを重視する理由は聞かされていたから、驚きや不快感より、そこまでやるかという感銘の方を強く感じた。とはいえ、熱狂のし過ぎという感もなきにしもあらずだ。何が人々をそこまで駆り立てるのか、伊丹としては疑問に思うばかりであった。

そんな疑問に対する答えは、お行儀悪く匙を口で舐っているロウリィからもたらされた。

「この国のヒト種は、行き詰まりを感じているのよぉ」

「行き詰まってる？」

「そう、この世界はとっくの昔に行き詰まってるのぉ。帝国を頂点とする国々の秩序。皇帝を頂点

とする人間達の序列。ヒト種と様々な種族との関係。それが固まってからもう随分と長くなっているわぁ。人間は誰だって今よりはぁ良い生活が出来る明日を夢見るものよぉ。夢を見れるから今の不足を我慢できるのぉ。でも、それが出来なくなってる。上も下もがちがちと固まって動かないし動けない。みんな努力なんて無駄だって思うようになって、自信を失っているわぁ」

「う〜む」

「歴代の皇帝は戦争でそれを打ち破ろうとしてきたわぁ。四方の国に攻め込んでぇ、様々な種族を力ずくで従えてぇ、領土を広げてぇ、力量を示した者には爵位を与えて栄達への道を指し示したわぁ。でも、それももう限界ぃ。……だからこそ『門』が開いた時、皇帝はそれを越えて攻め込むことを考えたのかも知れないわねぇ。でも、それは失敗したわぁ。しかもどっちかというと負けそうになっている。それをみんな不安に感じているのよぉ」

「だから英雄に熱狂すると」

「そう。息苦しくなってきているこの状態を誰かにぃ吹き飛ばして貰いたいのよぉ。そしてその英雄には自分達の側に居て欲しいぃ。それが自信を取り戻すことに繋がるからよぉ。だから帝国のヒト種達はレレイ万歳って熱狂するの」

レレイは、自分は帝国人ではなくルルドであると淡々と語った。だがその言葉は彼女とその周囲に居る者にしか届かない。食堂の外にいて、お目見えの挨拶を待っている者たちの耳には全く届いていなかった。

おそらくここでレレイが立ち上がって声を張り上げたとしても、誰も耳を貸さないだろう。人間は自分が見たいようにしか、現実を見ないからだ。見たくないことはやんわりと無視されていくのである。

「レレイを持ち上げる連中がいる一方で、レレイを狙っている奴も居る……そろそろ誰がやっていることか憶測でもいいから聞かせてもらいたいな。……で、グレイさんは？」

「シャンディーに朝食を届けに行ったわぁ」

彼女は笛吹男（パイパー）に対する隠し球なので、この宿の小僧達（ボーイ）には見られないようにしなければならなかった。そのため暗い内からここを離れて外で張り込みしているのだ。そう、外でつくねんと独りぼっちでいるはずなのである。

それは、ちょっと可哀想かも知れないと伊丹は思った。

ところが実際には、シャンディーは終夜営業のタヴェルナ（居酒屋）に入って時間をつぶし、たまたま居合わせた馬飛脚の男と意気投合して、伊丹達が炎龍退治に出発するまでの詳細な経緯（いきさつ）を一緒になって吹聴して回っているので同情には値しないのだが、そこは知らぬが仏である。

「おはようございます皆様方。お揃いになられましたな」

やって来たのは、宿の主人ハーマルであった。

「元凶がやってきたわ」とテュカ。

「おかげで、朝っぱらからこの始末だ」とヤオ。

「元凶とは人聞きが悪いですな。確かに噂を広めさせていただきましたが、これも皆様の身を守るためでございますよ」
「なんで、噂を広めることが俺たちの身を守ることになるんだ？」
どう考えたらそう言うことになるのか、参考のために伊丹は尋ねた。
「笛吹男（バイパー）とやらの手口が、虚言（きょげん）を弄（ろう）して他人を殺人へと嗾（けしか）けるのだとすれば、皆様のことが正しく知れ渡ることは、その手口を使いにくくなることを意味するからです。少なくとも炎龍退治の英雄だと知られた皆様を、襲うような理由というのはそうそう無いのでありませんか？」
「そう上手くいくかしらぁ」
「聖下の御懸念はごもっとも。ですが笛吹男（バイパー）とやらが暗躍している噂も付け加えて広めましたので、やりにくくはなるはずです。誰かを言葉巧みに唆そうとしても、『さては、お前が噂の……』と指差されてしまうことでしょう」
「それって大丈夫なの？　小僧（ボーイ）さん達がしでかしたことも広まっちゃわない？」
テュカが心配そうな声を上げた。
「ありがたいことに、皆様よりご同情のお言葉をいただいたほどです。やはり真実とは最高の武器ですな」
「諸刃だけどねぇ」とロゥリィが嘯く。
「なあに、一度は宿を閉めることも覚悟いたしましたので、捨て身の策でございますよ」

視線を食堂の外へと向けてみると、顔に痣を拵えた小僧達が宿泊客からからかわれていた。「もう、騙されたりするなよ」という言葉付きだから、かなり好意的に見てもらえているのだろう。
「おかげさまで、宿を閉じずに済むかも知れません」
「不幸中の幸いねぇ」
「はい。これも聖下方の寛大なお心のたまものです」
「しかし、これならレレイの学会発表までは平穏無事に過ごせるかな？」
だが、そんな伊丹の楽観的観測は否定されてしまう。人垣からグレイが抜け出してきて言った。
「いいや。かえって始末に負えなくなりましたぞ。馬飛脚が来たということは笛吹男とは別の刺客も来られるようになったということ。こうして、お目見えを求めて列を作っている者の中に、紛れ込まれたら目も当てられません。派手になった分、より気を配らねばなりますまい」
深々と嘆息しながらグレイは空いていた席に腰を下ろした。
「ご主人。事を始める前に、せめて相談していただきたかった」
「こ、これは、申し訳ありません。なんとお詫び申し上げればよいやら」
「いや。済んでしまったことを今更蒸し返してもせんなきこと。小官の方こそ、八つ当たりめいたことを言い立てて申し訳ない」
「ところで、貴方様はどちら様で？」
宿泊客でもないグレイの登場に、ハーマルは当然の疑問を抱いた。昨夜はどさくさの最中だった

こともあって気にならなかったが、今となってみれば、宿泊客として受け容れた記憶のない者がどうして此処にいるのかと思ったのである。

「小官は、帝国皇女ピニャ殿下付きの騎士補にて、こちらの皆様方を帝都へとお迎えに参った次第」

「ほほう、皇女殿下からのお召しですか？」

「さよう。これほどの偉業を成し遂げた方々を賞することもなく放置しては、帝国の威信が問われますからな。殿下より丁寧に招請せよとのご下命がありました。その最中に、今回の出来事に遭遇したところでありますな。以来警護に携わっております」

「そうでしたか……おいっ、こちらの騎士様にお食事を持ってきなさい」

は～いと返事するかのように、テーブル上を旋回する妖精達。

「や、お構いなく。小官は別に宿をとっておりますので、すでに朝食も済ませました」

「では、お香茶だけでも」

「かたじけない。では頂戴いたそう」

ハーマルはグレイの前に香茶を差し出しながら、そのかわり警護の方をしっかりと頼みますよと言った。どうやら皆の食事が終わると、この食堂はお目見え希望者との会見場所になるらしい。見れば小僧（ボーイ）達の仕切りで、整理券に従った行列が作られつつある。

伊丹達はその手際の良さに開いた口がふさがらなかった。だいたいハーマルの仕切りで、お目見えなんかするつもりもなかったのだ。だが、無秩序に声をかけられて、立ち往生するよりは良いの

も確かだった。
「みんな、皆様からのお言葉を賜るのを楽しみで、朝の出発を延ばしているのです。直接お話ししたことがあると申せば何処に行っても自慢に出来ますからな……」
どうやら今更嫌だとはとても言えない雰囲気であった。
押し黙る伊丹達を前に、警護の代金が香茶一杯とは随分と安いとグレイは豪快に笑いつつ、それとなく尋ねた。
「時に、橋は全て復旧したのですか？」
おや、ご存じでしたかとハーマルは目を丸くする。
「少なくとも、カリフォの橋は直ったようです。馬飛脚の到着が遅れていたのは、あそこで足止めされていたからだそうです。しかし、被害に遭ったのはカリフォだけでなく、モタルランと、パイランもとか……あれらまで全部直して元通りにするのは、もう少し日にちがかかることでしょうね。あまりにも悪辣で、帝都方面に用のある商人は皆が迷惑がっておりましたよ」
それを聞いたグレイは、考え込むように唸った。
「そうですかモタルランと、パイランはもう少しかかりますか。エルロンの陸橋はどうですか？」
「はあ？　エルロンについては知りませんが。あの橋まで落ちたのですか？」
「いや。何者かが為したことなら、あの陸橋を見逃すとは思えませんからな。そう思ったまでです……そんなことよりご主人、お目見えのやり方に多少の注文があるのですが」

グレイは、一度にたくさんの人数を食堂に入れるのではなく、廊下に待たせ一人ずつ入れてくれと注文をつけていった。相手が一人ならば注意が削がれにくいし、例え暴れ出しても対処しやすい。

ハーマルもそれを聞いて得心がいったのか大いに頷いていた。

こうして、炎龍退治の英雄握手会が書海亭で行われたのである。

陽が沈んで、夜。

書海亭の小僧（ボーイ）達四人は、一日の仕事を終えるといつものように、タヴェルナ（居酒屋）へと繰り出していた。別にはしゃいでいるわけではない。単に晩の食事を支度してくれる誰かと住んでいる身分ではないから、どこかの店に入らなければ腹を満たせないだけのことだ。

自分達のしでかした事の重大さは理解している。それは取り返しのつかない行為であった。いくら反省しても遅い。もう二度とこんなことをしないと心に誓っても、時が巻き戻されることは決してないのだ。自分達はしたことに相応しい罰を受け、書海亭の評判は地に落ちて、お客達は逃げるように去って寄りつかなくなる。そして宿の経営は立ちゆかなくなる。それが決定された運命であると覚悟していた。

だが、主人たるハーマルに庇われ、エムロイの使徒たるロゥリィより「許す」との言葉を貰った。あの時、寝台の剣を突き立てたその瞬間に、首と胴体が切り離されていてもおかしくなかった。罪人として役人に突き出されたとしてもおかしくなかった。にもかかわらず許されたのである。

危ういと思われていた宿の存続もどうにかなりそうである。悪評が流れて客達が一斉に寄りつかなくなるということも起きず、宿泊している客達から浴びせられると思っていた侮蔑と糾弾の視線もなく、代わりに揶揄といたわりの言葉すら与えられたのだ。

これは、もう一度機会を与えるというエムロイからの託宣なのだと彼らは思った。

彼らは人間として成長し、宿屋の従業員として大切なことを学ぶ機会を与えられたのだ。

もちろん、それを喜んではしゃげる立場ではない。だから絶望に続いた緊張、そしてそこからの解放を反芻しながら、一日を締めくくろうとしていたのである。

だが、そんな彼らの前に一人のワイルドウーマン（獣人女性）が現れた。

年の頃は見た目で十七～八歳。魅力的な肢体の持ち主で、栗色の髪を短くして、活動的な雰囲気の持ち主だった。ギラギラと輝くような強い瞳をまっすぐに向けてくる、悪く言えば不躾、よく言えば率直な気質のようで、初対面の相手でも物怖じすることがなかった。

颯爽とした足取りで現れた彼女は、彼らを見つけると指を突きつけてこう言い放った。

「馬っ鹿じゃない、あんた達！」

それは何とも言えない強烈な第一声であった。

女性は自らをノッラと名乗り、彼らのことを書海亭の小僧達（ボーイ）と確認した上で、詰（なじ）った。

「だいたい炎龍を倒してくれたあの人達に剣を向けておいて、許して貰ったからってそれで何もかも終わったような顔をしてるのが信じられない。とんでもない迷惑をかけたんだから、罪滅ぼしの

ひとつもしようと思わないの？」

それは小僧達にとって、反論の余地がない糾弾の声であった。

誰かには言われると思っていた事だけに、殊勝な態度で頷くしかない。

「僕たちだって分かってるさ。だけどもう、軽々しく行動しないって決めたんだ」

四人は感情的な反応を示すことなく、女性に対して冷静に言葉を返した。

「何、その意気地のなさ。笛吹男だっけ？　そんな奴の言葉に乗せられたから、今度は何もしないことにする。それって結局同じ事じゃない」

笛吹男に乗せられてとんでもないことをしてしまった。だから反省して軽挙妄動しないと言っている。なのに、それがまた笛吹男に乗せられているのと同じだという指摘には、当然ながら承伏できなかった。それだけは受け容れがたかった。だから小僧達のリーダー格の青年は気色ばんで「どこが同じだって言うのさ？」とノッラに迫った。

「だって、笛吹男とか言うのに踊らされて、動く。踊らされないように、動かない。ほら、どっちもそいつの言葉を行動の基準にしている点で同じじゃない。自分で考えて、自分で決めてない点で笛吹男の吹く笛に踊らされているのよ。ぴーひゃらららってね」

この言葉は、衝撃的に響いた。脳天を叩かれたような気分だった。

二度と笛吹男に騙されない。笛吹男には二度と踊らされないと決めていた小僧達にとっては、それだけは受け容れられないことだからである。ではどうしたらいいのか。どうしたら誤った状態を

改善できるのか。
「じゃあどうしろって言うんだい、君は」
小僧達はノッラにすがるように問いかけた。
「笛吹男を自分たちの手で捕まえてみなさいよ。そうやって、はじめて借金が帳消しになるのよ」
「相手がどこにいるのかも分からないと言うのに？」
「そんなことないわ。絶対に本人が出て来るに決まっている瞬間があるわ」
「どんな時さ」
「笛吹男っていうのは人から頼まれて人を殺める仕事をしてるんでしょ？　だったら仕事がうまく行ったかどうか、それを確認するはずよ」
「そうかなぁ？」
指を立ててつらつらと説明するノッラに小僧達は懐疑的な態度を示した。一度騙された経験を元に、疑り深くなっているのだ。
「確認に来るに決まってるわ。あんた達、宿の小僧でしょ？　部屋の掃除を、昨日今日入ったばっかりの新米に任せたとして、きちんとやったかどうか確かめないでほおっておく？」
「そりゃ、一応は確かめるけどさ」
四人は互いの顔を見合わせて同意した。主人から任されている仕事を新米に振っておいて、それであとは知らない、掃除はしたはず……では済まないのだ。新米がちゃんと掃除したか、また基準

に達する仕事となっているか必ず確認しなければならない。
「でしょ？　刺客の仕事だって誰かに雇われてしている点では同じはずよ。笛吹男（バイパー）って奴は、あなた達が仕事をうまくやったかどうかも、書海亭に確認しに来てたはずなのよ」
　この言葉を耳にした途端、小僧（ボーイ）達は頭を抱え、じだんだ踏んで悔しがった。
「なんてことだ。僕たちは奴を捕らえるチャンスをみすみす不意にしてたってことなのか！」
「そうよ。だから言ったでしょ、あんた達は馬鹿だって」
　小僧（ボーイ）達は「馬鹿だ馬鹿だ」の連呼を受けて歯がみした。
「でも、そう言う君は何なのさ。僕らを詰（なじ）りたいだけなのか？」
「違うわよ。あたしはあんた達に奴を捕まえるチャンスを上げたいの」
「どういう事さ？」
「実はあたし、笛吹男（バイパー）の彼奴から焚（た）きつけられたの。英雄だなんていい気になっている奴を、懲らしめてやれって口振りだったわ。でも聞いている内に、あっ、こいつがもしかして噂に聞いた笛吹男（バイパー）かなって思って、だから乗せられたフリをしてやったわ。あたしはあなた達と違うからちゃあんと気付いたのよ」
「くそっ。悔しいけど、僕たちは君に劣るのは確かみたいだ」
「ほんと、そうよ。……それでね、学会の日に、あたしがレレイさんを襲うのよ」
「駄目だよ、そんなことしちゃ！」

「だから言ってるでしょ。奴を捕まえるためのフリ、これは演技なのよ」
「演技？」
「そう。本当は綿密に打ち合わせしたいけど、奴の目が光っているはずだから駄目。だから貴方達がレレイさん達に前もって話を通しておくの。あたしが、レレイさんに襲いかかったら刺されて倒れたフリをしてくれって。お腹あたりを刺すから、胴鎧でも着ておいてもらえるといいかな。まわりの人も、あたしがあの人に近付くのを邪魔しちゃだめよ。それとなくあたしを見逃すようにし向けるの」
「うんうん」
「そうしたら、奴は現れるわ。本当にレレイさんが死んだかどうか、確かめようと現れる。その瞬間に捕らえるって寸法よ。レレイさんの仲間って、炎龍を倒すような人たちだもの、奴が現れたら捕らえるのは簡単なはずよ。あんた達、彼奴の顔を忘れたりしてないでしょうね？」
「忘れるもんか！」
「なら話は簡単よね？」
「凄いや。それならきっと捕まえられるよ」
「でしょ。どう？　この話に乗って、汚名を一気に返上する？　それともずうっと首を引っ込めて暮らして、自分達の失敗をみんなが忘れてくれるのを待つの？」
小僧（ボーイ）達は互いの顔を見合わせてから、ノッラに向けて大きく頷いた。

「分かった。やるよ」
その時の彼らの表情は、詐欺師を倒すのを手伝うと賞金稼ぎに向けて言い放った時と、全く同じとなってしまっていた。

薄暗いタヴェルナの片隅で、占い師に運勢をみて貰っていたシャンディーは、獣女と小僧達（ボーイ）の会話が耳に入って頭を抱えた。
「あの人達駄目です。本当に駄目駄目です」
ノッラとか名乗った女が、笛吹男（バイパー）に決まっているのだ。あるいは操られている傀儡だ。
これであの女は、小僧達（ボーイ）の手引きで標的まで誰にも妨げられることなく、近付くことが出来ることになった。演技でレレイの胴を刺すと言っているのも嘘だ。どうせ実際には、胴鎧で守りきれないような首などの急所を狙って来るに決まっている。
ロゥリィやレレイが、一度騙された人間はまた騙されると言っていたが、本当にそうだと思った。この四人、基本的に善良で他人を信じやすいのだ。他人を信じられるというのは美徳だから、騙す方が悪いとしか言いようがない。でも、それでもである。ここまでコロッと騙されるのはどうかとシャンディーは思ってしまう。
騙されまいという身構えが硬ければ硬いほど、そこにつけ込みようがあると言うのは、このことなのかも知れない。

「じゃ、あとをよろしく」
小僧(ボーイ)達に、そう言い残してタヴェルナを出ていくノッラ。
その背中が店を出てどちらへ向うか、シャンディーはじっと観察していた。
「イタミ様には、誰かが小僧(ボーイ)さん達に接触するのを確認したら帰って来るよう言われたけど……」
伊丹の指図を思い返して躊躇ったものの、ノッラの後を追うことで得られるかも知れない功績が脳裏をよぎった。もしかしたら、伊丹から感謝の言葉なんかもらえるかも知れないと思ったりする。場合によっては、ご褒美をおねだりできるかも。そんな感じでミーハーな乙女心を暴走させたシャンディーは、占い師に慌てて銅貨を手渡すと、ノッラと名乗った女のあとを追うため腰を上げた。
「お待ちなさい」
占い師の女はシャンディーを呼び止めると告げた。
「貴女の大切な人が困った境遇に置かれるという札が出ています。それを助けることが出来るのは貴女だけかも知れません」
占い師の女は『剣に囲まれた捕らわれたの女帝』を示すカードの並びをシャンディーに示した。
だが、ノッラの後を追うことに気をとられているシャンディーはそれを見ていなかった。
「あ、ありがとう。でも、先を急ぐから」
こうしてシャンディーは女の後を追って店の外に出ると、繋いでおいた自分の馬に跨った。
そして、そのまま姿を消し翌日になっても戻ることはなかった。

06

ロンデルの学会。多くの場面ではそのように略されているが、正式にはロンデル学位認定審査会と呼称するのが正しい。

その歴史は非常に古く、三千年近くまで遡る事が出来る。

元々は、この学都で研究生活を送る老師方の蔵書を、学徒達が閲覧させて貰うための資格審査だった。

公共の図書館が失われてしまったこの特地では、稀覯本を所有しているのは著名な賢者などの個人にほぼ限られていた。時の権力者が財と権力に物を言わせて強引にかき集めたこともあったが、その全てが政変や戦乱によって焼失したり散逸してしまった。さらには司書に任じられた者達が主観的に書物を選別、整理と称して焚書してしまうことを繰り返したため、結局は重要な知識のかなりの部分が、公共の場所から失われてしまったのである。

以来、賢者達は決して書籍を手放さなくなった。書物が欲しければ、自ら筆写するか、誰かが書き写した高額の写本を購うしかなくなったのである。

そのため学問を志す者は、まずはこのロンデルへやってきて、老師方の門を叩くしかない。

だが、誰にでも閲覧を許していては貴重な本がすぐに傷んでしまう。
それに読みこなすだけの基礎的な知識を有していなければ、その内容を理解することもできないから、はっきり言って無駄なのだ。そのため老師方も、ある程度の知識を有しているかどうかをあらかじめ審査した上で、書庫への立ち入りを許可するようになった。
そしてこれが、学徒の学問の進み具合を測るのに、具合の良い物差しとなったのである。
「このたび、めでたく書庫への立ち入りを許可されました」
「ほぅ、それではいよいよ本格的に研究生活が始まりますね。がんばって下さい」
「私は、老師より閲覧制限の解除を頂きました」
「素晴らしい。随分と励まれましたな。いかがでしょう、その知識を生かして御領主にお仕えになっては？」
こんな会話が、二千年ほど昔のロンデルではなされていたに違いない。
今では稀覯本の写本も数がそろってきたため書庫の利用許可という意味は薄らいでいるが、学問の修め具合を示すものとしてはかえってその権威と重要度は増した。やがて『学士』『修士』『博士』、そして最高位の『導師』という学位制度になり、それにともなって厳正な審査が行われるようになったのである。
それぞれの学位と、現在の資格審査は以下のようになっている。
まずは学士号だが、これを得るには、そもそも学徒にならなくてはならない。

それぞれ手近なところで、学士号以上の賢者を捜し、基礎教育を受ける。そして、その学習態度が真面目であることや成績が良好であることなどを条件に推薦を貰い、はじめて導師号を持つ賢者の弟子となることが許されるのである。長い学徒生活はここから始まる。

やがて師事した導師と、別の導師の二人からなる口頭試問を受ける。これによって認められると晴れて学士の称号が与えられ、人々から『賢者』と呼ばれるようになるのだ。

この称号を持つ者は、自らの所属する学派・流派の導師の下で書庫への立ち入りが許され、子供などを相手に基礎的な知識を教える塾堂を構えることが認められている。

修士号は、自らの学派・流派以外の導師二名以上による、口頭試問によって認められる。この称号を持つ者は、どの導師を訪れても大抵の書物の閲覧が許される。閲覧が許可されるということは、直接導師に質問をすることが許されるという意味でもある。つまり、様々な老師の下で、横断的な知識を積み上げていくことが出来るようになるのだ。

さらに、学会で研究成果の発表をすることが許され、学士以下の学徒に対しては、導師の代講をすることも認められる。

ちなみにレレイは現在ここ、『修士』であった。

次は博士号だが、ここからはハードルがぐんっと高くなる。

まず、このロンデルで開かれる学位認定審査会で論文を発表することが求められ、居並ぶ老師方全員から認定を得ることが必要となるのだ。

ただし、いったん博士号を得れば、どの導師を訪れても蔵書の閲覧制限を受けることはない。さらに多くの国で宮廷儀礼上、閣下の称号が与えられてそれに相応しい扱いを受ける。閣下の称号は、貴族、大臣、軍にあっては将軍職といった顕職のものであるから、ここまで進むと学問の力によって、貴族と同等に扱われるまでのし上がったと言っても過言ではないのだ。

レレイの姉、アルフェは現在ここ、『博士』である。

そして最終段階の導師だが、ここまで進むと自ら書庫を構えることが許される。書庫を構えるとは、学徒が学びに来ることを意味するわけで、例えるならば個人で大学を開設するに等しい。この特地では、導師という存在は、それだけの実力と権威を兼ね備えていると見なされるのである。

当然の事ながら、その審査は過酷である。

一部では公開処刑、あるい集団リンチ・吊し上げと揶揄されているほどである。

それくらいに、多くの者が挑んでは酷い姿となって退場していく難関中の難関なのだ。そのため、博士号を得た段階で先を目指すのを止めてしまう者も多い。例えば継ぐ門地も財産もない貴族の次男坊ないし三男坊などである。これらの者は自分に箔をつけるために学んでいることもあって博士号を得れば充分と考えることも多い。故郷に帰ればそれなりに尊敬されて、下にも置かない扱いを受けられるのに、わざわざ悲惨な思いを繰り返してまで上を目指す必要はないのだ。

しかしレレイは今日、これを受けようとしている。それは、やはりこの道で生きていこうと決めている者にとって学位とは最終目標ではなく、学問という長い学究生活の途中におかれた階に過ぎ

ないからだろう。
「なるほどねぇ」
伊丹達は学位認定審査会の成り立ちを聞いて頷いた。
ロゥリィ、テュカ、ヤオらも何となく知ってはいたが、家庭学習を基礎として経験で知識を深めていくエルフ&ダークエルフは学位とは無縁だし、ロゥリィは亜神となる前の、見習い神官時代に基礎教育を受けた程度なので、漠然とその仕組みを理解しているに過ぎなかった。だが、レレイの説明で学位を持ってる人間の凄さをあらためて理解した。勉学の道を志した者がどれほど大変な思いをしているかを、思い描くことが出来るようになった。
そのため、レレイがモノのついでとばかりに次の話をした途端、「へ？」と凍り付くこととなった。
「伊丹は学士に相当する学位を、ニホンでとっている」
伊丹は新設の三流とは言え大学を卒業しているから、間違いではない。
「うそっ!?」
思わず呟いてしまったのは伊丹を父と呼ぶテュカだ。
「それを知った時、わたしは学士という日本語を訳語として用いて良いか悩んだ。だが調べた結果、そう翻訳することしか出来ないと結論付けた。結論として伊丹は学士号を持つ賢者である」
「ニ、ニホンって凄い国なのねぇ」
ロゥリィは呆気にとられた表情で固まり、ヤオが首にぶら下げた五円玉を握りしめた。テュカな

どは伊丹を揶揄しているともとれる響きの声をあげた。
「レレイがそう言うなら、間違いないんでしょうけど、もの凄く違和感があるわ」
「此の身は、ロゥリィ聖下が、愛の神を目指されていると聞いた時ぐらいの驚きを感じた」
これを受けてレレイは頷く。
「偉大なる智母神ラーは、こういう言葉を残している。勉学には、物を知るだけの下達と、物を理解する力を養う中達、叡智を磨く上達とがあると」
「それって、どういう意味？」
「本を読んで知識を記憶しただけで、賢者を気取っている者が多いと批判する言葉」
さすがの伊丹も、此処まで言われると苦笑を禁じ得ない。
「何か、もの凄く馬鹿にされてるような気分になってくるんだけど」
「馬鹿になんてしてないわ、父さん。ただ……そう、ただ意外性を感じているだけなのよ。実際、父さんは賢者を気取ったりしてないじゃない」
「意外性の男と呼んでくれ」
「お陰で父さんに、学があるなんてちっとも思わなかったわよ」
「それは、馬鹿だと思っていたと言っているように聞こえるんだけど？」
するとテュカは、伊丹に向けて祈るように両手を組むと「怒っちゃ嫌。つい本音が口をついて出てしまっただけなの！」とからかうように言った。

伊丹は、「き、機嫌を悪くしたぞ！」と怖い顔で宣言すると、テュカの両頬を摘んでぎゅっと引っ張った。
「こいつめ、こいつめ。悪いことを言う口はこうしてやる！」
「あっ、うきゅ！　いらい、いらいわっ！」
それは、端から見ると怒った伊丹がテュカを乱暴狼藉してるように見える情景であった。
だが、彼の本音は力を込めているようで込めていない微妙な力加減に表れている。しかもそれは当の相手のテュカにはしっかりと伝わってしまっている。だからだろう、テュカも泣き叫んだり痛がったりせず、対抗するために伊丹の頬に手をかけて反撃を始めた。
「くぬっ、くぬっ、くぬぬぬぬ！」
「いれれれれれれれっ！　ひ、ひゅか！　は、はらせ！」
「ほうはんこそっ！」
互いにぎりぎりの力加減で頬を引っ張り合い、互いの身体は密着状態となる。
「うぎぅぅぅ」
「にゅゅゅゅ」
この二人のじゃれ合いをロウリィ、ヤオの二人は羨ましげに見ていた。
「いいなあアレ。此の身も構って欲しい」
「なるほどぉ、ああすればああいう反応が返ってくるのねぇ」

レレイも相も変わらず無表情だったが、少しばかり焦りを感じているようだ。
「しかし、これは不味い事態。テュカのタガがはずれかけてる」
「誰か止めなさいよぉ」
「では此の身が……」
ヤオは「イタミ殿。乱暴をしてはいけない」と止めに入った。
「そこは、御身の普段の言動を反省されるべきところなのではないかな？　学識ある者の言動には常に重々しさを感じるが、御身に限って言えばどうもそれが欠けている。まるで物を知らない無学者であるかのようにな。テュカはその事を言っているのだ。そうであろう？」
テュカは両頬を包むように押さえると唇をとがらせた。
表向きはどうあれ、内心では伊丹とのじゃれ合いを楽しんでいたから邪魔された気分なのである。さりとて違うとも言えないので、不承不承ながらも頷くしかなかった。
伊丹も自らの頬をマッサージするように撫でながら、不平を口にした。
「って言われてもなあ、性に合わないことは出来ないんだよ」
これまでだって上司連中から、服務態度とか日頃の言動についてのお小言を貰い続けてきたのである。挙げ句の果てに幹部レンジャー訓練に放り込まれたぐらいだ。だがそれでも変わらなかった。その意味では、伊丹の容儀（ようぎ）の軽さというか、貫禄の無さは筋金入りなのだ。
そんな弛緩した雰囲気が漂っている中で、突然、伊丹は腿から拳銃を抜くと戸口に向ける。ロウ

リィはハルバートを引き寄せ、レレイが杖を構えた。手元に武器を置いてないテュカは精霊魔法を唱え始めた。

それに少し遅れる形で、「遅くなり申した」とグレイが入って来る。

「……」

グレイは自分が死地に踏み入ったことに気付いて足を止めた。すぐに諸手を上げて降伏の態度を示す。

「こ、これは失礼。戸を開く前に声をかけるべきでしたな」

皆、「なんだ、グレイか」と肩の力を抜いて構えを解き、伊丹もホルスターに銃を戻した。

「で、シャンディーさんは？　何か手がかりは見つかった？」

伊丹の問いにグレイは首を振って、皆を落胆させた。

書海亭の小僧（ボーイ）達を騙そうとする笛吹男（パイパー）が再度接触するというレレイの予測を聞いた伊丹は、シャンディーを監視に出した。だがその夜以来、亜麻色の髪の女性騎士は消息を絶ってしまったのである。

何度目かの捜索を終えて戻ってきた騎士補グレイは、疲れた表情で告げた。

「連絡が途絶えてはや四日。戦場での偵察行なら希望を捨てるには尚早ですが……」

騎士団内の立場としてはシャンディーとグレイは士官で同僚である。だが一兵卒からの叩き上げでここまで位階を進めてきた彼は、ほぼ出世できる上限に達していた。それに対して貴族出身で、さらに最近では白薔薇隊の隊長となることが期待されていたシャンディーの栄達は、これからなの

だ。今回の任務で、経験豊かなグレイが彼女につけられたのも、細かなことを指導したり世話することをピニャから期待されてのこと。それだけにシャンディーが音沙汰もないまま行方不明になってしまうという失態を引き起こしたことに、グレイも責任を感じているのだ。

「小官、もう一度、このあたりを一周りして参りたいと思っております」

「わたしも行く……」

レレイも、そう言うと立ち上がろうとして腰を上げた。だが伊丹が止めた。

「レレイはそこにいろ。提案者として気に病んでるのは分かるけど、その手の責任は指揮をしている俺が負うもんだろ？」

グレイもそれを受けて身を乗り出した。

「そうですぞ。レレイ殿がシャンディー殿の名をあげられたのは、シャンディー殿の能力を信用したからでしょう？　ならば待たれるべきです。一度与えた信用を中途で引き上げてしまうのは、騎士への侮辱となりますぞ」

「……」

するとレレイは、伊丹に言われたように腰を下ろした。するとロゥリィが人差し指を立てながら言い聞かせるように言った。

「だいたいロンデルまで来たんだってぇ、今日のためでしょぉ？」

「学会は今日で終わりではない。次回に繰り越せばいいだけのこと」

「確かにそうかも知れないけどぉ、笛吹男（バイパー）はどうするのぉ？　このままだとひたすら狙われ続けることになるのよぉ。しかも、彼奴を野放しにしておくとぉ、犠牲者はどんどん増えていくのよぉ」

この場合は犠牲者とは、笛吹男（バイパー）に騙されて刺客にされてしまう者のことである。

殺意を持って襲って来る者を、無傷で制圧出来ることなど滅多にない。時、場所、人、そういった様々な要素がうまく働いたから、この宿の小僧（ボーイ）達などは、顔に痣を拵（こしら）えるだけで済んだのだ。下手をすれば彼らを死なせてしまったかも知れない。

「古来から作戦は頭脳で立てるもの、実戦は性根で指揮するものと言われております。シャンディー殿を心配して下さっていることは分かりますが、それに影響されて作戦を変えてしまうのは感心しませんぞ。一度始めたら決して動じない覚悟を決めていただきたい」

「そうよぉ。ここまで来れば笛吹男（バイパー）を迎え撃つ方が先よぉ」

「……」

レレイは唇を噛んだ。彼女は、ほとんどのことを自分でこなしてきた人間なので、他人に任せて結果を待つという焦燥感に慣れていないのだ。だが皆に説得されて、それを受け容れることにしたようである。

「ん？」

伊丹は、戸口に警戒の視線を向けた。腿の拳銃に手を伸ばしていつでも抜けるようにする。

やがて廊下を近付いてくる駆け足の足音が誰の耳にも聞こえるようになった。その足音はまっす

ぐこちらに向かってくる。
伊丹はゆっくりと九㎜拳銃を抜いた。グレイも剣を抜く。
息をのんで待ちかまえていると、戸口が勢いよく音を立てて押し開かれた。見ればシャンディーが息せき切って飛び込んで来たところであった。
「遅くなりました！」
「シャンディー。あんた今までどこに……」
テュカ達はシャンディーに詰め寄った。だがやはり一番喜んだのはグレイのようでシャンディーに歩み寄ると、ぜいはぜいはと激しく上下している肩を叩く。
「シャンディー殿。早速報告を……」
「あ、はい。ノッラって女を付け回していて遅くなっちゃいました」
「遅くなっちゃったって貴女、四日よ四日！　遅くなるにも限度というものがあるでしょう？　せめて、手がかりを残すとか連絡をなさい。心配したのよ！」
腰に手を当てたテュカが皆を代表して苦情を言った。
「済みませんテュカさん、連絡している余裕が全然なくって。それで小僧（ボーイ）さん達から、例の話持ちかけられました？」
するとロゥリィは小馬鹿にしたような表情で笑った。
「あの話なら来たわよぉ」

「ノッラって奴、笛吹男（バイパー）の傀儡（かいらい）です。お気付きですよね」
「やっぱりぃ？」
伊丹は悪巧みを失敗した悪戯小僧のような表情で後ろ髪を掻いた。
「ノッラとか言う女が実は笛吹男（バイパー）だったって言うのが一番手っ取り早かったんがなあ。さすがにご本人登場というわけにはいかないってことか」
他人を刺客に仕立てて、自分は安全なところにいるのが笛吹男（バイパー）の手口ならば、いくら一度失敗したからと言っても、自分で剣を持って標的に挑むのは考えにくいのである。
「で、笛吹男（バイパー）はどこにいた？　これだけ時間をかけたんなら見つけたんだろ？　男だった？　女だった？」
「男でした。小僧さん達が言っていた風体と同じで……でも結局見失っちゃって」
「何よそれ。さんざん心配させて、そのあげく見失ったの？」
唇を尖らすテュカ。
「ごめんなさい。でもパイランの街まで行くはめになっちゃって。うたた寝している間に見失っちゃったんです……」
グレイがシャンディーを慰めるように肩を叩いた。
「いやはや、それでは無理もありませんな。片道二日の道程を一人で追跡できた方が驚異ですぞ。この手の追跡は本来もっと大人数でやるもの。単独でやり遂げるなど最初から不可能なのですよ」

容姿を確認しただけでもよしとしようというグレイの言葉に、テュカも同意した。
「ほんとご苦労様。大変だったでしょ」
「大丈夫です。わたし、騎士団では優秀な方だったんですから。長距離斥候の評価は一番でした」
伊丹は言葉を選び選び言った。
「実のところこの宿の小僧(ボーイ)達にどんな奴が接触するか確認さえしてもらえれば良かったんだけどなぁ。正直、追跡まではしなくても良かったんだ」
その物言いには、当然の事ながら心配させられた事への抗議が含まれている。
「ええ！　それじゃあ、あの……無駄手間だったんですかぁ？」
「そ、そんなことはないさ。笛吹(バイパー)男の顔を確認したのはお手柄だよ。ただ、連絡は欲しかったな」
「つい夢中になっちゃって。でも、ちゃんと笛吹(バイパー)男の顔は見ましたよ。ばっちりです」
シャンディーは伊丹に向けてグッと握り拳を作って成果を誇った。
伊丹は「そうだな。ありがとう」と礼を言い皆に向けて宣言した。
「よし。あとは予定通り、会場に現れる笛吹(バイパー)男を見つけだすだけだ」
するとレレイは傍らに置いた杖を引き寄せた。ロウリィはハルバートを、テュカは弓に手を伸ばす。
伊丹も小銃の負い紐を肩にかけながら皆を見渡した。
「準備はいいな？」
こうして一同は、書海亭を出発しようとした。だがシャンディーが情けなさそうな声で抗議の声

を上げてしゃがみ込んだ。
「ええっ！　わたし、今帰ってきたばかりで、朝ご飯も食べてないんですけど。それに服も汗まみれで下着くらい替えたいし、もう疲れちゃいましたあ」
「しまった……そうだったな」
どうしたものかと伊丹は迷った。
シャンディーが自衛隊の部下ならば、「いくぞ」の一言で済ませることも出来る。テュカやレレイ、ロゥリィだったら、「がんばってくれ」と頼み込むことも出来た。だが、相手は単に協力してくれているだけの部外者なのだ。しかも、四日間に渡る大変な仕事をし終えてきたばかりである。無理を強いるのはどうにも気が引けた。
しかしこの中で笛吹男（バイパー）を直接見たことがあるのはシャンディーだけだ。彼女がいないと笛吹男（バイパー）を発見することが出来ない。宿の小僧（ボーイ）達も協力はしてくれるが、正直言ってアテに出来なかった。
「そろそろ出発しないと学会に遅れてしまうと思うが」
ヤオの言葉に、グレイが厳めしい顔つきをして前に出た。
「シャンディー殿、ここは頑張り所ですぞ。決戦寸前までの数日間を徹夜で斥候に走り回り疲労困憊しているのに、そのまま決戦になだれ込むなど、戦場ではあたりまえのことなのですからな。そうでありましょう？　イタミ殿」
伊丹も「ええ、まぁ」と頷いた。確かにその通りで自衛隊も隊員に同様の精神教育をしている。

するとシャンディーは、よっこらしょと立ち上がると、我が儘言って済みませんでしたと頭を下げた。そして明らかに疲れた顔つきをしているのに、予定通りに行動してくれと言う。実に健気で、伊丹達はシャンディーに対する評価を数段階引き上げた。

こうして一同は宿の一階玄関ホールまで降りた。するとそこでは、小僧達（ボーイ）もこれから出かけようとしていた。

「あっ、おはようございます」

「いよいよですね。打ち合わせ通りにお願いします。胴鎧、ちゃんと着てますか？」

「僕たちも、先に行って笛吹男（パイパー）が現れるのを見張ってますから」

「がんばって下さい」

何というか、有り難いけど、困った連中だなと思ってしまった。

だが会場に現れるであろう笛吹男（パイパー）を捕らえるには、彼らの協力はあった方が良い。そして協力して貰うなら気持ちよく働いて貰いたいので、伊丹達は彼らが騙されていることについては指摘しないことにしていた。そのため伊丹達は、小僧達（ボーイ）が「よし、行こう」と声を掛け合いながら勇んで出かけるのを、黙って見送ることとなった。

学位認定審査会が行われる会堂は、書海亭から徒歩で少しばかりの所にある。なので、伊丹達は歩いて会場へと向かうことにした。

いつ襲って来るか分からない刺客を警戒するという意味では、高機動車で移動した方が良いのだが、先日のように大渋滞に巻き込まれて動けなくなっては、レレイを遅刻させてしまいかねないし、目的地に駐車するスペースがあるとも限らないから、歩いて行った方が予想外のことが起こりにくくリスクが少ないと考えたのである。

そして道中の時間を利用して、伊丹は以前から引っかかっていた問いをレレイへと向けた。

それは、日本語を相当なレベルまで修得して、パソコンも購入し、アルヌスからネットにアクセスできるからには、そこから引き出した知識を基にこの世界に革命をもたらすような報告を連発出来るだろうに、何故それをしないのかというものであった。

「レレイが、もの凄く慎重にやってる気がするんだよな。他人の論文の剽窃にならないようにってこともあるんだろうけどさ、それとは違う慎重さを感じるんだよね」

これに対するレレイの答えは以下のようなものであった。

「学徒として入門し、初めてカトー老師から受けた教えは、学問が人々に与える影響についてだった」

それは、天文学の発達史であったと言う。

古き時代。家もなく纏う服も粗末だった頃、人々は、闇を背景に浮かぶ星々を見上げながら、大地を床として眠っていた。

夜空を彩る星々がつくりあげる幻想的な情景。それらを背景にさまざまな夢を見て物語として紡いでいった。やがて星々の作り上げる情景と、季節との結びつきを知る。農耕という生活手段を手

に入れると、人間は物語をより細かくそして壮大にしていったのだ。

例えば、種を撒く時季に空に登場するのは心優しい農耕の神。

だが、それを追い散らすようにして荒々しい雨の神が現れ、これと激しく戦う。飛び交う雷、吹き荒れる嵐。優しい神はその勢いに押されて、西へと追いやられて退場していく。

そして空には雨の神がしばし居座るのである。

おりしも季節は雨季。太陽の現れない日々が続く。だが、これに耐えなければならないのは、僅かな間だ。地母神の加護を受けた、農耕の神が再び奮い立って天主の座をめぐっての戦いを挑むのである。

やがて訪れる農耕の神の勝利。

雨雲は去り、作物はたわわに実って木々の果実は鮮やかに色づく収穫の季節の到来である。

天文と季節の関係を、人々はこのような素朴な神話を作り上げることで理解していたのである。

しかし賢者達は、星々の運行を支配する法則を解き明かそうと挑戦し続けていた。

精密な観測の積み重ねが、やがて正確な暦を導き出していく。そして、天文学という学問の一分野が成立して『学問世界』の重要な地位を占めるようになった。そして今から二千五百年ほど前、重大な事実が明らかとなる。それまでの定説を覆して、大地が球形をしていると説明されたのである。

世界の構造や物事の仕組みについてこの世界の神々はこうであると語らない。人々がその秘密を解き明かすのを待つように黙したままである。故に、素朴な民衆は、円盤状の大地の上に太陽がぽ

っかりと浮かんでいると考えた。賢者達も、それを基礎とした形で世界の成り立ちを理解しようとしていた。

例えば、太陽の通り道たる赤道の真下は、太陽との距離が近くなるので暑いのも当然。赤道から北へと離れれば離れるほど、太陽との距離も開くから寒くなるし、大地と太陽とがつくる角度も小さくなって低くなるのだ。

賢者達は、投げかけられる世界の構造についての問いに、このような説明で答えていた。

ところがある時、天文学者パッソルは、地図を作る際に用いられる三角測量の技術を用いれば、太陽と大地の距離を正確に導き出すことが出来るのではないかと考えた。そして、荒天に備えるなどの理由で予備も含め、南北の各地七ヶ所に弟子を派遣し、同日同時刻に大地と太陽とが作る角度の観測をさせたのである。

その結果は驚くべき物であった。

七ヶ所の計測数値を総合しようとすると、大地と太陽との距離が算出できなくなってしまうのである。

最初は誤差によるものかと考えた。そして観測点を七ヶ所から十四ヶ所にまで増やしてみた。だが、観測点の数を増やせば増やすほど、観測点の距離を離せば離すほど、太陽と大地がつくりだす角度は、説明の出来ない誤差を生み出していった。

これらの調査結果と格闘すること数ヶ月。やがて、パッソルはひとつの恐ろしい考えに行き着く。

それは赤道から離れれば離れるほど大地はなだらかに傾いていく、つまり大地は弧を描いており、それを延長していくとその弧はやがて交わる。すなわち大地は球形であるという結論に行き着いたのである。

人々は、パッソルが恐る恐る提示した考えに、驚愕すると共に恐怖した。

彼の説を受け容れるならば、球状の大地は何者にも支えられることなく宙に浮かんでいることになってしまうからだ。そんなあやふやなことは、素朴な人々にとってとても恐ろしく受け容れがたかった。しかも、大地が球形をしていると言うなら、その縁（へり）にいる人間は、人間ばかりでなく、建物も動植物といった何もかもが、下方向に滑り落ちてしまう。いや、そもそも何の支えもない大地そのものが、落下してしまう。今こうしている瞬間も落ちているなら、その先には何があるだろう。どこの、何に向かって落ちていると言うのか!?

人々は、地平線の向こう側で建物も何もかもが滑り落ち、崩れていく幻影を見てしまった。取り落とした果物が床に落ちて醜く潰れる姿と、大地の崩壊する情景を重ね合わせてしまったのである。

ロンデルの会堂は、鋤や鍬を手にした民衆によって取り囲まれることとなった。

人々は、大地が球体であるという説に怒り狂い、その証拠とした観測が誤っていたと認めろと迫った。別にパッソルがそうした訳ではないのに、人々は彼の学説こそが世界を滅ぼすような錯覚に囚われてしまったのだ。

学問は、世界観を変える。それは下手をすれば民心を脅かし、時と場合によっては人々をここまでさせる威力を持つという事実に、賢者達が気付いた瞬間であった。

議場の門を激しく叩き、打ち砕こうとする群衆。響き渡る怒号。

その激しい怒りに、賢者達は恐れおののきながらも、精密な観測とそれが示した事実を歪めることだけはしなかった。それは賢者としての矜持でもあったからだ。だからその代わりに、彼らは民衆に告げた。

「大地は球状だが、どこにも落ちない。それは我々の住むこの大地こそが世界の中心であるからだ。『下』という方向は、果物の種のごとく球状の大地の中心に存在する。従って大地は不動にして、けっして揺るぐことはない。諸君は何一つ心配することなく母なる大地の表面で暮らしていけるのだ」、と。

それは欺瞞であった。何一つ裏付けるもののない適当な考えを織り交ぜた嘘であった。蒙昧の闇を、智恵の剣で祓うことが賢者の使命であるというのに、今度は自分達が人々の目に蒙昧の闇を被せてしまったのである。

だが、当時の人々にとっては、真実なんかより、この嘘こそが必要だった。井の中の蛙、大海を知らずというが、蛙は大海では生きていけない。その広さと海水に溺れてしまう。世界の広大さに耐えるには、種としての成長がまだまだ不足だったのだ。そのため人々は昏い井戸の中にとどまることを選んだ。つまり民衆は自ら望んで騙された。進んで信じたのである。

自分達の住む大地が世界の中心、文字通り世界を支える存在であるという考えで自尊心を満足させ、その世界観に逃げ込んだのである。

「わたしは、この講義を受けた夜、恐ろしくて震えた」

幼いレレイは、意気揚々と大発見を報告する自分が、群衆によって罵声を浴び、棍棒で叩きのめされる夢を何度も見たという。

「賢者は、自分の発明や発見が、人々に何をもたらすか考えなければならない。わたしの発表は、爆発という現象を魔法でつくりだすもの。だから広まるとしても限定的。それを言い訳にして、わたしは自らの欲に従った。だけどそこから先には踏み込めない。本来なら、火薬の製法を発表するべきだということは分かっている。火薬の効果を知る以上そう考える。けれど、火薬の悪用が何を引き起こすか知るわたしは恐怖している。自衛隊は戦いに火薬を使う。アルヌスの『門』を挟んだ交流が進めば、遅かれ早かれ、この世界の人々は火薬の製法を知り、その使用方法を学ぶことになる。なのに、わたしはそれが出来ないでいる」

レレイは、そんな事を言いながら軟弱者と貶してくれてもいいと肩を落とした。

もちろん、伊丹はそんなレレイを貶したりしようと思わない。一度火薬を手にすれば、人間はより威力のあるものを求める。そして、それが最終的に何に行き着くこととなるのか、伊丹とて充分に想像できるからである。

背後で聞き耳を立てていたロウリィも伊丹と同じように微笑んでそれで良いと頷いた。

「だってぇ、いずれレレイには宿題を引き受けて欲しいものぉ……」
その言葉には面倒ごとを押し付けることへの申し訳なさを感じさせる響きがある。伊丹としては、レレイが火薬の製法を発表していたらどうなっていたかが気になった。しかし温かな言葉と裏腹に笑っていないロウリィの瞳の輝きが、それを問うことをとどまらせた。

＊　＊

学会が行われる会堂の前は、すでに多くの賢者・学徒達が集まって開場の時を待っていた。
そこかしこに出来た賢者、学徒の人垣をかき分けて進むと、会堂の入り口近くで、ミモザ老師やレレイの義姉、アルフェの姿を見つけることが出来た。
「遅いよ、レレイ！」
どうやらこの二人は、レレイを待っていたようである。
アルフェが口に出した名前が耳に入ったのか、周囲の学徒達が一斉に口を噤んで振り返った。そして「あれが噂の」とか「本当に若いな」という声がひそひそと飛び交う。どうやらレレイの名は、学徒達の間でも既に知れ渡っているようであった。
「そりゃそうでしょう。その齢で導師号を狙おうなんて身の程知らずなことを考えれば、話題にもなるってもんよ」

アルフェはそんなことを口にしながら、レレイの白無垢ローブを摘みあげた。
「へぇ、間に合ったんだ」
「おかげで新調するはめになった」
するとミモザ老師が、悪戯をしかけるような笑顔で言った。
「レレイが炎龍を倒したって噂も、もうあちこちに広がっているわよ。アルフェなんて、憎まれ口たたいている癖に、ついさっきまで貴女のことを友達にすっごく自慢していたんだから」
「ミモザ老師！　黙ってて下さいって言ったじゃないですか！」
「あら、そうだったかしら？　それじゃあレレイのローブが間に合わなかった時のために、自分の為に仕立てて置いたとっておきの導服を持って来てあげてることも、黙っていた方がいいわね？　その為に裾上げの針仕事で、徹夜したこととかも言わない方がいいのね？」
見れば、真っ赤になったアルフェが背中に何か包みらしきものを隠した。それが老師の言うところの、とっておきなのだろう。
「ろ、老師！　それじゃ何もかも暴露しているのと同じですっ！」
「あらあら、ごめんなさいね。つい言っちゃったわ。嫌ね、年取ると口が緩んじゃって」
「年寄りぶって何言ってるんですか！　言っちゃったわ……なんて可愛く言っても駄目ですよっ！　どう見ても確信犯ですよっ！」
アルフェは真っ赤な顔をして抗議の言葉をまくし立てた。

だが彼女の師匠は、それを柳に風、のれんに腕押しとばかりに受け流し「あらあらあら」と全くの笑顔のままだ。するとその分、アルフェは声を大きくするのである。

しばらくすると、さすがに放置しておけなくなったのか傍らに立っていた痩身で背の高いエルフ男が進み出て、指先でアルフェの肩をつつくように叩いた。

「アルフェさん、アルフェさん。みんな見てますから、そこまでにしておいたほうが良いですよ」

「フラット。いいからあんたは黙ってなさい！」

「あ、はい……」

鋭い剣幕を真正面から浴びせられて、瞬く間にしゅんと項垂れるエルフ男。

アルフェはエルフ男に背を向けると、ミモザに対して姉という立場にある者が、妹に示さなければならない威厳とか、家族の序列といったものを維持する苦労を切々と説き続けた。

一方、伊丹達の関心は、アルフェによって意見を一蹴されたエルフ男に向けられていた。

「誰だろうこのエルフ男」「エルフにも学徒っていたんだ」そして「アルフェとどんな関係なのだろう？」という問いがそれぞれの脳裏に浮かんでいた。男っ気が無さそうに見えたアルフェだが、少なくとも肩に触れることを許すぐらいには親しい仲の男がいたのだ。

「あ、ボクはフラット・エル・コーダです。よろしくお願いします」

皆からの視線を感じたのか、エルフ男は「初めまして」と自己紹介を始めた。

「貴女がレレイさんですね？　お会いできて感激です。噂はアルフェさんから常々聞いてます。そ

のお歳で導師号の審査を受けるなんて凄いですね。ボクが十六歳の時は、まだ故郷の森でうろうろしていましたよ……それに、ついさっき聞いたんですけど、炎龍を倒したっていう噂まで流れてますよ。凄いです、街中の噂です。もしかしたら大陸中の噂になるかも。そしたら大英雄ですね。凄いなあ、尊敬しちゃいますよ」

「炎龍の噂には虚偽が含まれているので訂正しておく。炎龍と正面から戦ったのは、ここにいる伊丹と斃れていったクロウ、メト、バン、フェン、ノッコ、コム、セィミィ、ナユそしてそこにいるヤオ。とどめを刺したのはテュカ。わたしは魔法で炎龍をつついていただけ」

するとテュカは「あ、あたしは最後まで突っ立ってただけよ」と赤面して顔を伏せた。

ヤオは、レレイが倒れていった仲間の名を一人残らずあげたことに、込み上げるものがあったのか目を潤ませている。

「皆さん凄いですね。テュカさんも、ヤオさんもご苦労様でした。エルフ仲間として鼻が高いですよ。ボクなんかただの研究賢者だから、感心することしか出来ないなあ」

「研究賢者って？」

伊丹の問いにレレイが答えた。

「魔法を使わない賢者のことを指して言うことが多い」

これを聞いたフラットは「ははは」と空疎に笑った。

「使わないんじゃなくて、使えないんですよ。エルフだからどうしても精霊魔法になっちゃって。

でも、精霊魔法って研究の実験とか解析に向いてないんですよね」
「魔法はただの道具。魔法を使わなくても賢者として立派な業績を残した者は大勢居る」
「でも、研究出来る分野が限られちゃうんです。方法も観察と考察とかに限られちゃうから」
「失礼ですが、ご専門は？」
伊丹の問いにフラットは「天文学です」と答えた。
「うわっ！」
今し方、天文学の発達史とそれに伴う苦労を聞かされたばかりなのもあって、伊丹は大変な分野の研究をしているなと同情めいた気分になった。
そんな伊丹の変化を見たフラットは、自分が何か気を悪くさせるようなことをしたのかなと心配そうな表情をする。そしてそれを見たレレイは、伊丹が何故このような反応を示したのかを告げる必要を感じて簡潔に事情を説明した。
「天文学の発達史を彼に説明していた。パッソルの『球体大地説』あたり……」
その途端、納得がいったのかフラットは自嘲的に笑った。
「大丈夫ですよ。最近は、袋だたきにされることも無くなってきましたから」
「袋だたき？」
「ええ。この分野は時々命がけなんです。でも、皆を必ず説得できるってボクは信じてます」
フラットは握り拳を作って最近の天文学の動向を説明した。

天文学の発達によってパッソル以降も、世界を揺り動かすような出来事は起きている。その一つがモクリの提唱した『太陽中心説』であった。

天体観測を進めていくと、夜空に瞬く星には、さまざまな種類があることが分かる。特に目立つのが見ている者を惑わすかのように居場所を変える星、惑星であろう。

観測の結果、赤星、黄星、蒼星、白星の四惑星は、どうやら太陽や月の仲間らしく、天球の内側にあって、全ての中心である大地の周りを廻っていると考えられるようになった。だが、そのような解釈では惑星の運動を説明しきれない部分があった。

同じ時刻に観測すると惑星は南の空を西から東へとゆっくり運行する。なのに、時折東から西へと遡行するかのごとく動く時があるのだ。動き方の大きな赤星や黄星ばかりでなく、蒼星や白星までもが、数百年の観測記録によって、そのような動き方をすることが分かっている。

当時の天文学者はその現象についてこう説明していた。

全ての惑星は、透明な球にくっついており、これが回転しながらそれぞれの軌道を廻っていると。これならば途中で後戻りするように見えることも説明できるし、惑星の位置予報がある程度可能となる。

実際、当時の観測技術や装置のレベルが低かったこともあって、これで説明しきれないような問題は、誤差の範囲と見なされていたのである。

しかし、観測の技術が進んでくると、これでは説明の難しい現象が数多く認められるようになっ

た。そこで天文学者のモクリは、これらの問題を解決するために、新しい世界観の構築に挑んだ。

そして彼がたどりついたのが『太陽中心説』である。

我々の住む大地も実は他の四惑星と同じであり、太陽を中心としてその周囲を廻る惑星に過ぎないと言ったのである。これならば、他の惑星が時折遡行するかのように動く理由が説明できる。つまり、内側の軌道を廻る大地が、他の惑星を追い越す際に発生する、見かけ上の現象であると。

当然の事ながら、この考えには大きな反発が起きた。

大地は不動にして、決して揺らぐことがない。それが、球体大地説誕生以降、人々の心に根付いた考えだったからである。しかも民衆ばかりでなく賢者の大半も、モクリの説に対しては懐疑的に振る舞っていた。

大地が移動すると言うのなら、どうして月は取り残されないのか。

また大地が太陽の周りを廻るなら、天球にある星々の位置も、僅かにしても見かけ上は動いて見えなければおかしい等、太陽中心説には様々な問題点が存在しているのである。

これに対する回答として、モクリは次のように説明した。

「大地と月との間には、目に見えない虚理が働いていて、月はこれによって繋ぎ止められているのだ」と。

だが、多くの研究賢者達が、「魔法を使う連中は、説明の難しいことがあると、すぐに虚理がどうこうとか言い出す」と批判し、魔導師達からは「虚理は現実を支配する現理のなかでは存在し

得ない。法理によって開豁された陣内においてのみ、発動されるという原則がある」と批判されて、定説となるまでは至っていないのである。

＊　＊

日本で行われる学会……例えば医学系のものだと、スポンサーになっている製薬会社が、パンフレットの印刷やら会場となる高級ホテルの手配、参加者が首にぶら下げる名札（製薬会社のスポンサー名が入っている）、参加料徴収、宴会の手配、場合によっては昼食のお弁当とお茶まで用意してくれる。ランチョンセミナーと称する、製薬会社の製品に関わる報告を聞くことが条件となるが、参加者には無料でお昼ご飯が配られるのだ。さらに、それに微々たる宴会参加費を追加するとバイキング形式の豪華な晩ご飯にすらありつくことが出来たりする。

だが、そうしたスポンサーのつくような学会は極めて例外であり、ほとんどが資金不足に悩みつつ参加者から集めた会費で細々と運営している。従って、その内容も、いささかわびしいものとならざるを得ない。

このロンデルで行われる学会も、ご多分に漏れずわびしいたたずまいでなされていた。

会場として使われる会堂も、かなり旧くなって柱にはヒビが走っているし、受付から会場整理にいたる様々なことが、学徒達の手弁当で運営されるのだ。感覚的には学園祭のノリに近いかも知れ

ない。
「あんた、今日はどうするつもり？」
受付を済ませたアルフェに問われ、「研究報告をする予定ですよ」と答えるフラット。
「まさか、また太陽中心説にかかわる話じゃないでしょうね？」
「違いますよ。今日は、観測報告だけです」
「それならいいけど……」
「でも、おもしろい現象が起きているんですよ。きっとみんな驚きます！」
エルフ男はそう言うと用意してきた原稿の羊皮紙を軽く叩いた。
「矢が降り注ぐような報告じゃなきゃいいわ。精々、がんばりなさい」
ため息混じりにお説教するアルフェを見たミモザ老師は、いかにも何か言いたいのを堪えているという表情で笑っていた。
その意味ありげな視線を受けるアルフェは、抗議口調だ。
「なんですか？　老師」
「何でもないわ。言うと怒られるもの」
ならいいですとふて腐れるアルフェ。だがレレイが「なに？」と側に寄って尋ねると、ミモザ老師はいとも簡単に全てを暴露した。
「フラットはね、アルフェにプロポーズしているのよ。二人はそう言う関係なの」

年老いた老女が両手を頬に当てて「きゃー」と嬌声をあげた。ロウリィとテュカも、これに声を合わせてはしゃいでいた。

ちなみに外見はどうあれ、この三人の中ではミモザが一番の若年である。

「ろ、老師！　その話は断りましたから！　全くの無関係の関係ですから！　どうしてこんな馬鹿エルフとあたしが結婚なんか。っていうよりもう男として見てませんから、ホントなんですよ。ちょっと老師、聞いてるんですかっ!?　っていうか弟子の話を聞けよ、おいっ！」

「……という関係なの。分かった？」

ミモザ老師の茶化すような口振りに、伊丹達は大いに納得することとなった。

「一般報告の予定者は、こちらが受付で～す」

その声に呼ばれたフラットが苦笑も治まらないままに受付へ。さらに、別の声が、別の場所から朗々と響き渡った。

「博士号審査、導師号審査を受けられる方は、こちらにお集まりください」

すると、十二～十三人の賢者が声のした方向へと向かって行った。その中で白い導服を着ているのは、レレイの他に男性が三人ほどであった。

見ていると、係員がそこに集まった賢者達に、注意事項の説明などをしている。

伊丹は邪魔にならないように距離をおきつつ、レレイに近付こうとする者を警戒できる位置をとった。テュカやロウリィやヤオ、グレイそしてシャンディーも散らばって、周囲に対する警戒の視

線を巡らせている。
「わたしは、控え室に居るお爺ちゃん連中に挨拶してくるわね」
ミモザ老師がそんなことを言って行ってしまったため、一人残されたアルフェは所在なさげにしていた。だからだろうか、伊丹にちらちらと視線を向けて来る。どうやら、義妹が『自分の』と所有権を主張した存在が気になってしょうがないようである。
ちょうど良いので、伊丹は声をかけて学会について二〜三情報を提供して貰うことにした。
「アルフェさん。学位認定審査って毎回合格できる定員とか決まってるんですか？」
声をかけられたアルフェはホッとしたような表情で、伊丹に歩み寄った。
「いいえ、ありませんわ。全員が認定される時もあるし、一人も通らない時もあります。それがどうかしましたか？」
「笛吹男（バイパー）とかいう刺客の噂は、耳にしてます？」
「ええ、レレイがそいつに狙われているとか。でも素人を操って刺客に仕立てるなんて、本当に出来るんでしょうか？」
そんな会話をしつつも伊丹の視線は、レレイとその周りの賢者達へ向けられていた。
見ると、係員が差し出すクジを皆で引いている。もしかすると発表の順番を決めているのかも知れない。
「俺も話を聞いただけなんですけど、口だけで他人を操っているとしたら、確かに凄いですよね。

詐欺師としてもきっと一流なんだろうなあ」
「口ばかりじゃだめですわ。多少巧いことを言われたぐらいでは引っかかったりしませんもの」
「きっと、あそこの人たちを刺客に仕立てるなんてことも無理なんでしょうね」
「無理ですわ。だってみんな、博士、導師号を受けようっていう賢者なんですよ。精神を操る魔法でもあれば別だけど、そこまで凄いのは聞いたこともないし。あっても喜怒哀楽を増幅させるぐらいです」
伊丹は「魔法か……」と呻いた。レレイとのつきあいも長くなったがそれでも門外漢だ。だから、魔法を使わずに騙すとしたらこんな方法はどうだろうか、と例えをひとつあげた。
もし審査を通れる人数に定員があるならば……審査が通れるかどうかの瀬戸際にある者に、「邪魔者を消せ」、的なことを囁いたらどうか。別に本人でなくてもいい。その家族や恋人で、盲目的に相手を想っている人間が見つかるなら、その方がよいかも知れない。
「もし審査に、定員制度があるなら、ありえる話ですわね」
アルフェとしても身につまされる話であった。何しろ、嫉妬に駆られて人前で決闘騒ぎを起こしたのは彼女なのだから。だがそれは姉妹喧嘩という枠組みの中でのこと。全く知らない他人相手に、目障りだからと喧嘩をふっかけるほど恥知らずではない。ましてや相手を殺してしまおうとは思わない。
「でも、学位審査はあくまで内容勝負です。他人の存在は関係有りませんわ」

だから、そんな心配はないとアルフェは言った。

そんな会話をしながらも伊丹の視線は、ふと白い導服を着ている初老の男でとまった。一歩踏み出したかと思えば後ずさったりと、妙に挙動が不審だが、どうやらその男性が本日最後の発表と決まったようであった。

この時、伊丹の想像力はうなりをあげて回転を始めた。横着者の伊丹だが、想像力を働かせることに関しては惜しむことはない。これまで読んできた漫画、小説、ファンフィクション等の二次創作作品群。そうしたもののなかにある様々な奇抜な発想、常識的・非常識的な知識を基に、場面に応じた状況の解釈を組み上げていく。そこに、ほんの少しばかり対テロ教育と訓練の成果を加味するのだ。

まず笛吹男（バイパー）の手口を、日本を含む『門』のこちら側の世界ではなじみ深い方法だと仮定する。

つまり嘘の、あるいは解釈の偏った情報を吹き込んで、目標とする者に被害者感情や義憤などの感情を喚起させるのだ。目標が、相手に対する感情を高ぶらせたら、最後に理性のタガをはずすような一言を注ぎ込んで背中をおす。主に一党独裁体勢をとる国家や過激派テロ組織、あるいは宗教団体などが、民衆を扇動する際に多用する手法である。人は感情に基づいて、受け容れる情報を取捨選択するから、感情を煽り立てることが第一段階なのだ。もちろん魔法を用いても良い。

「では、こんなのはどうでしょう？　貴女の研究が、誰かの研究内容とかぶっていると知らされた。例えばその相手がフラットさんで、発表の順番も彼が先。内容も彼の方が優れていたりして……」

「……さ、殺意は覚えるでしょうけど、実行に移したりはしません。わたしならきっと殴るだけで済ませるでしょう」

殴っちゃうんだ、と伊丹は目を瞬かせた。

「じゃあ、こんなのはどうでしょ？　長年苦労に苦労を積み重ねてきた研究の成果が貴女の嫌いな奴に盗まれた。しかも盗んだ相手が、その研究を自分の物として報告しようとしていることが分かった。その上で、自分の目の前に平然と立ってたりして……」

「わたしならきっと、必ず、殺します。誰が見逃してやるものですか！」

アルフェは間髪を入れず、胸を張って言い切った。賢者にとっての研究成果とは、それぐらいに大切な血と汗と涙の結晶なのだと言う。

途端、伊丹は拳銃を抜くと、思い詰めた表情でレレイの背後に立った初老の賢者に素早く歩み寄って銃口を突きつけた。

「はい、そこまでっ！　ご苦労様です。動かないでいた方がきっと幸せになれちゃったりしますよ。老い先短い人生、こんなところで終わりたくないでしょう？　まだまだ楽しいことが、これから先に待っているんじゃないかなぁ。多分だけど……」

鋭いとはとても言い難い警告であった。だが、それでも初老の男は身を竦ませていた。多分、疚しいことでもあって驚いたのだろう。そのため、手の中に隠していた小さな刃物を取り落とし、石造りの床に転がしてしまった。

「わ、儂は、儂は悪くないっ！　儂の研究を盗んだ小娘が悪いんだ！」
突然、言い訳を始めた男性に周囲からの視線が突き刺さった。
「だいたい、こんな小娘が導師号認定審査に出せるような研究を出来るはずがないと思わんかね!?誰かの研究を盗んだに決まってる！　こんな奴が大手を振ってるから、儂のような真面目に研究している者が苦労するんだっ！　いまの学会は腐っている！」
伊丹は「そう言ったご意見は、別のところでどうぞ」と言って、グレイに後の扱いを頼むことにした。「例によって騙されているだけだろうからさ、穏便に説明してあげて頂戴。ヤオ、グレイさんを手伝ってやってよ」
「承った」
こうしてグレイとヤオの二人が、初老の男を引きずっていった。
「儂は、自分の研究を守ろうとしただけなんだあ！　女なんて大嫌いだぁ！」
そんな叫び声も遠くから聞くと、何となくもの悲しく響くのであった。

結果からすると男性はやはり騙されていた。
学会の係員や、数名の老師達の立ち会いの下でレレイがどんな報告をするつもりなのかを、男性に開示したところ、彼のしていた研究とは分野も内容も全く異なっている事が判明し、意図的に誤解させられていたことを理解したということであった。

その男性はこれまでに何度も導師号認定審査に失格して来たらしい。そのため今度こそという気負いが相当に強かったのだ。また何年もかけて積み上げてきた研究にも強い自負心を抱いていた。そして女性が嫌いだという。そんなところを笛吹男（パイパー）につけ込まれたのだろう。

それは相当に巧妙な手口であった。

まず、彼の研究室に泥棒が入った。だが、これといって盗まれたものがないことに気付いて、ほっと胸をなで下ろした頃に、親切ごかした人間が、「誰かが、あなたの研究を盗みましたよ」と言って来たところから、笛吹男（パイパー）の仕掛けは始まったのである。

その親切な男は、彼の研究が盗まれた証拠を二〜三あげた（多分研究室に忍び込んで資料を盗み見たのだろう）。そして、研究成果が盗まれたことを理解させた上で「貴方の研究を、自分の物として発表しようとしている女がいる」と囁いたのである。

「儂が、その研究は盗まれたものだと申告したら、それで終わるではないか」と冷静に言い返しても、「学会での報告は常に早い者勝ちでしょう？　同じテーマをたまたま同時に研究していただけだと言われてしまえばそれで終わってしまうのではありませんか？」と返されると、男性はそれで頭に血が上ってしまい、そこから先の細かな矛盾とか、おかしなことには全く気が回らなくなってしまったのである。

「貴方に残された唯一の希望は学会の当日、発表の順番を決めるクジ引きだけです。盗人女よりも早く発表することが出来れば立場が逆になりますから大丈夫でしょう。ですから係員が買収されて

いないことを祈って下さい」

巧妙なのは完全に絶望させないことである。こんな風に希望をちらつかせながらも、猜疑心の毒を注ぎ込まれると、不安がふくれあがった人間は理性的な判断力を失っていくのだ。さらには笛吹男（パイパー）は、男性が常日頃から抱いていた自分の境遇に対する恨み辛みや、学会に対する不満などを上手く焚きつけた。そして最後の希望であったクジの結果が、自分に都合悪く出た途端、全てが仕組まれていたと妄想めいた解釈に陥ってしまったのである。

「盗人め、なんて酷い女だ！　こいつをなんとかしなければ学会は駄目になってしまう」

こうして、個人的怒りと義憤の綯（な）い交ぜになった衝動が彼を激しく突き動かし、懐に忍ばせていた小刀を握らせるに至ったのである。

そこまで聞いて伊丹は思った。

どうして、一度でも二度でも立ち止まって確かめようとしないのかなあと。

だが、感情的になった人間は、思っている以上に衝動的になっているものらしい。だからこそ感情に任せてつい、という類（たぐい）の犯罪はなくならないのかも知れない。

自分が取り返しのつかないことをしようとしていたことを知った男性は、今回の発表は諦めて次回に出直すと言って帰った。刃物を持ってレレイに近付いただけで、具体的にはまだ何も行動に移していないことが、罪に問われずに済んだ理由であった。だが、肩を落として去っていくその背中は、随分と煤（すす）けていたということであった。

＊　＊

学会は、世話人による挨拶のあと、すぐにはじまった。

次から次へと新規の発見と自称する奇妙奇天烈な報告や、学説・珍説の発表がなされていく。

そうした一般演題に挟み込む形で、博士号や導師号の認定審査があるという流れが伝統となっているようで、フラット・エル・コーダの発表はレレイの直前と指定されていた。

その前の導師号審査では、何個ものインク壺が飛び交って、壇上は赤や黄色、緑、青といった色とりどりなインクで塗装されてしまい、発表者は這々の体で逃げ出していった。その悲惨な姿を目の当たりにしてしまったためか、痩身のエルフ男は舞台裏で気弱そうに背中を丸めてがたがた震えていた。

その姿からなんとも言えない親しみやすさが感じられたので、レレイに付き添う形で舞台裏にいた伊丹は、声をかけてみることにした。緊張した雰囲気をほぐすことになればと思ったのだ。

「エルフって、師匠についたりしないって仲間から聞いたんですけど、フラットさんのような方は他にも居るんですか？」

「いや、居ないと思います。僕は、変わり者なんです。学位なんて要らなかったんですけど、同じ事を言ったとしても、学位があると説得力がありますからね」

フラットの緊張は和らいだようであった。

だがレレイの顔色は良くならなかった。伊丹の目にはいつにも増して白く見えた。日頃から色白の娘だとは思っていたが、さらに白くなる余地があるとは思っても見なかった。多分、普段はぎりぎりながらも血の気というか温もりを感じさせる風合いの肌色をしていたのだ。それが、これから発表という緊張によって白磁で出来た人形のような顔色となってしまっているのだ。

伊丹はざわめく会場内を見渡した。

すでに舞台の両袖では、テュカとグレイ、それとヤオ、ロゥリィの組み合わせで配置に着き客席の方向を警戒している。会場にまで視線を巡らせると、書海亭の小僧達（ボーイ）が客席の中に笛吹男（パイパー）とおぼしき人間がいないか目配りをしていた。彼らはノッラという女の言葉を真に受けているから、敵が会場内のどこかにいると思っているのだ。これに対してシャンディーは姿を消している。彼女は、敵が裏をかいてくることを読んで、別の場所を警戒しているのだ。

ただ困った事態も起こっていた。

それは壇上のすぐ前にいて審査をする老師方が、下手な発表をしたらインク壺を投げつけてやるぞと手ぐすね引いて待ち構えていることである。それも厳正な審査であるという建前を疑いたくなるくらいに、遊んでいる気配が濃厚なのだ。

警備する側からすると、そのインク壺と危険物の区別が出来ない。（インク壺だってたいがい危険物である）。

もし、老師方がインク壺を投げ出したら、素早くレレイを引っ込めないとならないだろう。
「大丈夫。老師方は投げない」
ところがレレイは言い切った。緊張を意志の力でねじ伏せて自信のある態度を示すのはなかなか難しいことだ。伊丹はそんなレレイが頼もしく見えてその背中を軽く叩いた。
「うまくやってくれると俺としても助かるからな。頼むぜ」
だがフラットは絶望的な表情へと逆戻りしていた。
「レレイさんは自信があって良いですね……ボクはもう、なんだか緊張で気が遠くなりそうです」
「貴方は、別に審査されるわけではないのだから、気楽に発表すれば良い」
「……そう思っても、そうはいかないのがボクの性格なんですよ」
「そんなことでは義姉は陥せない。もっと頑張って欲しい」
「あ、はい……」
フラットは未来の義妹からの言葉に素直に頷くと、掃除を終えた係員からの合図を受け、壇上へと歩いていった。

うらぶれた雰囲気のエルフ男が壇上に現れた時、会場の賢者達はまたぞろ天文屋がしょうもない理論をぶちあげるために来たかと警戒する構えを見せた。
彼は、以前の学会で、太陽中心説の弱点を補足するため「世界の中心が、太陽の周りを廻ってい

る」などとぶちあげたことがあった。
当然の事ながら会場のほとんどから罵声を浴びて退散しなければならなかった。
太陽中心説云々などよりも、世界の中心が動き廻るなどという論そのものが、姑息に過ぎると批判されたのである。それだけに今回の発表に対する視線も厳しかったのだが、フラット・エル・コーダが半時ほどかけて行った発表は、端的に言えば『なにかが、来た。そして世界が歪んでいる』と言うものであった。
聴衆である賢者達も、最初は太陽中心説に関わる話だと思って身構えていたから、拍子抜けしたようである。と、同時に「こいつ何言ってるんだろう」と、あきれ顔となった。世界が歪んでると言われても、どういう事なのかさっぱり理解できなかったからである。
「あの、馬鹿」
一番の理解者であるアルフェすらも、唾を吐くように呟いたほどだ。
「みなさんご存じのように、ボクはしょうこりもなく太陽中心説の研究を続けております。そのために天体の観測を続けていました。ですが最近、目的とは違う別の星を観測するという間違いをしてしまいました。惑星である白星と、恒星である天狐星とを取り違えていたんです」
会場の賢者達はこれを聞くと、一斉にげんなりしたような声をあげた。
天文を専門とする賢者が、星を間違うなどあってはならないことだからだ。これまでなされた発表の信憑性すら疑われる醜聞といえる。

「でも、その理由は天狐星が、不可解な動きをしていたからでした。この図をご覧下さい」

そうしてフラットは背後にある黒石の壁に、蝋石で観測の結果を図示していった。

霧月[第5]、優月[第6]……一ヶ月ごとに同時刻における天狐星の位置が、北辰星を中心にしてゆっくりと移動していくのが図示される。

これは、季節の移り変わりとともに起こることで、自然の現象であった。

雨季には雨季の空があり、乾季には乾季の空があるのだ。だが、穣月[第7]、湿月[第8]、雨月[第9]、涼月[第10]と、時間が経過するにつれて、その動きに異常が現れはじめた。本来動くべき方向とは違う方向へと引き寄せられて、ついには惑星の一つである白星の軌道と交差してしまった。

「このせいで、ボクはこの星を白星と取り違ってしまいました。間違いに気付いた私は、本来観測すべき白星を探しました。すると、こんなところにありました」

図示された白星の位置は天狐星と同様に、異常な場所に移っていた。

人を惑わすように動くからこそ惑星と呼ばれるのだが、どのような軌道をとるかは長年の観測の結果はっきりと分かっている。いくらなんでも、その範囲から大きく逸脱することなどあり得ないのだ。

「これはどうしたことかと思ってこの周辺の星の動き、ほとんど全部を記録しておくことにしました。そしてさらに一ヶ月ほど観測した上で、次のように考えました」

フラットは言った。天球を一枚の布に例えてみると、現在その布は一ヶ所を摘んで、ぐいっと引

き寄せたような状態にあると。

星々の軌跡はその皺というか、ひずみの影響によって南南西の方向に引き寄せられ、そこを通り過ぎると再び元の軌道へと戻っていく。つまり空の一部が歪んでいるかのように見えるのである。これをして、フラットは「世界が歪んでいる」と表現しているのであった。

「こうした現象が過去にあったという例は、ボクの調べた範囲ではありません。しかもこの歪み現象は日増しに強く、大きくなりつつあります。今はまだ詳細に観測してやっと分かる範囲ですが、もうしばらくすると、南南西の空では慣れ親しんだ形では星図を結べなくなってしまうでしょう」

当然のごとく、会場からは質問が飛んだ。

「それは、観測の道具が古すぎるとか、壊れているとかそういった類の間違いではないのかね？」

「確かに古いことは古いです。最新の物を買いそろえるほど、お金がありませんから。ですが、それを理由に、こんな結果が出るようなことはないと思います。もっとまとまりのないデタラメな記録になると思います」

「蜃気楼の一種という可能性はどうかな？」

砂漠や海で、遠くにある都市や島が、地平線や水平線に浮き上がって見えると言う現象は、すでによく知られて研究も行われている。

「数ヶ月間ずっと、ですか？」

蜃気楼は天候の影響を受ける。さらにそれが起こるのは温度差による光の屈曲が生じやすい海面

や陸のすぐ近くのことであり、天空で起こるとは考えにくいというのがここでの共通認識であった。同じ理由で、雲や天候の影響というのも説得力に欠けていた。

「天変地異の前触れかもと思っていろいろと調べてましたら、地揺れが起きたりしました。やっぱり、ボクはこうした一連の現象は繋がっていると思います。みなさんも是非、夜空に目を向けてみてください。もし、この現象を上手く説明することが出来たなら、ボクはこの世界の成り立ちの秘密に近付くことに繋がるんじゃないかと思っています。これでボクの報告を終わります……」

こう締めくくって、フラットは壇上を後にした。

会場からは、ごく普通の拍手が鳴り響いた。聴衆の多くは彼の発表が、極めて穏当な観測報告に過ぎなかったことに安心したようである。そのために彼の報告に含まれていた「世界の歪み」という概念が、やがて世界に大騒動を引き起こす事になるとはまだ誰も気付いていない。

「さあ……いよいよレレイの番だぞ」

伊丹が言うや、レレイは深呼吸をするとか、気合いを入れると言ったこれから頑張ろうとしている人間が見せる、いかにもなポーズを示すこともなく、すすすっと演台に近付いていった。

するとその途端、会場にいた女性が一人立ち上がって演台へと歩み寄って来る。

「ちっ……発表が終わってからにすればいいのに」

伊丹は拳銃を握りながら周囲へと合図した。見張りに立っていた小僧達（ボーイ）がしきりに「あれは大丈夫だ」と合図を送って来るから、この女がノッラなのだろう。

ノッラは小さな剣を手の中に隠していた。だがそれはある意味で打ち合わせ通りである。これが演技で、レレイは決して傷つけられることはないと信じているのが小僧達（ボーイ）で、演技にかこつけて実際にレレイを害そうとしていると考えているのが伊丹達なのだ。

「レレイが民衆から英雄視されるのが、気にくわないっていうのが暗殺依頼者の動機ならば、レレイが導師号を得て名誉を重ねる前に、暗殺者が行動を起こすのも当然と言えば当然か」

そう呟いて伊丹は嘆息する。そしてレレイは、演壇の上でノッラが寄って来るのを待った。伊丹は、女がぎりぎりの瞬間まで打ち合わせた通りに動くと見た。ゆっくりと演台に近付いて、すぐ手前から襲いかかる。だから決定的な行動を始める直前に対応すれば間に合うと考えていたのだ。

だが、ノッラはニヤッと笑うと身を低くして打ち合わせにない動きを見せた。まだ距離があると思っていた場所から跳躍するや、レレイに襲いかかったのである。伊丹はワイルドウーマンという種族の運動能力を完全に見誤っていた。

「ちっ、不味った！」

伊丹は、銃を構えた。

テュカもヤオも、そしてシャンディーも、レレイを守ろうと飛び出す。しかし虚を突かれたために、一瞬の出遅れが生じていた。無防備に等しいレレイに、ノッラの凶刃が迫った。

こうして、女の企ては成功すると思われた。そして事実としてそれは成功しつつあった。

だがノッラにとって、最大の誤算はここがロンデルの街であったことだろう。レレイが刺客に狙

われていることは、街中で噂となっていたのだ。

つまり、ノッラがレレイに向かって歩き出した瞬間から、会場の聴衆達は「おいおい、あれが噂の？」とノッラのことを刺客ではないかと疑念を持って見ていたのだ。そんな中で……それこそ会場を埋め尽くさんばかりに魔導師達がたむろしている中で、怪しげな挙動を見せればどうなるか。

四方八方から光弾、風の矢、魔法で誘導された石礫、ボーラー、チャクラム、投げナイフなどがノッラに向かって飽和攻撃に等しい勢いで放たれた。そして気が付けば、女はぼろぼろとなった姿で床に転がることとなったのである。

書海亭の小僧（ボーイ）達が慌ててノッラの下に駆け寄って、彼女を医者に診せるべく運びだしていく。

一方の伊丹達は、あっけにとられていた。自分の失敗に歯がみした直後だけに気が抜けた。そして客席に居並ぶ魔導師達を見渡してこの場では伊丹すらも瞬く間に礫死体に変えられかねないということを改めて思い知った。

「……なんて言うか、身も蓋もないなぁ」

あえて例えるならば、アイドルに悪戯をしかけようとコンサート会場に潜入した変質者が、警備員の目をなんとかごまかして舞台に近付いたが、振り返ってみたら客席にいた連中全員が実は警察官だった的な恐ろしさかもしれない。

とはいえ、こうしてレレイ暗殺は未然に防がれたのである。もし、笛吹男（パイパー）以外の刺客がこの会場に紛れ込んでいたとしても、これを見たら手を出すのを控えるに違いない。

「これなら大丈夫だろ」
伊丹は気を抜いて、舞台の袖へと戻ろうとした。
レレイを庇うべく飛び出してきていたテュカもヤオも、これからの発表を邪魔しないようにと再び元の配置場所へと戻っていった。
少し遅れてシャンディーも、レレイを元気付けるように手を挙げた。そして、おもむろにその手を振り下ろすと、レレイの胸に短剣を突き立てたのである。
「えっ？」

07

東京永田町。

話の時間軸を、伊丹達がロンデル周辺をうろうろしていた半月ほど前まで戻す。
森田内閣で外務大臣の職に任ぜられている嘉納太郎は、野地ら秘書と共に、昼食弁当を大臣執務室でとっていた。いずれは政治家にと志している秘書達は、食事中ながら嘉納のする話に熱心に耳を傾けていた。

彼らは嘉納の話をありがたがっているばかりでなく、時には反論し、時には自分の考えや意見を述べることもある。嘉納の下で働く者達の間では、何でも話し合える雰囲気があるのだ。それによって互いの考えをまとめたり、主張の利点や欠点を確認するのである。

「何で数字的には業績が上がってるのに、日本の景気が悪くなっているかって言うとだな……要するに中くらいの仕事が無いからなんだな」

「中くらいの仕事ですか？」

「そうなんだよ。経済用語をこねくりまわす連中がいろいろ言ってるが、要するにそういうことだと俺は思ってる。高度な技術とかよ、高い判断力、たくさんの知識を必要とする高給取りの仕事……それはまだ、なんとか日本に残っているよな。だけどよ、言い方は悪りぃけど別に日本人でなくったって出来るような仕事ってのもある。それがコスト引き下げのために、人件費の安い外国に持って行かれちまってるんだ。すると後に残るのは、賃金の比較的低いサービス業くらいになっちまうんだ。しかも、そんな仕事すら留学生だの外国人だのが入って来ちまってる。そりゃぁもう、仕事なんかなくなるってもんさ」

「それが格差が広まった理由？」

「改めて広まったってわけじゃないぜ。もともと格差はあったんだ。ただ、中くらいの仕事をして中くらいの収入を得ていた、いわゆる中産階級が居なくなっちまったんだ。そりゃ格差も目立つに決まってる」

「じゃあ景気回復をしようと思ったら、どうしたらいいんでしょう？」
「俺の考えじゃ、外国とあんまし仲良くしないことだ。この場合の外国ってのは中国と韓国だ。こういった国とは、企業が中くらいの仕事をさせる工場とか支店を、その外国に置くのにちょっと腰が引けるぐらいの緊張感って言うか、距離感を保つことが大切なんだよ。そうすりゃ、日本国内に中くらいの仕事が戻って来る。北条さんが総理やってた時に靖国に参拝してたのにはそんな狙いもあったと俺は見てるんだよ。ところが外国との商売で儲ける企業べったりの奴らはよ、目先の利益に飛びついて友好万歳とか言って、自分が国や国民を苦しめる選択をしちまっていることに気付いてないんだ……」
「なるほど」
「今の国家運営を分かりやすく例えるなら遊牧なんだ。牛や羊が企業で、俺たちは牧童。俺たちは日本という草原に牛や羊を誘い入れて、そこから得られる乳や羊毛、そして肉で国民を潤すんだ。だが牛や羊は、美味い草がたくさん食える余所の草原に行きたがる。逃げちまわないように囲いをしちまうのが一番なんだが……」
　経済のグローバル化というのは、この囲いを取り除くことであった。
「それをやったら牛や羊が文句を言う……ってわけですね」
「だから囲いでない方法で、牛や羊が隣の草原に行っちまうのを躊躇う状況を作る必要があるんだ。ところが後先考えずに羊や牛を全部肉にして（法人税を値上げして）国民を腹一杯にさせろって言

い出す馬鹿もいる。今の不況下でそんなことしたら、日本はきっとすげぇ衰退するぜ」
「そんなことしたら、羊や牛がみんな逃げちゃいますよ」
「だろ？　ま、実のところ企業ってのは牛や羊みたいに可愛いモンじゃないんだけどな。昔は国家がリヴァイアサン（怪物）に例えられたが、今じゃあ、企業こそがリヴァイアサンだ。俺たちは猛獣使いにならなきゃなんないんだよ」
　ではどうやって、怪物をコントロールするのか。秘書達はそれを聞き逃すまいと身を乗り出した。
　だが、話はこれからというところで、執務室の戸が激しく叩かれた。
「大臣。お食事中失礼いたします」
　参事官の一人が返事も待たずに戸を押し開け、書類の束を持って駆け込んできた。
「どうしたよ？　メシ時に慌てふためいて」
「特地からの緊急報告です。帝都で、講和派に対する一斉弾圧が始まりました」
　箸を脇に置いた嘉納は、報告書の綴りをちらと見ただけで一言呟いた。
「なんだこりゃ」
　眉間に深い縦しわを刻みこむ。
「こいつをマジでやろうってのかよ。おぷ……オプリチニン？」
「オプリーチニナです、大臣。『皇帝の主権および権威を擁護回復するための委員部会（Ougs Pri Rih Ric Chn Ivo Ni Nassen）』という言葉の現地での略称です」

「で、現地に滞在している白百合達の安全は確保されてるんだろうな？」
「はい。帝国側も我が国との協定を破棄するつもりはないようです。宿舎として提供されている翡翠宮は、ピニャ皇女の騎士団が周囲を固めて安全を確保してくれていますから、今のところは大丈夫でしょう」
「今のところは……か。いつまでアテになるか分からねえってことだな？」
「はい。ですが喫緊の問題は、講和派の議員や貴族達が続々と逮捕されているという現状です」
「現地はそんなに酷いのか？」
「はい。そのオプリーチニナ特別法の問題点は、『帝権擁護委員部』が、帝権の干犯とは何かを主観的に判断することにあります」
「言いがかりでも何でもありってことだな？」
「はい。特別法は、『皇帝の主権と権威が脅かされている状況からの回復が、全てに優先される』という解釈で、具体的な証拠がなくても強制捜査と容疑者の逮捕拘禁を許しているのです。どんな人間だって現状にちょっとした不満を抱くでしょう。強く叩かれれば、織り上げたばかりのまっさらな布だって埃がたちます。でも、この法律は、そうした悪感情すら、帝国の権威を汚すと決めつけているんです」
「その『帝権擁護委員部』とかには、中立的な人間は入ってねぇよな、やっぱり」
嘉納は自分で言いながらも、そうだったらここまで酷いことになるはずがないと思った。

「現地からの情報を総合しますと、バリバリの主戦論者ばかりのようですね。しかも過激な若い連中ばかり四百人。現在もどんどん増員中です。こんな有様ですから公平性とか中立性なんか全くもって期待できません。というより、この『帝権擁護委員部（オプリーチニナ）』のやってることは旧ソ連で猛威を振るった『内務人民委員部（ＮＫＶＤ）』と、ほとんど同じですよ」

内務人民委員部とはＫＧＢ（秘密警察）の母体となった組織である。それがどれほどの存在であったかと言うと、映画『スターリングラード』などの描写で例えると、退却して来た味方の将兵を助けるのではなく、後ろから片っ端から撃ち殺して「死にたくなければ戦え」と無理強いしたりしていた。要するに、怪しければ銃殺。怪しくなくても銃殺ということを平然とやった連中なのだ。

独裁者の多くは、この手の活動をする組織を作りたがる。例えば古代ローマのスッラはコルネーリを作って民衆派を殺戮し、ヒトラーは武装親衛隊を作った。毛沢東は紅衛兵を組織して文化大革命と称する大弾圧をやった。

「完全に恐怖政治（テロル）じゃねぇかよ。ゾルザルとかいう奴、そこまでやるか」

「はい。彼らを批判するような事を一言でも漏らせば捕まってしまいます。帝都の市民も彼らの目を畏れて家に引きこもって戸を閉ざしてしまうという状態です」

嘉納の前に帝都の風景を写した写真が、数枚投げ出すように置かれた。まるで死んだ街のように人の姿が全くない情景であった。

「こいつは酷えな」

「はい」
ゾルザルが政権を掌握してから帝都は戒厳令が敷かれているに近い状態にあったから、急にこうなったわけではない。だがそれでも最低限の人の動きはあったのだ。それが今ではこの始末。帝都の人達は今、どうやって暮らしているのだろう。それが心配になるほどだ。
「とにかく講和派の人達をどうするかです。彼らにはもう安全な場所は、アルヌスか、翡翠宮にしかありません」
「ん、何が言いたい？」
「実は、講和派の一部から匿ってくれないかという打診が……」
「駄目だぞ、おいっ！」
嘉納は机を叩いて立ち上がった。
「今、俺たちが講和派の人達に肩入れしてみろ。主戦論者はますます自分たちのやっていることは正しかったと思うようになるんだ。『ほらみろ、やっぱり彼奴らは日本と連んでやがった。売国奴は徹底的に根絶やしにしろ！』とか言うようになるぞ」
「ですが大臣、このまま見過ごせば、マスコミに知られた時に批判されますよ。アルヌスへの取材陣立ち入りも始まりますし、ここは配慮なされた方が……」
「批判のために批判する連中のことなんかほっておけ。逮捕された人たちは、まだ処刑されてないんだろう？」

「とはいえ、時間の問題です」
嘉納は唇をぐっとゆがめた。そして判断の甘い部下に教え諭すように告げた。
「中途半端な手助けは、捕まっている連中の立場をかえって悪くすることになるんだ。助けるとなったら、全員を一人残らず一気に助けなきゃならん……置き去りになった人間が、どう扱われるかを考えるんだ。それこそ八つ裂きにされてしまうぞ？」
「あっ……そうですね」
「いいか、現地にいる連中にもそのあたりのことは、ちゃんと言い含めておけよ。俺は助けるなって言ってるんじゃねぇんだ。機を窺えと言っているんだからな。それと防衛大臣の夏目さんに急いで連絡をとってくれ。救出計画を自衛隊に検討して貰わんとならん……」
「いっそのこと、帝都を占領してしまってはどうでしょうか？」
「そいつは駄目だ。今の日本にはそこまでの余裕はない。特地の安定は、あくまでも帝国に維持させる必要がある。イラクやアフガニスタンを占領したことで国力を疲弊させたアメリカの二の舞になっちまうからな。安っぽい正義感で重すぎる荷を背負って、日本そのものを危うくするわけにはいかないんだ。いいな」
「……分かりました」
大臣執務室から出ていく参事官の背中を見送りながら、嘉納はやぶにらみの顔をますます渋くして舌打ちしたのだった。

「くそっ、なんてこった」
嘉納は食欲がすっかり失せてしまい、昼食の大半を残すこととなった。

しかし帝都の情勢は、嘉納に報告されたものよりもはるかに悪化していた。
嘉納の下には多くの人間が捕らえられているという報告はなされていたが、逃亡し追跡を受けている者がどうなったかの記述が完全に抜け落ちていたからである。
外務省の官僚から帝国の内務人民委員部と言わしめた『帝権擁護委員部（オプリーチニナ）』は、おとなしく捕まる者に関しては、その場で処刑せず収監する寛容さを見せていた。だが一度抵抗したり、あるいは逃亡した者については、その本性を露わにすることを一切躊躇わなかったのである。
講和派の重鎮として知られるカーゼル侯爵は、オプリーチニナ特別法の布告直前から遠縁の家へと身を寄せて主戦論者達から身を隠していた。
帝都を脱出して、辺境にある領地に帰ってしまうという選択肢も彼にはあった。
実際、彼は家族や一族の者を使用人などと共に帝都を脱出させている。だが、情報伝達の遅い『特地』では、帝都から離れると言うことは状況の把握が出来なくなることを意味している。それでは何かあった時に素早い対応ができなくなってしまう。それを政治家としての責任放棄と考えていたカーゼルは、見切りを付ける時期を逸してしまったのである。
望んだとおり、帝都に居る限り情報だけは続々と入ってくる。しかしそれは、同僚の元老院議員

達や貴族が捕らえられたとか、追跡されているという不吉な報告ばかりであった。さらには窮乏を告げ、匿って欲しいと頼み込む悲鳴にも似た伝言すらも届く始末である。

だが、今のカーゼルに出来ることは何もなかった。彼にも辺境領主としての武力と財産があるが、それは帝都から遠く離れたところにあり、今のような時の役には決して立たない。私兵を帝都に呼び寄せることも出来るが時間がかかるし、一定の規模がなければ意味がない。そもそも皇帝の命令や許可もなく帝都に兵を呼び寄せることは反乱を起こすことを意味してしまう。

そのため、何も出来ない無力感に呵まれながら、帝国の先行きをただ憂えるだけの毎日を過ごすこととなってしまったのである。

「カーゼル様。小麦粥をもっと召し上がりませんか？」

少女が元気付けるように微笑みかけてくれた。

焦燥感が顔に出ていたのかも知れない。この心遣いに感謝できないような歳の取り方はしたくないと考えたカーゼルは、引きつっていた頬を無理矢理に笑顔の形に変えると、好々爺然とした態度で感謝の意を示した。

「いや、シェリー。君こそ食べなさい。君は伸び盛りなのだからね」

すると給仕をしてくれているこの家の令嬢は「てへっ」とはにかんだように笑った。

「わたしもちゃんと食べていますわ。ですけど、調子に乗って食べ過ぎると、おなかのあたりがぷよぷよしてきて、スガワラ様に嫌われてしまいます」

ただでさえ体型が子供だから、菅原を誘惑するのに不利なのだと少女はボヤいた。出来ることなら胸のあたりに、もうちょっとばかりふくらみが欲しいとまで言う。

帝都内の商店が戸を閉めてしまってどれほどになるか。もうテュエリ家の蓄えも少なくなっているはずなのだ。なのにこの耐乏生活を苦とも思わないような底抜けた明るさには、カーゼルも救われた気持ちになった。

「おやおや、もう食い気より色気なのかい？　随分と早熟なのだね」

「色気だなんて侯爵様ったら。乙女の純粋な恋心を、随分と貶めたおっしゃり方をなさるのですね」

「おっと、これは失礼」

「駄目です。罰としてこの小麦粥をきちんと平らげていただきますからね」

唇をとがらせたシェリーが侯爵の皿を、こんもりと粥で満たした。

その山盛り加減を見た侯爵はひょうげた表情をすると「こんなに食べられない。助けてっ！」と大仰に悲鳴を上げてみせ、皆、声を上げて笑ったりした。

「随分とよい子に育てたじゃないか？」

カーゼルはシェリーの頭を撫でながらテュエリ家の若い当主とその妻を褒め称えた。

「生意気なことで、お恥ずかしいです」

「いやいや、生意気というのは褒めてしかるべき資質だよ。若さに似合わぬ見識の持ち主という意味だからね。しかもこの子は謙虚さもちゃんと持っているよ。儂はこの賢しさこそが、明日の我が

一族を支えてくれると信じておる」
「でも、まさかこんな事になってしまうとは」
肩を落とすテュエリ家当主。だがカーゼルは、彼を元気付けるように言った。
「どんな夜も明けないことはない。暴風とていずれは去ろう。それまで耐えて生きぬくことこそ肝要なのだ。喰える時に喰って、今は力を蓄えておこうじゃないか」
カーゼルはそう言うと、腕まくりして目の前の皿にある粥の山へと匙を突き刺した。
だが突然、玄関方向から激しく戸を叩く音やわめき声、さらには悲鳴にも似た声が響いた。
「大変です！　お館様っ、『掃除夫』の奴らが踏み込んで参りましたぞっ！」
使用人の警報が耳に入った途端、二人は席を立った。
「侯爵閣下。地下蔵の排水道が外の川まで通じております。そこから裏手へ！」
「うむ、分かった。君も早く支度するんだっ！」
「はいっ！」
慌てふためいた二人は使用人らに命じて、身の回りの物をまとめにかかった。
生き延びるために脱出するならば、やはり着の身着のままと言うわけにはいかない。最低限でも金銭や衣類を持つ必要があるのだ。特に行く当てのない逃亡ならなおさらである。
すでに玄関口では、扉を撃ち破ろうとしてか、何か重たく強固な物を叩きつけるような音が響いている。

「不味いっ！　彼奴ら攻城槌なんぞ持ち出してきよった。そう長くは保たん！」
侯爵が言った瞬間に、木材がひしゃげ扉が破られる音が響いた。
たちまち無数の足音が屋敷内に進入して来る。
断末魔の悲鳴や叫びすら聞こえて、押し入って来た者達が、何をしているのか大方の予想が付いてしまった。
「侯爵、お逃げください！　シェリー、地下水道だ。侯爵閣下を先導してさしあげるんだ。いいね！」
「はい。お父様もすぐに」
「分かっているよ。母さんと一緒に行くから先に行ってなさい！」
父の言葉に頷いたシェリーは、「こちらです」とカーゼルの手を引いて地下蔵へと入っていった。
それを見送ったシェリーの父は、振り返ると妻と目配せしあって最後に頷いた。
二人はおもむろに地下蔵の入り口前に戸棚を移動させて塞ぎ、その前にテーブルやら椅子やらの家具を片っ端から積み上げ始めたのである。
「シェリーさえ生きていてくれれば、テュエリ家は残る」
「大丈夫ですわ。あの子には心強い婿殿がついてますもの」
「ああ、あの娘の男を見る目は確かだからな。彼奴は一見すると冷たそうな男だが、中身は情に厚いところがあると見た。あるに違いない。あってくれるはず。絶対、大丈夫だ」
最後に妻は戸棚の中にしまっておいた琥珀色の酒の入った瓶を二〜三本取り出すと蓋を抜いて

「あの娘の賢さは父親の教育が良かったからですよ」と言った。
「何を言う、母親譲りの器量だろう？」と答えながら、当主は火のついた燭台(しょくだい)を引き寄せる。
「だって、お前は俺を選んだじゃないか？　それが男を見る目がある証拠だ。そうだろ？」
結局は、自画自賛となっていることに気付いて、思わず苦笑しあう二人。だがそこに、無粋にも血に濡れた剣を提げた帝権擁護委員(オプリーチニキ)とそれに指揮された男達が姿を現した。
その男達は神殿の司祭と見紛うような黒い長衣をまとい、頭にはコボルトを象った兜をかぶっていた。そして獣毛を束ねた特別誂えの箒を手にしている。それは、裏切り者にコボルトのように噛みつき、国から掃き出してやるという意志の象徴であった。この姿のため彼らは『掃除夫』という卑称を民衆から授けられている。
廊下が狭いので三〜四人しか姿が見えないが、その奥にはさらに大人数が控えている様子であった。その向こうでは、身の回りをまとめるために働いていた使用人の倒れている姿が目に入った。
二人は人の姿をした死に向かって振り返ると、力みのない余裕のある態度で並び立った。
「これはこれはお客人。突然の来訪とはいったい何のご用ですかな？」
「テュエリ家の当主と、奥方ですな？」
質問に対して誰何とは随分と失礼な、とは思いつつも悠然と答えるテュエリ家当主。
「いかにも。それであなた方は？」
「我々は帝権擁護委員部(オプリーチニナ)です。あなた方には帝権干犯(かんぱん)の疑いがあります。大人しく縛について頂き

たい」
「反逆……という言葉なら知っているが、帝権干犯とはまた随分と耳慣れない響きだなあ。いったいどんなことがそれにあたるのか、後学のために教えてもらえないだろうか？」
「いや、そう難しいことではありませんよ。要するに陛下にとって都合の悪い言動は全てが帝権干犯にあたるのです」
「都合が悪いと言われてもなあ……悪口や憎まれ口をきいたことがある程度で、実行したことは一度としてないはずだが」
「それは帝国の権威を汚す行為にあたります。そのようなこと、本来ならば考えること自体が許されないのです」
「待て待てっ、ちょっと待て？　それってもしかすると『この国、いやだな』とか『嫌い』とか、不平不満や悪感情を吐くのも駄目ということになるのか？　清廉潔白な人間などいやしない。清い心で居続ける人間なんぞ見たことがない。『こいつ嫌い』とか、『あの人種は存在自体が不愉快だ』とか、思ったり口にしたりするくらいのことは誰だってあるだろう？　褒められたことでないことは承知しているが、それは内心の自由と表現の自由の範囲ではないのか？　だいたいそれって、誰がどのような規準で判断するんだ？」
「帝国の権威が汚されたという申し立てに基づいて、我々が我々の主観で判断いたします。なあに、疑いが晴れれば罰せられることもありませんから、どうぞ大人しく従って頂きたい。ただ、私的外

交ですでに有罪とされているカーゼル侯爵がいずこにおわすかだけは、力ずくでも喋っていただきますがね」

「ちなみに誰の申し立てで君たちが来たのか尋ねてもよいかな？」

「本来なら申立人の存在は秘匿されねばなりませんので、お答えいたしかねるのですが、この際ですから構わないでしょう。実は、私の申し立てです」

「やはり、そうか。取り調べるのも、裁くのもどうせお前らなのだろう？」

「はい。まさしく、その通り」

「だったら、大人しく捕まってやるのは嫌だね」

当主は肩をすくめた。

「そうですわね。一昨日出直してらっしゃいませ。わたくし、あんたみたいな不細工で図々しい男は大嫌いなの」

妻も、しつこい男の誘いを断るような表情をした。

「これは奥方まで……そう言えば、ご令嬢の姿が見あたりませんな。ご令嬢にも私的外交の嫌疑がかかっております」

娘はどこに逃げたとの問いに、二人は口をそろえて知らないと答えた。

「何分、放蕩娘なので、そのへんの男にひっかかって桃色遊戯に耽っているんだろう」

「あなた。それはちょっと言い過ぎではありませんこと？　あの子はまだ十二歳なんですよ」

「ふんっ。俺に言わせればだな、礼儀正しい挨拶があろうと、こそこそっと盗まれようと、娘が他人の物になってしまうという意味では同じなんだよ」
「まっ、妬きもちだなんて、随分と大人げないこと」
突然言い争いを始めた夫婦に、帝権擁護委員達（オプリーチニキ）は呆れたような声を上げた。
「あ、もしもし。もしもしっ!?　夫婦喧嘩は後にしてもらえませんか？」
「あら、ごめんなさい。ついお喋りが楽しくって、お客様を放り出してしまったわね」
「もう、問答は無用ということですな。我々としては、実力を行使させていただくのみです」
男達はゆっくりと夫婦に向けて歩みはじめた。
「そうそう、お客様にお飲み物をお出しするのを忘れていたわ」
「なあに、お構いなく。すぐに用事は済みますから……おいっ、お前達」
「はいっ」
すると、縄を持った男達が二人を捕らえようと前に出た。
「そう言うわけにはいかないわ。お客様にお飲み物の一つも出さなかったなんてことになったら、テュエリ家の末代までの恥になってしまいますもの」
シェリーの母は、そう言うと抱えていた瓶に入った酒精を男達相手にぶちまけていた。それは酒精度五十を越える菅原からの贈答品三本である。
酒を浴びた男達は、急激に体温を奪っていく酒精のひんやりとした感触に動揺を隠さなかった。

頭からかぶった者は目が激しく染みるらしく、顔をおさえて呻いている。
「うわっ、な、なんだこれはっ!!」
「奥方っ。こ、こんなことをしても時間稼ぎにもなりませんぞ！」
激高する男達を後目に、当主と夫人は、わずかに残った酒を乾杯するかのようにぐびぐびと飲み干していた。
「こいつは強い酒だなあ。シェリーの亭主になる男と、こういう酒を酌み交わすのが夢だったんだが……こんな事に使うなんて随分と勿体ないような気がするぞ」
「わたくしの夢は、孫を抱くことでしたわ」
「あいつの花嫁姿が見れなかったのが残念だ。まずいなぁ、俺ってこんなに欲深い男だったか？次から次へと未練が出てきて覚悟が揺ぎそうだ」
「わたくしと結婚できたことで、どうぞ満足なさってくださいな」
「そうだな。確かにそれで人生の願いのほとんどはかなった。残りの半分はこうして……」
テュエリ家当主はそう頷くと火の灯った燭台を持って前に出た。彼が何をしようとしているかを察した男達はたちまち血相を変えた。
「ま、待て。まてまて待てっ、話せば分かる！」
「ふっ、お前らの言い分など、分かりたくもないね」
そう言って当主は酒精に火をかけた。

瞬く間に広がる酒精の青白い炎。
帝権擁護委員達（オブリーチニキ）はたちまちの内に火だるまとなって悲鳴を上げた。酒精の青白い炎は、男達の黒い衣服に容赦なく燃え移ってその色彩を赤へと変化させた。
「わぁぁっ！」
「ひぃぃぃっ！　熱い！　熱い！　助けてくれっ！　火がぁぁ！」
こうして逃げまどう男達の悲鳴と、夫婦の愉快そうな笑い声が響く中で、テュエリ家の屋敷はあっという間に紅蓮の炎に包まれ、黒煙を上げはじめたのである。

地下水道は、テュエリ家当主が言うように、川縁へと繋がっており、そこから地上に出ることが出来た。さすがに帝権擁護委員部（オブリーチニナ）もテュエリ家の地下がこんなところに繋がっているとは思わなかったようで、周囲を見渡した範囲では見張りや追っ手らしい者の姿も見られなかった。
「お父様達ったら、遅いですわね。欲張りにも荷物を抱え込んで、途中で動けなくなっているのかしら」
シェリーは川縁に出たところで、両親が現れるのを待ち続けていた。
不安なのか周囲を見回したり、地下水道をのぞき込んだりを何度も繰り返している。
その傍らでは、カーゼル侯爵が別れ際に突きつけられたテュエリ家当主の目配せを、どう解釈したものか考え込んでいた。

もし、思った通りだとするならば……だが、ただの気のせいかも知れない。しかしいつまでも逡巡していれば折角二人が作ってくれた貴重な時間を、浪費してしまうことになる。だが、しかし、しかし……。

結局の所、即座に決断できるほどには非情になれなかった。

二人が姿を現すという希望を捨てられず、川岸の下草に身を潜めることにした。だがそうしている限り二人よりも先に掃除夫達がやって来るかも知れないという不安がついてまわった。そう思うだけで、ささやかな衣擦れ、草葉をかすめる風の音にすらビクついて、呼吸すら満足に出来ない有様になってしまうのだ。

そうしている内に、ついに堪えきれなくなったシェリーが腰を上げた。

「侯爵様。わたくし、ちょっと戻ってお父様達を迎えに行って参りますわ」

そう言って、あろう事か地下水道を戻ろうとした。

カーゼルは慌ててその手をのばして、少女の腕を引き留める。

「戻っちゃいかん！」

「は、離して下さいましっ。きっと、お父様とお母様が途中で難儀なさっているんですっ」

カーゼルは思った。この娘も両親の真意に気付いているのかも知れない、と。

だからこの聡いはずの娘が、不安に駆られているのだ。しかし、そうとなればなおさらカーゼルは心を鬼にしなければならなかった。この娘を託された者としては、断固として死の淵に近付ける

わけにはいかないのだ。
「戻っては駄目だ！」
「嫌です。侯爵様、お手をお離しになって下さいまし。お願いですっ、離してっ！」
「駄目だ。それよりすぐにここから逃げるんだ」
ようやくここを離れる決心をつけた……すなわちそれは二人を見捨てる決心でもあるが、カーゼルは、シェリーの小さな身体を担ぎ上げた。
年老いた身だが、こんな小娘一人抱えて歩くぐらいは訳がない。だが、必死に抵抗されるとやはり抱え続けるのは難しく、途中で何度も取り落としそうになった。
「お父様っ！　お母様っ！」
「これっ、静かになさいっ！」
カーゼルは何とか宥めようと試みた。だが、かけるべき言葉が思いつかない。
こんな時だというのに「静かになさい」という、頭ごなしの言葉しか出てこないのである。年の功ほどに、気の利いた言葉の一つも思い浮かばない自分に、ほとほと嫌気がさしてしまった。
そんな中、屋敷の方角から黒い煙が上がりだした。それを目撃したシェリーが絹を裂くような悲鳴を上げた。
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！　お父様！　お母様！」
「なんて事だ」

カーゼルも思わず立ちすくんだ。
「侯爵様、わたくしを降ろして下さいませっ！　お父様とお母様があ！」
「駄目だ。ご両親は、君を助けるために犠牲になってくれたのだぞ！　二人の気持ちを無駄にしてしまうつもりかっ！」
「そんなの嘘ですわっ！　だってお父様は、すぐに来るって言ってましたもの！」
激しく暴れるシェリーをいよいよ担ぎきれなくなった。
カーゼルは娘を地面に放り出さないためにも、一度降ろさなければならなくなった。
ところが娘は、地に足を着けた途端に駆け出そうとする。カーゼルは必死になってそれを引き留めた。
「駄目だ。戻っては危ない！」
「嫌です。嫌ですっ、離してください。お父様っ！　お母様っ！」
カーゼルはついに手を挙げた。
シェリーの頬を力一杯張った。叩くしかなかったのである。
「聞き分けなさい！」
その痛みと衝撃で、シェリーは地面に倒れ込み、放心したように頬をおさえる。
「さあ、来るんだ」
無理矢理手を引いて少女を立たせるカーゼル。シェリーは、操り人形のようになって老人に牽か

れるままに、ふらふらと歩いた。
「うっ、ううっ……」
「泣くなっ！　鬱陶しいっ！」
「うっく、ひっく……」
こんな時に少女一人すら勇気づけられない自分が皇帝を輔弼し、民衆を導く政治家であるという。だがたった一人を救えずしてどうして国を救うことが出来るのかとカーゼルは絶望に呵まれていた。

＊　＊

テュエリ家の火災は、その日の夕刻に自然鎮火した。
石造りの建物だったのが幸いして、隣近所に飛び火することもなかった。だがその分、内部は酷い姿となっていた。まだ空気の熱い建物内に踏み込んでみると、そこには竈の中を覗き込んだような光景が広がっていたのである。
屋内の漆喰や家具といった調度品、階段や天井の羽目板、カーテンといったものが燃え草となって激しく燃え上がったのだろう、煙と煤で燻された内壁は真っ黒である。床一面には燃えカスの瓦礫と炭化した木材が散らばって、その隙間に家具だったのかそれとも人間であったかと判別に迷うような物体が転がっているという惨状であった。

それは、見る者に火災というものの恐ろしさを、まざまざと見せつけるものであった。

そんな瓦礫の山を帝権擁護委員達（オブリーチニキ）は、あるはずのない生存者、そしてあり得るかも知れない逃亡者の手がかりを探すため掘り起こしていった。そして、かつての仲間とこの屋敷の住人であったろう者達の亡骸（なきがら）と確信できる物体を見つける度に、運び出した。だがどう見ても、生前の姿を想像できるような手がかりは残っていない。そのため、ことごとくを一緒くたにして弔うしかなかったのである。

そんな作業の果てに、男達は地下水道への入り口を発見した。しかしその時点で、この屋敷に踏み込んで、すでに半日が経過していた。ここから逃げおおせた者がいたとして、今から追って果たして捕らえることが出来るかは甚だ疑問である。

次期法務官ルフルスが皇太子の代理人を伴って部下達の働きを督励するため、現場へとやってきたのは地下水道が近くの川に繋がっていることが確認された丁度その時である。

「カーゼルらは、おそらくここから逃げおおせたに違い有りません。ただちに追跡いたします」

これから追跡するという帝権擁護委員部長（オブリーチニナ）にルフルスは告げた。

「もう遅いでしょう。カーゼルがこの先でのんびり待っていてくれると思うのですか？」

「あ、いえ、ですが万が一ということも……」

「君の拙劣な現場指揮によって、あたら優秀な委員達を失ってしまいました。しかも、講和派の首魁（しゅかい）を逃がすという失態までついてます。委員部長、この責任をいったいどうとるつもりですか？」

「ま、まさか、テュエリ家の者が家に火を放ってまで抵抗するとは考えておりませんでして」
「講和派の連中全員が腰抜けだと思ってたのですか？　相手は、腐っても帝国貴族なんですよ。誇り高い自死を選ぶ者もいるでしょう。その意味ではテュエリ家の当主と細君の最期は実に見事でした。尊敬に値します。立場が違えば友と呼びたいほどです。それに比べて今の君はどうです？　言い訳ばかりで何の結果も出していない。随分と見下げ果てた態度ではないですか？」
「し、しかし法務官殿。私も多くの講和派を捕らえました。すでに六十五家を捜索、二百六十三人を拘引いたしました。それを何もしてないとおっしゃられては……」
「数の問題ではないのよ。重要人物の消息こそが大事なの」
脇からテューレが口を挟んだ。
皇太子の代理人として振る舞う彼女の口調は、冷たく突き放すような響きがあり、その一言一言が見えない刃のように皆に迫った。
「ディアボ殿下は今いずこ？　講和派の首魁（しゅかい）カーゼル侯爵は、何故まだ見つからないのでしょう？　誰かの怠慢がこの事態を招いたとしか思えません。口では調子の良いことを言いながらも、内心では殿下に叛意を持つ者がいるのでしょう。わたしの耳は見ての通りとても大きくできています。この中に怠慢な態度をとっている者がいたら、ほんのちょっと囁いて下さるだけで充分ですから、皆様もご協力をお願いしますね」
テューレはくすくすっと微笑みながら帝権擁護委員会（オブリーチニキ）達を見渡した。

「た、怠慢な者はいません。皆、責任感をもって鋭意捜索中です！」
ルフルスは緊張に縮もうとする背筋を、無理矢理引き伸ばすようにして姿勢を正した。
「その責任感とやらの証明をお願いしたいわね。できれば目に見える形で」
テューレの突き刺すような視線を感じてか、ルフルスは緊張に身を震わせ額に脂汗を流す。
次期法務官と言えば大臣に次ぐ帝国の要職のはずである。執務室にて部下の官僚に仕事を任せ、文句さえ言っていれば良いような立場なのである。にもかかわらずルフルスは、皇太子の愛玩奴隷に過ぎないはずのテューレを恐れ敬って現場で冷や汗をかいていた。
ここに彼の立場と、テューレの立場の実情が現れている。今や帝国では、皇太子ゾルザルにどれだけ近い立場にあるかが全てを決めるのだ。
「貴方達のことを殿下に報告しなくてはならないのは、とても残念なことよ」
嵩にかかったようにテューレは告げる。それは追い込み、挑発し、嗾けるような物言いだった。
「お、お待ち下さい、テューレ様」
ルフルスはテューレに縋るように言っておいて、帝権擁護委員部長へと振り返って迫った。
「がっかりさせないでくださいっ！　君にも家族がいるのでしょう!?」
「あ、いや、しかし法務官殿。でも、その」
ルフルスは噛んで含めるように告げた。
「よく考えてものを言ってくださいっ。自分にとって大事なものは何なのですかっ？　君の決断如

何によっては、累がどこまで及ぶかを考えなさいっ」
「……わ、わたくしが……わたくしが責任をとりさえすれば、か、家族は？」
「大丈夫。殿下は戦いの中で倒れた者を無碍（むげ）に扱う方ではありません。あの方が憎まれるのは卑怯者と、責任を果たさない者だけですっ」
ルフルスはそう言うと懐から短剣を取り出すと、鞘ごと委員部長の胸に押しつけた。
委員部長は当初は自分が何を押しつけられたのか分からないような表情であった。
ゆっくりと手中の剣を見て、そして鞘を抜いて刀身を見つめて、自分が手にしている物の正体をようやく悟ったようだった。
やがて、震える手でその刃先を首へと押し当てる。
そこまで見ると、テューレはもう興味を失ったとばかりに背を向け、ルフルスへ問いかけた。少し離れたところで何かが倒れ伏すような音がしようとも、気に止めるそぶりすら見せない。
「今、あなた達に課せられた責任は、侯爵閣下を追うことです。違いますか？　違わないですよね。ですから追うべきです。なりふり構ってはいけません。責任感の有無が問われているのですからね……」
「は、はい。そうです。た、直ちにっ」
ルフルスは振り返ると帝権擁護委員（オブリーチニキ）達を集めると、自分が命令を翻訳して伝達するだけの立場でしかないことを証明して見せた。

「どうやって、侯爵と娘を捜すのですか？　誰か提案しなさいっ。早くっ！」
ルフルスの発言の末尾はどこか悲鳴めいて聞こえるほどに変調していた。
必死に叫いていると言っても良かった。その、せっぱ詰まった気分が感染したのか、委員達も血相を変えて、何かを言わなければならないとばかりに次々と口を開いた。
「た、直ちに追跡します」
「手ぬるい。何か具体的な提案をしなさいっ！」
「賞金をかけて密告を奨励します」
「それはすでにやっていますっ！」
「もっと賞金を高く！」
「ならばそうしなさいっ！」
「一族の者を捕らえて、見せしめにしましょう」
「カーゼルの家族は辺境の領地にいますっ。今から兵を送って何日かかると思っているのですかっ？　それに帝都にいた奴の一族の、ほとんどが法の施行前に逃散してしまいました。残っていたのがテュエリ家だけだったのですよっ！」
「では、その一族を追いましょう！　他にも帝都の外に逃げた者がいるはず。そういった連中も含めて全てを追うべきですっ！」
委員の中で、比較的年若な青年が一歩前に出た。

「ず、随分と手間のかかる話ですね」
「ですが、何もしないでじっとしているよりマシです」
「君がやるのですか？　よろしい、帝都の守備隊から一隊を割いて行きなさい！」
「はいっ！」
追跡を提案した男は、この場から逃げ去る口実を得たかのように、勇躍して出かけていった。
「さぁ、残った君たちはどんな提案をしてくれますか？」
「帝都を虱潰しに探します」
「だから、それをどのようにするのかって尋ねているのですっ！　もっと具体的に言いなさいっ！」
問われた男は、懐から帝都の地図を引っぱりだした。緊張しているのか、かさかさと手が震えていた。
「こ、これをご覧下さい」
皆が寄って来てその地図を覗き込んだ。
「このテュエリ家の屋敷から出ている地下水道は、プロム川に繋がっていました。そこで、プロム川の川岸から二リーグ以内にある道路、路地を全て封鎖し、その範囲にある全ての家屋を片っ端から調べていきます」
「そんなことに割ける人員があると思うのですか？　いったいどれほどの家を探さなくてならないか分かって言っているのですかっ？」

「いえ、実際にはそれほど多くは必要としないはずです」
「どういうことですか？　話してみなさい」
「包囲網の一ヶ所をわざと手薄にしておきます。家屋の捜索も街に騒ぎを起こすだけで、実際にはいちいち手間をかけて捜索したりしません。フリだけです」
「な、なるほど。家屋の捜索は獲物を燻すための煙ということですね」
「はい。カーゼルらは今、信頼できる隠れ家を持っていません。ですから包囲の手薄な部分に必ず姿を現すでしょう。この計画ならば、必要なのは封鎖に必要な戦力だけなので、帝都の守備隊をこぞって動員するだけで充分なはずです」
「君の名は？」
「はっ！　ギムレット・ジン・ライムと申します」
「ギムレット君、大変に具体的で良い提案でした。素晴らしい。とても素晴らしい。今から君を委員部長に任命します。君の権限と責任に置いて、その計画を実施しなさい」
「あ、ありがとうございます」
それを見ていた比較的年輩の委員の一人が手を挙げた。
「失礼ですが、ルフルス次期法務官閣下。よろしいでしょうか？」
「なんですか？　建設的な意見であることを望みます」
「あ、いえ、あの、その……川から二リーグですと、その、あの……ひ、翡翠宮が入ってしまいま

すが、よろしいのでしょうか？」
「あ？　ああ、そんなことですか。気にする必要はありません。そこはピニャ殿下の騎士団が警備しています。我々も近付けませんが、カーゼルらも近付けませんよ」
委員は狼狽えながらも続けた。
「しかし、その騎士団に助けを求められたら……」
「騎士団に引き渡しを求めればいいだけでしょう？」
「女どもが素直に渡しますか？」
「渡さざるをえんはずです。オプリーチニナ特別法は、元老院の可決を得て陛下の名代たる皇太子殿下より公布された帝国の法律なのですから。従わなければそれは反乱になります」
「提案します。見張りを配置してはいかがでしょう？」
「君が志願するのですか？」
「は、はい。わたしが張り付いて、騎士団の動向を見張ります」
「提案を承認します。では仕事にかかってください！」
こうして、帝権擁護委員の男達は再び動き始めた。恐怖に煽られるように、追い立てられるかのように。
全ての差配を終えたルフルスはおそるおそるテューレの顔色を窺うように振り返った。
だが彼の目には、つまらなそうにしているテューレが高熱に焼かれて歪んだ酒瓶を、つま先で弄

びながら、ぶつぶつと何か独り言を呟いているように見えるだけであった。
もう少し近付けば、それが独り言ではなく誰かとの会話であることに気付けたかもしれない。だが迂闊に近付くことも許されない雰囲気がテューレの背中にはあった。
「ボウロ、そばにいて？」
瓦礫の向こう側から陰湿そうな声が低く響いた。
「はい、何でありましょうか？」
「事態を面白くしたいわ。後は言わなくても分かるわね」
「逃げる獲物に追う猟犬。花壇を踏み荒らし、テーブルをひっくり返す大騒動ともなればさぞかし愉快なことでしょう。かしこまりました、骨を折ってみましょう。くひひひひっ」

一方、テュエリ家を脱出したカーゼルとシェリーの二人は、人気の全く失せた帝都の住宅街の、しかも裏通りばかりを選んで歩いていた。
ただ、歩き続けてはいるものの、実際にはどこを目指すという具体的な目的を持っていなかった。逃げ延びるために何をするという指針もなかった。ただ、一ヶ所にとどまっていれば人目を引く。だから歩いているのだ。誰かと出会いそうになれば角を曲がり、後ろからついて来る気配を感じれば、道を曲がってやり過ごす。その繰り返しをひたすら機械的に続けていた。
その為、ぐるぐると同じ所を何度も回っていた。兵士が見張りに立っている大通りを避け、四つ

辻を避けると自然にそのようになってしまうのだ。

帝都を脱出すべきなのは分かっていた。出来るならばそうしたい。だが帝都を守る城壁は、こんな時は檻ともなるのだ。どこへ逃げても結局は檻の中。捕らえられて行くところとの違いは狭いか広いかだけ。ならば捕らえられるのも一興かと、疲れ果てた心が思ってしまう。だが実際の牢獄よりも帝都の方がはるかに大きく、少なくとも自分のこれからを自分で決めることが出来る程度には可能性があるのだ。

「いい加減疲れたわい。シェリー、君は大丈夫かね？」

カーゼルは、ずうっと黙り込んでしまっている少女の機嫌をとるかのように話しかけた。

「君が言ったように、あの時、ちゃんと食べておけばよかったな。さすがの儂も腹が減ってきたぞ、わっはっは」

これまで少女は、老人がいくら呼びかけても、応える素振りを全く見せず、導かれるままにただ歩き続けていた。まるで意思そのものを失ってしまったかと思うほどである。

「仕方あるまい……」

両親をあんな形で亡くしたのである。しかも、悲しむ暇もないままにこうして逃げまわっている有様だ。これで元気いっぱいな姿を見せられれば、そっちの方が心配になってくる。考えるのは大人である自分がすればよいのだ。歩いてくれているだけでもよしとしなければ。

カーゼルは老骨に鞭を打つと周囲を見渡した。

日もだいぶ傾いて来ている。そろそろ、どこかに隠れ家を得て腰を下ろしたかった。
「さて、どうしたものかな」
「まずは食べ物を手に入れましょう」
驚いたことにシェリーが、カーゼルの呟きに答えてきた。
これまでずうっと意思を示さなかった少女が、口を開いて語りかけてきたのだ。
「わたくしも、お腹が減りましたから。とにかく食べ物を食べて力を蓄えませんと」
「そうは言っても、儂は先立つものを持ち出し損なったぞ」
カーゼルは、今まで黙っていたシェリーが突然しゃべり出したことに戸惑いつつも、騒ぎに動転して、財布を持ち出し損なったことをうち明けた。
それに帝都では食べ物が不足している。商店は軒並み閉まっており、お金があっても買えるという状態ではないのだ。
そんな状況でいたずらに歩き回って体力を消耗させてしまったことに呆れてか、シェリーは困った子を見る母親のような面持ちとなった。親指の爪を齧りながら首を軽く傾けて思案する。
「では、市井のみなさんに頼んでみましょう」
思いついたように手を打ったシェリーはカーゼルから手を離すと、そこいらにある中産階級の民家の戸をかたっぱしから叩いていった。そして家人を呼び出し、食べ物を分けてもらえないかと丁寧に頼みはじめたのである。

最初の十軒は「分けてやるほどの蓄えはないよ」とけんもほろろに断られたが、十一軒目で「いくらだす？」と色を見せた家の主人がいた。
「これでいかがでしょう？」
シェリーは菅原からもらった真珠の首飾の糸を切り、真珠を二つ抜き取って差し出した。
「耳飾りなどにされると奥様にきっと喜ばれますわ」
男はシェリーの小さな掌で輝く白い珠を見て首を振った。
「これっぽっちじゃだめだね」
こんな小さな真珠一個でも、金貨一枚以上の価値がある。だが、食料価格は高騰しているようであった。
「では、四つでは？」
「それ、全部と交換ならいいよ」
男はシェリーの首飾りそのものを要求した。
それを聞いたシェリーは、たじろぐどころか目を輝かせて警告した。
「全部差し上げるのはかまわないのですが、そういたしますと、きっと家庭内の不和の原因となりますわ」
「なんでだい？」
「首飾りはこの大きさですから、わたしのような子供の首にしか合いません。奥様は大人の女性な

のでしょう？　首にかけるには最低でも……そう、あと十個は真珠が必要となりますわ。しかしお宅様ですと、買い足すためには相当のご無理をなさらなければならないのではありませんか？」
「そうだな。だが、そういうことならそこから二個だけ取り出して耳飾りにして、残りは売っちまえばいい。どうだ、良い考えだろう？」
男はとても素晴らしい名案であるかのように誇らしげな表情となった。
だがシェリーも負けない。意地悪そうな笑みを浮かべて応じた。
「ところが、それが出来ないのが女の欲目というものなのです」
「ん？　何でだ？」
「二個を耳飾りにして、残りを売って日々の暮らしにあてると考えられるのは殿方だけなのですわ。女は、どうしてもあと十個あれば首にかけられると考えてしまいます。あと十個。あと十個と目の色を変え、時にはそれで人柄が変わってしまうほどですのよ。そしてその為に、お尻を叩かれるのが誰になるかを、どうぞご想像下さいまし」
「う、う～む」
シェリーの言う光景を正しく想像したようで、男は身震いしてみせた。
「最初から二個しかないということでしたら、奥様も耳飾りで満足されることでしょう」
「だ、だったら、妻には見せないで隠しておけばいい。どうだい、この考えは？」
苦しげに言い返す男。だがシェリーは目を丸くして恐ろしいとばかりに両頬をおさえた。

「まあ、もっと大変！　想像できますわ。誰にも見つからない場所に隠して置いたはずなのに、それがいつの間にか机の上に。そしてその傍らには腕を組んで睨み付けてくる奥様が立っておられます。その第一声は『どこの誰にこれを贈るつもりだったの？　私にはたった二つしかくれなかったのに！』」

「わぁぁぁ、お願いだ、止めてくれ！」

実際に聞こえたわけでもないのに、男は妻に怒鳴られたかのごとく青白い顔色となって頭を抱えた。

「どうやら似たような体験をなさったことがおありのようですわね」

「悪かった、悪かったからそれ以上言わないでくれ」

「きっとお金に換えておいても、同じような事がおこりますわ。これだけのお金をどうやって手に入れたのか、何に使うつもりなのか。あるいはすでに何に使ったのか？　それはもう、過酷なまでに責められることを請け合いますわ」

「俺の女房なら間違いない。当たってる。その通りだ、その通りのことがきっと起こる」

「ですから申し上げるのです。四個……いえ、せめて五個で我慢なされませ」

「何故に五個？」

「一個はあなたのお小遣い。そして四個を奥様にお見せなさい。そして今はこれだけしかないけれど、いつか首にかけられるほど集めてお前に贈ってやるとおっしゃいなさい」

「俺の稼ぎだと、あんまり現実味がないぞ……」
「現実味がないからこそ良いのですわ。途方もない夢だからこそ、過剰に期待されることもなく、それでいて奥様も心から喜ばれるのです」
男は、夢の果てに現実を見る生き物だが、女性は現実の中で夢を見る生き物だ。冷静に現実を見てその味気なさを知っている。だからこそ壮大な夢を持つ男を「せいぜい頑張りなさい」と可愛がってしまうのだ。しかもそれが自分のためと言うことであれば、どうして心憎く思うだろう。
「お、お嬢ちゃん。あんた歳いくつだ？　見たところ随分若いようだが」
「十二歳になりました」
「その歳でそれって、末恐ろしいな……お嬢ちゃんの旦那になる男が可愛そうになってくるぜ。って言うかあんまし老獪過ぎると相手が見つからないぞ」
「ご安心下さい。わたくし、もう貰い手は決まっておりますので」
「そりゃ剛毅な話だ。さぞ、肝っ玉の太い奴なんだろうなぁ。……分かった。お嬢ちゃんの言ったとおり五個で手を打とう」
男は、いったん家の中に引っ込むと抱えてきた食料を袋ごと渡してくれた。
シェリーも真珠を五つ、男に手渡すと深々と頭を下げてお礼を言い、もらった袋の中身を検める。
「あら、これはニホン語……」
中に入っていたのは自衛隊の戦闘糧食であった。オリーブドラブに塗装された外面に黒字で、『ク

ラッカー食』と書かれ、他に栄養成分などの表記が列んでいる。
「ん、あんたその字が読めるのか？　実は俺はなあ、翡翠宮で下男（フットマン）をしている。そこに滞在している賓客が頼み込むとそいつを分けてくれるんだ。それで少しばかり食べ物に余裕があるってわけだ。でなきゃ、何をどれほど積まれても食い物を分けてやること何てできなかったよ」
「ニホンの方々はご無事なのですか？」
「無事も何も、翡翠宮はピニャ殿下の騎士団が完全に警備しているからな。あの中にいる限りは平和なもんだぜ」
「そうでしたか……」
シェリーは安堵したように頷いた。それを見て何を思ったのか、男は余所の方に視線を向けながら言った。
「……嬢ちゃん」
「はい、何でしょう」
「警備の交代は、朝と夕刻の二回だ。騎士団のお姫様達は、どうも堅苦しいところがあってな、交代式なんて大仰な儀式をその都度やってる。その時の警備が、俺が見ても分かるほどにおろそかになってるんだ」
一瞬の空白の後にシェリーは深々と重ねて頭を下げ丁寧にお礼の口上を述べた。そしてその民家をあとにしたのである。

「帝都を出さえすれば、何とかなると思うんじゃよ。どこかの村か集落で、馬と食料を求めて領地に戻ってはどうじゃろうな？」

民家に部屋を借りて、シェリーが仕入れてきたクラッカー食に入っていたビーフハムステーキを喰い千切りながら今後の身の振り方を提案するカーゼル。

シェリーは、クラッカーで頬をリスのように膨らませながら問い返した。

「侯爵様の御領地は遠いのですか？」

「帝国は広大だからな。馬で旅しても三十日ばかりはかかるのう」

「そんなに遠くでは、とても路銀が続きませんわね」

シェリーは首飾りとは言えなくなってしまったわずか数個ばかりの真珠を握りこんだ。

最初は、路傍で休憩をとりながら食事をしようとした。だが食料不足の折に街中でそんなことをすれば、家族に我が子にと食料を探し求める者の殺気だった視線を集めてしまう。そのため慌てて民家の戸を叩き、真珠数粒と食料の半分を差し出すことで、一夜の宿をどうにか借り受けることが出来たのである。家の主が信用できるかどうかは、もう、賭であった。

「……これからそんな遠くまで行かなくてはならないというのに、今のわたくしたちは一～二リーグ四方の狭い範囲から出られません」

「儂らは、包囲されているのだな」

「あのお掃除係りのお役人達は、きっと広げた網を引き絞って参りますわ」
「うむ。そうだろうな……だがどんな方法だと思うかな？」
「もちろん、実際に網をかけているわけではありませんから、多分どこかにわたしたちを追い込もうとすると思うのです」
「なるほどな、儂らを燻り出そうとするということか。どんな方法かは知らぬが、道理にはかなっておるな」
「きっと、どこかに逃げ道を開けてあるはずですわ」
「なるほど、そこで奴らが待ち伏せをしているというわけか」
カーゼルは深々としたため息をついた。それをやられたら、例え罠だと分かっていても飛び込むしかないと気付いたからだ。自分たちは、いつの間にか絶体絶命の窮地に追いやられていたのだ。
シェリーは言った。
「侯爵様。亡命いたしましょう」
「だがどうやって？　たった今、帝都の城壁を越えられないと言ったばかりではないか。儂の領地は遠いが、国境となるともっと遠いのだぞ」
「いいえ。実は今、この帝都の中に外国がございます」
「何を馬鹿な事を」
「いいえ、本当ですわ。外交協定によって守られた翡翠宮の中はいわば外国。帝国のいかなる者も

その内部には手を出せません」
「驚いた。その翡翠宮に逃げ込もうと言うのかね。しかし、ニホンの使節が我々を快く迎え入れてくれると思うのかね？」
「スガワラ様のお情けにお縋りします。今のわたくしたちには、もうそれしかありません」
カーゼルは、「ああ、あの男か……」と呻いた。
「彼に非常に迷惑をかけることになるよ」
「このシェリーが、生涯をかけてお尽くしすることで、罪滅ぼしをいたします」
「きっと、そればかりでは済まないよ。多分、たくさんの人に迷惑をかける。迷惑なんて言葉では済まないほどの騒動になるだろうな」
「侯爵様。わたくしはこれでも結構腹黒な娘なんです」
「ほほう、腹黒とな？」
「スガワラ様にお近付きになろうとしたのだって、没落気味だったテュエリ家をなんとか盛り上げようと思ったからですの」
「うむ、その歳からすると驚くほどのしたたかさだな」
「ニホンという国と帝国の間に立つことで、美味しい思いが出来ると思っていましたわ」
「それはある意味で正しかったな。こんな事態にならなければ、外交で重きを置く地位を得られただろう」

「でも、そのせいでお父様とお母様が……」
「それは違うぞ。儂が匿って貰っておったからだ」
「いいえ、侯爵様がおいでにならなくても、お役人様達は我が家に参られたと思います。あの方達はニホンの方々と仲良くしている者が気に入らなかったようですから」
「確かにそうだな。儂は別段仲良くしていたつもりはなかったのだがな……」
「この腹黒な娘は、今、こう考えております。お父様とお母様の仇をどうやってとろうかと」
「掃除夫の奴らを相手にか？」
「いいえ、もっと大きなものを相手にです。でも、大きなものを相手に戦うからには、大きな力が必要となります。それを引き入れるにはどうしたらいいかと考えておりますの」
「……随分とはた迷惑なことだの」
「ええ。大きな力は、繊細な気配りは難しくて玉石も含め様々なものをうち砕いてしまいますから。けれど、皆様にはそのとばっちりを甘んじて受けていただきたいと思うのです」
「我々に……いや、君にそんな権利があると思うのかね？」
「いいえ。でも仕方ありませんわ。だって、わたくしここで終わってしまいたくありませんもの。まだ十二歳、あと七十年くらいは生きて、ありとあらゆることを見て聞いて味わって楽しもうと思っておりますの。そのためには、何としてもここを切り抜けて見せます」
「掃除夫の奴らが第一に捕らえるべきは、君だったかも知れんな」

「わたくしも歴史に学びました。いつだって生き残るのは、正しい者ではなく戦う意思のある者だけです。平和には戦ってつかみ取る平和と、服従し奪われ続ける平和のふたつがありますわ。犠牲と罪に手を汚すことを恐れ、戦うことを厭う者は永遠に奪われ忍従を強いられるのです。口を開け、誰かが餌を運んで来てくれるのを待つだけの弱虫は、結局は滅びるのです。それが大自然の摂理ではありませんか？　それとも人間の社会だけが特別なのでしょうか？　わたくしはそうは思いませんわ。ですからわたくしは進んでこの手を血で汚します。とばっちりで迷惑をこうむられる方のことなんかも、もう気にいたしません。もし、後になってわたくしを咎める方がいらしゃいましたら、わたくし殊勝に謝って見せて、裏で舌を出すつもりです」

「分かった。その罪、儂も背負おう」

「これによって状況は大きく動くことになりましょう……きっと」

うつむくようにして静かに自らの決意を語るシェリーの姿を見て、カーゼルは視線を逸らすことが出来なかった。

「シェリー。儂は君に謝っておきたい」

「何をですか？」

「あの時、君を叩いてしまったことだ」

「いいえ。あれは致し方のないことだったと思っています」

「だが……」

「あれで、わたくしは覚悟を決めることが出来ました。わたくしにはもう、子供のように泣いている時間はないのだと悟りました。ご心配をおかけしましたが、もうわたくしは大丈夫ですわ。ですから謝っていただかなくてもいいのです」

カーゼルは、臍を噛みたくなった。

この少女に子供であることを許さなかったのは自分である。状況がそうさせたとも言えるが、自分がそれに荷担した一人であることは言い逃れようのない事実であった。

ただでさえ、子供らしさに欠ける利発な子であったのに、わずかばかり残っていた子供っぽさすら無理矢理に切り捨て、大人になることを急かされている。しかもとてつもない存在へと変貌しつつある。それが、痛ましいことのようにカーゼルには感じられたのである。

夜半過ぎ、シェリーは寝ぼけ眼をこすりながら寝台から身を起こすと。側で寝ているカーゼルをゆさゆさと揺すった。

「侯爵様、侯爵様」

しばらくするとカーゼルは不機嫌そうな声を発した。

「どうしたね。まだ暗いじゃないか。もう少し寝かせて置いてくれぬかのお？」

「それどころではなくなりましたわ。あの音が聞こえませんか？」

耳を澄ますと、遠くから銅鑼や太鼓を叩くような音が近付いてくる。それは森や山で狩猟する際

に獲物を追い立てる勢子のものによく似ていた。
「あ、あれは」
耳を澄ましたカーゼルは、呆れるように呟いた。
「儂らは灰色熊じゃないんだから、街中でやるようなことでもなかろうにのう」
「ですが、ものすごく効果的ですわ」
シェリーはそう言うと胸を押さえた。
「すごくドキドキいたしますもの。とても落ち着きませんわ」
「ああ。とてもじゃないが、居ても立ってもいられんわい」
一軒一軒丁寧に家捜ししているわけではないだろうから、二人には戸を閉ざして隠れるという選択肢もある。だが、それは隠れ家の主に信頼が置ける時だけに選ぶことの許される方法であった。このまま籠もっていれば、恐慌状態に陥った家の者に密告されるおそれが強い。家の者だけでなく近所の者も疑う必要が感じられた。
「逃げることにいたしましょう。家の方には気付かれないようにしませんと……」
シェリーとカーゼルは荷物をまとめた。とは言っても着の身着のまま飛び出してきた二人だ。わずかばかりの食料の残りを手に取ったに過ぎない。
音は、西の方角から近付いてくる。つまり獲物を東へと追い立てようとしているのだ。
「まっすぐ北へ抜けて翡翠宮に参りましょう」

「翡翠宮に行くなら、警備に隙の出来るという交代式の時にしたかったのだがなぁ」
「致し方ありませんわ。こうなれば行き当たりばったりしかありません」
こうして二人は、家人を起こさないように静かに戸を閉じ、街の暗がりへと消えていった。
だが、この気遣いは無用だったかも知れない。と言うのも、二人が騒ごうが何しようが、この家の主は、それを苦にすることもない状態となっていたからである。
家主は手配書を握りしめた姿で血だまりの広がる床に倒れ伏していた。その様子から察するに、二人の存在を密告しようとして何者かに背後から刺されたのだろう。
血に濡れた剣を提げた影達が、暗がりから二人の出立を見送ってほくそ笑む。
「さぁ、派手に踊って下さいな。これでいろいろと面白くなりまする。ぐひひひひひひ」

＊　＊

「あの音はなにかしら？」
当直指令用の大天幕から顔を出したボーゼスは、視界に入った立哨中（りっしょうちゅう）の不寝番に尋ねた。
「ボーゼス様……」
気を取り直して、素早く敬礼して声を張り上げる不寝番。
「北一号天幕前、不寝番第四直、兵卒マーク、立哨中。異常を報告いたします。騒音は、西方から

聞こえて参ります」

翡翠宮周辺は庭園を含む充分な広さの敷地があって、すぐに街並みに接しているわけではない。にもかかわらず街での騒動が聞こえてくるのだから明らかに異常事態と言えた。

「兵卒マーク。わたくしの責任と権限で貴方の立哨勤務を一時解きます。仮眠中の当直幹部全員に呼集をかけなさい。その終了後に現行任務に復帰。復命は当直下士官へ」

「は、はい」

持ち場を離れて走っていく兵士。

ボーゼスは翡翠宮の庭園に張られた天幕の群れを見渡し、少なくとも騎士団内には動揺がないことを確認した。動いている者と言えば動哨中の不寝番くらいである。

やがて、主立った幹部の騎士達が指揮所天幕へと集まってきた。アルヌスで語学研修の傍ら、情報活動に勤しんでいるパナシュにかわって、白薔薇隊の隊長職を継いだヴィフィータも姿を現して全員が揃ったことになる。

「みんな、夜半に起こして申し訳ないけれど、あの騒動が何か調べなさい」

するとヴィフィータが「すでに、斥候を放ったぜ」と答えた。

「助かるわ。なにしろ帝都中が不穏状態だから、暴動が起きたとしてもおかしくなかったの。とりあえず仮眠中の当直者は全員待機させてちょうだい。それと状況如何によっては兵士全員に非常呼集をかけます。何か質問は？　ありませんね、では待機を……」

ボーゼスはそう指示してから、テーブルの籠に積まれた柑橘に手を伸ばした。
最近の彼女を見ていると、籠に山盛りにした黄色い柑橘の実を、皮ごと噛っていることが多い。指揮所天幕内にその香りが漂って、見ている者の口まで酸っぱくなりそうなほどであった。
それを見ていた、十四～十五歳の士官候補の少女達がおずおずと話しかけてくる。
「ボーゼス様。最近、柑橘を随分とたくさんお召し上がりになっているようですが」
「ええ。なんだか無性に酸っぱいものが欲しくなるようになったのよ」
ボーゼスは、親指についた柑橘の汁を、ぷっくりとした唇でちゅぱっと舐めると、さらなる一個に手を伸ばした。
「ま、まさかと思いますが……」
「どうしたのかしら？」
「いえ、その、あの」
言葉に窮してしまった年下の少女達を前に、不思議そうに首を傾げるボーゼス。それを見ていたショートヘアの麗人ヴィフィータはざっくばらんに言った。
「この子達は、お前が妊娠してるんじゃないかって気を揉んでるんだ。そんなことあるわけないのになぁ、あはははははははは」
「妊娠……そうかもしれないわね」
「あはははははって……え!?」

「えぇぇぇぇぇ!?」
女性達の驚愕の声が天幕内に響いた。
「ボ、ボーゼス様！」
「そ、それは大変。どういたしましょう！」
「何が大変なのかしら？　おかしな事を言うのね。わたくしとて女よ。妊娠の一つや二つしたとしても別に変じゃないでしょう？」
「いやいやいや、俺たちが言っているのはそう言う問題じゃないから」
「じゃぁ、何が問題なのかしら？」
「とにかく、お姉さまにはすぐにお体をお休めになっていただき……こんな軍務についてる場合ではありません。すぐにお湯を沸かしませんと」
「それより医者です。お医者を呼びましょう」
少女達はまとまりに欠けた言動で右往左往を始めた。
お湯を沸かしたり、医者を呼んだりしようとは、まるで今すぐにでも陣痛が始まると勘違いしているかのようである。要は慌てて混乱しているのである。ボーゼス懐妊という話は彼女達をそれほどまでに動揺させたのだ。
「お前達、落ち着け！」
ヴィフィータの言葉に、ボーゼスも頷いた。

「そうよ、お腹も膨らんでないのだから産まれるとしても……」ひぃふぅみぃと指折り数え「七～八ヶ月は先の話よ」と冷静に告げた。
「いやいやいやいやいや、それもそうだが、お前はもうちょっと慌てたらどうだ？」とヴィフィータ。「問題はお前が未婚だということなんだぞ。あ、相手はいるのか？」
「当然よ。神々の一柱が降臨されて臥所（ふしど）に忍んで参られたということもなかったから、妊娠したならちゃんと相手があってのことよ」
「だ、だから！　その相手が問題だと言ってる。あれか？　やっぱりあの男なのか？　確かトミタとかいう馬の骨」
「ええ。身に覚えがあるのはあの方だけだもの。他に考えようがないわ。それと付け加えておくけれど、あの方は馬の骨ではありませんからね」
「頼むから少しは動揺しろよ！」
ヴィフィータはボーゼスの肩を掴むとがくがくと物理的に動揺させた。ボーゼスの豪奢な金髪縦巻きロールが、ふあっさふあっさと舞い上がるほどの勢いだった。
「ちょっと止めてちょうだい。だいたい何故動揺しなければならないの？　こういう結果になっても良い覚悟で、あの方に身を任せたというのに。わたくし達の関係は遊びではないのよ」
「なおさら不味いだろう！」
「言わないで下さる。わたくし、いまとても嬉しい気持ちなんだから。そうだわ、わたくしの今の

このふわふわとした感覚は……これが、幸せということかもしれないわね」

単に頭を揺すぶられて、眩暈しているだけだという話もある。

「うわああ、誰か何とかしてくれ！」

ヴィフィータは同僚の脳天気ぶりに頭を抱えた。

「ヴィフィータ様、こ、ここはおめでとうございますと、祝福申し上げるべきところなのでしょうか？」

「いや、不味いだろう、やっぱり。イグルー家の娘としていいのか、それで？」

「いいの。一時は、望まない相手に身を任せる覚悟すら固めたこのわたくしが、『この方』と心に決めた方の子を授かったのだもの。これを幸せと呼ばずして何だと言うの？　もし父上の不興を買うということならば、わたくし、家をも棄てる覚悟です」

「ま、た、えっ……」

「す、素敵……」

これをボーゼス病と呼ぶならば、周囲にいた少女達は一瞬にしてそれが感染したようで、揃って夢見心地の表情となった。

「報告します」

そんな中、突然、天幕が開かれて斥候の兵士が報告に入ってきた。

「あの、不味かったですか？」

だが、何か男として踏み込んではいけない場所へと立ち入ってしまったような居心地の悪さを感じたようである。斥候長は左右をきょろきょろと見渡しながら、戸惑ったように問いかけていた。

「いえ、そのままに……わたくしの話はここまでにいたしましょう。お待たせしました、報告を聞くわね」

兵士の報告によると、西側から近付いてくる騒動は、掃除夫連中が逃亡者を追い立てるために起こしている騒ぎだというものであった。その騒ぎの包囲網にこの翡翠宮もすっぽりと包まれているという状況らしい。

「今夜の当番隊はどこだったかしら？」

「私の隊です。お姉さま」

団長代理となって全体を統括しているボーゼスに代わって、現在の黄薔薇隊の隊長職には彼女の妹分にあたるニコラシカが就いていた。

「では、ただちに、黄薔薇隊全部に非常呼集。臨戦態勢を整えて警戒を厳になさい。ヴィフィータの白薔薇隊はそのまま休ませておきます。多分、長丁場になるわよ」

ボーゼスの命令が発せられると、それまでの弛緩した雰囲気は一気に消し飛んだ。

士官達も、つい先ほどまで黄色い悲鳴を上げていた見習いの少女達も、顔つきを凛々しく引き締めると弾かれたように動き出した。

「黄薔薇隊非常呼集！　第二種装備にて、非常呼集！」

下士官の叱咤する声が響いて、飛び起きた兵士達が装備を身につけながら天幕からぞくぞくと姿を現す。騎士団は、もともと辺境で活躍してきた歴戦の古参兵が楽隠居できる場所と思ってやって来るところでもある。それだけに個々の練度は非常に高く、夜半の呼集程度では混乱など微塵も起きない。瞬く間に兵士達は整列して陣容を整えていった。

08

翡翠宮は、帝国における迎賓館的役割を果たすために、帝都内でもかなり広い土地を敷地として割り振られていた。正門アーチをくぐった者は、しばらく進むと森を切り開いて芝生を敷いた広場の中央に、石造りの瀟洒な建物が建っているという風景を見ることになるだろう。

土地の不足によって、人間がひとり横になれるわずかな隙間があれば、そこに家を建ててしまう悪所街の住人達からして見ると垂涎ものの環境と言える。森の中には、小さな泉や小川などもある。そして野鳥や野生の小動物などが棲息していてちょっとした自然公園のようだ。この雰囲気を身近なものに例えるなら、コンクリートジャングルの中にある緑のオアシス、『新宿御苑』や『日比谷公園』が近いかも知れない。

だが、国賓やそれに準ずる者の宿舎にあてるという存在目的から見ても、そこは市民がちょっと

した楽しみのために立ち寄れるという場所ではなかった。それどころか敷地内に入り込めば警備兵に追い払われるか、捕らえられてしまう。だから付近の住民達も、翡翠宮をかこむ森林の外縁部をなぞるように歩くぐらいにしか、その自然環境の恩恵にあずかれなかったのである。

だがシェリーとカーゼルの二人は、翡翠宮をとり囲む森の中にあえて踏み入っていた。

二人の行く手を阻んだのは予想通り、ピニャの騎士団である。

まだ、東側の空がうっすらと明るくなり始めた頃合いでしか無いというのに、翡翠宮正門へと通じる道はいかめしい完全武装の騎士団兵によってがっちりと固められていたのだ。

それならば、脇道から森を抜けて敷地内に入ったらどうかと思ったが、こちらも槍や剣を携えた兵士達があちこちに散らばって巡回しているという厳重さである。

「う〜む。ピニャ殿下の騎士団は儀式専用、女子供の兵隊ごっこと、楽隠居を決めた古参兵の集まりだと聞いていたが、こうして見る限りは馬鹿に出来んなあ」

見れば、こんな時であっても騎士見習いとおぼしき少女が、老練の下士官と一緒に巡回し、目の配りどころや気配りの仕方などについて指導を受けている。

少女から指図を受けている兵士達の視線も、まるで娘や孫を見守るかのようで、些細な間違い程度には目くじらも立てず、それぞれで要領よく修正するような言葉をかけたりしていた。

少女達の方も、身分の差を鼻にかけることがない。戦場経験の深さで適うべくもない古参兵らの言葉にじっくりと耳を傾けていた。

だからだろう、右を見ても左を見ても、騎士団の警備には隙らしき物がないのだ。これでは監視の目をかいくぐって翡翠宮に近付くというのはとても無理である。やはり交代式を待たねばならないかと、カーゼルは大木の幹に隠れながら呟いた。

「侯爵様。こうなったら堂々と名乗り出て案内していただくしかないと思いますわ」

下草に隠れるようにしゃがみ込んでいるシェリーが言う。

「なんだと？」

「身を潜めて近付くのが無理でしたら、それしか方法がないと思います」

「名乗り出てどうしようというのかね？」

「翡翠宮に用があってやって来た……では駄目なのでしょうか？」

何でこそこそする必要があるのかと、真剣な眼差しで問いかけるシェリーである。

「いや、確かにそうなのだが、それで通してもらえるだろうか？」

「何も騎士団の方々は、翡翠宮を封鎖なさっているわけではないのですから、お仕事や用件があって参られる方には、通り抜けるのを許してらっしゃると思うのです」

「確かにそうだろう。だが儂らの訪問を認めてもらえるとは思えんがなあ」

「それを決めるのは、ニホンの方々なのでしょう？　ですから堂々と名乗り出れば、とりあえず取り次ぐくらいのことはしていただけると思うのですけれど」

「それもそうか……確かにそうだな」

カーゼルはシェリーの言葉の正しさを認めた。そして少女とともに後へ戻ると、翡翠宮正門へと向かう道に出た。

そこで身なりを軽く整え、二人列んで、こそこそすることなく進む。そして、門を封鎖している騎士団の一部隊に片手を上げながら堂々と歩み寄った。

こうなると警備兵の対応も、怪しい者が近付いて来たから不審尋問するというものではなく、丁寧な物腰になる。カーゼルの身なりが薄汚れていても、高位の貴族の物であったことも幸いしていた。

「翡翠宮は、現在皇帝陛下の勅令に基づいて立ち入りが制限されております。役務上お尋ねいたしますが、どういったご用件でおいでになられたのでしょうか？」

「うむ、お役目ご苦労。儂は元老院議員のカーゼルだ。ニホンからおいでになっておられる使節殿に、極めて重大な用件があって参った次第だ」

「カ、カーゼル侯爵閣下でらっしゃいますか……こんな時間に、お付きの方もなくお嬢様とお二人だけでいらしたのですか？　お乗り物は？　護衛もなしですか？」

対応に出た兵士は、きょろきょろと周囲を見渡してカーゼルが乗ってきたはずの乗り物やお付きの人員を探した。どうやらシェリーのことをカーゼルの娘と勘違いしたようである。

「うむ。何分（なにぶん）に急を要する上に、街中があの騒ぎであろう。なのでこのような有様となってしまったのだ。申し訳ないが早急に取り次いでもらえるとありがたい」

「は、はい。直ちに上官に報告いたしますので、しばしお待ち下さい」

こうして伝令の兵士が息せき切って走り出すことになった。
そしてしばらくすると迎えの女性騎士がやって来た。どうやら正々堂々と名乗り出るという試みは正しかったようである。こうして二人は、先ほどまで通り倦ねていた警戒線を、まんまと越えることに成功したのである。
翡翠宮まで残りあとわずか。
騎士団の内懐に入ってしまった今、掃除夫の奴らに不意を襲われる心配もなくなった。そのおかげだろう、冗談を言い合うような精神的な余裕すら生まれていた。
饒舌になったカーゼルは、案内の女性騎士にいろいろと尋ねた。
「現在、騎士団の指揮をとっているのは代行と言ったのう？」
「はい。ピニャ殿下は、現在皇城におられますので」
「団長代行は、今誰がしているのかな？」
「ボーゼス・コ・イグルー騎士長です」
「ほほう、イグルー家の娘御がのう。立派なものだ」
やがて指揮所天幕前まで来ると、女性騎士は少し待つようにと告げて、入り口をめくって中の誰かと言葉を交わし始めた。
その間、シェリーの視線は、翡翠宮の建物に釘付けになっていた。今立ってるこの場所も厳密に言えばもう翡翠宮の敷地なのだ。だが、騎士団の兵士達の警備している姿から察すると、どこかに

目に見えない線があるかのようである。兵士達はそれを守っているのだ。
今、シェリーが立っている場所と、翡翠宮を隔てる境界線とは何だろうか？　どこだろうか？
シェリーはそれを探して、周囲を見て回った。
「おっと、お嬢さん、そこから前に出ては行けないよ」
すると、槍を立てて直立不動状態にあった四十代半ばぐらいの兵士が、シェリーに声をかけてきた。人形のように直立不動であったものが突然動いたため、シェリーは「きゃっ！」と驚いて尻餅をついてしまった。
兵士はシェリーの手を取って立たせてやりながら説明した。
「そのあたりからが翡翠宮。いわば国境だな」
シェリーは、兵士が槍先で指し示した天幕から翡翠宮に向かって数歩のあたりを目を皿のようにして見た。だが線らしきものはどこにもなくて、シェリーは兵士の言っていることがしばらく理解できなかった。
「線なんかいくら探したって見つからないさ。帝国とニホンとの間の協定を実施するにあたって、このあたりを境界って、便宜的に決めただけのものだからね。一応、芝生が始まるところからが、向こう側ってことになってる」
「そうですか。ここからがニホンなのですね」
シェリーはそう言って、大地の色が、土色から芝生の緑へと変わる境界線を見た。

兵士は便宜的に決めたと言ったが、それでもこの線を越えた向こうは帝国の法すら届くことのない別世界と定められている。帝国の法によって脅かされているシェリーにとってはこの線こそが最も頼りとなる防壁だ。そしてそれが今、目の前にある。これを越えてさえしまえば、自分はもう安全なのだ。そう思うだけで、今すぐにでも走り出してしまいたい気持ちが湧き上がって来た。実際、前触れも見せずにいきなり走り出せば、この兵士の横をすり抜けていくことも容易いことのように思われるのだ。

だが、そんなシェリーの思惑は目の色にはっきりと表れてしまっていたらしい。だからだろう警備の兵士は念を押すように告げていた。

「そこから先には行かないようにしてくれよ。俺たちの仕事は、許可のない者にこの線を越えさせないことなんだからね。その為だったら何をしてもいいって言われているくらいなんだ。この意味、分かるよね。許可が無いかぎり駄目なんだ」

「ええ、分かりますわ」

シェリーは嘆息するように頷いた。すると背後から声がかかった。

「シェリー！」

振り返ると、カーゼルがシェリーを待っている。

その向こうでは、ここから入れと言わんばかりに女性騎士が、天幕の入り口を開けていた。

ボーゼスは二人に歩み寄ると、まず椅子を勧めた。
カーゼルとシェリーの二人は、腰を下ろしたことで安堵できたのか、ホッと肩の力を抜いた。これまで気を休める暇もなかったのだろう、「このまま眠ってしまいたいほどだ」とカーゼルはこぼした。
「ご無事でなによりです」
「ああ儂はどうにかな。だが家の者のほとんどがちりぢりになったり、殺されてしまったよ」
従卒の少女が差し出す飲み物に礼を言って手を出すカーゼル。その姿はここ数日で、十年分は老けてしまったように見えた。その一方でシェリーはと言うと、自分とほぼ同じ年齢の少女が従卒とは言え軍務に就いている姿を見て、興味津々の表情をしている。
「ところで、ご希望のニホン使節への取り次ぎの件ですが、伝令に出した者が戻って参りました。残念ながら先方からのお答えは、『お会いする理由がないのでお断りする』というものでした」
「……にべも無し、か」と肩を落とすカーゼル。
「やはりニホンに亡命されるおつもりだったのですか？　先方はそれをだいぶ警戒されているようでしたけれど」
「分かるかね。もしかするとこれが初めてではないのかな？」
「ええ。これまでにも、保護してもらえないかというお話の取り次ぎを何度かいたしましたので」
「その様子では、どうやら成果の方は芳しくなかったようだな。ちなみにそうした者達は今どうし

ている？」
「掃除夫の目に触れない限りは、帝都の外まではなんとかご案内できますが、そこから先は、それぞれの才覚でなんとかしていただくしかありませんが……」
「そうか。ならば、儂らもお願いできないか。あの騒ぎを抜けるのは儂らには無理だ」
耳を澄まさなくとも獲物を追い立てる勢子の音が、聞こえてきている。獲物を逃走に駆り立てようとするあの音に、自分から近付いていくほどの胆力はもうカーゼルにはなかった。
「帝都の外までよろしければ……見つからない限りにおいてはですが」
もし、見つかれば引き渡しを求められるだろう。そうなれば応ぜざるを得ないのが騎士団の立場なのだ。
「それで充分じゃよ」
これまでは帝都の外に出ることさえ難しかったのだから、それが叶うなら充分であるとカーゼルは思った。だがシェリーはそれでは満足できない。伝令の一往復だけでは日本側との交渉がきちんとなされたとは到底思えなかったからである。断られたと言うが、それは果たして菅原の意思なのだろうか。そもそも、自分の名前を出してくれたのだろうか。もし菅原が自分が来ていることを知ったならもう少し違う反応があってしかるべきなのだ。
「あの、その、せめてスガワラ様とお会いできないでしょうか？」
「シェリー嬢、あそこは外国なのだ。無理を言ってはいけない」

ボーゼスの隣に立つヴィフィータが窘めるように言った。
「ですが、わたくしがここに居ることをお知らせすれば、スガワラ様は受け容れてくださるかもしれません」
「ほう、たいした自信だな。スガワラ殿と君はいったいどんな関係なのだ？」
「ス、スガワラ様は、いずれわたしの夫になられる方です」
「……」
カーゼルが肩をすくめ、ボーゼスは薄笑みを浮かべ、ヴィフィータは呆れたように問い返す。
「なんだって？」
「ですから、わたしの夫です」
幼い少女が将来の夢を語るのはとっても微笑ましい。だがそれに振り回されるとすれば大人としてはいささか迷惑めいた気持ちになる。さらに命がかかっているような場面で、そんなあやふやなものを頼りに動いているとすれば、「あそこにオアシスがある」と地図も見ずに適当に見当をつけ熱暑の砂漠の深奥部に突き進むようなものである。咎めて、なんとしても止めさせねばならない。
「君、歳はいくつだ」
「十二歳になりました」
「それはいくら何でも早婚過ぎるだろう」
この世界で成人とみなされる年齢は、十五歳からだ。

「それは、当事者がどう思うかで、周りの方がとやかく言うことではありませんわ」
「確かに我が帝国ならそうね。だけど、ニホンでは確か女子は十六歳を過ぎなければ結婚できないことになっているわ。あの国にはそういう法令があるのよ」
アルヌスでの語学研修中に、故あって日本の婚姻制度について調べたボーゼスは、得た知識をここで披露した。だがそれは、かえってシェリーを頑なにさせるだけであった。
「そういうことならば、正式な結婚は十六になってからにすればよいだけです！」
ここまで強行に言い張られれば、ヴィフィータとしても動かざるを得ない。動いて事実を確認するのだ。そして少女に現実を突きつけてやらねばならない。
「分かった。そういう話なら、スガワラを名指しで交渉してくればいいんだな」
「お願いできるかしら？」
ボーゼスの依頼にヴィフィータ騎士長は気軽に応じて腰を上げた。
「ああ。大した手間ではないからな」
こうしてヴィフィータは、伝令使として翡翠宮へと赴いたのである。まだ日の出もこれからの、薄明の頃合いであった。

そんな時間であっても翡翠宮内の白百合副大臣をはじめとする外交官、そして武官達は、すでに目を醒まし情報の収集と分析作業をしている。というより、ここしばらくはほとんど満足に休みを

取らずに仕事を続けていた。ゾルザルが政権を掌握して以来、帝都が不穏な空気に包まれていることは、この翡翠宮に籠もっていても充分に感じ取れていたし、オプリーチニナ特別法施行が、事態をただならぬ方向へと推し進めることは、その条文を読みさえすれば嫌でも理解できるからだ。

実際、帝都内に広げた自衛隊の情報網は、帝権擁護委員（オプリーチニキ）による逮捕拘禁が、血の粛清のレベルに進みつつあることをリアルタイムで報せて来ていた。特に昨日ぐらいから彼らの追捕（ついぶ）は誰の使嗾（しそう）によるものか、狩猟とも見まがうばかりとなっている。おかげでこれまで積み上げてきた講和成立への努力が、地響きを立てて瓦解していく音が聞こえるような気分であった。

「ああっ、これじゃもう平和的な講和締結は無理かも知れない」

「なんとかならないかねぇ。それじゃあ、拉致犠牲者の返還交渉すら出来ないぞ」

菅原は大きく舌打ちし、やけくそになったかのように声を上げた。

「折角の俺たちの努力もこうして政治屋連中の決断が遅いせいでご破算だよ。せめて講和派を匿うとか救出するとか、帝都侵攻するとかしてくれないかな？　日本と帝国は戦争中なんだから、爆撃しようが砲撃しようが問題なんかないんだし」

「お、おい、菅原」

同僚の警告に菅原は口を噤んだ。ここにも政治家の代表たる白百合がいるのだ。

白百合は苦笑して「かまいませんよ。愚痴ぐらいで目くじらは立てません」と言った。だが気まずい気配に覆われたのは確かである。だからだろう、菅原は同僚に振り返ると言った。

「本省にもう一度連絡をとってみてくれないか……」

だが返ってきた答えは相も変わらず「軽挙を控えるように。待機せよ」というものであった。

もちろん、一人救えば、二人を救わねばならなくなり、二人救えば四人、五人と際限なく増え、それが帝権擁護委員（オブリーチニキ）を刺激して状況がますます悪化するという理屈は理解できる。だが、それでも手を差し伸べたいと思って苦しむのが人の心なのだ。それが故に、彼らの目には嘉納や総理の森田が果断さに欠けるように見えて、悪口の一つ二つ、吐きたくなってしまうのである。

そんなところに翡翠宮を警備する騎士団から連絡が入った。

連絡と言っても電話を引いているわけでもないから、伝令の騎士が直々にやってきて口頭で用件を伝えることとなる。毎日、定時に行われている業務連絡ならばそんなこともないのだが、不意にやって来る場合のほとんどが、亡命希望者の到来を告げるものであった。

こんな時、菅原達は多少無理してでも電話回線を引かせておけば良かったと後悔する。

相手と視線を交えながら依頼を断るというのは、当の本人を相手にするわけでないにしても相当の精神的重圧を感じるからである。それが命に関わることならばなおさらで、伝令としてやってくるヴィフィータ嬢が、ことさらに伝令役という冷淡な態度に徹してくれていなければ、救いを求める知り合いを見捨てることによる罪悪感は、きっと、仕事を放り出したくなるだけでは済まないものとなったはずである。

ところが珍しいことに、今朝に限ってヴィフィータ嬢は続けざまに来た。しかも菅原を名指しし、

伝えたい用件があると言う。菅原は同僚達が見守る中、ヴィフィータに席を勧めながら、自分もその向かいの椅子に腰を下ろそうとした。
「どうしました。また亡命希望者ですか？」
「いや、ついさっき亡命依頼をお伝えした者の件だ」
「それならば、すでにお断りしたはずですが」
一度断ったはずの話を蒸し返すなというささくれ立った気分が、彼の口調をいささか強いものとさせた。
「カーゼル侯爵は講和派の重鎮でいらっしゃる。こちらとしてもお助けしたいのですが、本国政府からの通達は相変わらずです」
ところがいつもなら「そうですか」と素直に引き下がるヴィフィータも今回ばかりは反発するかのように口調を強めて返して来た。
「だが、侯爵の同行者から重ねて頼んでみて欲しいと、たっての希望でな……スガワラ殿を名指しで伝言を言付かっているのだ」
その時、窓の外から少女の声が響いた。
「スガワラ様！　シェリーでございます！」
思わず腰を上げ外を見やる菅原。
「スガワラ様！　シェリーが参っておりますっ！」

窓の遠く向こうに、翡翠宮を警備する兵士達とシェリーらしき少女の姿が見えた。ここにいる誰もが彼女のことは知っている。捕虜帰還を祝う席で、上手な日本語を操って歓迎の言葉を述べたシェリーは、ここにいる皆から好感を集めていたのだ。それだけに皆の視線が菅原へと突き刺さった。

「俺が持って来たってのはさ、彼女からの伝言なんだ」

「シェリーから、ですか？」

「ほう？　あながち嘘ってわけじゃないってことか」

ヴィフィータは驚いたように目を丸くした。少なくとも、シェリーが口にしていた菅原との個人的な関係云々が、全くの夢想で構築されたものではないことが証明されたのだ。少なくとも知り合い以上の関係であることは間違いがなさそうだと理解できた。

「彼女が言うには、スガワラ殿は彼女の夫になられる予定だとか？」

「まさか」

菅原としてはそう答えるしかない。

事実、そんな約束をしたこともないし、期待させるような言動も、絶対にしないようにしてきたからである。

するとヴィフィータは物分かりが良さそうに頷いた。

「いや、大丈夫だ。別に貴兄が彼女を騙したとか、責任をとらなきゃいけないようなことをしでかしたとは思ってない。俺にもあれぐらいの歳の頃に経験があるんだ。思い込みがつい暴走しちまう

ってことがな。ちょっと優しくされただけで、頭の中がすっかり桃色お花畑になっちまったりするんだよ。俺なんか、守って貰ったりとかすると駄目だったな」

過去の甘い体験でも思い起こしたのか、ヴィフィータはうっすらと頬を赤らめて、「ふふふ」と微笑んだ。

「ご、ご理解いただけて幸いです」

菅原は安心したのか、ため息をついた。だがヴィフィータは唇をぐっと弓形に引き寄せると告げた。

「けどよ……」

そうしている間にも、ひたすら少女の声が明け方の翡翠宮に響いている。

「それでも、何のきっかけもないところで思い込みが暴走するってことは無くてな。あの娘にそう思いこませるような言動が、貴兄に無かったと言えるか？　分かっている。貴兄は、あの娘に指一本触れちゃいないことは分かってるんだ。だけどよ、それがかえって始末に負えないんだよ。自分が大切にされてるって思っちまうからな」

ヴィフィータはそう述べると身を乗り出して菅原を見据えた。

「あの娘はそう思い込ませてくれたあんたの優しさに縋って一途にここまで来た。文字通り命賭けって奴さ。どうだろう、ここは一つ男としての甲斐性って奴を、見せてやってくれないかなぁ」

これには、菅原も堪えた。

亡命の希望を断るということは、相手の命を断つことだからだ。それに加えて、彼女が自分を慕

う気持ちを抱いているのには、自分にも相応の責任があると指摘されてしまったのだ。
これまでは外務省の役人として、組織の一員として、『上からの命令』という言葉を免罪符に、菅原は思考し行動してきたが、個人として、男としての甲斐性を見せろと言われてしまっては、国益を楯にして逃げることも許されない。
「それが出来ないなら、目をつぶって耳を塞いでてくれ。いずれ諦めてどっか行く」
「どっか？……どっかとはどこに？」
「さぁ。……目を閉じて耳を塞ぐからには知る必要のないことだ。違うか？」
菅原の問いにヴィフィータは甘えるなとばかりに身を引いた。背もたれにぐっと身体を預けて、天井を眺めている。
「スガワラ様！　せめて、せめてお声をお聞かせ下さい」
まぁいい。ヴィフィータは、そう呟いて腰を上げた。
そして、肝心の伝言を伝えるのを忘れてたと言って、シェリーの口上をそのままに語り聞かせた。
「ご迷惑をおかけすることは重々承知しておりますが、ぜひお情けをかけて下さいませ。それが駄目なら、お前なんか知らないからどこになり行けと、言って下さいませ。そうすれば諦めもつきます……だとよ。ホント、健気だよねぇ」
これで用件は終わったとばかりに立ち去っていくヴィフィータ。
だが菅原は、見送りのために戸口に近付くことが出来なかった。戸口に近付けば、そこからシェ

リーの姿が見えてしまうからである。彼女に姿を見せることにもなる。
「お願いです。お顔をお見せ下さい！」
シェリーは、騎士団の警備網の外から、母鳥を呼ぶ雛鳥のように声を張り上げ続けていた。幼い彼女だが、その声は意外なほどによく響く。
菅原は、今すぐにでも止めさせたかった。そんな声を張り上げていれば、きっと弱った獲物をつけ狙う猛禽を引き寄せてしまうことになるからだ。
だが遅かった。
帝権擁護委員部（オブリーチニナ）の男達がその不吉な姿を現したのである。

「ボーゼス様」
天幕に伝令兵が入って来て団長代行に耳打ちした。
「なんですって？　掃除夫達の一隊が？」
「はい、数にしておよそ百。カーゼル侯爵とシェリー嬢を引き渡せと参られました」
予想を越えたその早さに、ボーゼスは「少し早すぎないかしら？」と爪を噛んだ。
「おそらく、ここは監視されていたのでしょう。怪しげな人影を見たという報告もありました」
「仕方ないですわね。代表の方をここにお通しして頂戴」
ボーゼスはそう指示すると、カーゼルを振り返り残念そうに告げた。

「侯爵閣下。帝都より外にお連れすることも適わなくなってしまいました」
カーゼルは「ああ、聞こえていたよ。随分と仕事熱心な奴らだ」と両手で顔を覆った。そして、そのまま額から頭、後頭部へと擦り上げて頭を抱える。
「掃除夫達のやりようは、いささか偏執的に過ぎるように思えますわ」
「奴らには奴らの事情があるのだろう。儂等が斟酌すべき事ではないがな」
すると天幕の入り口が大きく開かれ、帝権擁護委員部の部長ギムレットが数名の部下と共に姿を現した。天幕内を見渡し、カーゼルの姿を見つけ「ふふん」とほくそ笑む。
「これはこれは侯爵閣下。ここにおられましたか？　お探しいたしました」
「儂は探して欲しいなどとは思ってもいなかったがな」
侯爵のつれない態度に肩をすくめた部長は、今度はボーゼスに歩み寄った。
「お手柄ですぞ。これでピニャ殿下に対する、ゾルザル殿下の覚えもめでたくなることでしょう」
ボーゼスは「ピニャ殿下の？」と首を傾げた。ピニャの名が出てくる理由が分からないのだ。
「ええ、そうです。ピニャ殿下のお立場は大変微妙なところにあるのです。貴女方の振る舞い一つで、危険な状態に陥るほどに……」
それを聞いたボーゼスは顔色を青くすると身体を小さく震わせた。
「殿下がわたくしのせいで危険に……」
その姿を見たギムレットは、自分が発した言葉の威力を確認し、「そうですよ」と満足げに微笑んだ。

「ところで、先ほどよりぴぃぴぃと雛鳥の鳴き声が聞こえておりますが、あれはいったい何をしているのですかな？」
「ひ、翡翠宮に、お会いしたい方がいるのだそうです」
「なるほど。そして、その相手に無視をされていると。不憫ですな」
委員部長は大仰に同情するような表情を見せた。
それを見たカーゼルは、下らないとばかりに鼻を鳴らす。
「あの娘も、自分の親を殺めた奴らには同情されたくなかろう」
「我らも、多くの同志を失いました。その恨みをここで晴らそうとしない自制心を褒めていただきたいぐらいだ」
委員部長はカーゼルの前まで進み出ると席を立つよう慇懃な態度で促した。
「致し方あるまい。どうやら、これまでのようだ」
ピニャを人質にとられてしまったボーゼスは、黙って見ているしかない。
「殊勝な態度ですが、どうせならもっと早く諦めて頂きたかった。えらく手間がかかってしまいました」
委員部長は部下にカーゼルを連行するよう合図した。
こうして帝権擁護委員達はカーゼルを連れて天幕を出た。
外では、芝生ぎりぎりの手前に立ったシェリーが何度も何度も声を張り上げていた。その姿は、

親からはぐれた子供が泣き叫んでいるかのようにも見えた。あまりにも大きな声を出し続けていたために、喉はすっかり嗄れて、その顔は路傍に捨てられた子犬のように頼りなく、その目からは涙が溢れていた。

傍らには、彼女が境界を踏み越えないように、兵士がぴったりと張り付いている。

帝権擁護委員（オプリーチニキ）の一人がシェリーを捕らえるために近付いて、「さぁ行くぞ」とその手をとった。だが、シェリーはその手を振り払って、さらに菅原の名を呼んだ。

翡翠宮の中では、菅原が苛立ちを隠せないでいた。

席を立っては座り、また席を立つ。その繰り返しを続けている。

やがて何かを思い立ったように足を踏み出そうとするが、同僚らが、わっと集まって来ては彼の肩を抑えるように叩いた。

「駄目だぞ、菅原」

「そうだ。堪えろ、我慢しろ！」

立ち並ぶ同僚達に気圧され、ふたたび腰を下ろす菅原。

「なんだって俺がこんなに苛つかなきゃならないんだ！」

相手構わず怒鳴り散らす菅原。皆、腫れ物に触れるように菅原から離れた。

「仕方ないだろう。相手は知り合いなんだ。しかも小さな子供だろ。動揺するのも当然だ。けれど

堪えろ。それが仕事だ。分かるな！」
「くそっ」
菅原は頭を抱えた。

「いい加減にしなさいっ！」
シェリーの腕をねじり上げて怒鳴りつける委員部長。
その声の恐ろしさにシェリーはビクッと身体を震わせた。だが、それでもその場からは離れまいと抗った。菅原から直接、諦めるように言い渡されない限り、自分から希望を捨てることは決してしないと決めていたからである。そうでなければ、どうしても諦められないのだ。
これが自分の我が儘であることは承知している。菅原にはシェリーを助ける義務も、その反対に諦めるように言い渡す義務もないのだから。期待する方が間違いなのだ。
これまでのことだって自分が勝手に思い込んで、盛り上がっているだけだった。
菅原は明らかに迷惑顔をしていた。それでも、それでもなのである。
いや、だからこそかも知れない。
自分の想いが菅原に届いていたか。そして菅原が自分のことをどう思っているか、その本音を知りたいのだ。確かめたかったのだ。その為ならば、菅原から「お前を助けられないから諦めなさい」と言われても良いのである。

もし、そう言われたなら、それで恨み辛みもなく自分はこれで終わるのだと、素直にそして笑顔で「はい」と受け容れられるだろうから。

だから動かないのである。

菅原から答えを聞くまでは動いてなどやるものか。テコでも動かない。

やがて業を煮やしたのか、委員の一人が舌打ちして、彼女を荷物のように担ぎ上げにかかった。

シェリーは地面から生えている雑草にしがみついてこれを拒んだ。

だが所詮は大人と子供である。老齢のカーゼルにですら彼女の身体を担ぎ上げることは出来たのだ。屈強な帝権擁護委員（オプリーチニキ）に彼女を持ち上げられないはずがない。

瞬く間に脚が大地から離れて、掴んでいた雑草のちぎれる音と共に高々と担ぎ上げられてしまった。

「ああっ！」

シェリーの喉から悲鳴がほとばしる。

「いやっ！　ス、スガワラ様ぁ。たすけてっ！」

自分の名を連呼するだけの声ならば、どうにか耐えることは出来る。だが救いを求める声には最早我慢できなかった。弾かれたように立ち上がった菅原は、止めようとする同僚達を押しのけると瞬く間に外へと飛び出していった。

「あの馬鹿っ！」

蒼然とした面持ちを浮かべて菅原の背中を見送る同僚達。

白百合副大臣は、うつむいて深々とため息を吐いた。

使節団に加わっている海上自衛隊派遣の武官達と、何か打ち合わせ済みであるかのように頷きあっている。そして、どこか清々したような笑顔になると官僚達を見渡した。

「いいでしょう。どうあがいてもこの手は汚れるのです。ならば、せめて知人が救われる道を選びましょう。大急ぎで嘉納大臣に連絡をとって下さい。亡命者の受け容れを開始いたします……」

帝権擁護委員（オブリーチニキ）に、荷物のように担ぎ上げられたシェリーは、手足をじたばたと振り回して抵抗を続けていた。だが所詮は子供の駄々である。大人の力によって簡単にねじ伏せられてしまった。

「その汚い手を放せっ、掃除夫野郎！」

そこに菅原の声が響く。

皆、一斉に振り返った。息せき切って駆けつけた菅原が膝に腕をおいて身体を支えていた。それほどの全力疾走で駆けつけたらしい。

ギムレットは蔑むように「これはこれは使節殿。いったいなんの御用ですか？」と問いかけた。

菅原は高ぶる感情を抑えるようにゆっくり「その娘を放せと言っている」と言った。菅原は、見張り兵が通せんぼするように伸ばした槍によって、芝生の線から外に出ること止められ、それ以上

近付くことが出来ないので、シェリーに向けた人差し指を何度も突きだした。
「なんで、我々が敵国の者の指示に従わねばならないのか？」
「無関係の人間は口を挟まないでもらいたい」
帝権擁護委員（オブリーチニキ）が口々に言う。これに対して菅原は反論した。
「その娘は俺の関係者だから、無関係ではないぞ。口を差し挟む権利がある」
するとヴィフィータが忌々しそうに言った。
「だからさぁ、ただ関係者って言っても説得力がねぇんだよ。いったい、どんな関係なんだ？　ただ関係者って言うだけじゃあ、もうこの場は治めらんねぇんだよ」
その挑発するかのような問いかけに、菅原は大きく息を吸うと捨て鉢に叫んだ。
「十六歳になるのを待って、俺の妻にしようと思っている。そういう関係だ！　だからその娘を連れて行くなっ！　こっちによこせっ！」
「よっしゃ、許可が出たぜ。中へ入れて良し！」
よくよく考えてみれば、おかしな理屈である。菅原の嫁にする宣言が出たとしても、まだ何の手続きもしてないのだから。だが人は何か行動を起こす時に、納得出来る理由を必要とする。逆に言えば情緒的に納得できる理由にさえなれば、それは充分に引き金として働くのだ。帝権擁護委員（オブリーチニキ）の横暴に憤っていた騎士団の将兵にとって、菅原の「シェリーは俺の嫁」宣言はその力を充分に持っていた。

ヴィフィータの命令に素早く反応したのが、シェリーに境界を越えさせないよう通せんぼしていた兵士である。掃除夫の肩に担ぎ上げられた少女をひょいと奪い取ると、まるで荷物でも放るように敷地内の菅原に向けて投げた。

「ほらっ、落とすなよ、色男っ！」

取り返そうと手を伸ばす掃除夫達。だが、そのつま先が敷地の芝生を踏んだ瞬間、ヴィフィータは素早く抜刀してその男を切り捨てていた。そして命令を下す。

「戦列を敷けっ！」

この命令を待っていたとばかりに帝権擁護委員部（オブリーチニナ）の前に立ちふさがる騎士団兵達。全員、血に飢えた肉食獣のような目で帝権擁護委員（オブリーチニキ）を睨み付けた。そしてそれぞれに剣の柄に手を添え、あるいは楯を並べて、槍をしごいた。

彼らの背後では、シェリーが男にしがみついて、その相手らしい男は少女を抱き締めている。これが舞台演劇ならば最も盛り上がる名場面だろう。にもかかわらず舞台に背を向けることになるとは実に業腹（ごうはら）なことであった。

「せっかく頂いた真珠の首輪を、ここに来るまでにみんな使ってしまいました」

「そんなもの気にするな。今度は、俺が買ってやる」

だから二人の交わす会話を背中で聞いて、頭の中でその場面を想像する。

だが、それだけでも結構盛り上がれた。いや、想像だからこそ美化率が高くなってひと際盛り上

がるのである。

女性と老人の構成比率が高い騎士団は、こうしたロマンス的情景に圧倒的に弱い。皆の頭の中では、二人の恋路とそれを邪魔する悪漢・掃除夫達という勧善懲悪ものの芝居にありがちな構図が綺麗なまでに出来上がっていた。

そして今、その悪漢を退治する英雄的な役どころが自分に回ってきた。

その瞬間、彼らは自らも舞台の上に立ったと感じた。噴出するほどに力が湧き上がって、敵愾心（てきがいしん）が身体に満ちていく。命令を待つことにすら苦労してしまうほどだ。それでも良く訓練されている彼らは、引き絞られた弓矢のように、上官が彼らの手綱を離し獲物へと嗾（けしか）ける瞬間を待つ。

これを真正面から受けとめることとなった帝権擁護委員（オプリーチニキ）達も激高で応じた。

彼らは自分こそが正義であると信じている。

人間は、自分が正しいことをしているという確信に満ちている時ほど、残虐に振る舞える。そして残虐に振る舞ったからこそ、自分が正義であるという立場を手放せなくなるのだ。そして、任務に失敗したらどうなるかという恐怖の囁きが、彼らの凶暴性を助長していた。

次期法務官の抑制を欠いた叱咤が幻聴のごとく耳にこびり付き、任務に積極的ではないというだけで、処罰された同僚の姿が目に焼き付く。わずかな怯みを見せただけでも、同僚からあの男は任務に消極的だと密告されかねない。誰のことも密告しないでいると、それすらも怠慢さの表れであると非難されてしまうのだ。

帝権擁護委員部結成以来、彼らは常に背中に冷たい刃物を押し付けられているような気分を味わい続けていた。その鋭い切っ先から逃れるためには、前に向かって進むしかなかったのである。帝権擁護委員部の委員達は騎士団と向かい合うように睨み合った。

「き、き、貴様ら、反逆するつもりか？」

ヴィフィータは「へへん、馬鹿にすんな」と鼻で笑った。

「俺たちの行動は外交協定に基づく警備行動で完全に合法なんだぜ。何者であろうともこの境界を越えるにはニホン国政府の了承が必要となる旨、皇帝陛下の勅令をもって定められているんだからな。てめえらはニホン政府より立ち入り許可を得てるか？」

「罪人を捕らえるのに、そんなものが必要か!?」

勢いに任せて強引に敷地に踏み入ろうとする帝権擁護委員部も箒を武器に持ち替えて、数瞬の睨み合いが騎士団との間で起きた。

「蹴散らせ！」

手を伸ばせば届く距離にいる二人を見て、諦めきれない委員部長は、部下達に突入を命じた。後に退くことが出来ない以上、彼には命じるより他なかったのである。

「野郎共！　花嫁を守れっ！　抜刀！」

ヴィフィータの励声を受けて、まばゆいばかりに武装きらめかす騎士団達。相手が皇太子ゾルザルの配下だろうと迷う様子は全くなかった。

「怪我するぞ。女と年寄りは道をあけろ！」
「他人の恋路を邪魔する奴はコボルトに喰われて死んでしまえ！」
罵声の飛び交う中、ヴィフィータは高らかに宣言した。
「ここは外交特権に守られた使節の館。帝権も及ばぬ異国。力ずくで押し入らんとする者は、誰であろうとこのヴィフィータ・エ・カティが皇帝陛下の御名の下に討つ！　突撃っ！　前へ！」
両軍が衝突してついに戦闘が始まった。瞬く間に、双方の陣営で犠牲者が倒れる。それでも、泣きじゃくる女児とそれを守ろうと飛び出してきた男に、少なからず感動していた騎士団兵は怯まなかった。彼らの胸中は掃除夫共への反感と怒りで満ちていた。
そして、そんな相手に軽装で、しかもこれまで無抵抗の者ばかりを相手にしていた掃除夫達が立ち向かうのは明らかに荷が重かった。激突の瞬間こそ互角に戦えたが、次々と倒れる僚友の姿を目の当たりにして戦意がしぼみ、鎧袖一触（がいしゅういっしょく）、いとも簡単に蹴散らされてしまったのである。
槍で突かれ、盾で押し倒され、剣で突き刺されて己の不運を悔やむ暇もなく絶命していく。コボルトを象った兜が叩き割られ、容赦なく大量の血が吹き出して、大地に赤黒い小川ができあがっていった。
菅原は、自分の決断がもたらした惨劇に戦慄した。そして、目の前で発生した流血地獄を見せまいとしてシェリーの目を覆い隠した。
だが、涙で顔を濡らしているシェリーは、菅原の手から逃れるように首を振って語りかけて来た。

「わたくしは見ます。スガワラ様こそどうぞわたくしをご覧になって下さいませ。名も知れない誰かにふりかかった悲劇なんかより、シェリーの無事を喜んで下さいませ。どうしても気に病まれるなら、スガワラ様にこのような決断をさせたシェリーを酷い娘と軽蔑してくださいませ。わたくしはこうなることを承知してここに参ったのです。わたくしはわたくしの為に死んでいって下さる方々から目を背けることは出来ません。どうぞ見させてください」

これを聞いた菅原はその覚悟の凄まじさに圧倒された。そして思い知った。

誰かを助ける、あるいは守るとは、このような犠牲を出すかも知れない行為なのだ。

もちろん、犠牲の出ない場面もあるだろう。何もかもがうまく行って、よかったよかったの大団円で終わることもあるだろう。だが、それは当たり前の光景ではないのだ。場合によっては全てが裏目に出て、犠牲者が続出する可能性を常に孕んでいる。我々は、そのことを覚悟しておかなければならない。そして、それでもなお、我々は火事場に、様々な現場に、そして戦場にと救いの手たる専門家を向かわせるのである。そうしなければ運命の差し向ける悪意から、ましてやヒトの悪意から、誰一人として守ることは出来ないからである。

敵や味方の血を流すことを恐れる者は、誰のことも、否、我が身すらも守れないのだ。

菅原は思った。どうしてこんな簡単なことに気付かなかったのか。いや、知ってはいたのだ。だが、理解していなかったのだ。こうして直に見れば嫌でも実感させられる。これまでの自分は幸せであったのだと。

通り魔から逃れたい一心で一一〇番する時、駆けつけた警察官が自らの身代わりとなって斃れる可能性がゼロでないことを考えることはまずない。

火事場で我が子を助けてと泣き叫ぶ時、それが消防官を死地へ駆り立てることになるとは思っても見ない。

未知の伝染性疾患の流行をおそれて病院に走る時、治療をしてくれる医師や看護師達が、その病気に感染する可能性が、一般で生活している人達に対してどれほど高いかも考えない。

無謀な登山を計画したり、悪天候の最中、危険な海岸で釣り具を構えて事故に遭った時、救難ヘリはいつでもどこにでも飛んで来てくれると思っている。だが、機体が突如操縦不能となって墜落する可能性がどれほどあるのかなどとは考えることもない。

我々は、それらのことを全く考慮せずに、日々の生活を送ることが出来てしまうのである。だが、それは少しも当たり前ではないのだ。ある意味で、宙に物が浮いているほどに不自然な状態だ。もしそんな幸せな状態が続いているとしたら、誰かがそれを維持するために懸命に働いた結果なのだ。

我々は、殉職者の葬儀場に立つ前から覚悟しておくべきだ。そして知るべきなのだ。

彼らが斃れることも厭わずに進むのは、給料を貰っているからというおざなりな理由からではなく、彼らが自らに課した使命を果たすためだ。彼らが貰っている給料など、命の対価として見るならば驚くほどに安い額でしかないのだから。

考えてみればいい。たった一人を救うために、何十人もの人間を危険にさらすことの数式が果た

して成り立つのかと。それでも「助けて」の声に応えようとしてしまうのが人間だ。その時の人間が、損得勘定なんかで動いているはずないのだ。

我々の共同体（コミュニティ）は、高度に分業化された社会で成り立っている。私たちは原初の時代ならば、自分で始末しなければならない災難を、分業の名の下に他人任せにしているのである。自分に力がないから、日頃からその技量と力を蓄えている人達に、代わって引き受けて貰っている。そうすることで安全な空間を作って日々の安寧を得ているのだ。

ならば無関係ではいられない。誰かが危険に身をさらすことで得られている安全の恩恵に浴している限り、直接手を下してなくても、間違いなくその手は誰かが流した血によって穢（けが）れている。汚（よご）れていないと思うことの方がちゃんちゃら可笑しい。それは毎日、肉や魚を食べている癖に、動物を殺したことなどないと言い張るのに等しいのだ。この事実に目を背けて、自分の手は穢れていない、良いヒトでいられると信じてしまう卑怯さこそが、様々な間違いを引き起こすことになるのだ。

菅原は、自らを善人だとは思っていなかったが、自分の手が汚れているという確たる自覚は持っていなかった。だが今回ばかりは自分も加害者の一員であることを受け容れざるを得なかった。目をそらすことは出来なくなってしまった。

こうして二人は、返り血を浴び、流れ出た血の小川が自分の足下を濡らす中で、目の前で繰り広げられる戦いを、人が死んで斃れていくのをじっと見つめたのである。

「スガワラ様。後悔しておいでですか？」

犠牲を恐れるなら、手を出さずに傍観してるという選択肢もあった。

だが菅原は、「いや、後悔はしない」と首を振った。事態を傍観していたら、今度は救うべきシェリーを見捨てる……つまり、犠牲にすることになったからである。

つまりは、どう足掻こうともこの手は汚れたのだ。それが敵の血か、シェリーの血かの違いでしかない。そう、どうあってもこの手は汚れ続け、その汚濁は厚みを増していく。その穢れはどこかで落とすことが出来るようなものではない。反省も後悔も、禊ぎには決してならない。これは終生抱えていくべき、生きるが故の罪業なのだから。

ならばどうしたらいいのか。どうするべきか。

加害者として、その罪を背負っていくことである。何かしたいと思うなら、どうしたら『最も少ない犠牲』で済むかと考えるのだ。それが菅原が得た答えであった。

なんだ、要するに嘉納が言っていたことではないか。

「嘉納大臣が、待てと言ってたのはそのせいか」

嘉納は何もするなと言っていたのではない。『待て』と言っていたのだ。最小の犠牲で済む方法と手段、そして時期を計っているからと。

ただ、嘉納の計算は脆くも崩れてしまった。菅原が、その他大勢なんかよりも、シェリー一人の方を重く見たからである。彼にとってはシェリーの無事こそが第一であり、それによって発生した何十人、何百人の死は些細な犠牲なのだ。

これが菅原の罪である。菅原はそれに気付いて頭を抱えた。
「もしかすると真珠のネックレス、買ってやれないかも知れないなあ」
下手をすると失業者になるかも知れない。そうなれば、高価な物を買う余裕など無いだろうから。
だが、シェリーはくすくすっと微笑んで答えた。
「いつか買ってくださるというお志だけ頂ければ、シェリーは幸せです」
シェリーは薄く笑った。この子はもう、前のように天真爛漫に笑うことは出来ないかも知れない。
菅原はそんな風に思った。
そんな二人の肩を、翡翠宮の芝生を踏んだカーゼルが叩く。
「婿殿。シェリー……そろそろ参ろうか」
帝国の通例では、カーゼルがシェリーの後見をとることになるらしい。つまり彼が義父となるのだ。義父ならば義娘の嫁入りに介添えとして同行しなければならないというのが、ヴィフィータらしい理屈である。
こうして菅原は、シェリーとカーゼルの二人を伴って翡翠宮へ向かったのである。

＊　＊

総理官邸では、電話では埒があかないと直接乗り込んできた外務大臣の嘉納と防衛大臣の夏目が、

森田総理を相手にして強談判に及んでいた。嘉納などは、藪睨みのべらんめぇ口調のため、やくざが脅しをかけているかと思うほどの迫力であった。

「白百合副大臣らを救出する作戦の許可をただちに頂きたい」

だが森田は、これを柳に風と受け流す。

「ええと、駄目です」

激高しかけた嘉納を抑え、夏目が語りかけた。

「何故ですか？」

「今、大きな動きを見せたりしたら、アルヌスにいる視察団やマスコミに情報が筒抜けになってしまうじゃありませんか。だから駄目です」

「この際仕方ないだろうよ？　白百合達をあんな危なっかしいところから退去させる方が大事だ。違うかよ？」

「大丈夫でしょ？　別に無防備というわけじゃないんですから。向こうの騎士団とかが頑張ってくれますよ？」

「失礼ですが総理。いったいいつまで保つと思ってらっしゃるんですか？　はっきり申し上げて時間はそれほど残っていませんよ」

「ですけどね、この計画を見ると帝都の一部を一時的にしても占領しちゃうじゃないですか？　そうするとね、どうしてさっさと帝都全体を占領して、この戦争を終わらせないんだという話が出て

来るんですよ。きっと出てきますよ」
「だから、今の日本には帝国を丸抱えする力はないって事をちゃんと国民に説明してだなぁ……」
森田は嘉納の説明に被せるように言った。
「あのね、これは国民に対してだけの話じゃないんですよ。いろんな国が見てるんです」
「だから言ったじゃねぇか。視察団なんか受け容れるなって、それを無視して受け容れを決めたのはあんたじゃねぇか。誰にも彼にもいい顔しやがって、その結果がこれだ」
すると総理は口を尖らせた。
「それを今言っても始まらないでしょう！」
不毛な、そもそも論が始まってしまいそうな気配に夏目は、とっちゃん坊やと揶揄される紅顔をさらに赤くさせて割って入った。
「お尋ねします、総理。この事態をどうしようと考えていらっしゃるのですか？」
「ですから言ったじゃないですか？　せめて特地に視察団とマスコミがいる間はじっとしていて下さいよ。居なくなってからなら、好きにして下さって結構ですから」
「つまり、あと一週間もこのまま何もしないでほっておけって言うのかよ？」
「なんとか保たすように努力してもらえませんかねぇ」
夏目は、総理の机に両手をつくと身を乗り出してその顔を森田に寄せた。
「先ほども申し上げましたが、無理です。騎士団の警備が突破されたら、翡翠宮に避難してきた講

和派の人達がどんなことになるか想像できますか？　……総理、その時に無策を批判されるのは貴方なんですよ」

「それについては嘉納さんの責任ですよ。講和派の人達から保護の依頼があっても受けないってことになってたじゃないですか。だから私だって安心してたんです。それが、どうしてこんなことになってるんです？」

「現場の判断って奴だよ。それ以上でもそれ以下でもない」

「だったら現場に何とかさせなさいよ。何でこっちにお鉢が回ってくるんですか？」

「現場のやらかしたことの尻ぬぐいするのが、俺たちの仕事だろ？　安全なところにいる俺たちにはどうしたって、現場で起きていることは見えないんだ。現場が、どうしても動かなきゃならねえって判断したからには、俺たちもそれを受け容れるしかないんだよ！」

「現場が暴走するに任せるってことですか？」

「違う！　現場を暴走させないために俺たちがフォローすんだろうよ。ここで手を拱(こまね)いてれば現場はもっと暴走しかねねぇぞ！」

「じゃぁ、いっそのこと帝都を占領しますか？　それでとっと戦争を終わらせて、戦国時代になった特地の安定を取り戻すために無限地獄に踏み込んで、この国を傾けろって言うんですかあんた達は？」

「だから、人の話をきちんと聞けよ。まず、帝都の占領なんて無理だってことを、きちんと国民に

向けて説明するんだよ。我が国は帝国を征服するために自衛隊を『門』の向こう側にやった訳じゃない。講和をまとめて賠償金を取るためなんだ。北条さんが総理をやってた時に立てた基本方針通りじゃねえか？」

「でもね、頭の悪いマスコミがそんなことを覚えてるはずないですよ。連中、こぞって批判しますよ。戦争をわざと引き延ばしてるとか言って。勝てる戦争で手を拱いているって。それに我が党の内部にだって、帝国を占領して、資源を片っ端から押さえろとか言っている頭のおめでたい連中がいるんです。そんなのに一斉に離反されたら、内閣不信任決議案が通っちゃいます。そうしたらもう選挙です。負けますよ。いいんですか？」

森田は森田なりに自分は大所高所に立った視点で物を考えていると主張した。

だが政権党の党首という立場でしか物事を見ない森田と、日本という立場で口を開いている嘉納や夏目との間には、理解し得ない溝が出来ていた。

「やるべき事をしないで後悔するよりは、選挙で負ける方が俺はいいね」

「私も、決断すべき時に決断する事が我々の責任だと思っています」

嘉納と夏目の言葉に、森田は信じられないとばかりに首を振った。

「つまりお二方は、わたしに総理をやめろとおっしゃるわけですね」

森田は憮然とした表情で二人を見比べた。

「分かりました。そこまでお二方が言うなら、許可しましょう。ただし責任はとってもらいますか

らね。いいですね」
「ええ結構ですとも。どのような責任だろうと、お引き受けします」
「好きにしろってんだ！」
こうして二人は、総理官邸を後にすることとなった。
公用車の後席に二人列んで座り、嘉納が口を開いた。
「夏目さんに貧乏くじ、ひかせちまったな」
「いいですよ。覚悟はもう済ませてますから」と夏目は軽く笑って、懐から携帯電話を取り出した。
「もしもし、夏目です。総理の許可がおりました。直ちに作戦を開始してください」
夜の永田町に、二人の乗った黒塗りの公用車は溶け込んでいった。

＊　＊

望月紀子にとって、アルヌスでの生活は無為と言っても良い毎日であった。
将来への希望もなく、ただ時が過ぎていくのをぼんやりと待つという日々が続いていたからである。
だが、このアルヌスに国連からの視察団や、マスコミ派遣の取材陣が『門』を越えて入ってくると、彼女の身辺はにわかに忙しくなった。

特地の言葉を解する上に、大学で英語とフランス語を選択していた彼女は、マスコミ……特に海外のジャーナリストから垂涎ものの人材として映り、彼女の身柄をまるで奪い合うかのように声をかけてきたのだ。

もちろん、単に言葉を訳すだけでいいのなら他にも人材はいる。

例えば特地側の人材としては、アルヌス協同生活組合のカトー老師や、日本人相手の商売に携わっている子供達、売り子などだ。だが彼らは、はっきり言って協力的ではなかった。マスコミ側も早々に、彼らに通訳を依頼することは無理だと断念していた。

通訳というのはただ単に意思の疎通が出来れば良いと言うものではない。

報道のための通訳は言葉そのものもだが、双方の文化や考え方に対する理解が求められる。報道という概念の存在しないこの特地の子供達では、取材の意義からして理解させることが難しかったのである。

その意味で言うならば、帝国皇女ピニャから派遣されている語学研修生などの方が適任である。彼女たちは元より通訳という目的のために、日本語と日本社会、そして日本文化（いささか方向性に偏りはあったが）の理解をしようと学習に励んでいたからである。

だが、残念なことに彼女たちに通訳を依頼することは不可能になってしまった。マスコミ陣曰く「些細な行き違い……」による誤解によって、マスコミに対する深刻な嫌悪感を抱かせてしまったからである。彼女らは帝国貴族のお姫様達である。それだけに礼儀というものをわきまえない人

種が大嫌いなのだ。ところが、マスコミ陣は特地に足を踏み入れた初日から、失礼な質問をしたり、これ見よがしに金銭を見せびらかして、誇り高い彼女たちを顎で使おうとしたとかしないといった理由で刃傷騒ぎを起こしかけている。

以来、彼女たちはマスコミ陣に全く気を許さなくなっていた。彼女たちは手近な場所にいる帝国人として、重要な取材対象でもある。にもかかわらず声をかけることすら出来なくなってしまったのだから、取材スタッフが今後きちんと仕事を果たすことが出来るかどうかが案じられるところである。実際、そうした出来事が彼らが仕事をする上で大きな足かせとなっていくのである。

さて話を戻すが、通訳に適する人材を、もっとも層厚く保有しているのはやはり日本である。六個の偵察隊の隊員達を中核に、すでに二百人以上の自衛官と、外務省の官僚達が意思疎通に不自由が無い程度に特地語を習熟しているのだ。片言程度で良いならば、その数は、倍以上になるだろう。だが、ジャーナリスト達はこれに頼ることは出来なかった。皆、政府関係者だからである。日本政府というフィルターを介さずに特地の状況を把握したいと考えるのが、真に自律的なジャーナリストである。なので、彼らは尋ねた。

「民間人はいないのか？」

こうして、民間人としては唯一特地に滞在することが許されていた紀子に、白羽の矢が立つ、と言うよりは降り注ぐこととなったのである。もちろん、まともなジャーナリストであれば彼女が特地にいる理由は承知している。彼女と彼女の家族に起こった悲劇は大々的に報道されたのだ。だが、

だからといって彼女が生き残るために必死の思いで身につけた技能、すなわち特地の言葉を無駄にする理由にはならない。交渉して説得して、頼み込んで、かき口説いた。

当初は面倒くさげにしていた紀子も、熱心な依頼にしかたないなぁと腰を上げた。

こうして彼女の忙しい毎日が始まったのである。

「ノリコ。売店にいる猫の娘に取材を申し込みたいんだけど、明日通訳頼めるかな？」

「彼女は片言なら日本語でも通じるわよ」

「頼むよ。ボクの方が実のところ日本語苦手でさ。フランス語で取材したいんだ。それに昨日のこともあるし。十分でいいんだ。お願いだよ」

「だったら変な質問しないでよね。痛い目を見るのは貴方なんだから」

先日、このフランス男は食堂で働いている猫耳の店員にいささかお下劣な質問をして、切れ味の鋭い猫ぱんちをその横面に喰らっていた。そんな冗談めいた質問ですら真顔で翻訳してしまう紀子の方もどうかしているのだが、こと言葉に関わることとなると紀子は真摯であり妥協しない姿勢を見せる。帝国に拉致された時に、言葉が通じなかったばっかりに生じた誤解やトラブルによって、あまりにも多くの苦渋を舐めさせられたからである。紀子は、嘘やいい加減、適当ということが断じて許せない気質になっていた。

「ノリコ！　酒場でのインタビューの収録。始めるよ」

「え、八時からじゃなかった？　それと酒場じゃなくて食堂よ」

「あそこは、どうみても居酒屋なんだけどなぁ……それにもう八時だよ」
「あら、大変。すぐ行かなきゃ」
カメラマンらとともに走り出す紀子。待ちくたびれ顔の北米からの取材陣と共に夜の食堂内へと突入していった。
星の瞬く上空を大型ヘリコプターのチヌークが乱舞している。その爆音があまりにもうるさくて、何度も撮影が途切れてしまった。陸上自衛隊は五十機を超えるチヌークを保有しているが、特地に持ち込まれているのは予備も含めて全部で十一機。今夜は、その内の十機が飛び立っていった。さらに他のヘリコプターの大編隊も離陸してこれを追っていった。
「煩いなあ。いつもここはこんな状態なのかい？」
「そんなことないはずだけど。今日だけ特別みたい」
見上げている内に、ヘリコプターは東の方角へと消えていった。
「よし、気を取り直して収録再開！」
食堂には、テレビカメラという得体の知れない道具を向けられることに不快感を示し、怒り出すような気難しい者もいるが、不愉快と感じる者はすぐに席を立ってしまうから、残るのはおおむね良好な反応を見せる者ばかりである。そしてこちらの方は、基本的に酔っぱらった客に対応するのと同じノリで答えてくれる。
何を目的とした質問なのかよく分かってない様子だが、仕事の邪魔とならない限りは愛想良く答

えてくれるから、特地に足を踏み入れた合同取材チーム……北米、ＥＵ、新興国連合、そして日本は、それぞれ一度はカメラを食堂に入れていた。様々な種類の亜人達が一ヶ所に集まっているという光景は、テレビに流すにはなかなかよい素材なのだ。

そんな彼らに対して取材陣が投げかける共通の話題と言えば、まずは日本に対してどのような感情を持っているか、アルヌスに盤踞（ばんきょ）している自衛隊の活動をどう見ているかである。

次に、戦争に対する個人的な感想や、他の国についての知識がどの程度あるかを問うような質問へと移っていく。

さらに、亜人という種族に対する興味から来る、文化や習俗にかかわる質問が続いたりすることもあった。

先ほどのフランス人ジャーナリストではないが、問われた側が困ってしまうような質問なんかも真顔で発せられることもあって、その都度起こる小さな悲喜劇の後始末に、紀子が苦労することも多かった。とはいえ、ここアルヌスで語られる自衛隊に対する感想は、すこぶる良いものばかりというのが通訳した紀子の感触である。

「それって、本当かね？」

だが、こうしたアルヌスの住民の反応に懐疑的な態度を示すのは、政策的に反日思想を利用している国を主力とする新興国派遣の取材チームではなく、どちらかというと日本からの取材チームであった。

戦場となった土地の住民から、ここまでの好意を得られるのはおかしいと言う。古村崎とかいう男の発言である。この男は日本派遣の取材チームで一番の年長者でもあるから、放送局や新聞といった各種メディアからの人材を集めたこの合同取材チームでも、皆から一目置かれていた。

「でも、この街の成り立ちから考えると反感を抱くような要素はありませんし、変ともいえないと思いますけど」

合同取材チームの一員である栗林菜々美は手を挙げると反論した。

菜々美は、紀子救出の際に大立ち回りをしたあの栗林の妹だ。だからではないが紀子は、栗林の意見をアルヌス滞在で得た知識で補足した。

「ここの人達は、戦闘に巻き込まれたとか被害にあった経験はありませんよ。だから戦争についての感想を聞いても、今ひとつピンと来ないのだと思います。自衛隊にだって、どちらかというと盗賊被害から守って貰ったという印象しかないんですから」

アルヌスは、本来何もない荒野だった。そこに保護したコダ村の避難民を住まわせるために仮設住宅を置いたことが、この街のはじまりなのである。以来、このアルヌスが戦渦に巻き込まれるようなことは起きていない。

「つまりここは、ポチョムキン村ってことだな」

ポチョムキン村とは、帝政ロシア時代の女帝エカチェリーナが、巡幸した際に訪れた村や町のことである。そこは常に新しい立派な建物がならび、住人である農奴達は充分な食事を摂り、良い服

をまとっているがごとく演出された大がかりな作り物であった。だが女帝エカチェリーナは、そんなこととは露知らず自分の治世が上手くいっていると満足したらしい。その村は仕掛け人の名を冠され、ポチョムキンの村と皮肉られた。

古村崎はこのアルヌスを、マスコミに見せるために演出された村だと一言で括った。

「だいたい、特地を自由に移動できないって言うのがおかしいと思わないか？　きっとヤラセだよ。自衛隊の息のかかった地域を出れば、人々の反応は真逆のはずだ。安全確保を理由に、あちこち出るなっていう制限がかかってるのが、その証拠だ」

人間は他人に自分の影を写し、それを基に疑ったり批判することが多い。

例えば、過去に事件を起こしたが故に、警察の捜査を受け続けている宗教団体があるが、当事者達はその捜査を受けるたびに信仰の自由に対する弾圧だと言って批判する。ところが、その宗教団体では、他の信仰を邪宗と呼び、信者が疑問を持つことも、脱退することすらも許さない。

また、とある政治思想の団体は、警察の捜査を受けるたびに言論結社の自由が脅かされていると声高に喧伝しているが、実際に、その団体内では思想や言論の自由なんてものは全く無くて、同じ思想に基づいて運営されている国家には思想刑務所なんてものまであったのだ。

要するに、人は「自分が普段やっていることは相手もする」と考えてしまうのだ。

古村崎の発言も、彼の日頃の仕事に対する姿勢を浮き彫りにしたものといえる。

紀子は、自分のスケジュール帳をめくって提案した。

「確か明日、視察団が近くの村落まで行くようですよ。同行取材できますけど」
「自衛隊が見せたいところを、見せてもらえるだけだろ？　何の価値もない」
これには、さすがの紀子も嗤ってしまった。
「あなた達だって、あなた達が見せたいと思う物だけを切り取って電波に乗せてるだけじゃないんですか？　つまりは、価値がないってことですね？」
これを聞いた古村崎はさすがに声を荒らげた。
「俺はジャーナリストとしての使命感に基づいて報道している！」
「そうなんですか？　それにしても否定的な意見が無いのはおかしいという先入観で取材するのは中立的とは思えませんけど。見たまま聞いたままこそが真実ですよね……」
「中立的なジャーナリズムなんて存在しない！」
これには紀子も唖然としてしまった。
使命感があるのは良い。問題はその使命感がどの方角を向いているか、なのだから。
だが、ジャーナリストが自らの中立性を否定しきったとすれば、報道は信頼できないことになってしまう。紀子は素人ながら、いや素人だからこそそう思った。
紀子は戸惑いながら尋ねた。
「それでいいんですか？　完全な中立は難しくても中立を保つ努力くらいはするべきじゃないんですか？　もし中立でないとするなら、私たち受け手側は何を信頼すれば良いんですか？」

「それはマスコミの負うべき責任ではないな。こちらも商売なんでね、稼げるような仕事をする」「ずいぶんと無責任なんですね。だから変な報道をしても平気なんですね」

だから隠し撮りと悪意の編集とナレーションで構成されたドキュメント風プロパガンダ映画を、表現の自由の名の下に、金の力に飽かせて暴力的に垂れ流すことに反対しないのである。隠し撮りされた側の主張なんてどうでも良いからである。そのことを指摘すると、彼らが決まって口にするのは「見てから文句を言え」である。

一見もっともなことを言っているように聞こえるが、つまり「まずは金を払え」と言っているのである。そこには自分の懐を肥やすシステムを回転させることが先だという姿勢が、はっきりと表れている。そこから出てくる批判には「今後の課題ですね」と耳を貸すフリをしながらも、「はいはい、次に行きましょう、次の話題です」と、過去のことにしてしまえばいいと思っているから、それでも彼らは充分なのである。

後には、めちゃくちゃに踏み荒らされた『何か』が残るだけ。そんなところにマスコミの見世物小屋的性格は表れている。

それが悪いとは言わない。彼らだって、そのシステムを回転させることで食べているから、当然と言えば当然なのだ。商売を維持することに全力を尽くすのも大いに結構だ。そしてそこで扱う情報という名の商品が、人々を沸き立たせ、耳目を集めることが出来るものでさえあれば、どんなものでも良いという態度も決して間違っていない。ただそれを『真実の報道』と名乗らせることだけ

は許してはならないのだ。紀子はそう思った。

紀子には、古村崎という男が日本のマスコミそのものを象徴しているように見えてしまった。

「なんだ、その無礼な言い草は？　侮辱するつもりか？」

「とんでもありません。古村崎さんを侮辱するなんてことしたら、どんな風に報道されるか考えるだけで恐ろしいですもの。今だって充分に酷いこと書かれてるんですから。日本のマスコミっていうものが、私たち受け手側が期待しているようなものではないことだけは、分かりました」

紀子は救出されて以来、好奇の視線にさらされている。

特にゾルザルに捕らわれている間の出来事を、下劣な空想で補完しようとする週刊誌やスポーツ新聞、報道バラエティ番組には精神的に追いつめられてもいた。なまじ、その内容があたっていたりするから始末に負えないのだ。紀子が特地に留まって東京に帰れない……いや、帰らないのは、家や家族を失ったからばかりではないのだ。

もちろん、古村崎もそのことは知っている。だから紀子からの侮蔑の色を含んだ視線に怯んだ。自分もその連中と同類と見られることを恐れたのだ。元より同類であって充分に手遅れなのだが、それでも自分は違うと思ってしまうところに彼の救えなさがある。

「ああ、忘れてた。そうだったな。君は確か自衛隊に助けられてたんだ。そりゃ自衛隊贔屓にもなるわな。そんな君なら、自衛隊を批判的に見る者がいれば気を悪くするよな。栗林君もお姉さんが自衛官だったっけ？　それじゃあ、中立的にものを見る事が出来なくても仕方ないか。でもさ、ア

レを見てご覧よ」

古村崎は滑走路の方角を指さした。

縦に長い滑走路は丘の南端にまで延びていて、アルヌスの街から目視することが出来る。そしてそこに二百人ほどの隊員達が、装備を枕に寝そべっている姿が夜間照明によって照らされていた。

「あのだらしなさを見てご覧。国民の目が無ければあの始末だ。自衛隊なんてのはさ、そういう連中なんだよ」

古村崎は、そんな事を言い捨てながら、紀子相手にまじめな論争をしても仕方ないという態度で早々に話をまとめた。要するに紀子を無視することに決めたのである。そしてこの瞬間、紀子も同じ事を考えていた。

紀子も、この男を相手にしても仕方ないと思っていた。この男はマスコミの収益システムを上手に使って、自分の考えを流すことに長けているだけなのだから。ジャーナリズムを自称する見世物小屋（マスコミ）が、資金の力で都合の良い情報を垂れ流すならば好きにすればいい。わたしもそれを逆手にとってやる。受け手にとって本当に必要な情報は、わたしが流す。

視点を変えて見ると古村崎という存在は、紀子にとって恩人と言えなくもない。

流されるままに、ただ時を過ごすしかなかった紀子が、この瞬間から、それが反感からにしてでも積極的に自分の生き方を決めたからである。

＊　＊

一方、各国政府から派遣されて来た視察団のメンバーはマスコミと違って、自衛官の通訳でも充分に満足しているようであった。今日は、日本政府差し回しの広報担当者の案内を素直に受けて、アルヌスの丘周辺を見て歩いている。

とにかく彼らは貪欲で、制服組の武官であろうと私服組の文民だろうと、どんなことでも見て聞いて、触れてみようとしていた。特地とはどんなところであるか、日本政府がこれまでに開示した情報と、実際との落差がどの程度なのかの確認をしたいと考えているのだ。

視察経路は、特地で生活している種族の多さを一目で実感できる食堂へ行き、そこでテレビ局の取材とかち合いながらも亜人達と言葉を交わし、その後、組合事務所と、このアルヌスがまた難民キャンプと呼ばれていた時に作られた仮設住宅を視察するというものである。

「つまり、この二棟の仮設住宅の避難民達が、協同生活組合という企業体を作って商売を起こし、小さいながらもこのような街を建設するに至ったということなのですね？」

「はい。そうです。けれど我々が関与したのは、最初のホンの少し。きっかけだけなんです」

広報担当の女性幹部、姫路一等陸尉は、この街を作ったのは難民達であることを強調した。

それでも、フランス政府派遣の女性は、「素晴らしいわ」と感嘆の声を日本語で上げた。

このアルヌスでは日本語が意志疎通のツールになりつつあるため、視察団のメンバーもおおむね日本語に堪能な者ばかりがそろっている。おそらく、住民と直接交渉を持ちたいという意図があるからだろう。問題は、直接交渉して何を得ようと考えているかであるが、視察を許した以上は、制限することは出来ないから監視するに留めている。

「大変よく出来た自立支援モデルだわ。我が国の、発展途上国の支援プログラムとして導入したいぐらいよ。あとで詳細な資料をいただけるかしら？」

すると、途端に姫路の口は重たくなった。

「……ええと。その、あの……」

「なあに、そんな物まで秘密なの？　出し惜しみしないで欲しいわね」

「い、いえ、出し惜しみとかじゃなくて。た、担当者に尋ねてみます」

姫路一尉は、思っても見なかった高評価に「自立支援プログラムなんてもの、あるのかしら」と額から汗を噴きだしながら考えこんでしまった。

まさか、あの伊丹二等陸尉が、そんな『支援プログラム』とか考えてこの難民キャンプの建設をしたとはとても思えなかったからだ。多分、行き当たりばったりの出たとこ勝負だったんじゃないのかなぁと言うのが彼女の見解であり、実のところ正解でもある。

「その担当者って誰かしら？　会ってみたいわね」

「あ、あの、その……い、伊丹二等陸尉です」

すると皆、「あのルテナント・イタミかい？」目を輝かせた。
「ご存じなのですか？」
「何を言ってるんだい、一尉（キャプテン）。二重橋の防衛戦で多くの民間人を救った上に、この街の避難民を守るためにドラゴンを追い払って国会にも呼び出された彼だろ？　さらに最近では帝都まで乗り込んで拉致犠牲者を救出したって大活躍じゃないか」
「ええ、まぁ、そうなんですけど」
姫路は「あれ？」と首を傾げた。
互いに同じ人物の話をしているはずなのに、違う人物の話をしているような気がしてならない。というか絶対別人の話だと思った。けど、よくよく考えてみれば、全て伊丹のことである。さらに彼は、一生左団扇（ひだりうちわ）な生活が約束される巨額の資産（巨大なダイヤモンドの原石）を所有し、この特地では卿の称号を与えられたお貴族様でもあるという噂も、隊内で流れている。
「あっれぇ？」
姫路は伊丹に対する評価が、自分の中でとてつもなく歪んで行こうとしているのを感じた。
何をどう間違ったのか、これまで身の毛がよだつほどに醜く見えていたはずの化物が、突然美しく見えてしまった。そんな恐ろしさを肌で感じていた。
「あれは、おたくで税金泥棒の怠け者……だったはずよね。うだつの上がらない昼行灯（ひるあんどん）なのよね」
姫路は懸命になって、伊丹について日頃から耳にしていた噂を思い起こし、自分の認識とそこか

ら導き出される評価を再確認していた。だが海外からのお客達は日頃の勤務態度を知らないし、特殊作戦群の流す、例の欺瞞情報の影響もあってか彼への評価はすこぶる高くなっているのだ。

「なるほど、彼が自立支援プログラムを作ったのか」

「確かにプログラムの優秀さには目を見張るけれど、それもこの特地のビジネスチャンスがあってこそだよ。そっちにも目を向けるべきだと思うな。日本からちょっとした日用品を持ち込むだけで、これだけの規模まで発展出来るんだから、大手の商社あたりに本格的に任せたらどこまで発展できるか期待が大きいよね」

アメリカからの政府関係者が、経済界の代弁者のような意見を口にした。多分きっと、そういう立場として送り込まれてきたのだろう。

「日本政府が、この特地の開発をどのように進めていくつもりなのかが楽しみだね。そこに我が国がどのくらい参入できるかが気になるところだけど」

「でも、この資料を見る限りじゃ、やっぱりアルヌス協同生活組合との合弁事業から始めるのが一番じゃないのかな。アルヌスを中心に、帝都や周辺諸国に支店を広げてるみたいだし。ただ合弁事業とかの概念を理解できるかが心配だけどね」

「問題になるとすれば『門』の狭さだよ。幅が約十六ヤードだっけ？　それと銀座の地理的条件も気になるよ。道路があんなに混雑してるんじゃ大量輸送が出来ない。これでは魅力が半減だ。日本政府は早急に対策を検討すべきだよ」

「我が国は、この特地の物資や資源を収奪の対象とするのではなく、移民してはどうかと考えている。そう日本政府に強く提案したいと思っているんだ。ぜひ、賛成して欲しいね」

中国から派遣された学者めいた男がそんな事を口にしていた。

他の面々は、それを聞いて苦笑いした。資源輸出国としての影響力低下を防ぎたい本国政府の方針をそのまま口にしていることが分かるからだ。資源禁輸をちらつかせた恫喝外交と、移民を用いた間接侵略は中国のお家芸として知られている。

「ところで、このあたりの治安状態はどうだろう？　帝国と未だ交戦中だというからには、良いとは言えないんだろうね？　今日だってなんだか妙にピリピリしている。何か大がかりな作戦の直前みたいに思えるよ」

これには二科長の今津一佐が答えた。

「このアルヌスと、明日ご案内する近隣の村落あたりまでは我々が掌握してます。ですが、その外側ともなりますと盗賊が出没したり、帝国のゲリラ活動などで、治安は悪くなってます。特にここ最近、帝国では政変があって軍の動きも活性化しております。お察しの通り、隊員達がピリピリしているのも、それを受けてのことです」

いつもと違って今日の今津はなまりを消して喋っていた。海外からのお客のために、聞き取りやすい日本語を心がけている。

「講和交渉中じゃなかったの？」

さきほどのフランスの女性が質問の声を上げた。
「別に停戦協定を結んだわけではありません。帝国側が講和を少しでも有利に導くために、軍事活動を活性化させることは予測の範囲内でした」
「帝国側としても、今のままだと無条件降伏に等しいことになるだろうからね。少しは巻き返そうとするだろう」
ロシアから派遣されて来ている武官がそう補足した。
「問題は、その方法だよ」
アメリカから派遣されている軍人が呟いた。戦力、兵器といった諸要素で不利な立場となった側の採れる選択肢は、実のところそう多くないのだ。まともにやっても勝てないのであれば、戦力劣性側の選ぶ戦術は、堅牢な防塞を構築してこれを守るか、身を隠して隙を突くというゲリラ戦しかない。
ベトナム、ソマリア、イラク、アフガニスタンとゲリラ戦に悩まされ続けた経験があるだけにアメリカ武官の表情は苦い。ロシア武官もアフガニスタン、チェチェンと散々苦しめられたこともあって同様の表情を見せている。
「情報によると、帝国側はゲリラ戦術へ転換することにしたようです」
「そうなると手間がかかるね。講和交渉がうまく行くことを祈っているよ」
制服組の軍人達は、この戦争が意外と長引くかも知れないという予感を抱いたようであった。

姫路が時計を見ながら言った。
「では、次に参りましょう。こちらの組合の倉庫で特地の物産を見せて貰えることになっています。夕食と自由行動はその後となります」
視察団は、姫路の後ろにぞろぞろと続いて組合の倉庫へと向かった。

特地ではどのような農作物が収穫できるのか、あるいは逆にどのような商品が特地で需要があるかを組合の倉庫で確認した視察団は、夕食を摂って、ＰＸ（駐屯地購買部）でしばしの自由行動をした後丘の麓に広がる空自地区へと入った。自衛隊の設備や状況を見るためである。
空自地区とは、要するに滑走路とそれに付随する格納庫などの並ぶあたりを指す。とは言っても厳密な区分けがあるわけではないので、陸自の隊員達が往来していたり、陸自の各種火砲用の掩体などが夜間照明の届く範囲で散見された。所々、不自然に照明が消されている場所もあって、何か見せたくないものがその照明の届くところにあるのだなと思われた。
ジェットのエンジン音が聞こえて来たので、滑走路に目をやる。すると二機のＦ４ファントムが離陸しようとしているところであった。さらに二機のファントムが、格納庫から姿を現しつつあり、特地に送り込まれたファントムは四機に増えていることが分かった。
ロシア人とアメリカ人武官がこれを見て呻く。
「骨董品だなぁ」

「うむ。自衛隊は物持ちがいい」
「だが、特地には衛星も電子設備も無いから、かえってこうした骨董品の方が使いやすいようだ」
先ほどまでは文民の視察団が目の色を変えていたが、こちらに興味を示すのはやはり制服組の軍人達のようである。特に関心を惹いていたのが、移動式の気象レーダーや移動式の管制塔セットの向こう側でエンジンの試運転らしき轟音をあげているC－1中型輸送機である。さまざまな政治的事情から、意図的に航続距離を短く抑えられたという曰く付きの輸送機で、これまたファントム同様に退役間近の年代物である。
「おおっ、どうやってあの狭い『門』を通したんだ？」
「いやいや銀座の街のほうが通すのは難しかったはずだ。大変だったろう？」
「はい。分解して持ち込み、やっと組みあがりました」
姫路は我が事のように言ったが頑張ったのは空自の整備隊員達である。
「輸送機というのは飛行場から飛行場に物資を運ぶために用いられるものだ。だが日本はこの特地ではアルヌスにしか拠点を持っていない」
「つまり用途が極めて絞られているってわけだ……今見えてるのは五機か」
「確か、帝都までの距離はおよそ六百キロメートルほどだったね」
「もうちょっとありますが、それぐらいと理解していただければ良いと思います。これで我々の活動半径は大きく広がることになります」

武官達は、滑走路端で寝そべっている隊員達の列を見ていた。
そこにいる隊員達が何者で、これから何が行われようとしているのか武官達は既に察している。
「この機体なら、往復するのにちょうど良いぐらいだね」
すると、ドイツ人武官が早速とばかりに、アルヌス協同生活組合のＰＸで入手した絵地図を紐解くと地図に示された帝都の位置を確認していた。アルヌスと帝都との距離を基準にすることで、入手した地図のスケールを推し量ることができるからだ。
それは帝国で作られたもので、精度としては伊能忠敬以前の古地図程度である。帝国を中心に据えて、周辺の国の広さと位置関係が概ねの形で示されていた。
なんでこんなものをドイツ人武官が入手したかというと、日本政府が、特地の詳細な地図を公開していなかったからである。特地の地理に関わる情報を防衛機密に指定し、視察団の面々に対しても簡単な略図しか提供しなかったのだ。
もちろん、裏取引や様々な次元の情報交換で、関係の親しい国にはある程度の情報は伝えてある。だが、この視察団には情報提供を全く受けていない国からの参加者もあったので、基本的に皆、未公開の情報については知らないという前提で会話しているのだ。
ところが、重要なはずの情報がとんでもない形で漏洩（ろうえい）してしまった。
事もあろうに売店で売っていたのである。
「まさか、ＰＸの本棚に地図があったとはなぁ」

「気付きませんでした」
「でも、まさか三十八万円もする代物を買うとは」
「情報というものの価値を知っとるんや。三十八万程度で情報が買えるなら、目の色を変えるのも当然や。頼むからもうちぃと気を張ってや……」
後に今津はそう言って、情報保全の大切さを改めて同僚達に訴えた。
身近なところにありふれているものの貴重さに気付かないことが、我が身を危うくする。それは『情報』しかり、『技術』しかりである。「日本人は、もう少しずっこく、ケチになるべきなんや」と今津は繰り返した。
実際ドイツ人武官は、ＰＸを物色している最中に偶然手に取ったものが地図であることに気付くと狂喜乱舞していた。
「おおっ、特地の世界全図が売っている！」
視察団のメンバーは皆、目の色を変えた。
早速、この一冊しかない地図の奪い合いが始まった。ところが問題は一冊の書籍としては高額な三十八万という値段がついていたことにあった。
これは高い。いかにも高かった。書籍というものに対する価値観の違いが、こうしたところにあらわれていた。印刷という方法がまだ一般化していないこの特地では、羊皮紙に手書きというのが主流であるため、書籍の価格はどうしても割高になってしまうのである。しかしそのことは決して

問題にはならない。三十八万という金額を安いと見たからこそ、視察団のメンバーは目の色を変えたのだから。

問題は、もうちょっと別のところで起こった。つまり誰の財布にも、多くてせいぜい三～四枚ばかりの一万円札しか入っていなかったのである。皆、財布を開いて改めてその事実を確認すると、絶望的な表情となった。

そんな中で最初に動いたのが、最近景気の良い中国武官である。財布からクレジットカードを取り出し、皆が財布の中味を見て固まっているのを後目に悠々と地図を手にとって、レジで待ちかまえている猫耳店員に支払いをしようとした。

だが、猫耳店員の反応は「これ、なにニャ？」であった。

特地での商品取引はそれ自体が価値を持つ金銀貨幣でなされるのが基本である。紙切れに印刷を施しただけの円紙幣なんてものが通用するのも、このアルヌスだけである。従ってプラスチック製カードなんぞ、犬の鑑札ほどにも役立たない。

ここで買い物をするには、少なくとも現金を用意することが必要なのだ。しかしカード全盛の時代に、海外旅行でこんな多額の現金を持ち歩く者はまずいない。そうなると個人での購入は諦め、それぞれの財布にある日本円を持ち寄って三十八万円にするしかないのだ。

まずは同じ国の者同士で、お金集めが始まった。しかしそれでは足りない。そうなると他の国と共同でと言うことになるが、こんな時に、それぞれのお国柄というか、友好具合が如実に表れた。

イギリスとドイツとフランスとアメリカがＮＡＴＯのよしみで連合を組み、これに対抗して中国とロシアが同盟を結成して新興国の派遣の者達から巻き上げるように、財布をひっくり返させ、五百円玉、百円玉、五十円玉、十円玉とかき集め、あと十万、あと十万と騒ぐ。

「ポケットに残ってないか？」

「ないない」

と制服の武官がピョンピョンと飛び跳ねている姿なんぞ、どこの中高生の恐喝かと思ったくらいである。

ちなみに韓国からの武官は周辺にいる自衛官に片っ端から声をかけて金を貸して欲しいと頼み込んでいた。だが、いくら日本人がお人好しだからと言っても、初めて会った外国人が借りた金を返してくれると思うほどではなく、韓国人武官は同盟を組む相手を探すのに出遅れてしまった。

こうして軍配は、ドイツ人武官に上がった。やはり決め手は友人の多さである。

報せを受けた今津が、息せき切って駆けつけた時には、ドイツ人武官はほくほく顔で地図の代金を支払っていた。もう、後の祭りとなってしまったのである。

今津は嘆息した。貴重な情報源である地図を本屋の本棚で売っていても、誰も不思議に思わない。傍らで視察団が目の色を変えているのに、ただそれを傍観していた同僚達のインテリジェンスに対するセンスの無さに呆れたのである。

「側で見てたんなら、せめて売るのを止めさせてや。でなきゃ真っ先に買い取ってくれてもいいや

ん！」

機密が漏洩してしまった責任は、最終的には彼がとらねばならないのだ。

ちなみにこの騒動には、続編があった。

「ドラゴンの鱗を売っている！」

国会で、特地甲種害獣による被害が討論された時、その能力が空飛ぶ主力戦車並みと表現されて以来、特地に棲息している生き物への関心は非常に高まっている。特にドラゴンの鱗はその強靱さが喧伝されており、それがどのような材質によるものなのかと、各国の軍関係者はこぞって強い関心を示していた。

それだけに、試料の入手は最重要課題である。それが、こともあろうにＰＸに土産物として並べられていたのだ。

もちろん、これらは全て傷物で、いわゆる難あり品である。武具商に卸すには小さすぎたり、弾痕があったり、欠けていたりで棄てるしかなかったものばかりだ。それを携帯ストラップやキーホルダーに加工して並べたら、自衛官達に土産物として喜ばれたのだ。

当然のことながら、先ほどの地図同様に視察団のメンバー達は目の色を変えた。秘密兵器に使える新素材の試料などという、スパイ映画が一本撮れるほどの重要情報が、小遣い程度の値段で手に入るのだから。

「き、君。これを購入したいのだが……一個いくらだろう」

「五百円です」
「全部、わいが買った！」
その瞬間、くしゃくしゃになった一万円札の束が猫耳店員の待つレジの前にドンと積まれた。
皆が振り返ればそこに今津の姿がある。さらにその後ろでは財布を空にした自衛官達が涙目になっていた。
「土産にするんやさかい、一つ残さず全部包んでな……」
こうして情報漏洩は、今津をはじめとした自衛官達の献身的な努力の果てに、最小限の被害で防がれることとなったのである。
だが、その安堵感が、今津の警戒心に間隙を生むこととなった。

「ディアボ様、どうされました？」
「いや、たかが地図一冊にあれほど騒ぐのだから、帝国の皇子にはどれほどの値を付けてくれるかと思うと楽しくなってな」
アルヌスの街はずれの森に身を潜めたディアボは、お上りさんのようにあちこち見て歩く視察団を値踏みするように眺めていた。
「ご自身をまるで競りにかける奴隷のように例えるとは、悪趣味の極みですよ」
「そう言うなよ、メトメス。実際に今の俺は奴隷同然の身の上なんだ。自分一人では、自分の運命

すら切り開くこともかなわないのだからな。だったら精々高値を付けてくれる者にこの身を売るのも、致し方ないだろう？」
「ですが危険です。殿下がどのように扱われるか不安です。ゾルザル様との取引の具にされてしまったらどうするのですか？」
「それもそうだな。よし、こうしよう」
ディアボはポンと手を打つと服を脱ぎにかかった。
「な、何をなさっておいでで？」
「メトメス、お前も服を脱がぬか」
「服を脱げとおっしゃって、いったいここで何を始めようとなさっておいでなのですか。あらかじめ申し上げておきますが、小生には男色の趣味はありませんぞ」
「こんなところでそんなまねするものか。服を交換するのだ」
「服の交換？」
「そうだ。今からお前が帝国皇子のディアボだ。俺はその従者のメトメスを名乗ろう。そうすれば取引の具になっても俺は安全だ」
「それでは、このメトメスは、どうなってしまうのでしょう？」
「心配する必要はない。例えゾルザルとの交渉の具にされても、実際にはただの侍従なのだからな。いざとなったら実はただの侍従でしたと名乗れば、お前をどうこうしようとする者などいないさ」

「なるほど、そう言うことでしたか」
メトメスはそれで納得できたのか、手早く服を脱いで交換していった。
「殿下。そう言うことならば、交渉の相手には、地図の争奪戦で失敗した者を選ばれることをおすすめします」
「何故かな？」
「失敗をした者は、取り戻そうとして普段よりも財布の紐を緩めるからです」
「なるほど。慧眼（けいがん）だ」
ディアボは、メトメスの言葉に頷いて、地図を買い損なって消沈している中国武官へと目を付ける。
「よし、あの男だ。あの男にしてみよう」
「問題は交渉しようにも言葉が通じませんね。どういたしましょうか」
「なあに、最初の挨拶ぐらいはピニャの手下に手伝わせるさ。あとのことはゆっくりやればいい……胸を張れメトメス。今からお前が帝国皇子ディアボなんだからな」
こうして互いの立場を入れ替えたディアボ主従は、使節団に接触する機会を窺って、アルヌスの街へと向かったのである。

09

翡翠宮の風景は一変していた。

緑豊かな森は戦場となって、短く刈り込まれた芝生を染めた血潮は赤黒くかたまりつつある。

死屍累々。流された血が小川となり、流れ矢が荊の棘のようにあちこちに突き刺さって、戦火の燻(くすぶ)りが、あたり一面に霞のように立ち込めている。文字通りの、屍山血河(しざんけつが)の荒野となってしまった。

原因は、帝権擁護委員部(オブリーチニナ)による攻撃であった。

もちろん、彼らだけでこのような惨状を作り出せるわけがない。帝権擁護委員(オブリーチニキ)達は、帝都を守備するために配されていた帝国軍の将兵を千人ほど連れて来ると、獣毛の箒が指し示す方角に向けて突撃するよう命じたのである。

戸惑ったのは、訳を知らされぬまま連れて来られた帝国兵であった。帝権擁護委員部(オブリーチニナ)が指し示した場所が、敵など居るはずのない翡翠宮だったからである。ここに外国からの使節が逗留していることは、帝都の守備任務に携わる者ならば誰もが知っている。翡翠宮は、その安全を皇帝が保証した場所なのだ。しかも、今それを守っているのは皇女ピニャ率いる騎士団であり、すなわち味方だ。味方を攻撃しろと言われて、困惑しない者がどこにいると言うのだろうか？

だが、その当然を当然と思わない者がいた。帝権擁護委員達はヒステリックに叫んだ。

「何をしているか！　進め、進まんか、慮外者っ！」

いったい何の冗談だろうか？

だが、帝権擁護委員達は真顔であった。もし本気の真面目で命令しているのなら、帝権擁護委員達は集団で精神的な失調をきたしているのだ。帝国軍将兵は直感的にそう思った。

実際、帝権擁護委員らは精神的に追い詰められ、正常な思考力を失っているに等しかった。

騎士団との最初の戦闘に敗退した彼らを迎えたのが、ねぎらいの言葉や負傷者に対する手当ではなく、次期法務官からの叱責とそれに続く恐怖だったからである。

ルフルスは、自分が委員部長として任命したばかりのギムレットを、言い訳の暇も与えず処罰した。そしてその死を皆に見せつけた上で、委員の一人一人に、それぞれの任務の遂行姿勢に対する総括という名の自虐的告白を求め、敵から逃げた、敵と剣を交えていなかったなどの糾弾を受けた者を十分の一刑に処したのである。十分の一刑とは、十人のうちから一人を選び、その一人を残りの九人によって殴殺させることである。

僚友が息絶えるまで殴ることを強いられた者達は、これによって恐怖した。いつ自分がこんな目に遭うことになるのか。この場における、加害者と被害者を隔てる境界線は実にあやふやなものでしかない。誰かが、ぼそっと自分の名を呟いただけで糾弾される側へと送り込まれかねない冷たい雰囲気が、帝権擁護委員の間を満たしていったのである。

皆、帝権擁護委員（オプリーチニキ）なんかにならなければよかったと激しく後悔していた。だが、その後悔を知られれば、殺される。この恐怖から逃れるためには、より強く、より激しく、狂気にも似た熱心さで、一心不乱となって職務に精励している姿を周囲に示すしかないのだ。

「いったい何をしてるの？　ルフルス・ハ・ラインズ次期法務官」

その声を耳にした委員達は、恐怖で凍り付き、瞬き一つ出来なくなった。

だがルフルスだけは、テューレの声を耳にすると喜色をたたえて振り返る。

「テュ、テューレ様！　どうしてこんな所に」

「報告が遅いから気になって見に来たのです。ゾルザル殿下のご期待がかかっているのですからね。がっかりさせないで下さい」

「し、しかし」

「駄目。『しかし』は、なしよ。そういういけない言葉を口にしては駄目なのよ」

テューレはルフルスに歩み寄ると、その耳朶に吐息を吹きかけるようにして語りかけた。

「あなたが口にして良いのは、『はい』よ。分かるでしょ？」

「は、はいっ！」

「相手は、女子供と若者とは言えない連中の寄せ集めなのに、選ばれて集まったはずの貴方達がどうして勝てないのかしら？　貴方ってもしかして……無能なの？」

テューレはこれ見よがしに、不思議ねと首を傾げた。

そんなことはないと言いそうになりながら、はいとしか答えられないもどかしさに憮然とした表情をするルフルス。だがそんなことには全く注意を払わない態度で、テューレは語り聞かせた。

「わたくしはこれから殿下の下に戻らなくてはなりません。あなたは帝権擁護委員部（オブリーチニナ）発足の功労者。少なくとも、わたくしはそう思っていますからね」

「は、はいっ！」

「でも、わたくしの報告を聞いた殿下がどう思うかまでは分からないわ。もしかすると、とても残念なことになってしまうかも知れない。でも、そんなのは駄目。だってわたくし、貴方に短剣を届ける役目なんか引き受けたくないんだもの。分かって下さるわよね？」

「は、はい」

「ですから、良い報せを可能な限り早く届けて下さいね。この際だもの、多少の無理とか損害は仕方ないわ。そうでしょ？　だって良い報せを届けるためですもの。そうよね？」

「は、はい」

「よい返事で嬉しいわ。では、良い報せだけを待っていますからね」

テューレはそう言い残すと、ルフルスの顎を撫でて去っていった。

その後ろ姿を見送ると、ルフルスは狂おしげに震えた。頭を掻きむしり、獣のように唸った。

こうして集団ヒステリーの状態に陥った帝権擁護委員達（オブリーチニキ）が生け贄（にえ）に選んだのが、帝都の防衛を担うために配備されていた帝国兵達なのである。

問題は、例え精神的な失調から発せられたものでも、これに従わなければならないことであった。軍は、帝権擁護委員部（オブリーチニナ）の要請には協力しなければならないと、特別法によって定められていたからである。

協力とは聞こえの良い言葉であるが、拒否する権利がないという意味では従う義務を課されたも同然である。帝権擁護委員（オブリーチニキ）は、獣毛を束ねた箒を振り回し、歯を剥いて、裏返った声で進め進めと追い立てるように叫き散らした。剣を抜いて、進まないとコレだぞと泣き叫ぶように白刃をきらめかす者までいた。

帝国軍の将兵にとっては意気が上がらないこと甚（はなは）だしかった。男のヒステリーほどみっともなく情けないものはないからだ。それでも命令だからしょうがない。不承不承といった体で翡翠宮へと進んだ。とにかく前進する。それより他、なかったのである。

これに対して総数で六百人ほどの騎士団側は、最初の接触から、翡翠宮の建物を囲むようにしてバリケードを構築すると守備をしっかりと固めていた。

近付いてくる帝国軍将兵が味方であることも重々承知していた。だが、彼女たちにも翡翠宮を守るという任務がある。敵側に立って向かって来る者に手加減している余裕などどこにも無かったのである。

こうしてバリケードの隙間から放たれた矢が情け容赦なく、やる気に欠けた帝国兵の頭上に降り注ぐこととなった。

「な、なんで俺達が!?」

分かってはいたが、やはり理解していなかったのかも知れない。兵士が進むと言うことは、反撃を受けるということである。目の前にいるのが敵だということを、彼らはどこかで考えまいとしていたのだ。

驚愕と戸惑いに駆られた帝国兵は、隊列を崩し、立ち止まった。そして一瞬の逡巡の後に逃げることを選んだ。だが退こうとする彼らに対して、今度は後方からの矢が降り注いだ。

「進め。進まないと敵前逃亡だぞっ！」

前後から射かけられ進退窮まった兵士達は、いよいよ恐慌状態に陥った。

ある者は翡翠宮に、またある者は自分達を背後から狙う帝権擁護委員に向けて絶望的な突撃を敢行した。そして、双方から矢を受けて、あるいは槍に突かれてばたばたと地に伏していったのである。

それは戦闘と呼ぶにはあまりにも無惨すぎる光景である。普通の神経の持ち主ならば、このようなことは繰り返すまいと思うほどのものだ。それなのに、そんな光景ばかりが、何度も何度も繰り返されることとなってしまったのである。

騎士団は帝国兵の度重なる攻撃を払いのけることに、なんとか成功していた。

しかしそれは、彼女達の実力と言うよりは、幸運がもたらしたものと認識した方が良いだろう。攻撃側のとった手段が、前述したような、兵士を追い立て、数に物を言わせてひたすら突き進むという拙劣なものばかりであったからだ。

恐怖に駆られて突き進んで来るだけの兵に、戦術だの作戦だの謀(はかりごと)をめぐらす余裕などない。それでも連日連夜続いた攻撃により、騎士団にも負傷者が続出し、死者も少なからず出ていた。無傷の者は指揮官から兵士に至るまで一人としていないという状態である。遠からず支えきれなくなる臨界点が来る。誰もがそう予感していた。そして、それでもなお、騎士団の兵士達は戦い続けていたのである。

すでに時間の感覚が失せている。兵士達は身体を横たえる隙間がわずかでもあるのを見つけると、昼だろうと夜だろうとそこに身体を横たえて眠り込んでいた。疲労困憊(ひろうこんぱい)している上に昼夜の別なく続いた攻撃によって、まとまった睡眠をとれないため、少しでも時間があればその隙に身体を横たえるのだ。その為に戦闘がない時は妙な静けさが戦場を支配し、動いてる者と言えば見張りの兵士か、あるいはまだ使える矢を拾い集めている年端もいかない従卒の少女達くらいだった。

帝権擁護委員(オプリーチニキ)が、次の生け贄にする帝国軍部隊を連れて来るまでが、しばしの休息なのだ。

ボーゼスは、指揮所天幕から陽の落ちた外の様子を見渡すと、自分を支えてくれる僚友に尋ねた。

「ヴィフィータ。兵士達の状況は？」

「みんな意気(いき)天を衝(つ)くばかりと答えたいところだけど、流石にもう不味いかな」

ちょっと暗いから燈火を増やせと従卒を呼ぶヴィフィータ。だが見習いの騎士達は指揮所の片隅で抱き合うようにして眠っていた。彼女たちも負傷者の看護、食事の支度などで働きづめに働いて疲れたのだろう。さすがに起こすのが気の毒になって、ヴィフィータは自分で燈火に灯を点けてい

った。

「くそっ、燈火用の油がもうないぜっ」

ボーゼスは「そう……」と俯くことで憂い顔を隠した。だが、それがかえって憔悴した彼女の心境を周囲に知らしめる姿となっていた。もちろん当の本人はそれに気付いていない。

ボーゼスは恨めしげな視線をヴィフィータに向けた。

帝権擁護委員部（オブリーチニナ）を相手に戦端を開いたことを悔いているのだ。何度も、「何故、勝手に先走ったの？」と問いつめたくなった。だがそれはしてはならないのが指揮官の立場である。それを言うならば指揮官として、掃除夫共が外交協定を破って翡翠宮の敷地に踏み込んでも、争ってはならないと明確に指示しておかなければならなかったのだから。

しかし、そうしなかった。それがボーゼスの後悔である。そして問題はこれによってピニャがどうなってしまうかである。それが彼女を悩ませていた。

ボーゼスが何を悩んで葛藤しているかを知らないヴィフィータは、無神経に別のことを持ちかけて彼女の邪魔をした。

「何が不味いって、食料の備蓄が尽きそうだってことさ。まさかこんな事になるとは予想してなかったからな。備蓄にそれほどの支度がない」

思わず、勢いに任せて戦端を開くからだと皮肉を言いたくなったボーゼスだが、出てきた言葉は「お水は足りていて？」と問うものであった。

「ああ。翡翠宮の井戸が使えるからな。それと食糧はニホンの連中が少しばかり備蓄を持ってた。例えばこれだ」

ヴィフィータはボーゼスに、プラスチック製の袋を放り投げた。

「これは何かしら？」

「『うめぼし』とか言うものらしい。柑橘がなくなっちまったからな。お前が、すっぱいものを欲しいだろうと思って、何か無いかと尋ねたらこいつを出してくれたんだ」

ボーゼスは中から赤い実を取り出すと、酸っぱそうな香り漂うそれを口に入れた。

すると頬を抑えて唇を窄める。

「ほぅぅぅぅぅ、すっ、酸っぱあい！　すっごく酸っぱいわ！」

柑橘とはいささか趣の異なった鋭い酸っぱさに、ボーゼスは強い衝撃を受けたようである。そして頬を押さえて唇を尖らす彼女の姿を、ヴィフィータは腹を抱えて笑った。

「あはは。向こう側には変なものがあるんだな」

「貴女、さっきから向こう向こうって言うけど、わたくしたち、すっかりニホン側の敷地に入ってしまってるのよ」

「そう言えばそうだな。こうなって見るとあるのかないか分からないような境界線を律儀に守ってたのが馬鹿らしく思えてくるぜ。そもそもオレ達何だってこんなことやってるんだ？」

「もちろん外交協定を、陛下のご意志を、そして帝国の名誉を守る為よ。そうでしょ？」

「そうだ。確かにそうだ」
ヴィフィータは安心したように頷いた。
どうやらボーゼスの胸中は見透かされていたようである。
この戦いの目的も意義も理解しているなら大丈夫であるとヴィフィータは言う。だがボーゼスは「なんの話かしら、そんなことは知らないわ」とばかりに食べ物のことに話題を引き戻した。
「どうしようかしら。日本側にお強請りをすれば、少しぐらいは分けてもらえるでしょうけど、全員分をまかなえるほどの量になるとも思えないし」
「俺は傷ついた馬を食料にしたらどうかと思う。飼料も少ないから口減らしになる」
「馬を!?」
ヴィフィータは「ああ」と頷いた。
ボーゼスは悩ましそうに眉根を寄せた。
特地において馬とは、移動手段でありかつ生産の道具でもあり、そして貴重な兵器である。
さらにこの騎士団において、馬は騎士の騎士たる由縁とみなされ、日頃から愛し大切にしていた。
ただの兵器ではなく、大切な相棒にして戦友なのだ。
それを食べようなどと言い出せば、きっと大きな動揺が湧き起こるだろう。なのにあえて言い出すからには、事態はそれほどまでにせっぱ詰まっているということなのだ。
しばし躊躇った後にボーゼスは「……いいわ。許可します」と首肯した。

「助かる。これで、問題の一つが先送りできたな」
「簡単に言うけど、皆に食べさせるのが大変よ」
この騎士団では、馬が死ぬと葬儀までするのだ。きっと皆、嫌な顔をするだろう。食事に手をつけない者も出てくるに違いない。
「そんなことはオレが考えるからいい。お前が気にする必要はねえよ。次の課題は、この後どうするかだ。団長代行、方針は立ててるかい？」
ボーゼスは二つ目の梅干しを口に放り込むと口を窄めながら言った。
「日本側と話し合う必要があるけれど、頃合いを見て皆を引き連れて強行突破しようかと思っているわ」
「包囲を突っ切って、いったいどこに？　そもそもここを離れたら、俺たちの戦う法的根拠はなくなっちまわないか？」
「大丈夫よ。日本の方達を守るためで押し通せるから。何しろこの戦いは、帝権擁護委員部（オブリーチニナ）側の協定破りに端を発したものですからね。それと行き先はイタリカにします。あそこには赤薔薇隊と歩兵隊の過半が残してあるもの。合流して騎士団を立て直しましょう」
それでピニャの立場が良くなるとは思えないが、少なくともここに立て籠って戦い続けるよりはマシなように思われたのだ。
「あそこも、すっかり俺たちの拠点になっちまったなあ。フォルマル家の人達には悪いけど」

「問題は、皇城におわすピニャ様よ。大丈夫かしら」
「いくら奴らでも、皇族方を害するようなことまではしないだろう」
その脳天気な物言いに、ボーゼスは呆れたように天を仰いだ。
「直接手を出さなくても、苦しめる方法はいくらでもあるんですからね」
「そ、そりゃそうだろうけど、いくらなんでもまさか。皇女殿下だぞ」
あり得ないだろうと言うヴィフィータに、ボーゼスは「いいえ。わたしは最悪の事態を考えているの。だから脱出の時は、殿下を連れ出したいわ。出来れば一緒に方法を考えて下さらない？」と迫った。
「そ、それにはまず居場所を突き止めて、連絡を取らないとなんないぞ。けど、皇城に忍び込むってのはちょっとばかし難しいぜ」
「困ったわ。ハミルトンはいったい何をしているのかしら。せめて手紙の一つでもいいから届けてくれればいいのに。気の利かない娘なんだから」
ボーゼスは「ああ、もう！」と髪を掻きむしった。
「いや、こっちから行くのが難しいんだから、向こうからだって来れないだろう」
その時、ガバッと天幕が開かれた。見張りの騎士が外で怒鳴っている。
「また、敵が参りましたっ！　夜襲です！」
「敵襲！　敵襲！」と味方に危機を報せる声が各所であがっていた。

寝ていた皆が跳ね起きて、武器を片手に飛び出していく。従卒の少女達も眠たげな目を擦りながらも、ごそごそと起き出していた。

「みんな、すぐに備えの位置について！　敵の夜襲よ！　急いで！」

ボーゼスは、ヴィフィータと共に指揮を執るために駆け出していった。

そのころ、皇太子府ではボーゼスが心配したように、皇女ピニャが半数以下に減った元老院議員達からの糾弾の嵐にさらされていた。翡翠宮で戦死した帝権擁護委員（オプリーチニキ）の多くが、主戦論派である彼らの子弟、縁者だったからだ。

「皇女殿下は、元老院の権威をなんと心得ておられるのか？」

「さよう。我らがどれほどの思いでオプリーチニナ特別法を可決したのかご理解下さっていない」

議員達がピニャに向けて、口汚いヤジを飛ばしていた。

だがピニャは、黙したままであった。

耳を塞ぎたくなるような罵声を浴びても、言い返すこともしない。

彼女の精神は、皇帝の不豫（ふよ）に始まった事態の悪化と、ディアボから見捨てられたことによって、絶望の荒野を彷徨していた。そこにこの罵声の嵐である。弱り切ったピニャには、黙って耐えることしかできなかったのである。

もちろん。ピニャに味方がいないわけではない。

ハミルトン独りだけではあったが、側にいて懸命に立ち向かってくれた。

「まるで殿下の理解力が不足しているかのように言わないでいただきたい。殿下は理解されている。ただ許容なさらないだけなのです」

ハミルトンはピニャを守るために、圧倒的多数の元老院議員に対して絶望的な論戦に討って出て、満身創痍の状態となっていた。

「それを理解力の不足だと申し上げている。我らも何も好きこのんで、このような法律を可決したわけではないのですぞ。断腸の思いを堪えたのです」

それを聞いたハミルトンは鼻を鳴らした。

「理解できさえすればそれを許容するというのは妄想でしかありません。理解し共感してもなお許容出来ないということは、いくらでもあるのです。自らの主張が許容されないからといってその理由を相手の理解力不足に貶めようとするのは、ただの我が儘です」

すると議員達は一斉にハミルトンを罵倒した。

そしてハミルトンがその声圧に屈して口を閉じると、主戦論派の急先鋒たるウッディ伯爵がつけ込んで来るのである。

「とにかく殿下には、翡翠宮に逃げ込んだ者共を帝権擁護委員部（オプリーチニナ）に捕らえさせることへのご同意を願いたい」

「それは無理だと先般も申し上げた。翡翠宮は皇帝陛下の勅（ちょく）によって、外交特権が付与された使節

の逗留の場。帝国の法の及ばない所なのです。そして我らはそれを守る楯。元老院議員の方々にこそ問いたい。使節の方々の安全を脅かそうとする帝権擁護委員部の行為を、本当に認めていらっしゃるのですか？　彼らの為していることこそ、皇帝陛下の権威と帝国の名誉を貶める帝権干犯そのものではありませんか!?」

「彼らは別に、皇帝陛下のご意志を損ねようとしているわけではない。使節の方々を害そうとしているわけではないからだ。我々が求めているのは、翡翠宮に逃げ込んだ者共の引き渡しだ。そもそも翡翠宮の警備をしているのであれば、侵入しようとする者を捕らえることも騎士団の任務ではなかったのか？」

「確かにそのとおり。不法に侵入しようとする者があれば我らはこれを捕らえるでしょう。それが帝権擁護委員部が追っている者であれば、当然のことながら引き渡します」

　すると各所から声が湧き上がった。

「じゃあ、何故そうしないっ!?」

　ハミルトンは声のした方向をキッとにらみつけた。

「我らとしては、堂々と正面からやって来て、用件があるから取り次いでくれと言う者が現れれば取り次がざるを得ないのです」

「それが犯罪者でもか!?」

「例え犯罪者でもです。誰に会って誰に会わないかは、ニホンの使節が決めることなのですから」

「それを、何とかしろと言っている！」
「無理です。これも外交特権で保障されていることの一つです」
「そのような条項は協定にない！」
「それは、解釈の違いでしかありません。使節の活動を妨げないという条項に包括されています」
「拡大解釈だ！」
「いいえ、必要条件です」
議論は水掛け論へと陥りそうになった。だがハミルトンとしては枝葉末節にかかわる話で時間を費やすことは大いに結構なことであった。ここで彼女が為そうとしているのは、論戦で勝つことではなく、自分が囮となってピニャに対する糾弾を妨げることだからである。泥仕合は望むところなのだ。
だが、それを快く思わない者が敵方にいた。
軍部出身のクレイトン男爵が立ち上がると話の方向性を変えた。
「では、ニホン側に犯人の引き渡しを求めてはどうか」
ハミルトンは胸中で舌打ちした。話が面白くない方向に向かっている気配を感じたからだ。
戦場に躍り出て、敵をさんざん引っかき回し、頭に血が上った敵をどうにか自分に引きつけたのに、冷静な敵がいてピニャという本陣めがけて突き進もうとしているのだ。
「ニホン側は、彼らを庇護すると回答して参りました」

すると議員達は、ホラ見ろとばかりにしたり顔となった。
「やっぱり、奴らはニホンと繋がっていたんだ」
「モルト陛下が翡翠宮に外交特権を付与されたのは、使節達との講話交渉を円滑に進めるためであって、敗北主義者達を匿わせるためではないぞ！」
「外交特権を停止しろ！」
「いっそのこと、講和会議そのものを中止しろ。時間の無駄だ」
「アルヌスに攻め込め。大反撃だ！」
ヤジが怒号のレベルにまで高まって、収拾がつかなくなってしまった。
するとウッディ伯爵が両手を広げて静めていった。もちろんハミルトンを庇おうとしてではなく、自分が喋るためである。
「我らとしても、これ以上の被害は出したくありません。無益な戦いで血が流されるのはもうこりごりでしょう。殿下のご指示とあらば、騎士団も翡翠宮の守りを解くはず。いかがでしょう。殿下、ここはお譲りいただけませんか？」
「無理です。翡翠宮を守ることこそが、騎士団に課せられた責務だからです」
「ハミルトン殿。我々は、貴女には聞いてない。ピニャ殿下に尋ねているのです」
「そうだそうだ！」
「ピニャ殿下のお答えを頂きたい！」

ハミルトンは慌ててピニャを隠そうとするかのようにその前に立った。だがその態度を議員達は激しくなじった。

「だいたい秘書官風情が、何故答弁しているのだ？　僭越だぞ」

ハミルトンは言い張る。

「殿下はご加減が悪く……」

「口も利けないほどか!?」

「先ほどからずうっと黙り込んで、秘書に代弁させているだけではないか。我々を馬鹿にしているとしか思えんぞ」

「そうだそうだ！」

「で、殿下……」

もう庇いきれないかも知れない。狼狽えたハミルトンはピニャに声をかけた。

するとピニャがハミルトンの背中を叩いて呼びかけに答えた。

「もういい、ハミルトン」

「は、はい？」

「もういいと言っている。妾がここにいても仕方がなかろう。夜も更けた故、妾は帰る」

「え、あっ、殿下！　し、しかし」

「しばらく聞いていたが、彼らは、妾に答えさせたいのではない。妾に言うことをきかせたいのだ。

彼らの主張を是とするような答えでなければ、何を言ってもきっと満足するまい」

皇女はそう言うと席から腰を上げた。

すると議員達はピニャが発言するものと思ってか、皆、一斉に口を閉じた。これまでずうっと黙っていた皇女が、どんな言葉を発するか興味を抱いたのだ。

「諸君。妾は気が滅入っている故、これにて失礼する。ご機嫌よう」

だが、ピニャの答えは彼らが期待していたものとは大きく異なっていた。それが反感を呼び起こし感情的な罵声となって、立ち去ろうとするピニャの背後にわっと襲いかかった。

「なんだそれは！」

「例え皇族でも、我々を馬鹿にするにも程がある！」

「殿下。殿下は、騎士団の女性と年寄りで、あとどれほど戦い続けられるとお思いですか？」

それは放っておけば彼女たちは全滅するぞという脅しの響きがあった。

ハミルトンが言い返す。

「その女と年寄りに手を焼いているのはいったいどちらか？　むやみに突撃を命じて将兵の生命をいたずらに蕩尽し、皇帝陛下の軍を損ねているのは、いったいどちらですか？」

「騎士団が逆らうからだろう！」

「手加減してやっていればいい気になりおって」

「いっそのこと予算を切れ」

「そうだ、そうだ。騎士団解散を議決しろ！」
ウッディ伯爵は振り返ると静かにするように告げた。そして改めてピニャに向かって告げた。
「このような声すら出ております。そうなれば、騎士団を維持していくことも出来ますまい。兵士らも路頭に迷うこととなりましょう。我々もそのような手段は取りたくありません」
最後通牒というわけか。
ピニャは、気怠げにふんっと鼻息一つであしらうとこう返した。
「好きにするがよい」
「なんと？」
「好きにするがよいと言った。どうせ、この国はもう滅茶苦茶になってしまうのだからな。先々のことなど気にしてなんていられるものか」
「何を、おっしゃられるか。我らは、そうなることを防ぐためにこうして」
「どんなことでも、それを始めた時の動機は立派なものだった……とは初代皇帝の言葉だったな。だが大抵が後になって、そんなつもりではなかったと言う事態になる。そんなつもりではなかったという言い訳を皆がするようになる。そもそも、いくら議事堂が再建中だと言っても、皇太子府のような場所で議事を開くとはいったい何事か？　既に、元老院が兄様の決定を追認するだけの機関に成り下がった証左としか思えない」
「殿下が、以前より我らを快く思っておられなかったことは承知しておりましたが、そこまで我ら

を見下しておいでか？」
「失礼千万！　なんたる暴言」
これまでと異なって、ヤジすら出ないという重苦しい空気が漂った。
怒りや反感というのは、表に現されている内はまだ良いのだということが実感できる瞬間であった。何かきっかけがあれば、議員達は直接襲いかかって来る。その気配に、ハミルトンは気圧されて後ずさった。
「ピニャ……言葉を慎め」
それまで沈黙していた皇太子ゾルザルがついに口を開く。
「俺としては、ニホンと講話交渉をうち切るつもりはない。だが、政情が未だ安定せぬ上に安全も確保できぬ故、一度、使節方には帝都よりご退去いただこうと思っている。もちろんその行き帰りの安全は俺の名で保証する。そして政情が安定した後に、ふたたび翡翠宮にお越し頂くのだ。これでどうかな？」
口々に賛同する議員達。
「そして退去させる際に、逃げ込んだ者の引き渡しをさせる、と」
「なるほど。そういうことなら、外交特権を犯すことにもなりませんね」
ゾルザルはしたり顔で妹を見た。
「そういうことだ、ピニャ。お前達のしていることなど所詮は悪あがきでしかないのだ」

だがピニャはそんなゾルザルの言葉にすら、どうでも良いと切り捨てると振り返った。
「……もう、兄上の好きにすればいいのです。妾は先ほどからそう申し上げています」
「殿下、捨て鉢にならないで下さい」と、ハミルトンは縋った。
しかしピニャは、そんなハミルトンすらも見捨てるようにして皇太子府をあとにした。

＊　＊

帝都上空。東の空が茜色に染まり、太陽が赤銅色の姿を現す中で、翼竜が大空を舞っていた。
元老院議事堂が空爆されて以来、帝国軍も帝都防空にそれなりの危機感を持って対策を講じていた。とくに最近になって将軍職に任ぜられたカラスタは、敵が『ヒコウキ』という、空を飛ぶ乗り物を自在に操っていることを警戒し、防空体制の強化を提案した。
そのため、峻険（しゅんけん）な西域山岳地帯に配されていた竜騎兵を呼び寄せて、帝都上空に近付こうとする者の監視と警戒任務にあたらせたのである。その甲斐あって帝都上空に侵入しようとする者を察知し、警報を発すると言うことだけは出来るようになっていた。
今朝も、日の出前に離陸した三騎の竜騎士が、三角編隊を組んで限界高度ぎりぎりをゆっくりと旋回していた。
「空気が重くてぬめりけがあるな。夕方には天気が悪くなるかも知れない」

竜兵長の呟きが風に乗ってわずかに聞こえた。
「どうせなら早く降らねぇかな、雨」
天気が悪くなれば、こんな形ばかりの警戒飛行もおしまいにできる。左翼の竜騎兵ミハエルはそんなことを思いつつ、まだ夜の残滓が去りきらない西の空についたシミのような何かを認めて警告の声を発した。
「竜兵長。西方上空！　……来ましたよ」
「馬鹿野郎、敵が来たらすぐに地上に報せろよ！　信号旗を落とせ！」
「敵襲！　敵襲！」
赤い吹き流しを上空から落とすのが、敵襲の警報ということになっている。
ミハエルは用意していた吹き流しを次々と投下していった。
「こんなことしたって無意味だし。だいたい誰かこっちを見上げててくれるのかな。無理だろうなあ……」
いくら目立つ赤色の吹き流しを用いても、この高度では見つけることも難しいのだ。地上から見上げている視力の良い者がいたとしても、青空に赤い毛筋のようなものが、うっすらと見える程度でしかない。
さらに敵を発見したとしても、何も出来ないという無力感もあった。
ここ最近になって現れるようになった敵の大きさは古代龍級。しかもその動きに鈍重さは少しも

なく、横に伸ばしている翼を、縦になるまで体を傾けた急旋回すらやってのけるのである。
その優れた運動能力のせいで、竜騎兵達は近付くことすら出来なかった。
よしんば近付くことが出来たとして、敵兵は身体を外界にさらしていない。龍の身体全体を巨大な鎧で覆って、その中に隠れているかのようだ。
そんなものを相手に、竜槍一本でどうしろと言うのだろう。
「新生龍ぐらい用意しなきゃ、あれは墜とせないよなあ」
敵は、こちらが手を出せないのを良いことに、帝都の空を侵して悠々と飛び去って行く。彼らはそれを切歯扼腕(せっしやくわん)しつつも見送るしかないのだ。腐るなと言う方が無理と言える。
「それなのに、上の連中は帝都侵入を防いだって報告してるんですよね」
カラスタ将軍は皇太子に、これを竜騎兵の戦果として報告しているらしい。
「事実防いでるじゃないか。敵は我々に恐れをなして帝都から去ってる。違うのか？　それに今回ばかりは目に物見せてやるさ。三度目の正直だ！」
竜兵長はそう叫んで命令を発した。
ミハエル達は、大地に向けての急降下をかけた。
敵は過去二回、帝都侵入を試みている。その二回ともが、帝都郊外の平原で何かを落として立ち去って行くという経路をとった。今回も同じ経路を通るに違いない。
いつも追いつけないのは敵を追尾しようとするからだ。ならば先回りすれば良いのである。

きっと上手くいく。竜兵長はそう怒鳴って部下を鼓舞した。
確かにその通りだ。ミハエルは気を取り直して竜槍を構え直した。
長さ四レンにもわたる竜槍で、正面から突撃をかければ、こちらには何も出来ないと思って油断している敵にも、傷の一つくらいは負わせられるはずなのだ。
だが、今回ばかりはこれまでの二回と何か様子が違った。
敵の大きさが違うのだ。その数も速さも……二頭？
ふと、耳にした噂を思いだした。
「あれはもしかして元老院を破壊したという、空飛ぶ剣。竜兵長、不味いっ！」
ミハエルは警告の声を発したが、気が付いた時には遅かった。
噴煙を伸ばしながら飛来した何かが、目前で爆発。その強烈な爆圧に巻き込まれ、竜兵長をふくめた二騎の竜騎兵が、翼竜もろとも全身を引きちぎられて墜ちていった。
「竜兵長っ！」
ミハエルが助かったのは、たまたま遅れをとっていたからに過ぎない。運が良かったのだ。
だがその幸運もどこまで続くかは怪しい。旋回した敵が、討ち漏らしたこちらに向かって来るのが見える。全身の体毛が逆立つような殺気を感じていた。
ミハエルは翼竜の手綱を引いて翼をたたませると、再び地上めがけて落下に等しい急降下をかける。

光り輝く軌跡が雨のように飛来して彼をかすめる。そのほとばしりの飛沫を受けて、彼の乗騎たる翼竜がバランスを失いかけた。

何事かと思ってみれば、彼の翼竜の甲皮が傷を負っていた。

翼竜の鱗すら破るほどの武器を敵が有しているという噂は耳にしていたが、まさかこれほどとは。その驚愕が彼に手綱をとる手をゆるめさせた。そしてそのわずかな油断が、彼の翼竜に身をよじらせる隙を与えることとなる。

それは本来ならば、竜騎兵として許されないことであった。例え手傷を負おうとも、翼竜に悲鳴一つあげさせないことが一人前の竜騎兵には求められるのだ。そのためにはまず、翼竜を完全に屈服させなければならない。ところがまだ若い彼にはそこに至るまでの能力がなかった。翼竜は苦痛に身をよじり、彼の制御から離れて無様なまでに不規則飛行をしてしまった。

だが、何が幸いするか分からない。彼の敵は、その無様すぎる挙動を追い切れずに、彼を追い抜いてしまった。こうして彼は敵の上手を取った。すれ違いざま、彼はヒコウキに騎乗する敵の姿を目にしていた。

「二人乗っている!?」

ミハエルは、喜色を浮かべて槍を構えた。

「みんなの仇だ。墜としてやる！」

敵が無防備な横腹をさらした一瞬の隙を狙う心づもりだった。だが敵の速さは彼の予想を遙かに

超えていた。
あっと言う間に、視界から消えた。どこへ？
敵の姿を見つけようと振り返った瞬間。回り込んでいた敵が放った弾雨……20㎜バルカン砲の弾丸が彼と彼の翼竜を襲っていた。

帝都郊外に作られた竜騎兵部隊の厩舎。
偽装し茂みに隠蔽する特殊作戦群所属の剣崎三等陸尉は、レーザー誘導装置のレティクルを急ごしらえの厩舎へと合わせた。ＧＰＳ衛星の飛んでいないこの特地では、こうした旧式の兵器の方が威力を発揮する。
剣崎を守るようにして槍田と的射らが周辺を警戒している。
「こちら、セイバー。準備良し」
すると上空を通過しながらＦ４ファントムが爆弾を投下した。
その爆弾はあたかも吸い込まれるようにして厩舎へと落下して行き、翼竜の厩舎を炎のかたまりで押し潰した。

『敵、防空施設を破壊』
『帝都上空に飛行物体なしを確認』

『了解。これより第二段階へ移る』

地上では、皆が空を見上げていた。奇しくも何者かの帝都接近を空対空ミサイルの爆発音が報せることとなった。

青い空を背景に、白い雲のような爆煙が浮かんでいる。

大空を舞うジェット機の轟音だけがどこからともなく響いていた。

「あれはなんだ!?」

「どうした!?　報告しろ」

その異常な出来事に、帝国兵の耳目が集まった。

もし、竜騎兵が撃墜されなければ、投下された赤色の吹き流しには、誰も気が付かずに終わっていたかも知れない。竜騎兵らの戦いは地上の兵士達にとって、それぐらいに高い空での出来事だったのだ。しかも、その高さは物理的なものばかりではない。精神的な隔たりを生む距離でもあった。

見張りから報告を受けた士官が血相を変えて詰め所から飛び出していくが、兵士達はその姿をぼやっと眺めている。士官が走るのは、指揮所に何かが起こったことを報せて、どのような対応をするべきかの指示を貰うためだ。だが何が起きたにしても、彼が走って行き、指示を貰い、そして帰って来るまでには、しばらくの時間を必要とするのだ。

兵士達からしてみると、今、確かに何かが起きているというのに、彼が帰ってくるまでは何もす

ることがない。そのため緊迫感が全く生じなかった。一人一人の兵士にとって、事態の進行は意外とのどかで、のんびりとしているように感じられるのである。

ヒュッ。

風を切る音に思わず首を竦める。

直後、腹の底から突き上げるような重い地響きにも似た爆発音が轟いた。

「おい、今度は何があった？」

「あ、あそこだ、あそこだ」

見れば帝都郊外に新設された竜騎兵の屯営から黒い煙が上がっていた。

地上の施設が破壊されたとなれば、危機意識と警戒心を最大限まで高めなければならない。

「おいっ、誰かすぐに報せに行け」

だが兵士達は、危機感よりも安堵感を得ていた。これで翡翠宮攻撃のために帝権擁護委員部（オブリーチニナ）に連れて行かれずに済むからである。彼らの目下の関心事は、次はどの隊が帝権擁護委員部（オブリーチニナ）に目をつけられるかだったのだ。

「あんまし規律正しくて、強そうだと掃除夫の奴らに連れて行かれるって話だぜ」

帝都守備隊の間で、そんな噂が飛び交い、わざと装備を着崩したり、やる気無さそうに見せることが流行していたくらいなのだ。

連中は兵士達の命を磨り潰していくような戦いを強いる癖に、失敗の責任を取ろうとしない。兵

士となったからには命令される限り戦うが、そんな奴らのために戦うのは、まっぴらゴメンというのが彼らの本音なのだ。

「これで、ウチの大将。掃除屋の要求を拒絶してくれるよな」

「無理かも知れんなあ。ヒラモグラだもん」

ヒラモグラとは、砂に潜って上ばかり見ている平たい小動物のことである。

「でも、警戒を厳重にするってことになれば、余所に兵隊を送り出している余裕なんかなくなっちまうだろ？」

「警戒程度じゃなぁ。どうせなら敵が帝都を囲むとかしてくれれば完璧なんだよ」

会話しながら、兵士達の目配りは常に城壁の外側へと向けられていた。だからだろう、背後から迫っている危険には全く気付かなかった。

突然、後ろから口が覆われる。

えっ！

驚愕している間に、彼の頚部（けいぶ）、喉頭隆起（のどぼとけ）の右外方三横指分の位置から、ナイフが胸鎖乳突筋（きょうさにゅうとつきん）を突き破って深々と差し込まれた。

そして、そのままナイフは前方へと突き出される。その際、頸動脈と気管、横隔神経といった重要な器官組織が引き裂かれ、傷口から噴出した赤くて熱い何かが下顎を濡らした。

焼け火箸を押し付けるような激痛を首に感じたのもその時である。

痛い！　痛いっ、痛いっ、痛いっ！　一生懸命叫ぶが支配神経を切断された横隔膜は少しも呼吸の役に立ってくれず、喉を失った今、声を発することも出来ない。

傍らで、仲間の倒れる音がする。

ふと気が付くと、自分もいつの間にか転げていた。身体に力が入らなくなっていた。

視野の右半分が城壁の床で覆われて、まるで壁のように見える。首を動かすことが出来ないので目線で周囲を探るしかないが、見慣れたはずの風景が、突如として奇異な角度に傾いたとしか表現できない状態に陥っていた。

えっ！　えっ!?

これはいったい何の冗談だろう。いったい何が起こったというのだろう。

自分の背後にいた誰かの足が見えた。それはまだら緑の服装をした何者かだった。それが誰かに語りかけながら、自分を跨(また)いで越えて行こうとしている。

「西門の制圧をした。こちらアサシン、西門を制圧した。このまま保持する」

次第に視野が薄れていく。目がおかしい。耳が遠くなる。何が、何が起きたのか。

帝国兵は、ひたすら戸惑い続けた。そして彼は最後の最後まで、自分に何が起きたのか理解することが出来なかった。

帝都の西側には、城壁に面する形でバスーン監獄が存在している。

そこは裁判の結果が出ていない未決囚などが収監される場所であったが、現在は帝権擁護委員部（オプリーチニナ）の牙城となっており、講和派の元老院議員、貴族などが集められていた。

その高い壁の外側に、迷彩服を纏った陸上自衛隊の隊員達が姿を現した。高い外壁に背中を預けるように細い路地から、じわじわと進んで閉ざされている門を取り囲んだ。

見上げると栗林と富田が外壁に付属した尖塔の上で手を振っている。見張りを無力化したことの合図だった。

桑原陸曹長は、ハンドサインで部下達に正門脇にある通用門へ近付くよう指示する。

彼の足下には男が倒れていた。

桑原は知らないが、それはルフルス次期法務官であった。通用門から出てきたところで出会い頭に倒したのだ。心構えをしていた分だけ桑原に有利で一瞬のうちに片が付いた。

「行くぞ」

桑原の命令で、通用門の分厚い扉が開かれる。

素早く、内部へと侵入していく第三偵察隊の隊員達。伊丹と古田、黒川などを欠いてはいても、彼らは桑原の指揮下で機械仕掛けのような正確で素早い動きを見せていた。

もちろん彼らだけでこのバスーン監獄を解放しようとしているわけではない。他の部隊や特殊作戦群との協同作戦であり、ほぼ同時に攻撃が始まる。

桑原がちらちらと時計を確認する。

「前に出過ぎるな。特戦と４ｒｅｃ（第四偵察隊）の攻撃とタイミングを合わせるぞ！」

桑原達は音もなく、監獄の警備詰め所へと近付いていった。中には騒いだり喋ったりする人間の気配がある。途中途中に立っている見張りや、何かの用事で部屋から出て来る者があれば、その場で静かに無力化処理を施していった。

やがて全員が予定の位置についたことを確認すると、桑原が攻撃開始を命じた。

詰め所の窓や戸口から、一斉にスプレー缶に似たＭＫ３Ａ２手榴弾が放り込まれ、窓や戸口から衝撃と爆音がこぼれ隊員達はそれを合図にして窓や戸口を蹴破るほどの勢いで突入した。

銃声が轟き敵を掃討していく。ここだけではない、あちこちから銃声と手榴弾の爆発音が轟いて派手な騒ぎとなっていった。

普段ならば、この騒ぎは隣接する城壁に配されている帝国軍の注意を引き、敵の増援を招き寄せることになる。だが、今日に関してはそんな心配は不要であった。何故ならば、帝国兵達には他人の心配をしている余裕などないからである。それは上空を横切っていくジェットの轟音が教えてくれた。

見上げれば帝都上空に、Ｃ－１輸送機五機からなる編隊が飛来し、空を背景に淡緑の花を無数に咲かせている。帝都守備の帝国兵達は混乱する空を指さし「あれは何だ？」と得体の知れない何かを、見上げることしか出来なかったのだ。

空挺降下とは、空中挺身の略（文献などによっては空輸挺身とする説もある）で、簡単に言うと飛行機から落下傘（パラシュート）を背負って飛び降りることである。

スポーツでスカイダイビングをする人もいるし、太いゴムひもを身体に繋いで高いところから飛び降りるバンジージャンプなるアトラクションが遊園地にあったりする時代であるから、楽しそうと思う者もいるかも知れない。だが一般的な感覚では、これは怖いと感じるのが普通である。さらに遊びではないから、地上に降下してから戦うための武器弾薬類を装備している。そのため身軽で楽しい空中遊泳と言うわけにはいかないのだ。

だから空挺徽章（くうていきしょう）を得ようとする者に対しては、この怖さを克服する訓練がなされる。

怖くなくなる訳ではない。怖さとは、生きるために必要な行動を起こさせる警報装置的なものだから、失わせたり鈍らせたりしてはならないのだ。ただ、怖さを乗り越える勇気を養うのである。その為、人間が最初に怖さを感じるとされる地上十一メートルの高さにしつらえた塔から、飛び出す訓練を何度も重ねて、必要な動作や行動をパブロフの犬のごとく、条件反射にまで刷り込んで行くのである。

怖さを克服するための工夫はそれだけではない。降下に至る一連のプロセスは、降下員が輸送機に搭乗しようとする前から徹底的にシステム化されて繰り返される。

「背嚢（はいのう）良し、Ｖ型管良し、クイックインジェクター良し、ちょう帯良し、背嚢携行要領良し、小銃携行要領良し……」

飛行機に搭乗する前、空挺隊員達は降下長から体中をまさぐるような点検を徹底的に受ける。ヘルメットを被り、背負ったリュックサックのような袋には一二傘という十五・七キロもある落下傘が入っている。さらに腹の前には万が一のための予備傘を抱える。そしてその下に、あたかも前掛けか化粧まわしの様に戦闘用装備をぶら下げるのだ。

「主傘外形良し、自動索環良し、安全ピン良し、閉鎖ループ良し、枝索良し、背帯良し、肩部離脱器良し、V型調整管良し、胸帯良し、携行袋良し、離脱器安全栓良し、腹帯吊りフック良し、予備傘外形良し、予備傘封印良し！」

これらの点検を通り抜けることで、危険要素は可能な限り排除され、「安全なのだ」と自分に言い聞かせることが出来るようになる。あとは訓練で繰り返したことを条件反射的に行うだけ。

装備の点検後、彼らは滑走路脇に寝そべったような待機姿勢で搭乗の時を待つ。古村崎がだらしないと批判したのは、合わせて六十キロもの装備を身につけ、待機する彼らのことであった。

輸送機が目標上空へと近付いた。

「目標まであと約十分！」

降下地点が近付いて、ロードマスター（空中輸送員）がドアを持ち上げて開く。

外気が機内に吹き込んで、機内が凄まじい轟音で満たされた。

「降下用意。立て！」

隊員達は降下長の合図で立ち上がって椅子をたたむ。これからは、ありとあらゆる動作が指示に

従って為される。鼻くそをほじることすら、指示がなければしない。

「環(わ)かけ！」

降下長の号令で、機内天井に物干しロープのように渡されている繋止索(けいしさく)に、各自の落下傘から延びる自動索環をひっかけて握る。この紐がそれぞれが背負う落下傘をリュックサックの中から引っ張り出してくれる。

「装具点検！」

装備の点検。「いち、にぃ、さん、し……」と数えながら、自動索環、鉄帽の顎紐(あごひも)、肩部離脱器、胸の離脱器、腹帯、腰の装具に触れて点検。さらに振り返って背後に立つ同僚の装備を点検してやる。問題なければ尻を叩いて報せてやる。「異常なし」が、最前部にまで伝わって降下長に報告された。

「この位置まで前へ」

そして指示が出た瞬間、隊員達はターミナル駅に近付いた電車に乗ったサラリーマンのようにドアへと近付く。重たい荷物を抱えたまま、たじろぐ暇もなく、ガニ股でじたばたとすり足で前に詰める。

全員が降下灯という信号機を固唾を呑んで注視している。まだ赤だ。そんな中で、降下長が外の景色から最後の通過地点を確認すると「位置につけ！」の号令を発す。

先頭降下者が、大空を見下ろすドアの前に立って、吹き込んでくる猛烈な風を全身で受ける。つま先からほんのわずかな先はもう、何もない空だ。見下ろす地面は、非現実的なほどに遠い。

「青！」
降下灯が赤色から青色に変わり、ベルが鳴り響く。
「降下っ！　降下っ！　降下っ！」
静から動へ。待機から行動へ。屈伸から跳躍へ。パブロフの犬は、ベルの音で唾液が出るように条件付けられ、空挺隊員達は、この合図の下で大空に飛び出すという条件付けを受けている。皆、目もくらむような高さから次々と飛び出して、脚を揃え伸ばした降下姿勢で重力に引っ張られながら、喉を枯らす大声で「初降下～二降下～三降下～」と絶叫するのである。
落下傘が背負ったリュックから引きずり出されて開く。こうして周囲に広がる雄大な景色を見渡しながら、地面が近付いて来るのを待つのである。

「殿下、あれは敵です！　敵が空から降って参りましたっ！」
この報告を受けたゾルザルの皇太子府は、上を下への大騒動に見舞われていた。
皇太子府を含めた皇城は、帝都全域をほぼ一望できる丘の中腹にある。だから視線を窓へと向けるだけで編隊を組んだ五機の輸送機が、花を池に浮かべるように、無数の落下傘を落としていくのが見えるのだ。
「あれはいったい何なのだ!?」
朝早くから集まって、騎士団や捕らえた講和派貴族の資産をどう分配するかを話し合っていた

元老院議員達は、頭上からの轟音に空を見上げ、そこに繰り広げられた見慣れない光景に驚愕した。そしてそれが敵であると知らされると、今度は恐怖した。

敵がこの皇城めがけて、直接天降って来ようとしている。自分の目の前に、敵が忽然と姿を現そうとしている。そんな錯覚にとらわれたのである。

もちろんそんなことはない。空挺作戦は、降下場所の地形、気象状況などを徹底的に選ぶからだ。

「敵が空から降って来るとはなんという非常識な」

「ニホンとは、あんな高いところから兵士をばらまくようなことをするのか？」

「何を馬鹿なことを。翼人でもあるまいし、そんな真似をして生きていられるはずがないだろう。何かの間違いだ、もう一度確認させろ！」

「敵は、翼人からなる部隊を持っているかもしれませんよ！」

「なに!?　くそ、その手があったか！」

ゾルザルと、その側近達も議員らの大混乱に巻き込まれていた。だがその中の一人が言った。

「いや、連中がぶら下がっているあの凧のようなものが、飛び降りるための道具かも知れません。とにかく、すぐに迎え撃つ支度を！　敵はいよいよこの帝都に直接乗り込んで来たのです。殿下、早く備えを固めましょう」

ゾルザルは、側近の進言を受けて、今、気が付いたかのように大きく頷いた。

「うん、そうだ。あれが敵だと言うなら兵を繰り出して蹴散らさねばならん。いかに天から降って

きたとはいえ、あの程度の人数たかが知れておる！　数に任せて押し出させろ！」
「駄目です！　間に合いません！」
だが、次に駆け込んできた報告が、すでにゾルザルの指示が手遅れであることを告げた。
「敵の一隊が、すでに西門を占拠！　門を開け放って城外の敵を迎え入れようとしております。敵は既に帝都内に侵入している模様っ！」
「な、何だと!?　なんという速さだ！」
実際には、時を同じくして帝都内に潜伏していた部隊が襲撃しただけのことであった。
窓から外を見れば、まだ空に浮かんでいる落下傘もあるのだ。最初に降下したグループが集結して、ようやく集団としての行動を開始し始めた頃合いでしかない。だが報告のタイムラグが、降下した敵が西門を襲って制圧、帝都内に侵入を開始したと感じさせてしまった。驚くべき速度だが、その非常識も、この敵ならやってもおかしくないと思い込まされてしまったのである。
「城門の守備隊は、何をしていた!?」
「敵は、まっすぐここを狙って来るぞ！」
誰かの声が耳に入り、ゾルザルの背筋に戦慄が走った。
このまま帝都が、占領の憂き目に遭えばどうなるか。
自分はきっと捕まってしまうだろう。敵に捕らわれれば、またあの時の屈辱と恐怖にさらされることとなる。否、今度こそ嬲り殺されてしまうかも知れない。

地震の夜にあった出来事が、ぶり返したようにゾルザルの脳裏を駆けめぐった。
あの夜の苦痛と恐怖がまざまざと蘇って、全身の毛穴という毛穴が開いて冷や汗が滝のように流れ出た。
「ぜ、ぜ、全戦力をもって直ちに皇城の守りを固めさせろ！」
ゾルザルが怒鳴った。
いや、それは悲鳴にも近い喚き声のようなものであった。
だが、彼の側近達にとっては、混乱の暗闇に差し込んだ一筋の光明にも見えた。そうだ、皇城を守らなければならない。確かにその通り。自分達はそのことにだけ思案を集中すれば良いのだ。
「は、はいっ！」
側近達は直ちに走り出した。
それでも、ゾルザルの血走った目には、その動きが果てしないまでに鈍重に見えていた。
側近達が、伝令に伝達すべき命令文を語り聞かせている。そして走り出す伝令。懸命に走っているようだが、目的地にたどりつくまでにどれほどの時間がかかるのか。
さらに命令を受けた兵士達が、行動を開始するにもやはり時が必要だろう。ましてやこの皇城にたどり着いて守りを固めるまでどれほどの時間を要するのか。
そう思えば思うほどに、あらゆる全てが、忌々しいほどにのろまに見えてしまったのである。
焦燥感のあまり、数秒ごとに「兵達は集まったか!?」と問いかけ、側近達にその都度「まだです。

しばしお待ち下さい」と言わせてしまう。
「遅い。遅すぎるぞ！」
怒鳴り散らすゾルザル。
もたもたとしている間にも敵がここまで来てしまう。ゾルザルはそう感じていた。
「ええいっ！　兵をかき集めろ！　帝都にある限りの兵を全て集めるんだっ！」
「し、しかし、各城門守備に配されている守備隊まで呼び寄せるとなりますと、集結にかなりの時間を要することになりますが。それでは帝都の守りが疎かに」
「構うものか！　敵は既に帝都内に侵入して来ているのだぞ。外壁など今さら守って何の意味がある？　とにかく兵を呼び寄せろ！　急げ！」
敵が来てしまう。
もう来てしまう。
すぐそこまで来ている。
ゾルザルの耳には、聞こえるはずのない敵の靴音が確かに聞こえていた。
そうなると、もう居ても立ってもいられなかった。こんな守りの薄い場所で敵が来るのをじっと待つことなどとても出来そうもなく、思わず椅子から腰を上げていた。
「だめですわ」
だが、意外そうに響く声が、ゾルザルのこの行動を咎めていた。

「テュ、テューレ」
いつの間にか背後にテューレの姿があった。
「殿下。もしかして、お逃げになるおつもりですか？　そんなことありませんわよね」
なんだとっ！　俺が逃げようとしただと!?
この発言に、ゾルザルの体毛が逆立った。テューレの言葉は王者の誇りを踏みにじるものだったからだ。だが、続けられたテューレの声には、ゾルザルの怒りなど一瞬にして吹き消してしまうような極寒の冷気が満たされていた。
「殿下は、今や帝国の要。ですから、お逃げになられては帝国そのものが立ちゆかなくなってしまいます。もちろん、次期皇帝たる地位も、皇太子としての誇りも、何もかも投げ捨ててしまえば、こんな恐ろしく寂しい椅子に座っていなくても良いのですけれど、誇り高い殿下がそのような道を選ばれるとは、わたくし思いたくありません。うふふ」
「わ、分かっている。俺はただ敵の様子を見るために立ち上がっただけだ」
ゾルザルは言い訳めいた口調で手を振ると、窓際まで進んだ。
だが、ゾルザルの奥歯はがちがちと鳴っていた。手足も緊張して、今にも膝から力が抜けそうであった。
背後に付き従うテューレが素知らぬ顔で続ける。
「わたくしにも記憶がありますわ。随分と昔のことでしたが、故郷の者達が敵と戦っている時、

剽悍なはずの味方の動きが随分と遅く見えたものです。うふふふ、今思えばおかしなこと。皆、懸命に戦っていたのに、安全なところにいた自分だけが、恐れて、不安に駆られて、部族の為に自分を犠牲に、などと言い訳して砦を抜け出してしまったのです」

「そ、そうか？　そんなことがあったのか」

「はい。みんな今頃どうしているかしら？　元気にやっているかしら？」

「さ、さあな……」

「とにかく、殿下はみだりに動いてはなりません。この国は、ありとあらゆることが殿下のお指図で動いているのですから。敵が、ここにやって来ようとも、殿下はここにいるべきなのです。自分が何とかしないと。そんな考えが閃かれるかも知れませんが、それはこの場から逃れるための方便でしかありません。そんなものに従うと、大抵はろくでもない結果になります」

「そ、そんなことは分かっている。この俺に偉そうな口をきくなっ！」

ゾルザルはそう言うと振り返ってテューレを突き飛ばした。これまで耳心地の良い和音を奏でていたはずの楽器が、突然鉄板を爪で擦ったような不快な音しか響かせなくなった。そんな不快感を払いのけたかったのだ。

悲鳴を上げて尻餅をついたテューレは、頭を床に擦りつけた。

「うふふふ、申し訳ありません。つい出過ぎたことを申し上げてしまいましたわ。殿下ならば当然ご存じのことですものね。ふふふ。わたくしという愚かな前例があるのですから」

ゾルザルはテューレの変貌ぶりに戸惑った。いったい何がどうしたと言うのだろう。

もしその理由について、充分に考える時間があったなら、ゾルザルはテューレに注意を払うようになったかも知れない。だが、今のゾルザルには、そこまで考えを巡らしている余裕はなかった。ただ漠然とした後味の悪さ、気味の悪さを感じただけでそのまま残すこととなったのである。

「と、とにかく助言はありがたく受けておく。そうだ、俺はこれしきのことで動揺してはならなかったのだな」

「そうですわ、殿下」

「分かった。そうだな、その通りだ……だが、くそっ！」

ゾルザルは、震える足を何とか支えると、睨むように迫り来る敵を見下ろしていた。

だが、さらなる敵が大空の向こうに見えると、ゾルザルが必死に汲み上げた勇気の泉も、一気に枯れそうになった。彼は腰が砕けたように座り込むと指さした。

「な、なんだあれは」

それはチヌークと呼ばれる大型ヘリを主力とした、ヘリコプターの大集団であった。

＊　＊

バスーン監獄では、牢獄から解放された講和派貴族達が、迎えの荷馬車に乗り込もうとしていた。

これらの荷馬車は、悪所街の無法者達に金貨をばらまいて掻き集めたものである。そんなこともあって、集まったのは土砂運搬用や、野菜運搬などに用いられたようなものばかりであった。中には、あきらかに排泄物運搬に使われたと思われる臭いのこびりついた物もあって、気位の高い貴族達は、かなり強い抵抗感を抱いたようである。

「なあに、ここの牢屋に比べたら遙かにマシですぜ。オレッちもここで生活したことがあるんで、よく分かってまさぁ」

御者をしている犬男が肩をすくめて気にするなと嘯く。見ただけでチンピラかそれに近い生活をしていると分かる風体であった。それでもここに収監されていた者達よりはマシなこざっぱりとした服装をしていた。

救出されたのは講和派元老院議員とその家族親族など三百人ばかりであったが、そのほとんどが酷く汚れた姿となっていた。ここでの待遇が、どれほど酷いものであったかが、そこから窺い知ることが出来る。

「今のあんた達には、これがお似合いですぜ」

「分かった。仕方ない。私達は選べるような立場ではないんだ」

こうして、皆、荷馬車に乗り込んでいった。

「全員が乗れるだけの用意があります。慌てず、前の人を押さず、そして急いでください」

栗林や倉田と富田ら第三偵察隊の面々が、声を上げながら人々を誘導していく。

皆、コダ村での経験が生きたのか、大変に手際が良かった。
見れば、翼人ミザリィとその仲間の娼婦達も手伝いに駆り出されたようで御者台にいる。地震予知に活躍したハーピィのテュワルなんかの姿もあった。
「ほら、そこの旦那さん。乗ったからって安心してないで奥に詰めて下さいな。だから、乗り降り口をその太った腹で塞ぐなって言ってんのっ！　他の人間が乗れないでしょ！」
「あっ、いゃん！」
テュワルの悲鳴にミザリィが柳眉を逆立てた。
「こらっ、そこっ！　何処をさわってるんだいっ、全くっ！」
ごった返しているのを良いことに、彼女達の身体に手を伸ばす不届きな男もいるようであった。元々そういう性格なのか、あるいは監獄での禁欲生活の反動だろう。
「そういうことがご希望なら、店開きしてる時に来てよねっ！　えっ、場所？　メルノ街だよ。ホントに来てくれるんならサービスするよ。……あら、奥さん？　お願いだから睨まないで……」
ここで風俗営業の宣伝するなよなぁと思いつつ、栗林は荷馬車に乗れずに困っている者は居ないかを確かめるために振り返った。すると見覚えのあるご婦人がニコニコ顔で立っていた。
「あ、キケロさんの奥様！」
「まあまあまあ、クリバヤシ。貴女だったのね。迎えに来てくれたのは」
キケロの妻が満面の笑みで栗林に抱きついた。

この二人は、帝都郊外での園遊会以来、比較的によく話をする仲となっていた。でっぷりとしたキケロ夫人に抱きつかれると、小柄な栗林などはそのまま浴びせ倒されてしまいかねないような取り組みに見える。だが栗林は筋金の太さが違うので、しっかりと足を踏ん張ってがっぷり四つに支えていた。

「お陰で助かったわ。ありがとう」

「いえいえ、任務ですから。で、ご主人はご無事ですか？」

「ええ。あそこにいるわ」

キケロ夫人は、何やら好色顔でテュワルに話しかけている夫を指し示した。

「甥っ子がニホンから帰ってきてから、皇太子府で働いているでしょ？　だからここでも少しばかり融通を利かせてもらえたの。食べ物とかね。お陰で他と比べたらちょっとはマシって感じかしら。でも、マシすぎて少しばかり元気が余っているみたい。後で、きちっと締めておくことにするわ」

「せ、折角助かったんですから、お手柔らかにどうぞ」

栗林はそう言いながら、キケロの妻を荷車の一台へと誘った。

太ったキケロ夫人を栗林は軽々と持ち上げ、荷車の後ろに座らせる。決まり手は吊り出し……いや吊り乗せということになるだろうか。

「貴女達がこの監獄に来るってことは、もしかして帝国は戦争で負けちゃったの？」

「いいえ。私たちが命じられたのは、皆さんを救出することだけです」

「助けるってどこに連れて行くの？　もしかしてニホンに連れてってくれるのかしら」
「ニホンに連れて行くといろいろ難しいことになるみたいなんで、とりあえずは避難所ですねぇ。その後は、ご希望をうかがって身の振り方を決めることになると思いますよ」
「それは残念ね。機会があったら、是非一度ニホンに行ってみたいのよ」
「歓迎します。その時はニホンをご案内させて下さい。面白いところがいっぱいあるんですよ」
「ええ、お願いするわ。きっと楽しみにしているわよ」
栗林の合図で、荷車が動き出す。
キケロ夫人は、栗林が見えなくなるまで手を振り続けていた。

バスーン監獄を出た荷馬車の列は、西門を抜けて帝都の外へと向かう。
その道筋にある四つ辻のほとんどが迷彩服を纏った自衛官によって固められて、帝国軍の姿は影を見ることすらなかった。
空挺団長、鯖江（さばえ）陸将補は、健軍（けんぐん）一等陸佐と小銃分隊を護衛として引き連れ帝都の街中を徒歩で進んでいた。そして講和派の人々を乗せた荷馬車の列を見てそのみすぼらしさに顔をしかめた。
「随分とガタついてる馬車もあるみたいだが、集合地点まで保つのか？」
「質より数を優先させたようです。でも大丈夫です。予備は充分にとってあるようです」
健軍がメモを確認して答えた。

「で、状況はどうかね？」

健軍は鯖江の質問に、地図を片手に状況報告をはじめた。

「ＤＺ（降下地点）を四〇一中隊がそのままＡｓｓｙ（集結地点）として確保します。帝都進入経路の制圧、移動手段等、全てが予定通りに進んでいます。今頃、十一中隊が翡翠宮に到達していることでしょう」

健軍は今回の作戦指揮を任されていた。

空挺団の最高指揮官は鯖江陸将補であるが、彼は特地内の事情に詳しく実戦経験のある健軍に現場指揮の一切を任せていた。自分は『旗』役に徹して、細かい事は部下に任せるというやり方だ。健軍の前職が空挺団の第四大隊長であったことも信頼の理由となっていた。

今回の作戦の目的は、帝都の講和派救出である。

もし、帝都の占領を企図しているならば、使える限りの航空機、ヘリや車両を動員して、一斉に帝都に襲いかかればよい。だが今回は政治的な理由でそれは出来なかった。あくまで救出を目的とした一時的かつ限定した地域の制圧という枷（かせ）がかけられており、可及的速やかに退去しなければならないのだ。さらに一般市民を巻き込むことを防ぐために市街地での航空爆撃、砲撃等が禁じられるという非常にきつい条件の下で作戦を遂行しなければならない。しかも、救出の対象者は三百人を超える。こうなると、今現在使用できる十機の大型ヘリでは、民間人を運び出すだけで精一杯なのだ。

「この作戦で重要となるのは、数ではない、速さだ。そしてこの要求を実現できる部隊を、私は隊

内に一つしか知らない」

特地派遣部隊の最高指揮官である狭間は、そう言い切った。

こうして動員されたのが第一空挺団普通科第四大隊の二個中隊なのである。

「行けと言われれば、我々はどこにでも行く準備が出来ている。だが、行ったこともないところで、見たこともない相手と戦うからには、不慮の事故を恐れなければならない。これを防ぐために現地に精通している人材を出して貰いたい。出来れば実戦の差し引きを肌で知っている人物が良い」

空挺団長の鯖江は狭間にそう要求し、これに応えるために声をかけられたのが健軍なのだ。

「やってくれるね？」という鯖江の問いに、健軍は「嬉しくて涙が出ます」と答えたと言う。

なお、今回の作戦では空挺団ばかりでなく、健軍率いる第四戦闘団の内四〇一中隊が、また都で潜伏活動している特殊作戦群、第二、第三、第四偵察隊の隊員達も参加している。

手順としては帝都郊外に空挺団二個中隊（迫撃砲小隊を除く）が降下。

ほぼ同時に帝都内に潜伏していた隊員が進入路を確保。そして、そこから空挺隊員達が帝都に突入し、翡翠宮とバスーン監獄を解放する。

その間に用賀二佐率いる四〇一中隊の中型ヘリと、大型ヘリコプターのチヌークが集合地点を確保、高機動車などの車両を運び込む。

帝都郊外へと救出した民間人は、そのまま空荷となったチヌークやヘリで脱出。

空挺隊員達は、チヌークが運んできた車両に乗って陸路で帰る、というのが大まかな作戦手順で

ある。

「報告します。翡翠宮で戦闘が始まりました。それ以外では、敵の抵抗は一切ありません。なさ過ぎて気味が悪いくらいです」

豊平(とよひら)二尉の報告に情報担当の湯布院(ゆふいん)二尉が天を指差しながら付け加えた。

「上空の観測ヘリから入った情報によると、帝国軍は守備戦力の全てを皇城に向けて移動させているようです。きっと俺たちが、皇城を直接襲うと思ったのでしょう」

「なるほど。びっくりしてまずは巣穴に逃げ込んだというわけか」

健軍は頷いた。戦力不明、目的不明の敵に襲撃されたら、ともかく逃げて戦力を保全することは間違っていない。問題はそれが理性的な判断でなされたものか、感情的、反射的にしたことかである。理性的な判断で、素早く退却を決めることが出来るような指揮官は、反撃に出るのも早い。健軍は、敵が馬鹿であることを期待しなかった。

「敵さん、こっちの目的に気付いたら一斉に飛び出して来るぞ。急がせろよ」

健軍は、豊平二等陸尉にそう叫ぶと、鯖江陸将補に振り返った。

「団長、自分は翡翠宮に向かいます。相当の抵抗が予想されておりますので」

「分かった。では私はＡｓｓｙ(集結地点)で避難民退去の指揮を執ろう。健軍、引き時を見誤るなよ」

鯖江はそう言って健軍の肩を叩くと、帝都外へと向かう民間人の乗る荷馬車に飛び乗った。

翡翠宮周辺の森林では激しい戦闘が行われていた。
翡翠宮攻撃のために引っ張られてきた帝都守備隊一千二百は、翡翠宮を守備する騎士団三百人を包囲していたため翡翠宮解放に赴いた空挺一個中隊に背後を突かれることとなったのである。
戦闘は、緒戦から楯を並べて壁を作る帝国軍に対して、第十一中隊の隊員達が屈折銃床型の八九式小銃で五・五六ミリ弾を浴びせかけ一方的に出血を強いるというものになった。
板きれに薄い鉄板を張っただけの帝国兵の楯では、厚さ十ミリの鋼板を貫通する銃弾を防ぐことは、やはり無理なのだ。それでも帝国軍の将兵達は一歩も退かず、逆にじわじわと前進しながら、ばたばたと斃れて行った。被害を全く気にしない相手に、隊員達は背筋が寒くなるような不気味さを感じていた。
「第四分隊。右から回り込め！　狙撃手（ハンター）！　黒服を狙え。政治将校モドキがいなくなれば、連中はきっと総崩れを起こす。俺たちはそれまで支えるぞ、撃ちまくれ！」
このような敵を突き崩すには大変な手間がかかると判断した第二小隊長は、若い陸曹に指揮された小銃分隊に、回り込みをかけての側面攻撃を命じた。
「小隊長、張り切ってるなぁ」
「何しろ初めての実戦だからな。興奮してるんだぜ、きっと！」
そんな軽口をたたき合う隊員達の頭上に帝国軍の矢が降り注いだ。攻撃の為に距離を詰めたこともあって、何時の間にか帝国側の矢でも充分に届く距離まで踏み込んでいたのだ。

隊員達の数名が矢を受けて動けなくなり、救いを求める声を発した。砲弾の破片よけ程度の性能しかないボディアーマーだが致命傷に至ることだけは防いだようだ。

「いたいっ！　痛いっ！」

「くそっ、衛生！　衛生！」

健在な者が命令を受けて負傷者を立木の影へと引きずり込む。

「矢を抜くな、そのままにして体幹側を圧力包帯で縛っておけ。下手に抜くと一気に出血するぞ。動かすのに邪魔になるようなら、矢を真ん中ぐらいで折って後送しろ。身体の根本で切るなよ、ひと握りくらいは残して置くんだ！」

矢を、身体から引き抜こうとする隊員を小隊長が止めた。

帝国軍の鏃（やじり）には通常返しがついている。そのため引き抜こうとするとかえって体組織の損傷を酷くすることになる。さらに矢との接続が甘いため、無理に引き抜くと鏃を体内に残してしまうおそれもあった。だから帝国など特地の軍医は手足に深く突き刺さった場合、ハンマーなどで叩きわざわざ貫通させて鏃を摘出、その後に手当てしている。もちろん自衛隊がそんな真似をする必要はない。切開手術が出来る環境まで後送すれば、そんなリスクの高いことはしなくても済むのだ。

ちなみに、体幹側（心臓に近い側）を縛らせるのは止血と共に、鏃に毒が塗ってあった場合への配慮でもある。

駆けつけてきた衛生科員が負傷して動けなくなった隊員を引きずって下げていく。他の隊員達も

矢の射程から逃れるために一時下がった。
それを自衛隊側の怯(ひる)みと見たのだろう。帝国軍は一気に前に出て、互いの表情がはっきりと判別できるまでに距離を詰めてきた。肉迫して白兵戦に持ち込もうとしているのだ。
八九式小銃に照準補助具(ダットサイト)を装着した隊員達は、突出してきた帝国兵に赤色のレティクルを合わせてバーストモードで銃弾を浴びせかけた。
しかし帝国兵は仲間の死体を踏み越えてくる。
銃撃程度では埒があかないと見た隊員達が、手榴弾で帝国兵の出足を挫こうとする。だが数人程度しか倒すことしか出来なかった。楯を構え、そして仲間の身体すらも楯とする帝国兵相手には、手榴弾も効果的な武器とは言い難い。映画などにある手榴弾一個で、数人がまとめて吹き飛ぶという映像は誇大表現のようである。
とは言え、帝国兵達の前進を封じることには成功した。爆発の衝撃が帝国兵の足を止めたのだ。
「擲弾(てきだん)を使え」
○六式小銃擲弾が銃口にとりつけられ、帝国兵の人垣の真ん中へ次々と打ち込まれる。
その爆発で、隊列の中央の人間がドミノ倒しのように折り重なって倒れていく。だが、それでも帝国兵らは隊列にあいた穴を埋めてじわじわと前に出ようとする意志を見せた。
「あいつら、すげぇなあ」
弾倉を交換しながら、思わず驚嘆の声を上げる空挺隊員達。

その時、狙撃手の一人が、帝国兵のつくる隊列の最後尾にいる黒服の眉間を、伏せ撃ちに構えたレティクルに捕らえていた。
対人狙撃銃が火を放つ。
脳漿をまき散らして、帝権擁護委員（オプリーチニキ）が倒れた。さらに一人。
するとどうしたことか、それまで鋼のような戦意を示し、自衛官達を苦戦させていた敵が突如として乱れた。
まるで蜘蛛の子を散らすように、あっという間に逃げ散ってしまったのである
どう表現するべきだろうか。
目前から敵が消えた。居なくなった。あるいは忽然と失せてしまった、か。
側面迂回を果たした第四分隊長が無線で、「あれ、敵はどこにいった？」と問いかけてくる始末である。
第二小隊長は、よっこらしょと大儀そうに立ち上がると答えた。
「次に行くぞ、次に！　まだ敵はあちこちにいるんだからな！　油断するな！」
翡翠宮を分厚く攻囲していた帝国の一角は、こうして切り崩されたのである。

「騎士隊騎乗！　集合！」
敵の一角が崩れた。ボーゼスは、そこに勝機を見いだした。

包囲網に穿たれた、この穴こそが敵の弱点である。
たちまち百騎を超える騎馬隊が馬首を並べた。
「ヴィフィータ！　行きますわよ」
「続け！」
ボーゼスは陣地から飛び出すと、騎士団の本領発揮とも言える騎馬突撃を敢行した。
馬の突進力を利用して敵を蹂躙することこそが騎馬隊の本分。馬蹄が大地をえぐり、轟音を響かせながら突き進む。
包囲網に開かれた穴から一旦森林の中へと入る。そして大きく迂回して隊列を楔形に整えさせた。
やがて森から抜けだす。豪奢な金色の髪をたなびかせながら、白刃を抜いたボーゼスは叫んだ。
「突撃！」
自分自身を黄金の鏃として、帝国軍の柔らかな背中に怒濤の勢いで突入していった。
「蹴散らしなさいっ！」
圧倒的な衝力で、何もかもをなぎ倒す津波のように騎士団は帝国軍の将兵に襲いかかった。
思いもしなかった方角からの攻撃を受けた帝国軍は、巨大なハンマーで叩かれたかのように、一気に弾き飛ばされた。
「に、逃げるなっ！　下がるな！」
喚き続ける黒服の帝権擁護委員。

「どこへ行こうとしている！」

逃げようとする帝国兵の襟首を捕らえて、前へと戻そうとする。だがその一人を取り押さえている間に、脇からこぼれるようにしてどんどん帝国兵は逃げていった。そこに騎士団の騎馬隊が、減速することなく襲いかかる。

全てが通り過ぎた後には、無惨にも踏みつぶされた、誰のものともつかない屍体らしきものが転がっているだけであった。

翡翠宮を守る騎士団の陣地からは、敵を蹂躙していく騎馬隊に対して「ボーゼス！　ボーゼス！」と呼ぶ歓呼の声が上がった。

陸上自衛隊と騎士団は、はからずも絶妙な連係攻撃を行うこととなった。

騎馬隊が切り開いた傷口に、空挺隊員達が入り込みぐりぐりと傷を抉り広げる。これによって騎馬隊は包囲される心配をすることもなく、帝国軍のまっただ中を縦横無尽に駆けめぐった。

帝国軍の包囲陣は、要（かなめ）を抜かれた扇のようにバラバラになり、組織だった戦闘を続けることが出来なくなってしまったのである。

健軍が部下らと翡翠宮にたどり着いた時には、戦闘は既に散発的な掃討戦へと移行していた。

帝国軍は、戦意を失ってちりぢりに四散した。まれに立ち向かって来る者もいたが、個々の蛮勇では、もう状況をひっくり返すことは出来なくなっていた。

健軍は、隊員達の損害状況の確認を命じながら、白百合副大臣らの待つ翡翠宮へと入った。
だが、そこで見た光景は、外国からの賓客を迎える豪華な内装ではなく、負傷者がところ狭しと横たわり、血と薬の臭いが混在した野戦病院のものであった。
「なんだ、これは」
健軍が衝撃を受けたのは、怪我人のほとんどが年輩の兵士であったり、若い女性だったからであった。男性士官のほとんどが帝国軍再建に引き抜かれていたため、騎士団は若い女性士官と中年以上の兵士達で構成されている。その比率をそのまんま反映する形で負傷者が発生していたのだ。
「高齢の兵士が多いというのは、まだいい。ベテラン揃いってことだからな。だが年端もいかない娘までいるじゃないか。何なんだ騎士団ってのは」
「それはもしかして、わたくしたちを遠回しに批判なさっておいでなのですか？」
背後からの声に健軍は振り返って答えた。
「いや。批判しているつもりはない。女性隊員は自衛隊（ウチ）にだっているからな。ただ、女性の負傷者がずらっと列んでいるのを見るのが忍びないんだ。男としてな」
戦いに傷ついた女性が大勢横たわっている光景は、男にとっては見るに痛ましすぎるのだ。
指揮官らしき金髪女性が健軍に手袋を外した手を差し伸べている。その腕や肩は、包帯を巻いて血をにじませていた。激しい戦いの中に身を置いていたことが、一目で分かる姿である。
「お久しぶりですわ。ケングン一佐」

「ボーゼスさん……だったかな」
健軍はボーゼスの手を取った。アルヌスで語学研修をしていたボーゼスとは、何度か顔を合わせたこともある。
その手はとてもほっそりとして、いかにもお嬢様然としているのに、実際握手してみると掌は分厚い剣ダコで覆われていた。これに触れれば、見た目はどうあれ彼女達は戦士なのだと、健軍も認めざるを得なかった。
「俺は、ヴィフィータ」
続いて、ボーゼスの隣にいた男装の麗人と握手する。
「ん？　君とは、アルヌスで会ったことがあったかな？」
「……」
ヴィフィータはアルヌスに行ったことがないため、日本語が全く理解できない。
ピニャやボーゼスが好む芸術がどうにも理解できない気質であったから、語学研修の要員からもはずされて隊務に専念していたのである。
だから、名乗りこそしたものの、それに付随する挨拶を交わすことが出来ず、ボーゼスが通訳して意志疎通を助ける必要があった。
「ヴィフィータは、こう申しておりますわ。ケングン隊長にお目にかかれて光栄ですって」
「そうですか。こちらも光栄です。さて、早速だがボーゼスさん。我々は民間人を連れて、これよ

り帝都を脱出します。ボーゼスさん達はどうされますか？」
するとボーゼスは驚いたように目を丸くした。
「貴隊は、このまま皇城に向かわれないんですか？」
「ええ。われわれの任務はあくまでも救出作戦なので。すぐに撤収します」
するとボーゼスはボソッと呟いた。特地の言葉で。
「困ったわ。皇城を陥落させてほしかったのに」
これを聞いたヴィフィータは信じられないとばかりに目を丸くした。
「いやいやいやいや、それはいくらなんでも不味いだろう、ボーゼス。それって帝国が外国に占領されるってことなんだぞ」
「確かにそうだけど、殿下のご無事のためなら仕方ないわ。それに、もうわたくしたちは帝国の敵になってしまったのよ。貴女、気が付いていないの？　ゾルザル殿下が治めておられるかぎり帝国に、わたくし達の居場所はなくてよ」
「えっ……でもよ、俺はそんなつもりは」
「そんなつもりも何もないの。掃除夫の皆さんは、今度はわたくしたちを捕らえに参ります。そしてその時のわたくし達には、逆らう法的根拠もないの。だって使節団の方々は帰ってしまうんですもの」
「おいおいおい、じゃなにか、俺たちは、バスーン監獄行きかよ」

「さぁ……こういう事があった以上、捕らえて裁くなんて手間をかけなくなるかも。その場で処刑ってこともあるかもしれないわ」
「なんでだよ！　どうしてだよ！」
「仕方ないわ。ゾルザル殿下に盛大に逆らってしまったんですもの」
「でも、俺たちは皇帝陛下のご命令で」
「ええ、それは正しいことよ。でも、そんなことはゾルザル殿下には関係がないの」
健軍には、突然言い争いを始めた二人を戸惑うように眺めているしかなかった。そろそろ行っていいかなと思ったりしたが、すぐにボーゼスが話しかけてきた。
「ケングン隊長、帝都の外までの道のりは、確保されているのですか？」
「ああ。今のところは、敵も大きな動きを見せてないんでな」
「では、お願いがあります。騎士団を帝都の外までご同道させて欲しいのです」
「ええ、構いませんよ。元よりそのつもりでしたから。でも、その後はどうするのですか？」
「フォルマル伯爵領に向かいます」
「なるほど。イタリカにですね」
「はい。それと、もう一つお強請りがあるのですが？」
「何でしょう？」
「ここにいる、負傷者の皆をお預けしたいのです。わたくし達の力では、このまま残していくしか

ありません」
健軍は横たわる負傷兵達を見渡して頷いた。
「確かにそうだな。負傷者がこんなにいては移動することも難しいか。いいだろう、了解しました。皆さんの身柄をお引き受けします。アルヌスで治療を受けさせましょう」
「助かりますわ」
側にいた豊平二尉が問いかけてくる。
「一佐。大丈夫なんですか？　帰りのチヌークに乗せ切れませんよ」
「大丈夫だ、怪我の重い者は空路で、比較的軽い者は、陸路で連れていけばいい。車がちょっと混雑するが女性を乗せるんだ、若い連中は文句を言わんよ」
するとヴィフィータが、健軍に言いたいことがあるらしく何かまくし立ててきた。
「ちょっと確かめておきたいんだが、こいつらの立場は捕虜ってことになったりはしねぇよな？　おい、ボーゼス。訳してくれよ」
ボーゼスは、聞くまでもないのにと嘆息しながらも通訳した。この話題はちょっと前にしでかした失敗を思い出すから嫌なのだ。
「以前も申し上げたが、我が国は捕虜を人道的に扱う。それに、ここにいる皆さんは日本国民を守って戦い負傷されたのだ。捕虜なんかではなく、相応の扱いをさせていただく」
するとヴィフィータは「安心したぜ、あんたいい奴なんだな」と健軍の肩を叩いた。

自分の子供と言っても良いくらいに年若い娘から、このように気安い態度をとられ、気を悪くして良いのか喜んで良いのかと戸惑った健軍は、とりあえず反応を保留してボーゼスに向き直った。
「では、早く集結地点に向かいましょう」
「はい。皆をお願いいたします。ヴィフィータ、後をよろしくね」
「後をって、なんで？」
ボーゼスの口振りはまるで、自分は行かないとでも言わんばかりである。
「よろしくって、お前はどうするんだよ？」
「殿下をこんなところに残していくわけにはいかないからお迎えにあがるの」
行ってしまおうとするボーゼスを「ば、馬鹿かお前！」とヴィフィータは引き留めた。
「馬鹿でもいいわ。分かって頂戴！」
「無理を言うなよボーゼス。殿下がどこにいるか、俺たちにも分かっていないんだぞ」
「皇城に決まってるでしょ」
「問題は、あのだだっ広い皇城のどこにいるかなんだよ！　救出なんて無理に決まってる！」
「でも、わたくしには殿下を置いて行くことなんて出来ないの」
「待てっ……じゃあ騎士団はどうすんだ。放り出すのかよ!?　この後のことはどうすんだよ」
ヴィフィータはその数を半分近くにまで減らした騎士団の将兵を指差した。
すでに負傷者達は、健在な者達によって運び出されている。

担架が足りないこともあって、女性達については若い自衛官連中が「オレオレ！」「いや、俺がこの娘！」と先を競ってお姫様だっこして運び出す。自ら歩けるような者すら「疲れてるでしょ」と抱き運ばれてしまう程である。年輩の男性兵士は担架で運ばれているから、明らかな待遇格差がそこには存在していた。だが、これは男と女という種がある限りどうしようもないことなのだ。

そんな様子を見て心配がないことを確信したのか、ボーゼスは言った。

「この後のことをどうするか考えるためにも、殿下をお迎えに上がる必要があるの。このままだとわたくしたち、本当に立場がないんですからね」

「じゃ、再編作業は誰がやんだよ」

「貴女に任せるわ」

ボーゼスは翡翠宮の玄関を出ると、繋いでおいた馬にまたがった。

「じゃ、行ってくるわね！　ケングン一佐、皆のことよろしくお願いします」

「だから、待てって！　何やってんだよ馬鹿女っ！」

ヴィフィータの声を無視したボーゼスは、馬に鞭を当てると、あっという間に行ってしまった。

「後をよろしくって、彼女はどこに行ったんだ？」

健軍に問われても、ヴィフィータにはその言葉が分からない。追うべきか、追わざるべきかと逡巡していたヴィフィータは健軍の問いから逃れるように馬に跨るとボーゼスの後を追った。

「おいっ！　どこに行くんだ？」

「悪い。連れ戻してくるから待っててくれ！」
何が起こっていたのか理解できない健軍は、彼女達を黙って見送ることしかできなかった。

＊　＊

ゾルザルと側近達が陥った大混乱も、各所から報告が届くようになり始めると、自分達の置かれている状況が見えて来たため、落ち着きを取り戻していった。
「ご報告いたします。郊外の竜騎兵隊屯営地が全滅した模様。生存者は絶望的です」
「報告いたします。帝都内に侵入した敵は帝権擁護委員部（オブリーチニナ）を襲撃いたしました。本部内にいた帝権擁護委員（オブリーチニキ）は壊滅。ルフルス次期法務官殿が行方不明です！」
「ご報告いたします。敵の一隊は翡翠宮を包囲する帝権擁護委員部（オブリーチニナ）と交戦中」
ゾルザルの面前に置かれた帝都の模型には、報告によって判明した敵味方の兵棋が並べられていった。青い駒が帝都守備隊三万、赤い駒が自衛隊を示している。
膨大な量の青駒のほとんどが皇城内か、あるいは皇城を指向して移動していた。これに対し、赤い駒はほんのわずかしかない。まるで青い海に浮かんだ赤い島である。それが西門とバスーン監獄周辺。そして翡翠宮あたりにわずかに見られる。さらにその一部は、帝都城外にあって帝都を睨んでいた。

側近達はこの地図を取り囲むと、現在の状況から理解できることを話し合っていた。
「敵の戦力は、たったのこれだけか？　数えてみれば五百にも満たないではありませんか？」
「物見の兵の間違いじゃないか？　いくら何でもこれは少なすぎるぞ」
「いや、空から降ってきた者共も、考えてみればそれくらいの数でした。多少の間違いはあっても、誤差はそれほど大きくはないでしょう」
「だが、そうなると敵の狙いは皇城ではなかったということか？」
「やはり翡翠宮の使節救出が目的だった？」
「なんと愚かなことを。このようなことをせずとも、退去すると言えば許されただろうに」
「いやいや。この動きから察するに、敵の目的は講和派の救出だったと考えたほうがよろしい。だからこそ、このような強硬手段に討って出たのです」
「うむむむ」
ゾルザルは青白かった顔色を、今度は真っ赤にしていた。
敵の目的が、自分ではなかったことに安堵した途端、今度は怒りが込み上げて来たのである。
皆に見せた醜態の挽回をしなければならないという思いにも駆られている。
「直ちに、全軍を敵に向けさせよ」
「殿下、それは無理です。守備隊の将兵は皇城に向かって集結中なのです。ここで新たな別の命令を下したりしますと、進路が交差してきっと大混乱が起こりましょう」

「では、敵にやりたい放題させておけと言うのか？」
「いいえ。このまま手をつかねて見ていれば帝国軍の威信を揺るがすことになります。敵の目的が講和派の救出ならば、間もなく敵は撤収に移りましょう。近衛の内から四～五千の精鋭を派して敵を追わせるぐらいでよろしいでしょう」
ゾルザルは頷いた。
「よし、すぐに兵を選んで準備をさせよ！　急げ！」

第一空挺団第十一中隊と騎士団のエスコートを受けたカーゼル達は、無事に帝都郊外の集結地点に到着した。そこで民間人脱出用に用意された大型ヘリチヌークに乗り込むようにと指示される。翡翠宮にいた怪我人達と、日本からの使節団は別のヘリへと乗り込んでいく。シェリーは菅原から離れたがらなかったため、そのまま白百合ら使節団と一緒に行動していた。
「これに乗れば良いのか？」
カーゼル達は係りの隊員の指示に従って機体後部のハッチから中に入った。すると薄暗い機内で見知った顔をいくつも見つけて手を挙げた。
「キケロ卿、そこにおわすのはキケロ卿か！」
「おおっ、カーゼル侯爵！　皆も無事でしたか？」
議員達が互いに無事を喜び合った。

「儂らは、翡翠宮に逃げ込んでなんとか。捕まった者らはどうだった？」
「帝権擁護委員（オプリーチニキ）の連中も、大人しくしている者まで、即座に首を刎ねるようなことはしませんでした。ただ、捕らえる時に逆らったり逃げたりした者については、どうやら……」
「やはりか。痛ましい」
「大人しく捕まっていた方が、助かることになるとは考えてもみませんでしたな」
「いや。それは後知恵でしょう。こうして救いの手が差し伸べられなければ、よくて幽閉、下手すれば処刑という末路は確実だったのですからな」
「そうでした。しかし、世の中『こうなると分かっていれば、ああしていたのに』と思うことばかりです」
「確かに。将来のことなど分からないから面白いなどと言ってられるのは、楽観主義者か、失う物を持たない者ぐらいでしょう。特に親しい者や家族を失った者には慰めにもならぬ」
貴族達は苦い物を口に含んだように眉間にしわを寄せた。
「とにかく一難は去った。また一難とならないよう、我々としても今後のことを真剣に検討しなければならない。特に今回の一件で、儂はニホンの真意が掴めたように思える。あの国は我が帝国に、この世界の安定確保の役割を求めているのだ。そのためには……」
語りの末尾が、突然強まったヘリコプターのエンジン音によって打ち消される。
「おおっ、浮いたぞ！」

離陸の浮遊感を得て、キケロ達は窓に張り付くようにして外をのぞいて感嘆の声を上げた。
「このような乗り物を自在に操っているのだな、ニホンは」
機体の高度はやがて、帝都を見下ろせるほどの高さに至る。
世界最大を誇っていたこの都市を空から一望するのは、ここで長年暮らしたカーゼルも初めてである。その景色を目に焼き付けながら、カーゼルは再びここに戻ってくる決意を固めていた。

一方、彼らが帝都脱出の際に乗ってきた荷馬車も、役目を終えて集結地点から離れて行こうとしていた。
悪所街の者達は、自衛隊から報酬の金貨を受け取ると、空になった荷車を北へと向けていた。
「あれ、どこ行くの？」
栗林の問いに、ミザリィはニッと笑って受け取った金貨を見せると、離陸していくヘリの爆音に負けないように大声で答えた。
「今、帝都に戻ったって商売はあがったりだし、食べ物もないだろ。折角外に出れたんだ、こいつを元手に食べ物をいっぱい買い込んで来ようと思ってるのさ。きっと良い稼ぎになるよ」
講和派がことごとく脱出してしまえば、帝都の封鎖も意味がなくなるはずである。そうなれば封鎖も解かれる。堂々と食料を帝都に運び入れることが出来るようになるのだ。食料不足の帝都では、きっと高値がつく。利に聡い悪所街の住人は、こんな時でも一石で二鳥も三鳥も落とすことを考え

ているのだ。
　栗林はミザリィ達のたくましさに感心しつつ第三偵察隊の仲間と共に、チヌークから降ろされてきていた高機動車に乗り込んだ。一台に倉田や富田、桑原らがひしめき合うようにして乗っている。高機動車を降ろしたあとのチヌークには、隊員達の誘導で、講和派貴族とその家族達が列を作って乗り込んでいく。
　ヘリのローターが巻き起こす猛烈な風（ダウンウオッシュ）に乱れる髪を抑えながら、ミザリィは離陸していくチヌークを見上げて叫んだ。
「クリバヤシ達はあれに乗らないのかい？」
「あれは、バスーン監獄に居た民間人用。わたしたちはこれに乗ってのんびり陸路を帰る予定」
　栗林はそう言って、高機動車のボンネットを叩いた。
「どうせまたこっそりと帝都に来るんだろ？　その時にはまた男共の話を摘みに酒でも飲もう。じゃ行くよ、テュワル」
　ミザリィ達はそう言い残して集結地点を後にしていった。

　帝都の街を皇城へ向かって馬を走らせるボーゼス。少し離れてそれを追うヴィフィータ。
　やがて二人の前に皇城の正門が見え始め、ボーゼスはどうやって中に入るかを考えた。
　正門周囲は近衛の兵や守備隊によって堅く守られているが、門が閉じられているわけではないか

ら飛び込んでしまえばいい。
そう考えたボーゼスは、減速することなく突き進んだ。
「そこの騎兵！　止まれ！」
「止まれ！」
だが、帝国軍もはっきり味方と分からない者を、そのまま通り抜けさせるほど間抜けではなかった。怪しければ斃すという戦時の原則に従って、すぐに矢を放って来た。
慌てて手綱をひき、馬を止めるボーゼス。矢の的にならないよう馬を巡らせながら叫んだ。
「わたくしは騎士団所属、団長代行ボーゼス。ピニャ殿下にお目通り願いたい！」
こうなってしまえば小細工の余地はどこにもない。堂々と名乗るしかなかった。騎士団は帝国の敵という認識が広がってなければ、まだ中に入れるとボーゼスは思った。
だが、城壁の奥から兵士達を罵倒するような怒声が響いた。
「騎士団の者が今更何の用だ！」
近衛に混じってコボルトの兜をつけた黒衣の男達がいてボーゼスは舌打ちする。
「あの女は敵だぞ！　決して近付けるな！　矢だ、矢を放て」
あちこちから散発的に矢が放たれた。
それは弓兵のとまどいを感じさせるような狙いの定まらない矢で、ボーゼスに掠りもしない。
「待ちなさい！　わたくしは敵ではないわ！」

「何を言うか、これまで散々逆らっておきながら、今更味方面するな！　おい、あの女を捕らえろ！　歩卒を出せ！　何をしている弓兵、さっさと次の矢を放て！」

矢が次々と飛来して来る。今度は手加減がなく、ボーゼスは懸命に剣を振って矢を払わなければならなかった。だがたちまち数本の矢を肩や腿に受けてしまった。

「あっ、痛っ！」

投げ出されるように落馬するボーゼス。

かろうじて受け身はとったが、落ちたときの衝撃ですぐに身体を起こすことが出来なかった。

帝国軍の歩卒が飛び出して来て、ボーゼスを捕らえようと迫ってくる。

這うようにして後ずさるボーゼス。だが、顔を上げると、取り囲むように歩卒の姿がすぐそこにあった。

「あっ……」

「ボーゼス！」

そこにヴィフィータが駆けつけた。歩卒達を蹴散らしながら馬を竿立たせると剣を振り回した。

城兵が矢を射かけて来ないのは同士討ちを避けてのこと。だからだろう、取り囲んでいた歩卒らが急に下がりだした。

やばい、矢が来る。

敵の意図を悟ったヴィフィータは、その隙をついてボーゼスを引っ張り上げると、馬の首を返し

て走らせた。次々と矢が飛んで来て、背中に焼け火箸を押し付けられたような激痛を感じた。
「ヴィフィータ。お願い、皇城にっ！」
「馬鹿野郎っ！　いい加減にしろよ、このくそ女。無理に決まっているだろ。あっという間にトゲトゲモグラにされちまう！」
振り返れば、騎兵の集団が後を追って来るのが見えた。それは数百どころか数千にも及ぶような騎兵集団だった。これこそゾルザルが出撃を命じた追撃部隊である。だが、ヴィフィータには自分たちを追うために出された戦力に感じられた。
「たった二人に出す数かよっ！　くそっ、重てえなぁボーゼス。お前最近食い過ぎだぞっ！」
「失礼ね！　妊娠してるって言っても、まだスタイルは変わってないわ。ご不満だったら、わたしを捨てていけばいいじゃない。貴女だけだったら逃げられるでしょ」
「馬鹿！　んなこと出来るかよ！」
けれど、馬足が鈍いのは確かであった。二人合わせても、太り過ぎた男程度でしかないからこそ、すぐに追いつかれないだけで、距離はじわじわと詰められつつあるのだ。
「ちっ……不味いぜ」
なんとか帝都の外に。
だが、帝都の外に行って、そこからどうする？　日本人は待っててくれるんだろうか？
もし、待っててくれなかったらどうする？　イタリカへと向かった味方に追いつけるのか。

ヴィフィータは祈るような気持ちで額を馬の首に押し付けた。

その頃、自衛隊の撤収作業はほとんど終わっていた。

民間人や、騎士団の負傷者は既に機上の人となって空にあがった。軽傷者と、作戦に参加した各隊もヘリが運んで来た車両を用いて、陸路をアルヌスへと向かっている。

騎士団の方もニコラシカの指揮で、フォルマル伯爵領に向けて出発済みだ。

集結地点に残るのは、殿（しんがり）となった四〇一中隊の第一小隊だけであった。

ぎりぎりまで残る彼ら小銃小隊の脱出には、貴重なチヌークが一機、残されていた。とは言え、味方も充分に離れた頃合いだ。もうここに残っている必要はないはず。そろそろ搭乗命令が出ても良いのに、どうしたのかと、用賀二佐をはじめとした隊員達は健軍の顔をちらちらとのぞき見ていた。

「用賀二佐。健軍一佐は、何を考えてるんでしょう？」

「んなこと俺に聞くなよ。分かるわけないだろう」

似たような会話が、隊員達の間で交わされていた。

一方、健軍は皆の視線を意識しながらも帝都方面を睨むようにじっと眺めていた。特地の言葉を解さない彼だったが、ヴィフィータが最後に言い残していった言葉が、何故か「待っててくれ」に聞こえたのだ。日本人を守るために戦ってくれた女性達だ。もしそうなら、ぎりぎりまで待ってやりたいと思っていた。

だが、帝都から数千規模の騎兵部隊が姿を現し、こちらに向かって来るのが見えると、もう待ち続けることは出来なくなった。あの人馬の波濤がここを埋め尽くす前には離陸してしまわなければならない。

健軍は命令を下した。

「よし、ここまでだ。搭乗！」

ほっとした雰囲気が隊員達の間に流れた。皆、いそいそと装備を抱えてチヌークへ向かう。

「おい、あれ！　誰か追われてるんじゃないのか!?」

だがその時、隊員の一人が気付いて指差した。健軍も慌てて双眼鏡を取り出した。

ヴィフィータ達である。ヴィフィータ達が帝国の騎馬集団に追われているのだ。

見ると帝国軍の先頭集団から飛び出した軽騎兵四騎が、ぐんぐんと距離を詰めて、今にも追いつこうとしている。それを見た健軍は「くそっ、最悪だっ！」と頭を抱えて怒鳴った。

「第一小隊搭乗止め。射撃用意！　目標、前方の敵騎馬隊先頭集団！　距離四百。短連射！　指命！　女に当てるなよ！」

敵騎馬の兵種は弓騎兵のようで、ヴィフィータ達に向けて矢を放っている。だが、激動する馬上から的を狙うのは難しいようで、そのほとんどが外れて地に突き刺さっていた。

隊員達は慌てて六四式小銃の二脚を立て、伏せ撃ちの姿勢となって狙いを定めた。

四騎の騎兵の中から、さらに一騎が抜きん出た。おそらく手練れの一人なのだろう、中腰の姿勢

で弓を引き絞り、逃げるヴィフィータの背中にしっかりと狙いをつけていた。
「撃て！」
健軍の号令で、隊員達の六四式小銃が一斉に火を放った。
ヴィフィータに迫っていた騎兵が何かにぶつかったかのように落馬して地面を転がる。
「撃ち続けろ！　ゆっくり下がるぞ！」
健軍の命令で三〇名の隊員達は敵の先頭集団めがけて射撃を続けた。身体を起こして膝撃ちの姿勢に、そして立ち上がって、後ずさりながら弾倉を交換して射撃を続ける。
だが帝国軍の数が多い。いや、多過ぎた。
人馬の群れがあたかも嵐に煽られた津波のように、大地を埋め尽くして迫って来る。
まずは、先駆けとなる軽騎兵の数十騎が第一波となって襲いかかってきた。
銃火の壁に正面から衝突した帝国兵達は、まるで岸壁にぶつかり飛び散る波のように、血しぶきを舞わせて次々と落馬していく。
帝国兵の喚声と怒号が轟き味方の死体を踏み越えた騎馬隊の第二波が迫る。
彼我の距離は、瞬く間に弓矢の届く距離へと縮まってしまった。
健軍達の下にたどり着くとヴィフィータの馬が、役目を終えたとばかりにドッと倒れた。既にあちこちに矢を受けていたのだ。
「よし！　搭乗開始！　負傷者を残すな！　落ち着いて下がれ！」

投げ飛ばされるように落ちてきたヴィフィータの身体を、健軍ががっしりと受け止める。ボーゼスは数人の隊員の背中をクッションがわりにして落ちていた。

健軍はヴィフィータを土嚢のように左肩に担ぐと、そのまま大声で隊員達の士気を鼓舞するように指揮する。

「周りをよく見て味方を残すなよ！　隣とタイミングを合わせて下がれ！」

隊員達も、小銃に着剣し腰だめに構えて、近付く敵に向けて銃弾をばらまきながら、輪を縮めるように後退していく。

「くそっ……」

緊張と興奮のためか、手を震わせた隊員が交換しようとした弾倉を取り落とす。

「次が来るぞっ！」

槍を構えた軽騎兵の第三波が馬の突進力そのままに、突っ込んでくる。帝国兵は数発の弾を受けたくらいでは止まらない。落馬しつつも武器を構えた姿のまま体当たりして来た。

激しい白兵戦が繰り広げられ、銃剣と剣とが激しくぶつかり合って火花が散った。隊員が押し倒されドロにまみれる。仲間の助けを得て立ち上がり、泣きわめくように小銃を撃ちまくる。

健軍が拳銃を撃ち、ミニミ機関銃を構えた隊員が弾帯を左手に巻き付けると、帝国兵に激しい銃火を浴びせる。銃身が焼けるのも構わない、引き金を引きっぱなしの連射であった。

瞬く間に枯れ葉を掃くようにして、騎兵達はなぎ倒されていった。

軽騎兵の小集団を一掃すると、嵐の前の静けさにも似た凪の瞬間が訪れる。だがすぐそこに次の攻撃波が近付いて来る。一部の騎馬隊は、第一小隊を包囲するように距離を置いて迂回していった。

「急げ！　急げ！　誰も残すな！」

隊員達は傷ついた仲間を抱えると、互いにかばい合ってチヌークへと乗り込んでいった。

帝国の騎馬隊が四方八方から押し寄せて来るのを見たチヌークのパイロットは、後部ハッチを開いたままわずかに機体を離陸させた。高度を数十センチほどとって、滑るようにして方向を変える。

「全員、飛び乗れ！」

隊員達はハッチが自分の方向に向けられた途端、飛び込むように乗り込でいった。

近付く敵には、機内から激しい銃撃を浴びせかける。

それすらものともせずに、後部の開口部にしがみついてくる帝国兵もいて、隊員達はガンガンと銃床で殴りつけて突き落としにかかった。

帝国兵の振り下ろす剣が隊員の鉄帽をかすって、そのまま肩に食い込む。その凶刃をボディアーマーが防いだが、運動エネルギーはそのまま隊員の鎖骨へと伝わってこれをへし折った。

「うがっ！」

突き出された銃剣が帝国兵の胸を抉る。

「全員乗ったか!?　残してないなっ！」

健軍が叫び、負傷した隊員を抱えた用賀二佐が答える。

「これで全員です！」
「よし、行ってくれ！」
ハッチがせり上がってゆっくりと閉じられる。
逃がすまいと帝国兵がわらわらと迫って機内に飛び込んで来た。迎え撃つ自衛官達。
機体の外壁が激しく叩かれ、機体外面はへこみ、窓には亀裂が入った。
前に回り込めば、逃げ道をふさげるでも思ったのだろうか。帝国兵の数名がチヌーク機体前方に回り込んだ。だが回転する前部ローターによって首を飛ばされ血煙が渦巻いた。
それを見たパイロットが喚きながらスロットルを全開にした。エンジンが咆吼をあげて暴力的な挙動で高度を上げた。すると、こぼれるように帝国兵が落ちていく。
最後まで後部ハッチにぶら下がっていた帝国兵が、その高さに脅えたように叫(わめ)いている。脚を振って救いを求める。だが自衛官達はその兵士が必死になって捕まる指を、砕いてしまえとばかりに銃床を叩きつけていた。
やがて帝国兵が、悲鳴を上げながら墜落していった。
この高度まで上がってしまえば、地上から矢を放っても届くこともない。
眼下では帝国軍重騎兵の大集団が、つい先ほどまで彼らが守っていた大地を津波のように覆い尽くしていた。あと数秒遅れていたら、あの勢いに飲み込まれてしまっていただろう。
「ふぅ……」

離陸して敵の手が届かない距離となると健軍はため息をつきながら座り込んだ。
隊員達も肩の力を抜いて座る。腰が砕けたようにその場に座り込む者、シートにもたれかかる者などみなそれぞれである。
「く、うっ……」
斬撃を頬から首にかけて受け大出血している隊員が呻いた。
皆が取り囲んで、衛生科員が悲鳴のような声をあげながら懸命に止血をしている。だがその様子からすると助けられないかも知れないと誰もが予感した。
「顔面動脈がやられてる！　頸動脈もだ！　血が止められないっ！」
瞬く間に、小山のような白いガーゼが鮮血色に染まっていった。
「何とかしろよっ！」
「だったら手を貸せ！　傷口をおさえろっ！」
そんな声が飛び交う様子を呆然と見つめていた健軍に、ヴィフィータが、おそるおそるといった感じで声をかけた。
「あの、その、なんだ……よかったら降ろしてくれねぇ……かな」
「おっと失礼」
言葉は解さずとも、これくらいのことはなんとなく理解できる。健軍はヴィフィータを降ろしてやった。

「重かったろ？」
「なんだ怪我してるじゃないか。衛生！　手が空いたら見てやってくれ」
何故か衛生科員はすぐにやって来た。
どうやら先ほどの隊員は、手当の必要がなくなってしまったらしい。助からないことが分かったら、助けられる者の治療を優先するという戦場の原則に従って、衛生科員はボーゼスやヴィフィータの背中に刺さった矢を診ていった。
「ここでは抜かない方がいいですね。止血と、痛み止めをしておきましょう」
ヴィフィータは、脂汗にまみれた顔を袖口で拭うと言った。
「もしかして、わざわざ待っててくれたのか？」
流石にこの言葉は理解できず、健軍は首を傾げるしかなかった。
「いずれにせよ救って貰ったんだ。俺に礼を言わせてくれよ」
言葉が通じていないのはヴィフィータも承知していた。だが、それでも頭が下がった。下げたかったのである。健軍に対してだけでなく、この場にいる隊員達全てに向けて。
それを見た隊員達は無表情のままである。腹を立てることも、無事でよかったと喜ぶこともない。ただ淡々と死体となった仲間の被服を整えていった。
突然、沈黙を破る悲鳴が上がった。
「ピ、ピニャ様！」

悲鳴の主はボーゼスだった。窓から広がる下界の風景に、何かを見つけたようだ。
チヌークは皇城上空を通過するところだ。
ボーゼスが悲鳴を上げたのは皇城の建物に、ピニャの姿を見つけたからであった。
テラスに立ったピニャが、確かにこちらを見上げている。はかなげな笑顔で、こちらを見送っているのが健軍からも確認できた。
「殿下を助けてっ！」
ボーゼスが振り返って皆に向けて叫んだ。
だが、「無理ですね、燃料がぎりぎりです」とパイロットが答える。航空機は努力と根性では飛ばない。常に燃料の残量によって飛べる距離は決まる。パイロットが無理と言ったら絶対に無理なのである。
「残念だが、我々にはどうすることも出来ない」
健軍が諦めるよう諭した。
それを聞いて泣き崩れるボーゼス。
ヴィフィータには、そんな彼女の背中をそっと叩くことしか出来なかった。

＊　＊

大型ヘリのチヌークは、夜半にアルヌスに到着した。

まず帝都から救出した民間人や、政府派遣の使節団が降ろされた。さらに騎士団の負傷者が降ろされるとヘリポート周辺は大騒ぎとなった。

フラッシュが瞬き、カメラの砲列が彼らを迎える。

その中でも目立ったのはやはり日本の代表取材チームであろうか。

「白百合さん、帝都はどんな様子でしたか!?　帝国の首脳との話し合いは、決裂してしまったんでしょうか!?」

栗林菜々美がマイクを片手に白百合に突進しようとして、警備の隊員達ともみ合いになっている。

北米や、ＥＵ、新興国派遣の代表取材チームも、緊迫した特地の様子を伝える滅多にないチャンスと見て、それぞれの言葉でまくし立てるようにして報道していた。

特にマスコミが注目したのは、続々降ろされて来る騎士団所属の負傷者達である。皆、武装をはずしていたから傍目には民間人に見えるのだ。そして、血のにじんだ包帯などをして傷ついている。その姿はセンセーショナルな映像を作るための格好の素材となった。

「自衛隊が、帝都にて何らかの作戦行動を行ったようです。その際に、ご覧のように女性やお年寄

りに大量の負傷者が出てしまった模様です」

古村崎が、怒鳴るようにしてカメラに喋っている。

「このような犠牲者を大量に出すような残虐な作戦行動をとることが、果たして許されるのでしょうか？　我々は政府や自衛隊に対して厳しい視線を向けていかなければなりません。やはり市民の監視の目というものが必要なのです。今回我々報道陣は、代表取材という形で極めて限定的な取材しか許されませんでした。しかし、我々の目が行き届かないために、このような結果になってしまったとするならば、やはりこうした制限は撤廃されなければならないでしょう。政府に対して強く働きかけて行きたいと思います」

この夜の報道番組の視聴率は軒並み上がった。そして森田が恐れていたように、政府の支持率は急落するのである。

10

コダ村の避難民達は、口を糊（のり）する職を得るために各地の村や町に散らばった。

村長の場合は、帝都郊外にある荘園で臨時雇いの農夫の職に就いた。

荘園主は以前からの知り合いであり友人と言ってもよい仲である。そのため、臨時雇いの身でも

それほど待遇は悪くなかった。

仕事の内容は、畑仕事をする亜人奴隷である。

朝日が昇れば起き出して、力はあるが穏和な性格の亜人達を働かせ、夕方には仕事を終える。そして陽が沈む頃には友人に誘われるままに、濁った安酒とたわいもない下世話なお喋りに興じ、すっかり暗くなった夜半に寝藁を積んだ床へと潜り込むのである。

収入は少なく、自分と家族の食事とその他の費えですぐになくなってしまう。当然、貯蓄をつくることも難しかった。それでも食べて行くには困らないのだから、幸せだと考えていた。失った家や畑を取り戻そうと思えるほど、彼は若くなかったのだ。

荘園という場所は人間の出入りがほとんど無いので、自然と閉鎖的となる環境だ。外界からの情報もほとんど流れてこない。そのために帝国で今、何が起きているか、コダ村の避難民達が今、どのような生活をしているか、そういった噂は、全くと言って良いほど入って来なかったのである。

村長は漠然と考えていた。他の避難民達は自分ほど恵まれていない。だから過酷な生活をしているだろうと。何しろ、コダ村の村民達の多くは、どこにでもいる農夫で、どこにでもいる職人でしかないのだ。特別な技術や才能を持たない限りは、捨て金のような賃金で、下手をすると奴隷よりも貧窮した暮らしを送らなくてはならないのだ。

皆、うまくやっていればいいのだがと心配する。だが、自分の生計を維持するだけで精一杯な彼に出来ることはそれだけであった。

そんな彼に、炎龍が退治されたという噂が伝わったのは、偶然である。

荘園主が、収穫した作物を出荷するために、荷馬車を連ねてモリソンという街へと赴いた。その際、酒の臭いに釣られて立ち寄ったタヴェルナ（居酒屋）で、吟遊詩人の奏でる詩を耳にしたのだ。それこそが、炎龍を討ち果たした『老魔法使いの弟子レレイとその仲間』を称える詩であった。

「村に帰れるぞ。よかったな！」

肩を叩いて喜んでくれる荘園主の手前、村長は早速旅支度をはじめた。ただ、心は少しも喜んでいなかった。何故なら、コダ村に帰ったからといって、すぐに昔の生活を取り戻せるわけではないからだ。畑は荒れ果てているに決まっているし、家だってどうなっているか分からないのだ。元のような生活を取り戻すために、いったいどれほどの年月と費用が費やされるのか。それを考えるだけで気が重かった。

とはいえ炎龍が退治されたならば、かつてのコダ村がどうなっているか確かめる必要があるのも確かであった。そして状況を見極めて、今後の方針を立てなければならない。それが村長の役割だからだ。

幸い、荘園は農閑期に入って彼の仕事も暇になっていた。家族を荘園主に託した村長は、荷馬車を引き出すとコダ村に向けて出発した。

旅の途中、村長は村や街を見かけると立ち寄ることにした。主にコダ村からの避難民の消息を得るためであったり、炎龍が退治されたという噂の真偽を確かめるためである。

だが、程なくして彼は愕然とすることとなった。
立ち寄った村や街のほとんどが、死に絶えていたからである。
あちこちに斬られたり矢を受けた住民の死体が転がり、火のついた家々からは煙が上がっている。
盗賊にでも襲われたのだろうか。だがそれならば生きている者が一人も居ないなんてことはない。
無人となった村落はただの廃墟であり、奪うべき農作物もお金も産み出されなくなってしまうからだ。それは盗賊を職業とする者ならば、決してしない行為である。だが次の村でも、さらに次の街でも同じ光景が広がっていた。そして次も。
「ここもか……」
また廃墟。そう思って嘆息した彼が見たものは、ゴブリンが群れをなして人々に襲いかかっている殺戮の現場であった。
周囲を見渡してみれば、コボルトやオークらもいる。本来ならば錆びた武器や、戦場で拾った壊れかけの武具しか持たないような連中が、何故か、みんな真新しい甲冑や剣、槍で武装していた。
路地では大きな黒妖犬が、子供の死体を貪っている。肉片や血の塊が飛び散り、辺りを汚していく様を見て思わず目を背けた。
このあたりでは滅多に見かけないジルバス（投げ槍）を抱えた痩身のジヴォージョニーの姿まであった。コヨーテを祖とする彼女たちは、生き残った老人や女子供をいたぶるように追い立てていた。
その光景を村長は、凍り付いたまま眺めていた。

これまで通ってきた村や街は嵐の爪痕が残る廃墟であった。だがここは、今まさに嵐に襲われている最中だったのである。

危険だ。すぐに逃げろ、引き返せ。村長の頭の中では警鐘が鳴り響く。

だが、身体が彼の言うことを素直に聞いてはくれなかった。恐怖で竦んでしまったのか、それとも身体の動かし方を忘れてしまったのか、手綱を持ち上げることすら出来なくなっていた。

やがて、彼の視界に帝国兵の姿が入った。それを見て、帝国兵が来てくれたかと村長は安堵する。声をかけて救いを求めれば助かるかも知れないと思った。

「た、たすけ……」

ところが信じられないものを見てしまう。あり得ざるものだ。

それはゴブリンやオークが火を放ち、財貨を奪うのを、ヒトが指揮している姿である。

この惨劇は凶暴化した亜人達が引き起こしたものではない。帝国軍の仕業だったのである。

その驚愕が、村長に身体の動かし方を思い出させた。村長はそおっと馬の首を返して荷馬車の向きを変えた。見つからないように、目立たないように。なまじ騒ぎ立てずに凍り付いていたのが幸いしたようで、村長の存在に誰も気付いていない。そおっと、そおっと。静かに逃げれば大丈夫。

村長はそれだけを心がけて馬の手綱を握った。が、しかし、路地から転がるように出てきた少女と男の子が泣き叫ぶようにして駆け寄って来た。

「村長さんっ！　村長さんっ！　助けて！」

「おっ、お前は、ドガランのところの!?」
汚れた顔で、ボロを纏ってはいたが男の子は見覚えのある、コダ村の子供であった。
「お父さんと、お母さんがっ！」
悲痛な響きをともなった声は雄弁に事情を伝えた。だが、それと同時に、村長達の居場所を周囲の怪異達に報せることとなった。黒妖犬がジロリと視線をこちらに向け、ジヴォージョニーがこちらを指さしている。帝国軍の指揮官達も村長達に振り返った。
その帝国軍の指揮官こそヘルム子爵、ミュドラ勲爵士、カラスタ侯爵公子らであった。
「見ろカラスタ、あんなところに狩り残しがいるぞ……」
「ヘルム殿。我々の姿を見られてしまっては、逃がすわけにはいきませんぞ」
村長は、子供達に向けて叫んだ。
「早く乗りなさい！　逃げるぞ！」
子供達を荷車に乗せた村長は、手綱を鞭のように振ると馬車を走らせた。
力はあっても、速く走ることには向いてない農耕馬は、軽くいなないて不満の態度を示す。だが手綱を通じて村長の鬼気迫る思いを感じたのか、やがて全力疾走することを受け容れた。
だが……しばらくすると後方より馬蹄の響きが、疾走する獣の荒い息が聞こえて来た。
少しずつ、少しずつ。それはゆっくりと迫ってくる。
村長は、その気配から逃れるように馬を急き立てる。懸命に、ひたすらに。

その圧迫感に怯えたのだろう。荷台の子供達が、怯えて互いに抱き合って泣き始めた。
子供の泣き声というのは、癇に障るものだ。特に大人自身、追い詰められていると感じる時はなおさらで、村長は子供達を泣きやまそうとして叫んだ。
「大丈夫だから泣くな！」
叫んだのは、荷馬車のたてる騒音が凄くなって、普通に喋っても聞こえないからだ。
引きつる表情を強引に笑みの形にしている村長を見た子供達は、どうにかべそをかくのをやめた。
「儂はな、これでも若い頃は戦にも行ったことがあるんだよ。なかなか強いんだ」
馬を操りながら床板を剥がして見るように村長は叫ぶ。
子供達は、激しく揺れる荷台の上で、言われたままに床板を調べた。すると、前から三枚目が簡単にはずせるようになっている。そしてその下から一振りの剣を見つけだした。
村長は子供達から剣を受け取ると、頼もしく見えるように、痩せた腕に力こぶを作ってみせた。
柄に口づけて祈る。
「戦いの神エムロイ様。儂なんぞどうでもいいから、この子達だけでも守り給え」
魂を押しつぶすような圧迫感は、すぐ後ろまで近付いていた。
村長は振り返る。
すると後方に騎兵の隊列が見えた。いや、それは騎兵ではなくケンタウロスであった。やはり皆、武具を身につけて盗賊のような装いになっている。さらには黒妖犬の群が一緒になって追随してく

る。

対するに、村長の馬は農耕馬。しかも、激しく喘いでいる。全身から血のような汗を流し、既に舌を出しかけていた。いつ倒れてもおかしくない状態である。しかし、もし捕まったらどうなるか。黒妖犬に食い荒らされた肉片の光景がまざまざと蘇って、焦れる、叫く、吠える。

「頑張るんじゃ。頼む、頑張ってくれっ!!」

馬に死ぬまで頑張れと鞭打つのは、考えてみれば途轍もない虐待だ。もし馬が人語を語れたなら、長年の酷使の末にこれはないんじゃないかと恨み言の一つや二つ罵るはずだ。だが子供二人の命と引き替えだ。エムロイの御許に行ってから赦してもらうしかない。

村長は心を鬼にして手綱を握り、無茶を承知で鞭打った。

だが、折角馬が頑張っても荷馬車の方が保ちそうもなかった。この使い古された荷馬車も、寿命が来ているのを騙し騙し使っていたのだ。

車軸がギシギシと音を立て、振動は激しさを増すばかり。それでも馬を鞭打つ手を止めることだけは出来ない。動けなくなるのは馬が先か、荷馬車が先かという状態であった。

やがてついに限界が訪れた。力つきた馬が、四肢を折るようにして突然転倒する。

勢いそのままに荷馬車も横転し、車軸が折れて盛大に砂煙をあげる。そして、こぼれ落ちた村長と子供達は大地に叩きつけられてしまった。

全身、土と泥と、そしてにじみ出る血に汚れた村長は、身体のそこかしこに走る激しい痛みを無

視し、よろよろと立ち上がり子供達を背に庇うと錆の浮いた剣を抜いた。
希望も、気力も失っていたこの老骨の、いったいどこに、これだけの力が眠っていたのかと当の本人も驚いてしまうほどだ。
「エムロイ様、儂の馬がよう最期まで頑張ってくれました。看取ってやってくだされ。次は、儂の番です。この老骨も最期まで戦い抜けますように、祝福してくだされ」
老人は牙を剥き出しにして迫ってくる黒妖犬に向けて剣先を向けて祈った。そしてその瞬間。
「良いわよぉ。祝福してあげるぅ！」
その時、何かが疾風のような勢いでやってきて突如としてケンタウロスの首を刎ね飛ばす。黒妖犬の群が弾き飛ばされて、あちこちに飛び散って悲鳴にも似た叫びを上げた。
神が村長の祈りに答えた瞬間であった。

＊　＊

テュカは、無蓋の高機動車の中央に立ち上がって、両手を大きく拡げ風を浴びていた。
流れていく風を全身で受け止めると、飛んでいるようにも思えてとても気持ちが良いという。たなびく彼女の髪は光を受けてキラキラと金色に輝いていた。
そんなテュカの後ろで、荷物をごそごそとやってるのはロウリィ。

彼女はこれからの戦いに備え、荷台に積みこまれていた品物を調べ、覗き込み、引っ張り出して、武器や備品の用途を確認していた。110㎜個人携帯対戦車弾（ＬＡＭ）も用意されている。
「なにぃ、これぇ？」とロウリィは商店街の置き看板にも似た箱形の物体を取りだした。
「それは仕掛け罠の一種だな。指向性散弾と言う。まとめて敵をなぎ倒せるという優れものだ」
「で、これは何に使うのぉ？」
「それは照明弾。夜、空に打ち上げて少しの間明るく照らすんだ」
「ああ。書海亭で使った奴ねぇ」
「あれは、閃光発音筒。こっちにしまってある」
「随分と種類があるのねぇ。で、こっちの箱は食べ物ぉ。こっちの箱は何かしらあ？　薬箱ぉ？……で、これぇはなぁに？」
「そ、それはっ！　なんで、んなもん入ってるんだ？」
伊丹は、ロウリィが取り出した箱に絶句した。救急箱は一度も蓋を開けたことがないので、中身がどうなっているか知らなかったのだ。
「イタミ殿。薬箱に入ってるんだから、医薬品ではないのか？」
ヤオの言葉に、伊丹は、「それは、その、あの……」と窮してしまった。確かに、薬局で売っている代物ではある。
ロウリィは早速開けてみましょうとばかりに、セロファンの包装をはがして、紙の箱を開いた。

すると中から出てきたのは、円盤状に丸めあげた状態で真空包装された、ゴム製品であった。

「伊丹殿。顔色を察するに、これが何に使うものがご存じであろう。宜しければ教えてくれないか？」

そう言ってうりうりと迫るヤオ。

ダークエルフの瞳に笑みの色が浮かんでいる。どうも、答えにくいものであることを承知で尋ねている雰囲気があった。

これはまずい。

もし、ゴム製品の用途を説明したりすると、何故ここに、そのようなものがあるのかという話になる可能性が大であった。誰かの悪戯だろうが、そんな説明はここにいる女性陣には通じないだろう。そうするとこのような物が必要な時がくる予定なのか？　それは誰と？　……と、ずるずると追い詰められてしまうおそれもある。だから、真の用途は決して教えてはいけないのだ。

「そ、そいつは……小銃の先に被せて、銃身に砂が入るのを防ぐのに使うんだ」

伊丹はそう言って六四式小銃の銃口に被せる動作を見せた。あながち嘘ではない。実際、湾岸戦争の際、砂漠に赴く米軍の将兵はそのように用いていた。

「なるほど。だが医薬品の箱に入っていた理由が分からないな」

「いや、きっと間違ったんだろう。どうりで見つからなかったわけだ、あ、は、は、は、は」

『死刑台の笑い』と呼ばれる絶望下の乾いた笑い声を上げる伊丹を救ったのは、運転席でハンドルを握っていたレレイである。

「十時の方向」
レレイの言葉を受けて、伊丹は話を打ちきるようにして双眼鏡を彼女が指さした方角に向けた。
ヤオとテュカはしつこく伊丹に問いかけようとしたが、ロゥリィは真剣な眼差しで伊丹と同じ方向を凝視していた。
「誰か追われている？　盗賊でも出たか？」
「戦いの祈り、確かに受け取ったわぁ！　年寄りと子供ぉ。助けるわよぉ！」
気の早いロゥリィは漆黒に艶めく唇をペロリと舐めると、ハルバートの刃を覆う皮革製の被いを取り払った。この被いは、書海亭で運搬しようとした小僧達（ボーイ）が怪我をしそうになったことから、後々問題になることを恐れた伊丹がつけてくれと頭を下げて頼み込んだものだ。
「盗賊じゃないわ！　ケンタウロスが六、黒妖犬が十！」
目の良いテュカが叫ぶ。
ロゥリィは運転席の後ろ、つまり高機動車の右側に立って足場を決めると、一旦ロールバーにハルバートを立てかけ、黒い革手袋をはめた。掌だけを覆う指のない手袋である。
テュカは機械式（コンパウンドボウ）のアーチェリーを取りだして構えた。
「ヤオ、弓は使えるか？　ＬＡＭだと威力があり過ぎだ」
伊丹の問いに「そうだな」と答えて手にしかけたＬＡＭを床に降ろすヤオ。弓矢はダークエルフにとっては当然の嗜みだと言いながら、荷物から引っ張り出した弓に弦を張り始めた。

「レレイ。連中の左側を駆け抜けてよねぇ！」
ロウリィはそう叫んで、ハルバートを野球のバットのように振りかぶる。テュカ、ヤオの二人も矢を番えて弓を引き絞り狙いを定めた。
ロウリィの要請に頷いたレレイはハンドルを軽くきって、アクセルをぐいっと踏み込む。
高機動車はさらなる加速を始め、流れていく風は最早暴風のようになった。
「レレイ、急いでっ!!」
テュカが叫ぶ。これを受けて安全運転主義者のレレイが、リミッターを解除されたかのようにアクセルペダルを床に着くまで踏み込んだ。
逃げる荷馬車に迫るケンタウロス。転倒する農耕馬。土煙を上げて激しく壊れる荷馬車。放り出される老人と子供。全てが、凄まじい勢いで近付いて来た。テュカとヤオの奏でる鳴弦に続いて、レレイは黒い大型犬の群れに高機動車を突っ込ませて跳ね飛ばした。
老人が剣を構え、祈りの声を上げている。
ロウリィが、「ふんっ！」と気合い一閃、ハルバートを振りおろしながらそれに応えた。
ケンタウロスの首がはねとばされ、テュカとヤオの放った矢は黒妖犬を大地に縫いつけた。
レレイがブレーキを踏み込んで、ステアリングを大きく回すと、高機動車の車体は砂煙を巻き上げながら大きく方向を変える。
「ロッロロロロロロウリィッ！」

ヤオの喚声を聞いたロゥリィは、荷台の上で盛大に倒れた。ドリフト走行の勢いで倒れたにしては変な倒れ方だった。何かこう腰が抜けたかのようだ。

「ねぇヤオぉ！　それ違うぅ、著しく間違ってるからぁっ！」

ロゥリィは床に這いつくばると顔を羞恥の色に染めて頼むように叫んだ。

次の矢を番えながらヤオは首を傾げる。

「何故だろう？　戦意高揚のために信じる戦神の御名を唱えるのは、信徒としては当然のことだと思うのだが。神々にどう祈るかは、信徒がそれぞれ決めるものだし……」

「こっちの力が抜けるのよぉ！」

ロゥリィは抗議の声を上げながら、ロールバーに掴まり立ちした。

揺れ動く車に揺すられながら伊丹はニヤリと笑って瞳を輝かせた。レレイに「右だ右だ」と方向を指図しながらウインクし、背後のヤオとテュカに目配せして無言の同意を得る。

凄まじい勢いで加速する高機動車。砂塵の中でテュカの金髪が舞い、ロゥリィの黒ゴススカートの裾がひらめいて、導師号授与保留と書かれたレレイの白い導服がはためいている。

レレイが、テュカが、そして伊丹が、ヤオの合図で一斉にロゥリィの名を冠した鬨（とき）の声を上げた。

「さん、ハイッ！」

「ロッロロロロロロロロゥリィッ！」

＊　＊

レレイが発表を終えた時、居並ぶ老師達は愕然としていた。聴衆からのヤジが飛ぶこともなく、会場は水を打ったように静まりかえっていた。それはすなわち彼女が『導師号』を得るに相応しいと皆が認めたことを意味していた。

レレイの報告の有用性は誰の目にも明らかだったのだ。もちろん、その副作用として魔法を用いた戦闘がより悲惨なものになることは容易に予想できる。だが、それは何も彼女の報告だけがもたらすものではない。学問、技術、あらゆる分野の進歩が、戦いの悲惨さと直接的、間接的に繋がっているのだ。戦争に繋がるからという理由で技術や学問を否定するなら、人類は火や石器を手にする前に戻らなくてはならない。

それでも、レレイの導師号授与は保留されてしまった。理由は発表の内容ではなく、個人的なトラブルによって学会の場を荒したことにあった。

導師となった者は、学徒に門戸を開き、これを指導する義務を負う。特にレレイの発表は魅力的でありこれを学ぼうとする学徒が、彼女の下に大勢集まることが予想された。だがレレイは命を狙われていた。現にこの学会の場でも刺客が取り押さえられたぐらいである。これをこのままにしておけば、学徒達を巻き込むことになってしまう。

要するに導師を名乗りたかったら身辺のトラブルを解決してこいと言われたのである。
おかげでちょっと見ただけでは分からないが、レレイは大変な仏頂面をしていた。
結んだ唇が微妙に上に向いて凸の曲線を描いている。それこそ日常接している伊丹達にだけ分かる、微妙だが明らかにそれと分かる不満顔であった。
導服の下には、翼竜の鱗を編んだ白い胴鎧を着込んでいる。胸元に開いてしまった穴や、たなびく裾の合間からそれが垣間見えた。この胴鎧が、シャンディーの凶刃から彼女を守ったのだ。
「前もって胴鎧を着込んでおけと言われていた」
突き立てた剣が、硬い抵抗に阻まれ甲高い音をあげた時、顔を青ざめさせたシャンディーは「どうして!?」と問いかけた。
この「どうして?」には、「何故こんな物を着ているの?」に始まって、自分がレレイ暗殺を企てていたことを知っていたのかと問う意味もあった。
だがこれは、レレイにとっては、偶然の結果でしかない。あくまでも書海亭の小僧達(ボーイ)に胴鎧を着ていて欲しいと言われたから着込んでいただけなのだ。だから責められても困る。だいたい、シャンディーもそのことは知っていたはずであった。
「で、でもノッラは笛吹男(パイパー)の手下だから、その企てには乗らないってことに……」
どうやら、企てには乗らないことにしたのだから、そのための備えもしないのが普通だと言いたいらしい。だが、だからと言って何の備えもしないということにはならない、と言うのがレレイの

答えである。いや、レレイでなくてもそうするだろう。
「ずるいです！」
シャンディーは、呆れ果てた表情をするグレイに縛り上げられながら不満の声を上げた。
「明らかにあんたのドジでしょ」
テュカが一言で言い切った。
「そんなっ、ひどいわっ！」
シャンディーは涙目で抗議したが、皆の関心はすでに、何故シャンディーがレレイを狙ったかに移っている。
「ま、笛吹男（バイバー）に嵌められたんでしょうけどね」
「その手口を理解し、警戒していてもひっかかってしまうとは、恐ろしい相手ですな。で、どんな理屈で、レレイ殿を襲うことにしたのか聞かせてもらいますぞ」
グレイの問いに、シャンディーはピニャを助けるためだと叫んだ。レレイの首を持っていけば、ピニャが助かるという。
何故、どうして？　そもそも、どうしてピニャがそんな状況に？
皆からの問いに、シャンディーは笛吹男（バイバー）から聞かされた帝都の状況を語った。
翡翠宮の攻防。騎士団の活躍。これによって皇女ピニャは宮廷内で立場を失って、絶体絶命の状態に陥ってしまっているという。

「ディアボ殿下すら逃げ出したそうよ。姫殿下がご無事でいられたのは、ゾルザル殿下の妹君だという理由でしかないの。そしてそのお立場すら、今回の出来事で危うくなってしまったの」
「それがどうして、レレイを狙うことに繋がるんだ？」
伊丹の問いにシャンディーは答えた。
「レレイさんの暗殺を命じたのがゾルザル殿下だから。わたし達が、レレイさんの首を持っていけば、ゾルザル殿下に対して姫殿下の忠誠を示したことになるわ」
伊丹は「なるほどね、彼奴だったか」と諸悪の根元の名を知って舌打ちした。
「そんな風に騙されたのねぇ」
「違う、違う！　わたしは騙されてなんかいない！　だって、ちゃんとエルロンまで馬を走らせて、帝都の噂を確かめてきたもの！　笛吹男（バイパー）に騙されてなんていないわ！」
「そうだとすると、笛吹男（バイパー）は、とんでもない情報収集力ですな。おそらく手下が大勢居るのでしょうが、遠く離れた帝都で起きている出来事を見事に利用している。橋という橋が渡れなくなっているなか、どうやって連絡を取っているのか。何か特殊な伝達方法を持っているのか。大変興味深い話です」
グレイは、笛吹男（バイパー）の底知れない能力に唸った。テュカは忌々しそうに「ふんっ」と鼻を鳴らす。
「あなた、そんなことのために四日間も行方をくらましていたって言うの？　……こっちを心配させておいて、それがそんなことの為だなんて！　とんでもない裏切りよ！」

「なんとでも言えばいいわ。グレイ騎士補！　姫殿下を助けるためよ。レレイさんを斃して！」
「斃せと言われましても、この状況で小官にどうしろと？」
グレイは呆れたように周囲を見渡した。
自分達は正面にレレイ、右に伊丹、左にテュカ。そして右斜め後ろにロゥリィ、左斜め後ろにヤオという布陣で取り囲まれているのだ。さらに演台の下には、ずらっとロンデルの学徒達がいて話を聞いているという始末である。小指ひとつでもレレイに向けて動かしたら、その場で塵一つ残さずに斃されてしまうだろう。
「姫殿下をお助けするなら、小細工を弄したりせず、皆様に助けてくださいと頼んだ方が良かったのではありませんかな？　小官、そう愚考するところですが……」
「どうやって？　功績をあげてゾルザル殿下のご機嫌をとるしかないでしょう！」
「現状では、レレイ殿の首をとることのほうが難しい。皇城に乗り込んでいって、殿下を助け出す方がよっぽど現実的ですぞ」
「皇城は何万もの軍隊や近衛が守っているのよ」
いやいや、物事はやりようだ。グレイはそう言うと、伊丹らに苦み混じりの笑みを向けた。
「どうでしょう？　笛吹男（バイパー）をはじめとする刺客共を止めるには、その大本を断つしかありません。火の粉を払うためにも、火元を断ちに皇城に参るというのはいかがでしょう。そのついでに、姫殿下をお救い申し上げるということで……」

「信じられない！　皇太子殿下に手をかけるつもり!?」
「このあたり根っからの貴族と、庶民からの成り上がり軍人の違いでしょうかな。小官は何とも思いません。ピニャ殿下をお助けするならこれが最も効率的ですからな」
グレイはそう言うと、改めて伊丹らに向けて頭を下げた。
「ここは一つ、小官からのたっての願い、お聞き届けいただけないでしょうか？」と。

＊　＊

多くの商店が軒を連ねる帝都の中心街には、活気が蘇っていた。
講和派を帝都内に閉じこめておくために行われていた城門封鎖が、ようやく解かれたのである。
商人達が堰を切ったようにして大量の食糧を運び込み、高騰していた食料価格も数日ほどで正常な価格にまで下がった。これによって人々はようやく安堵のため息をついた。帝都の市民を震撼させた、帝都封鎖とオプリーチニナ騒動はこうして終わりを告げたのである。
悪所街の住民達も、この食糧特需のどさくさで大いに潤い、かつ人々から感謝された。
「それで、どこへ行くんだい？」
ミザリィの問いに、手回り品を抱えたテュワルは頬を赤らめながら答えた。
「プレイリーが、今回稼いだお金で所帯を持たないかって……。畑を拓いて農場をするんだって。

手伝ってくれって言われちゃった」
「お～い、テュワル。その荷物はこっちに載せな」
見ると気のよさそうな若者が、荷車に荷物を載せて旅支度をしている。
ミザリィは、がしがしっと髪を掻きむしった。嫉妬、祝福、羨望、賞賛、懐疑、諦念……良い感情と悪い感情の入り交じった複雑な気分が込み上げて来たのだ。
「ま、こんなところ何時までもいる場所じゃないから、出ていけるならそれに越したことはないんだけどね。しかも、前職を承知の上で誘ってくれるんだから有り難い話じゃないか。ま、苦労はするだろうけど、それも承知の上だろ？」
言ってからミザリィは後悔して自分の頭をコツンと叩いた。苦労するだろうけど……なんて警告は、聞きようによっては、苦労をしろという呪いにもなるのだ。
「ごめんなさい、ミザリィ姐さん」
「謝ることじゃないだろ？　あんたはここを出て幸せになる。めでたしめでたしだ」
「……うん」
「じゃ、元気でやんな」
こうしてテュワルは悪所の街から出ていった。
誰だってこの最底辺の街から抜け出したいと思っている。まとまった財産を掴んだ今が、唯一にして最後のチャンスかも知れない。見れば、あちこちで街を去っていく者の姿があった。

だが、これでこの悪所が寂れることはない。空いた部屋にはすぐに誰かが入る。出ていく者の代わりはすぐにやって来る。最底辺という存在は、無くなることも失われることも決してないのだ。

「おい、ミザリィ。お前は出ていかないのか？　たんまり稼いだんだろ？」

ゴンゾーリ一家の若頭が見送りに来ていた。プレイリーという男は、ゴンゾーリの配下をしていたらしい。男は男で、足を洗うときに見送りに来るような関係者がこの街にいたのだ。

「これでも業の深い生き方しているんでね。ここを出たって、ろくなことになりゃしないのさ」

「だったら宝の持ち腐れだな。俺に少しばかり投資しろよ」

「馬鹿言ってんじゃないよ。おとつい来やがれってんの！」

ミザリィは男をすげなく振った。そして腰を振りながら、しゃなりしゃなりと悪所の道を歩む。だが男はついて来た。配下だった男が番う相手を得てこの街を出ていったのを見て、寂しさに似た焦りを覚えたのかも知れない。その気持ちはミザリィにも理解できるが、相手をちゃんと見て声をかけろと思った。

「なぁなぁ、ミザリィ」

「あんたもしつっこい男だねぇ。いい加減にしないと嫌われるよ」

仕方ない。こう言う時は、あそこに行くに限る。

ミザリィは、陸上自衛隊・帝都内悪所街事務所へと向かった。ならず者は、用がない限り近付くに二の足を踏む場所だ。そこに入ってしまえばこの男も、これ以上は言い寄っては来れないのだ。

「ちっ、くそっ」
案の定、男は玄関前で立ち止まった。
「ミザリィ、俺は」
「はいはい、言いたいことは分かったからとっとと帰りな。暇じゃないんだろ？」
だが、男は帰れ帰れと手を振るミザリィの手を掴んだ。
「ちょっと、この手はなんだい!?」
「いいから、俺の話を聞け！　聞いてくれ」
「ちょっと、痛いから離してよっ！　ここでこんなことして、ただで済む思ってるのかい？」
「馬鹿にするな！　ここの連中なんか、俺はちっとも怖くねぇぜ！」
ミザリィは悲鳴をあげてやろうかと思って大きく息を吸った。そうすれば事務所内にいる剣崎か誰かが助けに来てくれるだろう。
だが、ミザリィが息を吸いきる前に男の乱暴が止んだ。
のど仏に巨大なハルバートが突きつけられた男が、仰け反って両手を上げている。
「邪魔よぉ。戸口をふさがないようになさぁい」
首を動かせない男は、目だけでぎょろりと横を見て、「だ、誰でぇ、お前は」と震える声で誰何する。
ミザリィも、戸惑った。
目の前に立っているのは、ここに普段から出入りしている連中とは明らかに毛色が違ったからだ。

神官も学徒も、この悪所にやってくることは無い。それにエルフとダークエルフが列んで立っているという風景も珍しい。それに加えて見窄らしい姿の農夫らしい老人に、子供を二人連れている。実に得体の知れない集団であった。

ミザリィに見覚えがあるのは唯一、男だけである。最近姿を見せないので記憶から薄れかけていたが、確か……。

「あんたは、クロカワの上司の……確かイタミだったかね？」

ミザリィはそう言って伊丹を指さした。伊丹も気安く返事する。

「よっ、久しぶり」

だが、悪所訪問はこれが初めてらしい彼の同行者達は、伊丹の秘密を暴いたかのような表情をすると、左右前後から詰問口調で男に迫った。

「へぇ、お父さんって、こういう女性と知り合いなんだ？」

「どんなふうにぃ久しぶりぃなのかぁ、聞かせてくれるかしらぁ？」

「……こういう遊びは駄目」

「女など買わずとも、此の身がいるのに」

ミザリィには、この時の伊丹がした表情には大変見覚えがあった。

それは夜の歓楽街通いが、妻に露見して叱られる男のものと非常によく似通っていた。

「お、俺は、歓楽街通いなんてしてないっ！」

しかし、伊丹の心からの叫びは、どうやら無視されそうであった。

＊　＊

「ニホン軍による帝都襲撃は、ゾルザル殿下率いる帝国軍によって撃退された!!」

それが皇太子府の発表した『事実』である。状況を俯瞰して見るだけの情報を持たない下級兵士や市民達からすれば、「ちと怪しいけど、上がそう言うんだからそうなんだろう」という認識である。

だが、ゾルザル以下、元老院の主戦論派にとっては、そうはいかなかった。彼らは真実を知っていたからだ。いくら嘘で塗り固めても、完璧な敗北であることは紛れもない現実なのだ。

それは彼らにとって、怒りと口惜しさで、夜も眠れない日々の始まりを意味していた。敵に首都を蹂躙されて我慢できるようなら、そもそも主戦論者などになるはずがないのだから。

「完全にしてやられた！」

今回の戦いは、帝都の、いや現在の帝国の戦力や兵器では、全く歯が立たないということを再確認することとなった。勿論、手強い相手であることは理解していた。だが、ここまで圧倒的だとは思っても見なかったのだ。

「次こそは、目に物見せてやる」

議員達は口々に叫んだ。

そして、我が目で負傷者や死者の姿を確認すると、自分達がどのような相手と対峙しているかへの理解を進め、彼らなりにどうしたらこれに対抗できるかを真剣に考え始めたのである。

「戦死者の遺体を調べてみましたところ、傷の奥より鉛の鏃がみつかりました。これが体内に飛び込んで致命傷となった模様です」

負傷者を手当てし、また遺体を調べた医師団の代表者がそう報告した。

さらに穴の開いた楯や防具などを並べて、どうすれば敵の武器を防げるかが論じられる。

「この点について言えば、ピニャ殿下の報告書や講和派連中が言っていた通りです。敵は、魔法かあるいは何か別の方法で、これらの鏃を手持ちの石弓で放っているのです」

「原理なんてどうでも良い！　分かったのは、今用いている楯ではどうにもならんということだろう？　敵の矢玉はこんな薄っぺらな楯では防げんのだ」

「では、楯や鎧を二枚重ねにしてみては？」

「馬鹿言うな！　二枚じゃ心許ないぞ。三枚は重ねる必要がある」

銃弾は帝国兵の楯を貫いた上で、さらに鎧をも貫通していた。これを防ごうとするなら最低でも三枚重ねにする必要があるという声が挙がった。

「それでは、兵の腕力では持ち運びが難しくなってしまう。いくら楯を丈夫にしても、歩くにも苦労するようになっては実用性に欠けるぞ」

楯を厚く丈夫に。その要求は最近に始まったものではない。だが楯の材料や、大きさ、重さは、

適当に決められているわけではなく、幾たびもの戦役の洗礼を受けながら、携行する兵士の腕力や使用する武器、戦術の関係から現在の姿となったのである。それをいきなり二倍、三倍と言ってもすぐに出来ることではないのだ。

だが、ゾルザルは、どうしてこんな簡単なことに誰も気付かぬのかと、誇らしげな笑みを浮かべて言った。

「俺には何故皆が窮してしまうのか分からぬ。この俺でも答えが見つかるというのに。いいか？楯が重いのならば、腕力に優れた怪異を用いればよいのだ。楯も二枚重ね、三枚重ねなどとケチくさいことを言わず、いっそのこと特製の大盾をあつらえれば良い。そして怪異共を兵達の最前列に並べるのだ。試みに用意させてみた。見るが良い……」

ゾルザルの合図で、巨人と見紛うばかりのジャイアントオーガーが二頭、皇太子府の広間へと入ってきた。

その背丈は、天井につかえそうなほどの巨体である。腕回りはゾルザルの胴回りほどもあって、怪異使い達は、その四肢にそれぞれ繋いだ鎖を八人がかりで引いていた。

その手には壁と呼んだ方がふさわしいほどの分厚い楯を構え、どこぞの神殿の柱でも持ってきたのかと思うような棍棒を抱えている。兜は、丸いお椀を被せたような形状。胴鎧は角張った箱形。伊丹が見たら、「肩だけ赤く塗装したい」と言い出すかも知れない。そんな姿であった。

「楯も鎧も、厚さ一クロ半（約二センチ）の鉄板で仕立てさせた」

「で、殿下。まさか、このような怪異共を、正規軍の戦列にお加えになるとおっしゃるのですか？」

これには、将軍達ばかりでなく議員らも驚いていた。

「そうだ。ジャイアントオーガーばかりではない。様々な種族、恐獣を戦列に加えようと思う。そうしないかぎり、敵には対抗できん」

「さ、流石にそれはいかがかと……」

帝国軍は戦争で怪異を使役している。

だがそれは、戦端を開いた直後に真っ先に敵中に突っ込ませ、敵陣を攪乱したり、猟犬代わりに四方に放ち、市街や村落を寇掠させるためであった。兵士達は彼らを一緒に戦う仲間とは少しも考えていないのだ。

『肩を並べて戦った仲』という言葉があるが、帝国でその言葉を使う場合は、相手の存在や価値を自分と同等の物として認めることを意味している。しかし、怪異達はあくまでも格下。知的にも劣る野獣とみなされている。それを戦列に加えよなどと命じれば、おそらく兵士達から「俺たちを獣と同じに扱うのか」といった類の、感情的な反発が起きるだろう。

それに、こうした腕力に優れた怪異に重武装させて戦わせるという発想は、ゾルザルが初めてではない。列国の歴史の中でも、こうした発想でつくられた軍は時折現れている。だが、とある理由によって、そのほとんどが中途で消えていったのである。

「では、どうする？　たかだか五百にも満たない敵にまた帝都を蹂躙させるのか？」

「いや、ですが、しかし」
「確かに兵共は動揺するだろう。だがそうしなければ損害を負い、傷を受けて苦しむのは兵達なのだ。結局は兵のためになる。反発は抑えてみせろ」
ゾルザルは持ち前の傍若無人さで問題解決は部下達に押しつけた。言っていることが一面で正論だから始末に負えないのだ。そんな重々しい空気が漂う中で、空気が読めないかのように、新任の次期法務官アブサンが前に出ると恭しく頭を下げた。
「かしこまりました、殿下。我々が兵士達に言って聞かせましょう」
するとテューレが、付け足すように言った。
「こうしてはいかがでしょう？　帝権擁護委員（オブリーチニキ）を一人ずつ、帝国軍の各隊に常駐させて殿下の御心をお伝えする役目を負わせるのです。帝権擁護委員部（オブリーチニナ）のいっそうの増員が必要になるかとは思いますがアブサン様は、亡くなられたルフルス様と違って有能な方。殿下の政治主導を為し遂げるために、きっと殿下が満足なさる結果を出して下さるでしょう」
「さすがはテューレ様」
アブサンはすぐに賛成した。そればかりか、ゾルザルの意志を汲んだ政治を実現するために、軍ばかりでなく行政機関の各組織にも帝権擁護委員（オブリーチニキ）を配置してはどうかと言い出した。
「いえ、いけません。下手をすると指揮系統が二つになってしまいます。反対です」
これを聞いた軍関係者達は慌てて立ち上がると口々に反対した。この方策の目的が、モルト皇帝

から任じられた将軍達を監視し、軍の指揮系統に干渉することであるとすぐにも理解できたからである。

だがアブサンは落ち着いた口振りで言い返した。

「何故そのような心配をなさるのでしょう？　大本の命令を発されるのは殿下なのですから、指揮系統が二つに割れることなどありません。問題が起きるとすれば、閣下らが殿下のご意志に反したような命令を出される時だけ。そのようなことは、決して起こらないのですから心配する必要は全くありません」

「し、しかし……」

この腰巾着めが。

将軍達はアブサンに対する反感で奥歯を噛み砕いてしまいそうになった。だが、ゾルザルの手前、不満を露わにすることは出来ず、黙り込むしかなかった。そこを突くようにしてアブサンは話題の終了を告げた。

「この問題は、ここまでといたしましょう。次はピニャ殿下と騎士団の問題です。翡翠宮での騎士団の振る舞いからしてピニャ殿下の叛意が疑われます。いくら殿下の妹君とは言え、このまま捨ておくことは出来ないかと思いますが」

この意見に、同席している議員達は一斉に賛成の意を示した。

「うむ。だがピニャの奴、あれ以来看病と称して父上の寝室に籠もっておる」

「陛下のですか？」
「そうだ」
「困りました。これでは釈明すら伺うこともできません」
皇帝の寝室を含む宮殿の奥は、皇帝の私空間であり近衛が守っている。ゾルザルの治世下で、最高の権勢を誇ることとなった帝権擁護委員部（オブリーチニナ）だが、彼らでも近付くことは許されないのだ。
「まぁよい。父上のところに籠もっている限り、何も出来ないのだから放っておけ」
すると今度はウッディ伯爵が前に出てくる。
「いえ、そういうわけには参りません。敵の帝都来襲には、騎士団の関与も疑われているのです」
「騎士団が、だと？」
「そうでなくて、どうして敵はあそこまで手際よく事を運ぶことが出来たのでしょう。手引きした者がいると考えるのが妥当でしょう。そして騎士団は敵と共に帝都から逃げていった。少なくとも協力関係にあるのは間違いありません」
この意見にクレイトン男爵は大きく頷いて言った。
「確かに、敵の動きは速やかだった。速すぎるくらいにな」
「もしそうだとするなら明らかに外患誘致の大罪。例え皇族であっても、いや、皇族だからこそ見逃すことは許されん！」
ウッディ伯爵は握った拳を振り回した。議員達も「そうだ、そうだ」の大合唱となった。その迫

力でゾルザルが圧倒されたほどである。主戦論派議員達は、帝権擁護委員（オブリーチニキ）に出した身内を失い、さらに帝都が襲われたことでゾルザル以上に先鋭化しつつあった。そしてその矛先を向けるべき生け贄を求めているのだ。

クレイトンやウッディの鋭すぎる舌鋒を前にしたゾルザルは思わず舌打ちし、ピニャを弁護するような口調となった。

「しかしだな……ピニャに限ってそのようなこと」

ウッディが興奮気味の議員達に、気を鎮めるように合図しながら言う。

「分かっております。そうだとすればピニャ殿下が一人帝都にお残り遊ばすはずがない。敵と一緒に逃げていなければおかしいでしょう。しかし、そう思わせる策だと見ることだって出来るのです。ここは、ピニャ殿下から、我らの疑念を晴らすようなご説明を頂かなくてはなりません」

「確かに、そうかも知れないが……ううむ」

ゾルザルはため息をつくと、テューレを見て、側近達を見渡した。誰かが反対することを期待していたのだ。だが誰も何も言わなかった。

「致し方あるまい」

ゾルザルは腰を上げると傍らの近衛長官に命じた。

「ピニャを連れてこい。逆らうようなら手荒にしてもよい」

こうしてピニャは敗北の屈辱感を晴らすための生け贄として、皆の前に引き出されることとなっ

たのである。

伊丹達はレレイの運転で、高機動車を皇城前に乗り付けた。もちろんそのまま乗り付ければ敵だと悟られ、警備兵から矢を浴びせられてしまうので、車体を板で囲って荷車のように見せる偽装を施している。多少不格好だが、それでも「これ、なんだと思います？」と通行人に尋ねたら「荷車でしょ」という答えが返ってくるぐらいにはなった。

「せめて、馬か牛ぐらい手配できなかったのかな」

問題はそれだと伊丹は愚痴った。牽引させる家畜の手配が付かなかったため、奴隷に扮した彼が引っ張るはめになったのだ。実際にはエンジンが動いているから、疲れることはないが、調子に乗ったロゥリィが目の色をすっかりと嗜虐的なものに変えて、「もっとしっかり引っ張りなさぁい。ホラホラぁ、どうしたのぉ？　おばかさ～ん」などと叱咤してくるので、伊丹はなんだか鬱小説を読んでいる時のような自己憐憫的な快感に目覚めそうになり「どうせ僕なんて」と思わず呟いてしまった。

こうしてレレイとロゥリィの二人は皇城の城門前へと降り立った。

その後ろでは伊丹が大きな箱を荷車に扮した高機動車から抱え降ろしている。その箱は小柄な人間が入ることが出来る程度の大きさであった。

門の両脇に立つ衛兵は、三人の姿を、何の用で来たのだろうという物問い顔で眺めていた。

まず魔導師のローブを翻したレレイが歩み出て、ぺこりと頭を下げる。
「わたしは、レレイ・ラ・レレーナ。皇帝陛下のお召しにより参上した」
レレイに差し出された招請状を見て顔色を変える衛兵達。警戒の視線が一変して、アイドルを迎えるような喜色に転じた。
「おおっ！　貴女が？」
衛兵の一人がしばしお待ち下さいと言い残して警衛の詰め所へと飛び込むと、「レレイさんが、参られた」などと報告している。「レレイって誰？」「馬鹿、炎龍を退治したあの人だろ！」「ああ⁉」そんな会話が漏れ聞こえ、たちまち数人の警備兵が飛び出して来てレレイを出迎えた。
それに対して伊丹は、「そこの奴隷、乗り物を門前に止めて置くな、中に入れろ」と指示されてしまう。すでにレレイやロゥリィは、衛兵達の案内で行ってしまい自分だけである。かといって皆が見ている中、運転席に座ってエンジンをかけてという操作をするわけにはいかない。これは荷車なのだから。ここまで伊丹がしてきたように、彼が引っ張って城内に入れなくてはならないのだ。
伊丹は「これ、俺が引っ張るの⁉」と嘆くように天を仰いで皇城内に侵入してからの手順について反芻した。

新田原の机の上に置かれた小型スピーカーからは、今津の声が流れている。
『まず、コダ村の村長が見たっちゅう連中の件や。こちらで得ている情報と合致する。帝国軍はい

よいよなりふり構わなくなって来たっちゅうことやな。悪どい手やけど、有効なのも確かや。このままじゃこちらもジリ貧にさせられてしまうから対策をせんとあかん。今回の姫さんの救出……これについて条件付きでOKが出たのもその一環や』

事務内では新田原三佐と剣崎、的射、槍田ら三名の自衛官が皇城の図面を広げ、それを伊丹達が覗き込む。皇城の構造と間取りは様々な方面からの調査によって詳細な図面がつくられていた。

『ただし、ゾルザルをどうにかするのはなしや。いくら戦争中でも皇族を暗殺したなんてのは、めちゃくちゃ不味いからな』

「でも、それだとレレイの安全が確保できそうもないんですよ」

伊丹はそう言ってレレイの肩を叩いた。

『伊丹。お前マンガ読みの癖に、そのへんの常識が抜けとるなぁ。普通、その手の仕事をする奴って、依頼人が死んだって引き受けた仕事をやめないんとちゃうか？　それに実の兄貴を暗殺されましたなんてのはお姫さんかて、気分わるいやろ？』

「あ……そうでした」

『さいとうたかを先生のゴルゴを読め、ゴルゴを。この手のことはなぁ、依頼者本人に止めさせるんや。だから彼奴は生かしておく必要がある。これが作戦を許可する条件の一つや』

「じゃあどうすれば」

『方法は二つや。一つは徹底的に脅すこと。他人を暗殺しようなんて輩は、自分が狙われる側にな

ると案外腰砕けになるもんや。もう一つは、ロンデルでやったみたいに、噂を流すのがいい』
暗殺者がレレイを狙っているという噂を流せと言う。
『その依頼人がゾルザルだっちゅうことを付け加えてな』

レレイとロゥリィ、そして箱を抱えた伊丹はネイに案内されて皇太子府の廊下を進んだ。
皇城に何の前触れもなくいきなりやって来たと言うのに、下にも置かない扱いを受けられるのは、英雄としてその名の広まったレレイと、エムロイの使徒たるロゥリィが揃っているからだろう。
「聖下、そしてレレイ様。どうぞ控え室にてお待ち下さい。むさ苦しい小部屋ですが、ご容赦を」
ここが小部屋？　むさ苦しい？
感覚の違いというものはこういうところに現れるのだなと変に感心した伊丹は、彫刻と装飾に溢れたテニスコート一面分にもなるだろう控え室を見渡しながら箱を床に置いた。腰掛けのクッションはかなり柔らかいようで、腰を下ろしたレレイやロゥリィの身体が半分ほど埋まっていた。
「折角お越し頂いたのに残念ですが、皇帝陛下へのお目通りはかないません。代わって皇太子殿下にお取り次ぎいたします。ただいま執務中ですが、さほどお待たせすることもないでしょう」
「モルトはどうしたのぉ？」
ロゥリィの問いにネイは慇懃に答えた。
「陛下は、御悩（病気）を得られまして、ただいまご療養中です」

「それは心配ねぇ……見舞えるかしらぁ」
「聖下の御芳志をお断りするのは大変に心苦しいのですが、面会謝絶令が出ておりまして」
「本当に良くないのねぇ。では快癒を祈ることにするわぁ」
「聖下のご祈祷をいただければ陛下の回復も早まることでしょう。臣下を代表し篤く御礼申し上げます。ところでレレイ様、不躾ですがこちらに御芳名をお記しいただけないでしょうか？」
ネイがおそるおそると言った体で羊皮紙と羽ペンを差し出した。色紙代わりだろう。つまりはサインしてくれと言っているのだ。
こういう時、レレイの無表情さは役に立った。伊丹やロゥリィには明らかにめんどくさそうにしているのが分かるのだが、見ず知らずの他人からするとそうとは見えないのだ。
レレイはさらさらとサインをして、ネイはインクが乾くのを待って大切そうに丸めた。
「ありがとうございます。それともう一つ。お付きの方が運んでらっしゃるあの箱は？」
「陛下への献上品」
レレイの説明は簡素だった。それはあたかも詳しい説明を拒絶するかのようでもあって、詳しく問うことが憚られた。ネイは戸惑いつつもそれを受け容れる。
「かしこまりました。ではお茶をお持ちいたしますのでしばしお待ちを」
かくして伊丹達は控え室に残されることとなった。早速箱をあけて二重底の下から小銃や無線機を取りだす伊丹。

ロゥリィは扉を薄く開けて外の様子をうかがっている。廊下には完全武装した近衛の兵士が二人、警備に立っていた。
「見張りはぁ、二人居るわよぉ」
伊丹は頷くと、箱から取りだした無線機のイヤホンを耳につけて囁いた。
「こちらアベンジャー、内部に入った。そっちはどうだ？」

皇城内の森の中を、偽装で身を固めたテュカとヤオが、特殊作戦群の剣崎、槍田（うつだ）ら二人のエスコートで静かに進んでいた。下草をかき分けながら、警備の隙間を抜けて、石造りの大きな建物へと近付いていく。
『こちらアベンジャー、内部に入った。そっちはどうだ？』
剣崎がこれに答えた。
「こちらはセイバー。目標地点まであと……三分ってところだ」
的射は帝都内では最も高い神殿の屋根で、二脚を立てた対人狙撃銃を伏せ撃ちの姿勢で構え、私物のプレミアレティクルス社製照準眼鏡を覗き込んでいた。
「こちらアーチャー。すでに位置に着いてる。いつでもいいぞ」
『了解。五分後に陽動を開始する』

その頃、近衛の兵士らに小脇を抱えられたピニャが、手ぐすね引いて待ち構えていた主戦論派元老院議員達の前に引きずり出されていた。

髪を振り乱して、床を引きずられて来た姿から察するにピニャも力の限り抵抗したようである。だが、結局は抗いきれず、力ずくで連れて来られてしまった。

「妾に、いったい何の用か？」

肩で息するピニャが恨めしげに問いかけると、次期法務官のアブサンが、あたかも陪審員に被告の犯行を印象付けようとする検察官のように問い始めた。

「殿下にお伺いしたいことがあってご足労願いました。今日は小賢しい秘書官殿もおられませんし、殿下より直接お答えをいただけるものと期待しております」

「どうせ騎士団のことであろう？　騎士団の行動は、皇帝陛下の命に従ったに過ぎない」

椅子すら与えられず、直に床に座っているピニャは膝を抱えこんだ。周囲からの責め苛む視線にさらされて、何かを抱かないと心細くていられないのだ。

「では、この帝都に敵を引き入れることすら、陛下のご命令であったとおっしゃるのですか？」

思いも寄らない言葉に、ピニャは思わず「誰が敵を引き入れたと？」と尋ね返した。

「あなたの騎士団です」

「言うに事欠いて裏切り者呼ばわりか。妾達も堕ちたものだ」

ピニャは嘆きながら抱えた膝に顔を伏せた。完全に自分の殻に閉じこもろうとする体勢である。

こいつをどうにかしろという議員達の視線を浴びたゾルザルは、苦々しい表情をすると、近衛に指示してピニャに顔を上げさせた。

近衛の兵は一瞬躊躇ったものの「殿下、ご容赦下さい」と囁くように言ってから、ピニャの紅い髪を掴んだ。

髪をぐいっと引っ張りあげられ、ピニャは苦痛に顔をゆがめている。

アブサンがさらに追及する。

「では何故、騎士団の者達は、敵と共に帝都を出て行ったのでしょう?」

「言わねば分からないのか? 妾が今、身をもってそれを体験しているだろう。こうなることが分かっていたからだ」

「自分の行動が、正しいと信じているなら、公式の場にて堂々と抗弁できるでしょう。逃げ出すのは疚しいことがあるからに決まっています」

「その理に従えば、妾は潔白ということになるな?」

「そう思わせる策だ!」

議員の一人が投げたヤジに、ピニャは乾いた笑い声を上げた。

「あはははは。つまり、逃げる者は裏切り者。逃げない者は策を抱いた裏切り者ということか」

アブサンはピニャの抗論に覆い被せるように怒鳴った。

「皆が揃って公式の場に出て下されば、このように疑われることもなかったのです!」

「ここが公式の場だと？　あははははは！」
「何が可笑しいのですか？」
「てっきり、宴席かと思ったぞ。妾はその余興に駆り出されたのだろう？」
「馬鹿にするにもほどがある！」
議員達はピニャを口汚く罵った。
「議員方こそ、元老院の権威を蔑ろにされているであろう。前にも申し上げたが、元老院とは皇帝と並び立つ帝国の柱石たる機関。その議事は、皇太子府の広間で開いて良いようなものではないはず。なのにどうしてここが議場となっているのか？」
ウッディ伯爵が前に出た。
「元老院のなんたるかを皇女殿下に聞かせていただくほど、我らは耄碌しておりません。ここで議事を開くのも、議事堂が再建されるまでの仮のこと。便宜的な配慮です」
ああ言えばこう言うを絵に描いたような問答に、ピニャは、もうすっかり疲れてしまった。
「分かった。もう、良いようにするがいい」
何をどう答えても、この連中はピニャを貶め、攻撃しないではいられないのだ。すでに分かっていたことだが、改めてそれを確認すると、どうでも良い気持ちがさらに増していた。
「何という不遜な態度か。我らが問うのは殿下にかけられた疑念を晴らすためなのですから、真剣にお答えていただきたい」

「嫌だ。答えたくない。答える義務もない」
ウッディ伯爵は、呆れたようにため息をつき、座り込んでいるピニャを見下した。ピニャが拒絶するように顔を背けると、いよいよ議員達の口汚い罵声が飛びだした。
「そのようなお答えでは、我々は納得できません」
「やはり、殿下は帝国を裏切っておられたのだ！」
「何という浅ましさ。所詮は小娘だ」
「普段から勇ましいことを言っておった癖に、いざとなればこの始末」
ピニャは両耳を覆い隠して「聞きたくない。言いたくない。答えたくない。もう嫌だ！」と叫ぶ。そして掴まれた髪が痛むのもかまわずに顔を伏せた。
近衛の兵は「殿下、お願いですから顔を上げていてください。このままでは、御髪（おぐし）が酷いことに」と囁いた。彼の手にはピニャの紅髪が、無数に絡み付いているのだ。プチプチと髪のちぎれる感触から苦痛が我が事のように感じられるのだろう。近衛の青年は今にも泣きそうな顔をしていた。
「もう嫌だ、もう嫌だ。どうせこの帝国も、お終いだ！」
「勝手に終わりにするな！」という議員達の怒号が轟く。
「折角妾が必死になって、この戦争を終わりにしようと努力して来たのに、ことごとくを駄目にしたのは、お前達ではないか!?　この始末、いったいどうつけるつもりなのか!?」
「殿下は、敗北主義者でいらっしゃるようだ」

「妾が敗北主義なら、皆は現実を見ない愚か者だ！　そこにいるジャイアントオーガー。随分と立派な鎧を着せたようだが、そんなものでニホンの軍に勝てると思ったのか？　馬鹿じゃないのか？　敵は、炎龍の鱗すら砕く鉄の逸物を持っているのだぞ？　大楯なんかいくら揃えたって、役に立つわけない！」

ゾルザルが顔を真っ赤にして立ち上がった。自分の発案を貶められ反射的に腹が立ったようだ。

「戯言を申すな、ピニャ！　戦って見もせずにどうして役に立たないなどと言える!?」

「役に立たないことが実証された時には、全ては終わっているぞ兄様。それに完全武装させたオーガーをどうやって操る？　怪異共に帝国に対する忠誠心などあろうはずがないだろう。飼い慣らしたつもりでも突然牙を剥いてくるのが野獣だ。鞭で脅えさせ、餌で手なずけてようやく従わせていると言うのに、剣や槍も通じない鎧など着せて、誰が抑える？　まさか、ヒトの手に余るようなものを軍中に抱えて戦おうと言うのか？　誰の発案かは知らないが、これを考えた者は相当の馬鹿だぞ」

これが、重武装を施した怪異が特地の歴史から消えていった理由であった。

ヒトの力で制御できないような不確定要素は、戦場でつけ込まれれば敗因にすらなり得るのだ。

兵器という物は常に矛盾した性格が要求される。それは向けられた者にとっては危険でありつつも、使用者側にとっては安全という性質である。完全武装したジャイアントオーガーは確かに強力である。だが同時に使用者にとっても相当に危険な存在となるのだ。

「ええいっ！　そこの近衛、ピニャを黙らせろ！」

ゾルザルからの命令だが、近衛の兵達は女性に暴力をふるうことを嬉しいと感じる性格ではなかったようで、もう悲壮感に満ちた表情となっていた。それでも従わなくてはならない。歯を食いしばってピニャの背後から口を押さえにかかった。だが幸いなことに、すぐにそれを中断する口実が出来た。まるで爆発するかのような勢いで、広間の扉が開け放たれたからである。

テューレは、ゾルザルの背後で独り笑っていた。

このような公式の場での彼女の役割は、ゾルザルが飲み物を欲したときに、酒を出すことが出来るように、杯と酒の入った壺を捧げ持って側に控えること。なので目の前で起きている喜劇の一部始終を特等席で見ることが出来た。

皇女ピニャが誰からも庇ってもらえず、皆から罵声を浴びている。その姿を見てテューレは軽い興奮状態になった。ついに、帝国の皇女が自分と同じような境遇になった。高慢ちきの鼻がへし折られたと喝采をあげ、万歳を心の中で連呼していた。

誰も彼も不幸になれ。苦しみ、悲しみ、疑い、罵倒しあって何もかもが滅茶苦茶になればいい。全てを呪い、そう願っていたテューレにとって、拳を握って「よしっ！」「よしっ！」と手放しで喜びを表明したい瞬間だった。

これで、つもり積もった恨み辛みが、ほんの少しだけれども晴らされたような気分になれた。

だが、それに水を差すような轟音が広間に響いた。何事かと思ってみれば、広間の分厚い扉が破られて、巨大なハルバートを振り下ろした構えで、黒い神官服の少女が立っていた。

見ると、その両脇には魔導師の少女とまだらな緑模様の服を着た男もいる。

「じゃ、退路の確保はぁまかせなさぁい」

黒い神官服の少女はそんな事を言って廊下の向こうへと姿を消し、程なくして廊下から剣戟の音と、近衛の兵をかき集める呼集の声が響き始めた。

その一方で、男と魔導師の少女はそのまま皇太子府の広間へと入ってくる。その姿を見たゾルザルは、突如として悲鳴にも似た叫き声を上げた。

「うわぁぁぁっ！」

その巨体を椅子からずり落としながら、もがくようにして腕や脚を振り回した。

「お、お前はまさか!?」

「お久しぶりです、ゾルザル殿下。またお会いできて光栄です」

議員達の間を抜けて歩み寄ってくるまだら緑の服をまとった男。

「イタミ殿！」

ピニャが歓声にも似た声でその名を呼んだ。「妾を助けに来てくださったか！」という言葉こそは口にしないが、表情でそして全身で喜びを表現していた。この顔を見たら、誰でも「やっぱりピニャは敵と通じていた」という心証を抱いたろう。男の方も、そんなピニャに片目をつぶって応え

ている。テューレが陪審員であればこれだけで有罪の判決を下す。

しかし、ゾルザルはそれどころではなかった。

テューレは知っている。ゾルザルにとっては、この男の存在こそが悪夢なのだ。

地揺れのあった夜、ゾルザルはこの男に尋問され、この男の命令で半死半生の目に遭わされたのだ。その時の苦痛と恐怖は未だにゾルザルの精神を強く縛り、苦しめ続けていた。

身体の傷は癒えた。折られた歯は義歯を入れた。そして外見的にはすっかり元通りになった。それでもゾルザルの精神には、抉られたような深い傷がそのまま残っているのだ。

テューレは、ゾルザルが何度も叫びながら目を醒ますのを見守ってきた。人知れずほくそ笑みながら。

その恐怖と苦痛をもたらした男が、再びゾルザルの前に立った。ゾルザルの精神の奥襞（おくひだ）まで知り尽くしたテューレには、この後何が起こるか容易に想像できて腹をかかえた。笑っていることを気付かれないように堪えるので精一杯だった。

案の定、ゾルザルは竦んだ。その精神は絞り上げられ、見栄も外聞も投げ捨て椅子にしがみつき、泣きわめきながら「寄るな、来るな！　テューレ、助けてくれ！」と叫んだ。

「近衛！　何をしている、こいつ等を俺に近付けるなっ！　オーガーを嗾けろ！」

ヒトは、恐怖感を持つが故にその対象に凶暴となる。恐怖の対象を倒し、破壊し、徹底的に粉砕しないといられなくなるのだ。「斃せ、殺せ！　やっつけろ！」とゾルザルは怒鳴った。

怪異使い達は、ただちにジャイアントオーガーを獲物に向けて放った。役立たずとピニャに言われたことを覆そうとしてか、どこか張り切っているようにも見える。

巨大な兜に開かれたスリットの向こうで獰猛に輝くジャイアントオーガーの凶暴な視線は、伊丹へと向けられた。神殿の柱にも似た棍棒が振り回され、議員達は巻き込まれてはたまらないとあたふた広間の端へと逃げていく。伊丹等を囲もうとしていた近衛の兵などは、巻き込まれて壁に叩きつけられてしまう者が出て、皆一斉に飛び退いていった。

「おおっ、装甲騎兵みたいだ！」

完全武装したジャイアントオーガーの姿は伊丹のオタク心に触れるものだった。伊丹は小銃を向けつつも感銘の声を上げた。ついつい、アニメの主人公のように銃を構えて引き金を引いた。しかし弾丸はジャイアントオーガーの胸部に命中したものの弾かれてしまう。

「げっ、なんとまあ分厚い装甲だこと。やっぱりアニメみたいにはいかないねぇ」

だが、伊丹の行為は全く無意味ではなかった。伊丹の背後では、彼の稼いだわずかな時間を利用して、魔導師の少女が床に数個の真鍮製の漏斗を転がし呪文を唱え終えていた。

漏斗は、空き缶のような甲高い音と共に床を跳ねて、そのままの勢いで光に包まれながら浮かび上がった。そしてジャイアントオーガーの周囲にまとわりつくように襲いかかった。

棍棒を振り回して漏斗をはね除けようとするジャイアントオーガー。だが、レレイが指先を鳴らすと、漏斗は四方八方の全方位から一斉にオーガー達に突き進んだ。

楯や、鎧の各所に円錐形の『底』の部分がぺたりと張り付く。
さらにもう一度レレイが指を鳴らす。パチン。
ジャイアントオーガーの身体で無数の爆発が起こる。そして動力の停止したロボットのように膝をつき、ゆっくりと仰向けに斃れていった。
見れば分厚い鎧の各所に穴が開いている。
真鍮製の漏斗によって円錐形に形成された爆発魔法はその衝撃が一点に集中する。さらにはノイマン効果によって厚さが二センチ程度の鉄板には穴が穿たれていた。
その威力の凄まじさは、目の当たりにした者たちを驚愕させ、警備の近衛をも恐怖で竦ませた。

ゾルザルは奥歯をガチガチと鳴らしていた。それが怒りからなのか、それとも恐怖からなのかは本人にも分からない。だが真っ赤になっていたゾルザルの顔色は、今や真っ青であった。
「き、貴様、今度は何の用だ？」
言葉だけは立派だが、椅子からずり落ちるのを懸命にこらえている姿はどこか滑稽でもあった。
「ちょっと会って頂きたい娘がいましてね。連れてきました」
伊丹はそう言うと、レレイを差し出すように前へと押し出した。
「わたしはレレイ。レレイ・ラ・レレーナ」
その名を聞いてゾルザルは眉を顰め、議員達は一斉にどよめいた。なるほど炎龍殺しとしてその

名を知られた魔導師ならばジャイアントオーガーを一撃で屠った力量にも納得できる。評判は間違いがなかったと皆頷いた。だが続いて発せられたレレイの言葉に、広間の議員達はさらにどよめくこととなった。

「ゾルザル殿下。貴方が雇った殺し屋に、わたしを狙わせるのを止めさせて欲しい」

途端、ピニャが皮肉を叫んだ。

「ふ、兄上らしいやり方だ。自分を差し置いて栄光を掴んだ者に嫉妬でもしたか？」

「ば、馬鹿を言うな。お、俺は殺し屋など雇ったりせんぞ！」

「どうだか？　現にこうして当事者が抗議に来てるぞ」

「戯言をぬかすな。こんな小娘の言葉など信じるに値せぬ」

「小娘とは言え、炎龍を退治した英雄。その言葉には重みがあるぞ。少なくとも妾は信じた。他の者もどうかな？」

支持者を求めて周囲を見渡すゾルザル。だが、少なくない数の議員達が気まずそうに視線を逸らした。全員ではないが、ゾルザルならやりかねないと思った者は確かにいたのだ。

一方、ピニャとゾルザルがそんなやりとりをしている間、伊丹はテューレの前まで進んで「やっ、どうも久しぶり」と挨拶した。

この瞬間、テューレは何の根拠もないのに、伊丹が自分を救いに来たのかと思って息を止めた。紀子の次は自分の番。そんな風に思ってしまったのだ。助けに来たよと言われて手を伸ばされたら、

後先考えずにその手を取ってしまっただろう。
だが淡い期待はすぐに裏切られてしまった。伊丹が用があったのはテューレではなく彼女が捧げ持っていた黄金の杯だったのだ。伊丹はそれを取り上げるとゾルザルに握らせた。
「な、何だこれは……」
そしてワインをその中に注ぎ入れていく。
ゾルザルはその間、伊丹にされるままだった。議員達をはじめとして広間にいる者も、レレイから告げられた衝撃の事実に「まさか」「いやしかし」と、ざわめいている。そんな中で支度を終えた伊丹は、窓の外を指さしてゾルザルに告げた。
「窓の外が見えます？」
窓の向こうには皇城の庭園と街の風景が見える。ゾルザルはちらりと見て、ああ見えると頷いた。
「じゃ、アーチャー。頼むわ」
伊丹が耳を押さえて囁くと、突然ゾルザルの手にした杯に、スコッと七ミリ程の穴があいた。
穴からあたかも血液のように、ワインがこぼれ落ちて床を汚していく。その突然の出来事にゾルザルは「うわっ！」と手にした杯を投げ捨て、椅子からずり落ちて腰を床に打ち付けていた。
レレイが抑揚に欠けた口調で淡々と語りかける。
「貴方が、どこにいてもわたしたちの手は届く。いつもあそこから狙っている。もう一度言う。今雇っている殺し屋を引き揚げさせて欲しい。さもないと貴方の頭にこの酒杯のような穴があく」

平坦な語調とは裏腹に、その爪先は黄金の酒杯をぐちゃと踏みつぶす。その冷たい迫力にゾルザルはガクガクと震えるように頷くことしか出来なかった。

＊　＊

用が済んだら、長居は無用。ましてや、敵地でもたもたしている理由も必要ない。伊丹はゾルザルが刺客の引き揚げを約束すると、レレイを連れて退却を始めた。

ゾルザルも、伊丹達を引き留めなかった。さっさとどっか行ってくれという気持ちのほうが強かったのだろう。「手を出すな！　行かせてしまえ」と後を追おうとする衛兵達を制止すらしていた。見えない敵から狙撃される恐怖にさらされていると思えば、分からない話ではない。伊丹達がピニャを連れ去ることも妨げようとしなかった。

しかし広間を一歩出れば、そこはロゥリィと衛兵達が激しい戦いを繰り広げる戦場であった。甲冑に身を固めた屈強な男達が、小柄な少女に群れるようにして襲いかかっている。だが、巨大なハルバートが風車の様に回転するたびに、血飛沫が旋風に巻き上げられて、廊下と壁と天井が、赤一色の前衛芸術で飾り立てられていった。

廊下は累々たる屍で足の踏み場もなく、衛兵達はロゥリィを前にして明らかに怖じ気付いていた。黒ゴスの神官服をまとった亜神が軽く踏み出しただけで、衛兵達は恐れおののき二歩も三歩も後ず

さり、その挙げ句背後の同僚にぶつかって尻餅をつくという腰の据わらない有様だった。ロゥリィは「これが皇城の衛兵？　質が落ちたものねぇ」と不満顔である。

「ロゥリィ！　ずらかるぞっ！」

伊丹の呼び声に「え、もう？　今、良いところだったのにぃ！」とがっかりした風のロゥリィ。衛兵達に向けてぐっと踏み込んで今にも飛びかかると見せ、自分を取り囲む人垣を大きく退かせると、その隙を突いて床から壁へと跳躍し、壁を蹴って衛兵達の頭上を舞うように飛び越えた。

衛兵達も、慌ててこれを追う。

ロゥリィは追いついてきそうな衛兵が現れると、足を止めて振り返り、矛を交えてこれを叩きのめし、追い散らすという退却戦を展開し、見事に殿をつとめていた。

伊丹達は、ロゥリィの陽動によって無人となった廊下を無事に駆け抜けた。そして玄関を飛び出すと止めておいた荷車に偽装した高機動車に飛びつくようにして乗り込む。

運転席に座ったレレイはエンジンをかけると、間髪入れずアクセルを踏み込んだ。エンジンが甲高い咆吼をあげ、高機動車は全速で後進し、半開きだった玄関の分厚い扉を、バリバリと押し破るようにして突入していく。

ロゥリィと交戦中の衛兵達は、突然の乱入者に「うわぁ！」と蜘蛛の子のように逃げ散った。背後から迫る危険に気付くのが一瞬遅れたロゥリィは、何事かと振り返った瞬間凍り付いてしまう。

「よいしょっ！」

だが、ぶつかる寸前、荷台で待ち構えていた伊丹がロゥリィをすくい上げる。おかげで激突こそ免れたもののロゥリィと伊丹の二人は荷台を盛大に転げ回ってあちこちをぶつけ、あられもない格好となったロゥリィは「きゃん」という悲鳴を上げた。

高機動車は、急ブレーキ音を上げて玄関ホールで停止し、荷馬車に偽装するための板や張りぼてをそこに盛大にまき散らす。伊丹とロゥリィは絡み合った姿のまま再度転がった。

衛兵達は、荷車が壊れたと見たのか、剣や槍を手に周囲を取り囲むようににじり寄った。だが六四式小銃の連射音が耳を劈くと衛兵達は再び退いた。真の姿を現した高機動車の助手席に片足を乗せて銃口を天井に向け、弾倉が空になるまで銃弾をばらまいた伊丹は、くらくらする頭を抑えながらぼろぼろと崩れて降ってくる漆喰の雨の下で警告の声を発した。

「はい、そこ近付かない。当たったら、死ぬほど痛いよ！」

銃口を向けられて凍り付く衛兵達。そしてその一瞬に出来た隙を縫って、玄関脇の植え込みに隠れていたテュカとヤオが、剣崎らと共に高機動車に乗り込んできた。瞬く間に高機動車内は満員になる。

「よし、全員乗った。レレイ！」

伊丹の声にレレイが叫ぶように返事をする。「了解！」

オートマチックトランスミッションのレバーを前進に合わせ、アクセルを床が抜けるほどの勢いで踏み込んだ。弾かれたように加速した高機動車は、今度こそ帝都の大通りを南に向かった。

とは言え、まだこれでは終わらない。
帝都の中央通りは、人通りが多い上に荷馬車等の往来も多く、さらに交差点も信号などによる交通整理がされていない。通行人の間を縫って進まなければならないため、高機動車と言えどもさほどの速度を出すことは出来ないのだ。しかも的射を拾うために一旦停車する必要もあった。そのため帝都の南門が見えてきたあたりで、追跡してきたコボルトを象った兜をつけた黒衣の騎兵集団に追いつかれてしまった。狙撃の恐怖に震えて、手を出すなと叫んでいたゾルザルが追跡を命じたとは思えない。もしかすると側近や主戦論派連中が、そのままにしておくなと騒ぎ立てたのだろう。あるいは、帝国における最重要人物が皇城から姿を消していることに、遅ればせながら誰かが気付いたのかも知れない。
「あれが噂の掃除夫かな。おっかない顔して追っかけてくるねぇ」
後方の様子を確認した伊丹が揶揄するように言う。
「あれは顔じゃなくて兜よぉ」
「やっちまうか？」
「まて、街中で発砲したら、流れ弾が通行人に当たるぞ」
銃を構えようとした的射や槍田を、剣崎が手を伸ばして止めた。自衛隊としてはあくまでも一般市民に被害を出すことは避けなければならないのだ。でないとまたマスコミに叩かれる。
するとレレイが「相手にする必要はない。高機動車の性能なら引き離すのは難しくない」と言っ

て来た。伊丹が「とばせ」と一言でも叫べば、アクセルが床にぶつかるまで踏みこむ構えだ。

今でもレレイは、右へ左へとハンドルを切って、スリップ音を上げさせながらも、見事に高機動車を操っている。その運転技術を見る限り、確かに引き離せるだろう。だが、レレイの運転はいろいろな意味で限界を突破しそうな気配がある。同乗者達の心身の健康を鑑みると、避けておきたいことであった。

「まったく、父上まで連れて来てしまうとは。つまり、イタミ殿が来てくれたのは、妾を救うためではなかったのだな。きっと妾のことなんて、ついでだったんだ。そうに決まっている」

ミキサーのように揺すられる車内で、ピニャがやさぐれた調子で愚痴をこぼしている。そんなピニャに秘書官のハミルトンが、申し訳なさそうに言い訳していた。

「申し訳ありません、殿下。殿下もご了承した作戦だと言われて、つい信じてしまいました」

伊丹は「いや、ピニャ殿下の救出こそが今回の作戦の第一目標だったんですよ。どっちかっていうと皇帝陛下を連れ出すことの方がついでして」と説明して誤解を解こうとした。

見れば荷台には担架に乗せられた皇帝モルトの姿がある。一緒に拉致されたのか側近のマルクス伯爵までもが、その傍らで居心地悪そうに腰掛けていた。

マルクス伯爵は伊丹の言い訳に呆れ顔になる。

「嘆かわしい。皇帝陛下の拉致が『ついで』の片手間仕事だと？」

「ええ。皇女を助けるなら、いっそのこと皇帝の身柄も持ってこいっていうのが上の考えた作戦だ

ったんです。皇帝陛下に皇女殿下、そして講和派の元老院議員。これだけそろえば、帝国の正統政府を主張出来るでしょ？」

「なるほど……逆賊の汚名をゾルザルに着せようというのだな？」

突然の声に全員ぎょっとした。

病気で意識がないはずの皇帝が、瞼を開いて喋りはじめたからである。

「こ、皇帝陛下。何時の間に……」

マルクス伯が皇帝の顔を覗き込む。

「つい先ほどな。荷物のように手荒に運ばれては、おちおち眠ってもいられぬわ」

モルトは、ピニャとハミルトンの手を借りて身を起こした。それを見てロウリィは「怪しいわねぇ」と呟く。仮病を疑っているようだ。

だがピニャは「よかった！」と本心から喜んだ様子を見せて父にすがりついた。

「父上、お目覚めになった早々で申し訳ありませんが、ゾルザル兄を止めてください。イタミ殿、すぐに帝都に引き返して……」

だがモルトは「いや戻っても無駄だろう」と娘をとめる。「今のゾルザルは余の言葉などに耳を貸すまいからな。余はニホンの企てに応じようと思う」

「企てとは？」

「お前に正統政府を立てさせてゾルザルに対抗させようという企てだ」

「しかしそれでは帝国が割れてしまいます。内乱になりかねません」
「手遅れだ。最早内乱となることは防げまい」
皇帝は、ピニャの手を取ると告げた。
「ピニャよ、お前を皇太女に据えることとしよう。ゾルザルと正面から戦うも良し、和平を呼びかけるも良し、帝国を二分して存続させるのも良し。我らの行く末を定めて見せよ」
「わ、妾がですか!?」
実の息子と娘とを噛み合わさせる非情の決断を、まるで恩恵であるかのように言う父に、ピニャは驚いて是とも非とも答えることが出来なかった。だがハミルトンは喜びの声を上げる。
「おめでとうございます、殿下！　これで騎士団のみんなも反逆者の汚名をすすげますわ！」
その時、ピニャの腕が何者かに掴まれた。皇帝の言葉に気を取られている隙に、掃除夫の騎兵がすぐ側まで近寄って手を伸ばしてピニャの手首を掴んだのである。力比べとなったが、ピニャの身体が引っ張られて高機動車から落ちそうになってしまう。側にいたハミルトンとテュカ、剣崎、槍田は慌ててピニャの身体を支えた。
「きゃぁっ！　イタミ殿！」
ピニャの叫びに伊丹は小銃の銃口を騎兵に突きつけることで応えた。数発の銃声で騎兵は仰向けに落馬して地面に激突した。
ロウリィが、ハルバートの石突きを繰り出して反対側から乗り移ってこようとしていた敵を突き

落とす。もんどりを打って地に落ちた騎兵は、瞬く間に後続の馬蹄に踏みつけられてしまう。その無惨な様を見たモルトは、周囲を見渡して告げた。

「ま、それもここを逃げ延びることが出来たらの話だがな。そのほう、確かイタミと申したな。なんとかしてみせるがよい。炎龍を屠ったという緑の人とやらの手腕、この目で確かめさせて貰うぞ」

皇帝は伊丹をまるで自らの臣下であるかのように命じた。その威厳ある言葉に思わず「大丈夫、任せておいて下さい！」と返事してしまう伊丹。皇帝に命じられなくても追撃を振り払うつもりではあったが、銃を手にのばしながら「アレ？　なんで素直に従ってんだ、オレ」と首を傾げていた。

「よし、城門を出たぞ！　やっちまえ！」

剣崎の合図で、まず、ロゥリィが高機動車の荷台を蹴って飛び出した。

スカートをパラシュートのように膨らませながら、追いすがってくる騎兵の馬に飛び移って、馬の背を舞台にした軽業めいた剣戟戦を始める。そして一人、また一人と敵をハルバートの餌食にしていった。

テュカはロゥリィを側面から襲おうとする敵に向けて弓弦を鳴らして矢を射かけ、ヤオは騎兵の本隊めがけてＬＡＭを撃ち放して、人馬もろとも派手に吹き飛ばした。伊丹と槍田が連射で銃弾を浴びせかけた。

「伊丹二尉！　運転手のお嬢ちゃんに次の三叉路で右折するように言ってくれ！」

的射一等陸曹が手にした無線装置のアンテナを伸ばした。
「何それ？」という伊丹質問に、的射は「へへへ」と肩を震わせて笑う。
「指向性散弾が仕掛けてあるんですよ。退路に仕掛けを施しておくのは基本でしょ？」
それを聞いて血相を変えた伊丹は「ロゥリィ！　戻れっ！」と声を張り上げた。ロゥリィは騎兵の一人をはり倒して馬を奪うと、手綱をぐいっと引いて右に離脱した。
剣崎が、双眼鏡を前に向けて何かを探している。
高機動車が三叉路を右折し緩やかなカーブにさしかかったところで目印を見つけたのか、剣崎が怒鳴った。
「よ～い、点火！」
的射がスイッチをひねった。
すると道路端に据えられていた置き看板のような物体が爆発した。無数の散弾が暴風となって掃除夫連中に襲いかかり馬や兵があっという間になぎ倒されていく。
「どうだ？」
高機動車を止めさせて戦果の確認をする剣崎。
最早無事な敵は数騎しか残っていなかった。しかも、自分たちの身に何が起きたのか理解できず、釈然としない表情で周囲を見渡している。だがしばらくすると、恐れをなしたのか馬の首を返して逃げ去っていった。

「よし。これで状況終了」と剣崎。
「いやいや、家に着くまでが遠足です。でしょ？」と的射。
特殊作戦群の男達はそんな軽口を叩き合った。
相変わらず怖い連中だと伊丹は苦笑して皆の無事を確認する。ロゥリィもけろりとした表情で馬を寄せてくる。
「これでいいですか？　皇帝陛下」
伊丹に問われた皇帝は、「お見事。褒めてとらすぞ」と上機嫌そうに笑った。

フォルマル伯爵領の都市イタリカで、帝国正統政府の開府が宣言されたのは、これより十日後のことであった。

＊　＊

皇城から延々と伸びる軍団兵の列は、帝都を出て北へと向かっている。それは軍団兵だけではなく、官僚や、主戦論派の元老院議員や貴族、その家族などを含んでおり、あたかも宮廷そのものが大移動しようとしているかのようであった。
これをゾルザルは『遷都』などと叫んでいたが、帝都に残る市民の目には夜逃げとしか映らない

ものであった。特に狙撃をおそれるようになったゾルザルは、どこに移動するのにも周囲に幕を張らせてた。それが自分に向けられる視線を避けているように見えてしまうため、そのような評価にも反論しがたいものがあった。

「殿下、どこに行かれるとおっしゃるのですか？」

次期侍従長のネイの質問にゾルザルは吐き捨てるように答える。

「ここではないどこかだ」

「ここではないどこかとは、どこでしょう？」

「とりあえず、北東だ。後のことはそれからだ」

「しかし、帝都を離れてしまっては統治が揺るぎかねませんが」

次期侍従長の問いは当然のことである。だがゾルザルは悲鳴を上げるかのように怒鳴った。

「うるさい。何度も何度も敵が襲って来るようなところにいられるかっ！　俺は敵の手が届かないところに行きたいんだ！　アルヌスの敵から一リーグでも二リーグでもいいから離れたいんだ！」

既に市民の間では、嫉妬に駆られたゾルザルがレレイの暗殺を謀ったという噂がまことしやかに流れている。これを耳にした市民達は一斉にゾルザルを白眼視した。

ゾルザルの側近達は噂の規制を試みようとした。だがゾルザルは止めた。彼の目には、帝都の街そのものが彼を糾弾し、彼を攻撃しようとしているように感じられたからである。

レレイが「あそこから狙っているぞ」と指さしたのは帝都の街並みであった。

不合理なことだが、これによってゾルザルは帝都そのものが自分を攻撃し、斃す力を持っていると錯覚してしまったのだ。そんな街に対して力ずくで何かしようとすれば、手痛い反撃を受ける。窓に近付くことも出来なくなったゾルザルは、別の都市に移ることしか考えられなくなってしまったのだ。

「テューレさん……この後、どうなっちゃうんでしょうね？」

馬に乗れない古田は食材やら、調理道具や食材などを山ほど積んだ荷車の僅かな隙間に座っている。手綱は、彼の下で料理法を学ぶ見習い料理人達が握っているので心配はない。

馬にまたがったテューレは、古田が声をかけても「さぁ」と心ここにあらずといった様子だった。馬の脚がいつの間にか止まって隊列から落伍するように置いてきぼりとなっていたのだ。

「テューレさん？」

「あ、フルタさん……何の用？」

「何の用じゃないでしょう。ボヤッとしていたら危ないですよ」

「そ、そう？」

自分が立ち止まっていたことに気が付いたテューレは、馬の腹を軽く蹴って歩きださせた。

「昔の偉い人はこう言ってます。『どうしよう、どうしようと言うばかりで相談してくれない人には、何にもしてあげられない』って」

「そう？　そんな言葉があるの？」

「ええ。悩み事なんて他人に相談したら、案外簡単に解決するようなことかも知れないですよ」
「……相談していいの？」
「ええ。もしかすると何にも出来ないかも知れませんけど。話を聞くぐらいなら出来ますから、ね」
するとテューレは、ほろほろと涙をこぼしながら言った。
「ねぇ、どうして誰も私に手を差し伸べてくれないの？　どうして誰も私を助けてくれないの？」
何が、どうして？　助けるって？　誰を？
問われている意味の分からない古田は、どう答えるべきかも分からずに、テューレのこぼす言葉にただ黙って耳を傾けることしか出来なかったのである。

ALPHAPOLIS
アルファポリス 作家 出版原稿 募集!

アルファポリスでは才能ある作家 魅力ある出版原稿を募集しています!

- ◉既存の賞の傾向や審査員の嗜好の枠からはみ出た小説
- ◉これまで知られてこなかった仕事の裏側事情
- ◉目からうろこの生活・情報ノウハウ ……などなど

アルファポリスではWebコンテンツ大賞など
出版化にチャレンジできる
様々な企画・コーナーを用意しています。
まずはアクセスして下さい!

▶ アルファポリスからデビューした作家たち



恋愛小説

市川拓司
『Separation』
『VOICE』



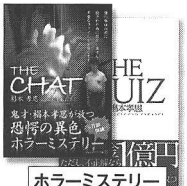
ファンタジー

吉野匠
『レイン』シリーズ



児童書

川口雅幸
『虹色ほたる』
『からくり夢時計』



ホラーミステリー

楊本孝思
『THE CHAT』
『THE QUIZ』

*次の方は直接編集部までメール下さい。

- ◉既に出版経験のある方
  (自費出版除く)
- ◉特定の専門分野で著名、
  有識の方

詳しくはサイトをご覧下さい。

アルファポリスでは出版にあたって
著者から費用を頂くことは一切ありません。



フォトエッセイ

吉井春樹
『しあわせが、しあわせを、
みつけてきた。』
『ふたいち。』



心理エッセイ

本多時生
『イヤな人がいる!』
『幸せになる考え方』

電網浮遊都市

ALPHAPOLIS

アルファポリス

http://www.alphapolis.co.jp



アルファポリス　検索

モバイル専用ページも充実!!

携帯はこちらから
アクセス!
http://www.alphapolis.co.jp/m/

Webコンテンツが読み放題

登録コンテンツ8000超!（2010年8月現在）

アルファポリスに登録された小説・映像・ブログなど個人のWebコンテンツをジャンル別、ランキング順などで掲載!　無料でお楽しみいただけます!

Webコンテンツ大賞　毎月開催

投票ユーザにも賞金プレゼント!

恋愛小説、ミステリー小説、旅行記、エッセイ・ブログなど、各月でジャンルを変えてWebコンテンツ大賞を開催!　投票したユーザにも抽選で10名様に1万円が当たります!（2010年8月現在）

その他、メールマガジン、掲示板など様々なコーナーでお楽しみ頂けます。
もちろんアルファポリスの本の情報も満載です!

柳内（やない）たくみ

東京都在住。自衛官を経験した後、2006年に自営業を開業。本業に従事する傍ら、インターネット上で精力的に執筆活動を展開し、人気を博す。2010年4月、「ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり　1.接触編」で出版デビューを果たし、一躍注目を浴びる。

イラスト：Daisuke Izuka
http://www.kcc.zaq.ne.jp/d-trench/

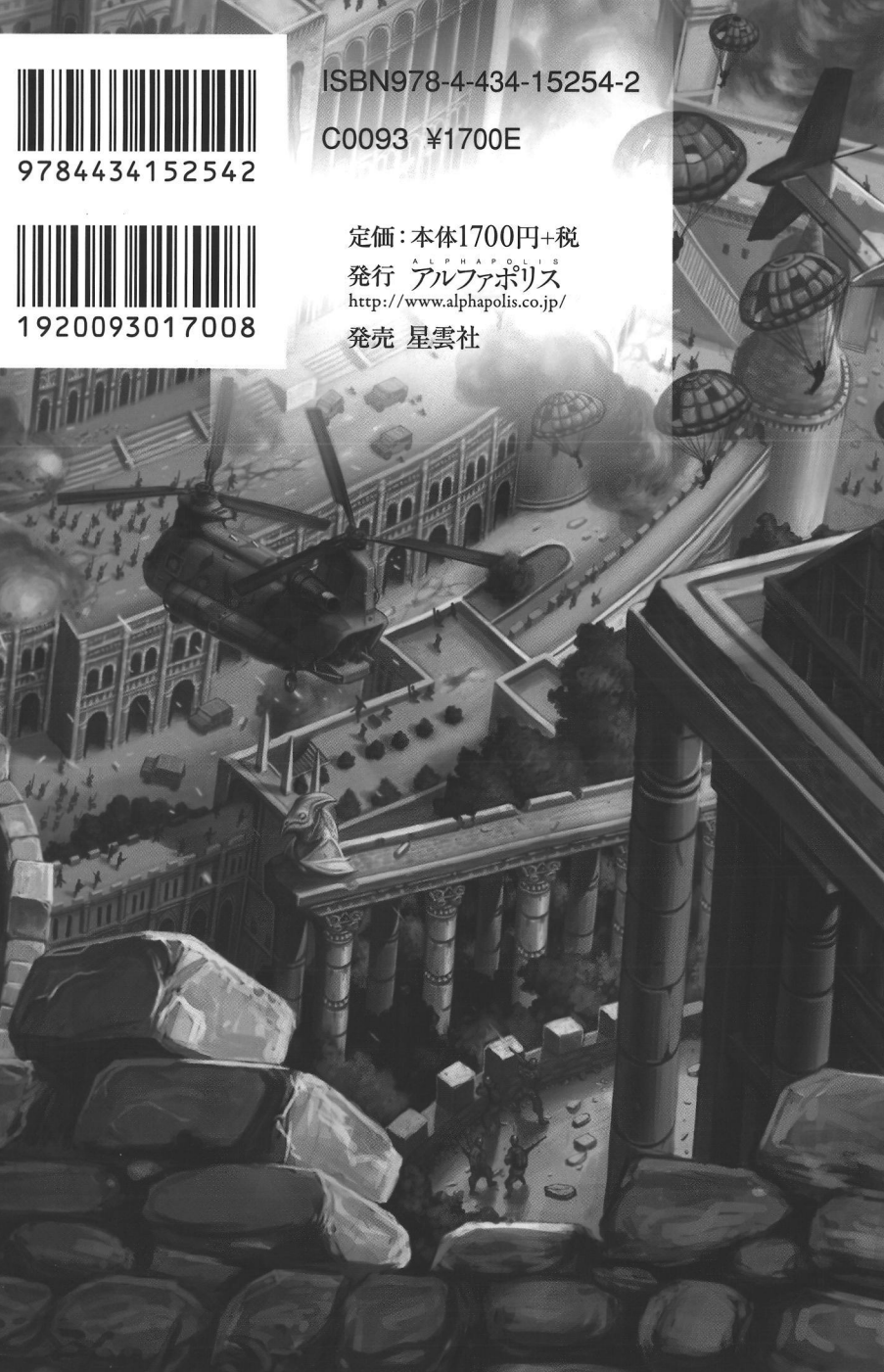
ゲート　自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり　　— 3.動乱編 —

柳内（やない）たくみ

2010年 12月 24日初版発行

編集－太田鉄平
発行者－梶本雄介
発行所－株式会社アルファポリス
　〒153-0063東京都目黒区目黒1-6-17目黒プレイスタワー4F
　TEL 03-6421-7248
　URL http://www.alphapolis.co.jp/
発売元－株式会社星雲社
　〒112-0012東京都文京区大塚3-21-10
　TEL 03-3947-1021
装丁イラスト－Daisuke Izuka
装丁デザイン－ansyyq design
印刷－大日本印刷株式会社

価格はカバーに表示されてあります。
落丁乱丁の場合はアルファポリスまでご連絡ください。
送料は小社負担でお取り替えします。
©Takumi Yanai 2010.Printed in Japan
ISBN978-4-434-15254-2 C0093



9784434152542

ISBN978-4-434-15254-2

C0093 ¥1700E

1920093017008

定価：本体1700円+税

発行 アルファポリス

http://www.alphapolis.co.jp/

発売 星雲社